女人藝術

昭和三年九月廿三日印刷納本 第一巻
昭和三年十月一日發行（毎月一回一日



科學の粹を集めた

チョコレートの製造に就て

皆様のお好きなチョコレートは何から作るか御存じですか「學問上の名前をテオブロマカカオと云ふ樹の種子カカオビンスから作るのであります。テオブロマカカオと云ふ名前は伊太利の或る學者がつけたのでテオブロマとは希臘語で「神の糧」と云ふ意味で御座います カカオ樹は赤道の南北に位する僅かな國々にのみ繁茂するもので主としてメキシコ中央アメリカ西印度諸島等であります。この樹の實を砕いて中から取り出されたカカオビンズは丁度日本に産するゑんどう豆位の大きさでありますこのカカオビンズを集め或る方法にて醱酵し更に太陽に依つて乾燥し嚢に納れ需要地に運ばれるのでありますカカオビンズが工場に運ばれますと弊社森永製菓鶴見工場の如きは獨特の滅菌裝置によつて先づこれを消毒し粒の大小或は芥や砂を取り去り選擇分類し馥郁たる香氣を發露させる爲適當の温度で瓦斯の爐にかけてこれを炒り不消化な莢を除きこれを臼にかけて挽き潰しますと液狀態になります。これをカカオリカーと申します。これに砂糖カカオバター粉牛乳等を入れ混合機にかけて充分混ぜ更に瑞西で發明された他の特殊な機械で立派になる様準備されたスチール・ローラにかけて摺潰して非常に滑かな練物にされた物を高價な磨きたてられた型に詰込んで平板を拵へ冷却室を通じて冷却凝固させた後錫箔で包み更に包裝紙で包み始めて皆さんの召上るミルクチョコレートが出來上るのであります。この行程の際濕氣はチョコレートの品質を害する慮がありますので弊社の如きは製造並に包裝作業には Air Conditioning and Washign Apparatus（空氣淨化並に濕度調整裝置）の大規模なる設備により製造室内の空氣の洗滌と濕度を一定に調製し四季を通じ一定不變の優良品を製造致して居ります。この設備は我國に於て最初の計劃です。而も森永のみの持つ最大の誇であります。一方チョコレートの營養價の高き事は今更喋々を要せざるも最近屢々行はれし無着陸飛行に飛行家が一樣にチョコレートを携帶食料としてゐました事や先年英國のドーバー海峽横断遠泳に見事成功したアテール嬢又ロスアンゼルスから沿岸カタリナ島へ海峽横断に成功した十七才の子供トロント市のヤング君等何れもこの不断の愛用家でこれにより如何に價値ある食料品たるか御判りの事と思ひます。

前述の如く本品が最も衛生的なるは勿論更に年と與に技術の奥妙を究め品質に於ても日毎に改善を重ね今や東洋一の弊社鶴見工場の大量生産と相俟ちて廉價の理想を着々實現致して居ります。どうぞ一層皆様の御愛用を賜らん事を御願ひ申します。



（寫眞はココアビーズの採集狀況）







吉田雅子

高安やす子

女人藝術十月號目次 ―禁轉載―







吉田雅子

高安やす子



──『ソビエツトユニオンの友の大會』の婦人協議會に於け
るクラヽ・ツエトキンとクルウプスカヤ（レーニン夫人）──



日本最初の婦人投票權行使　——鐵道省現業委員選擧——

御婚禮の
御支度は三越

◆三階西館の御婚禮調度品賣場」に御用命願上ます◆

御婚禮のお支度を遊ばす季節で御座います。三越では御式服、御調度品を初め御入用品は一切取揃へて居ります。何卒御用命願上ます



◆御式服用品◆

黒縮緬紋付模様八掛付小袖……九十七圓位より
白羽二重八掛付下着……三十七圓位より
紅紋羽二重長襦袢……四十圓位より
糸錦丸帯……六十五圓位より
卵甲花付髪飾四ッ揃……二十六圓位より

三越の美容部では御婚禮の際豫め御通知下さいますと、係りの者がお伺ひ致し、お化粧やお着附等一切のお世話を申上げます

東京市日本橋

三越



よく顔の見えない寫眞を出すのは、事いささか卑怯未練に似たれども、敢て敵に脊を向けたのではなく御覽の通り正面に向いて堂々といともしほらし氣に編物をする風情——これがいゝ〱つて皆が申すものですから、何事も自我のない人の言ひなりに從がふ私が此の寫眞を他選させられた譯です、このしごく天下泰平で陽を浴びて編棒をとつてゐる私の家のポーチにも暫別れを告げて歐洲への旅にもう十餘日たつと出る身ですゆゑ、この時家のポーチで編物なぞしてゐる姿の寫眞を見ると、一年餘の後無事に旅を終つて又こんな風に呑氣に柄にもなくポーチで日向ぼつこして毛絲をいぢくる眞似が出來ますやうにと神樣に祈つてゐます。

では一寸みなさま行つてまゐります。御きげんやう。

吉屋信子



數日前靑鞜社時代の寫眞を或る新聞から求められ、高いところへしまひ込んだなり久しく見たこともなかつたその頃の寫眞をひき出して見た。そして思つてゐたより遙に子供らしいものであつたのに驚いた。ひとかどのおとなのつもりで子供扱ひされたり、お孃樣扱ひされたりするとよく腹を立てたものだつたがと思ふとをかしくもなる。何のことはないきかん氣ではちきれさうなやんちや娘だ。影のない明るさだ。今の自分にはあまりに味なく親しみないものであつた。

今又私は「女人藝術」によつて最近の寫眞を見る機會をもつた。(そこには言ふまでもなく二十年たらずの歳月がある) これは何といつても今の自分の心に近い。ぴつたりとしたものがくる。眼のまはり、頰のあたりにたゞよふかすかなかげにも自分が見出され、自分がかへりみられ、飽かないものがある。時なく、金なく生きる私はともすれば忘れてゐるが年齡といふものは意味深いものだと思ふ。

らいてう



ドリス・チン・カイセン

公人腐敗　検察談話會

婦人市政研究會　多川すみ子
同　富山直子
同　刈谷道子
婦選獲得同盟　新妻伊都子
同　金子茂
同　河崎夏子
東京聯合婦人會　竹内茂代
評論家　山田わか

職業婦人社　奥むめお
食糧の日本　八木秋子
婦人共同會　大和俊子
司會　生田花世
漫畫　長谷川春子
吉屋信子
伊福部敬子
長谷川時雨

生田　今日はあの複雜な市政問題の御意見を伺ひ、現代に處して行く女の人が何う考へていいか、何う批判すべきかと云ふ心の糧になるやうな御話を、先輩諸氏から頂きましたならば、啓發する所が多いと思ひます。皆さんの御腹藏のない御言葉を御寄せ頂きたう存じます。

金子　皆樣方の御顔を割合よく存上げて居ると云ふことゝ、それからどうも人並外れてお喋りのものですから、先輩の方々から「お前が座長になつたら宜からう」と、大變名譽ある御推薦を受けましたので、何でも出來ることなら働いて女人藝術の御仕事を助けるのは私も希ふ所でございますから、厚顔しいやうでございますが何とか纏め役をさせて頂きたいと存じます。

今生田さんの仰つしやいましたやうに、丁度今起つて居ります市の疑獄事件と云ふやうな事から入りまして、女の人達がさう云ふやうな方面に就て日頃色々感じ合つて居る事等話合つて頂けば、可なり色々な問題に觸れやしないかと思ひます。一番先に今度の市會議員の問題で、眞先に婦人側としてお起ちになり、さうして色々時に適つた御仕事に手をつけて行つて下さいます市政研究會の方々から、今日迄に大體今度の事件についてなさいました事を簡單に御話を伺つたら何うかと思ひます。

多川　私共の婦人市政研究會は、起りは震災前からで、それ以來ぼつ〳〵色々の事を研

究し又或場合には實行と云ふやうな事をやつてまゐりました、今度の事を申上げますと昨年二月に例の瓦斯問題が起りまして、瓦斯報償問題契約改訂案の事に就て、反對の聲が大變高うございました時分に、板舟權問題も起りました。此の瓦斯問題の勢に乘じて可決してしまはうとしたのでございます、併しそれは輿論の聲が大變起つて、到頭否決になつたのでございます。其の當時の市長は西久保市長でございました。詰り板舟權報償案と申します、それに九十萬圓市から拂ふと云ふ提案をしたのでございます。唯ほんの魚河岸の一部の人間の、形も何もない權利金と云つたやうなもの丶爲に其のお金を出すことは、些つとも理由のないことで説明する迄もないのでございます震災當時に日本橋の魚河岸が燒けた爲に其の市場が築地に移轉したので、其の權利が自然に消滅したと云ふことを、市へ持つて來て何うかして與れと云ふのでございますから、天災を市に償へと云ふ――實際無理なことでございます。此の九十萬圓の報償案は否決になりました。其時は聲を潛めて居ましたけれども、又市長が替りましてから再び此の問題が起り、到頭市來市長の時代になりましてから修正の結果七十萬圓の報償金で以て、遂にこの三月卅日に可決してしまつたのでございます。御承知の通り瓦斯問題は市民の臺所の問題でございます又板舟權は、それ程直接家庭に影響はございませぬけれども、非常に無理な事で、今大變市が窮乏して財政難の中に九十萬圓拂ふと云ふことは、甚だ不都合だと云ふので、昨年の西久保市長の時に反對の決議文を送りましたが、それが極く僅かの間に、可決されてしまひ、疑獄事件など曝露されるやうなことになりました。それで本會でも默視して置く譯に行きませぬから、八月十五日に市會議員及び各方面に聲明書を發表致しました。亞いで十八日市會議員及び其の夫人に宛て丶總辭職勸告書を書きまして、主な人に持つて參りました。總辭職勸告と云ふのは、詰り板舟權問題を可決した時には無記名投票で兎に角四十二名に對する四十名と云ふ極く際どい所で可決した以上、市會議員全部責を負ふべきであると思ひました。





それで斯う云ふ際に、吾々は極く微力ではございますけれども、併し一方から申しますと弱い女の聲が存外強く響く場合もあるのでございますから、吾々善いと信ずることは、假令聲は小さくても力は弱くても、出來るだけ、根強く、辛抱強く、何處迄も市政の廓淸と云ふことに就て力を盡す、それには今が一番好い時機である。又一方から申しまして、斯う云ふ不都合な問題の起るのは、男子は總て利權と云ふ事に大變動かされ易いと考へる。婦人の方がさう云ふ事には割合淸廉でございますから、どうし

ても婦人が市政に携らなければならないと云ふことを、此際深く考へますので、女子の公民權獲得を叫び市政の廓淸を叫ぶ爲に實は今度運動を始めたやうな譯でございます。



金子　市會議員に辭職勸告にいらした時議員の中で直接逢つた人がございますか。

富山　もう大抵、都合よくやつてゐます、私共がずらつと這入るとお宅の方は奥の方からちらちらと私共を見て、出て來るのは可愛らしい女中や書生ばかりです。

時雨　傍聽者側から飛出します。大變突飛な質問かも知れませんが、さう云ふ時に市税を拂ふのを止めて居ても宜いものなんでせうか。

金子　詰り市民の義務を當然怠つて宜いでせうかと云ふ……。

時雨　税金を拂ひながら「惡い事をして居る／＼」言つてゐるのも一寸可笑しい、皆が同盟して拂ふことを止めたら如何でせうか。

多川　それは、責任は市民に在ると言はれても仕方がない、其の市議員を選んだのは市民ですから……。

時雨　全然拂はぬのではなく、供託でもして、片つ方の淸算がつく迄拂はないことには出來ないでせうか。

新妻　此の間の富山電氣の爭議のやうに、あれは今の問題とは違ふけれども、非常に料金が高い、三割五歩なら三割五歩値下をしなければならない、其時に町の人が結束して、燈を暗くされようとも何うしようとも料金は拂はないのではない供託して置いて、解決がつけば拂ふ。其處まで行つて居るです。あの富山の滑川のは。

金子　今度のはまださう云ふ運動は起つて居りませぬね。

新妻　長谷川さんはさう云ふ事は出來ないかと仰つてやるんでせう？……市民全體が結束しなければ出來ないですね。

河崎　あれは一私立會社ですし、此方は市議の事ですから、對照が別です單なる爭議とは違ひますね、

時雨　それから又、惡い時には聲を合せて責めますが、善い事は褒めませぬね。道路が早く出來たとか、橋が立派に出來たとか思



ひますが、あゝ云ふ事は何處でも褒めないあれはやつた人としては詰らないでせう。

金子　今の長谷川さんの御意見は面白いと思ひます。同じやうな例で申しますが、外國の婦人參政權の運動には、さう云ふやうな一つの戰術を隨分使つて居りますね。女の人が參政權も得ないで所得税を納める必要はない、だから税金を納めない同盟と云ふや

ゝなことを、英國でも米國でも皆さう云ふ戰術を使つて、可成り有力に働いた場合もあるやうです。長谷川さんの仰つしやつたのは、一つの戰術として全然採上げられない戰術ではないと思ひます、それは今度の市會の場合に市民に依つて有力に起り得るか何うかと云ふことは疑問ですけれども。

山田　理事者側になら出來るが、吾々の選んだ代表だから仕方がないでせうね。

金子　市政研究會の方々がなさいました事は大體皆さんにお解りになつたと思ひますけれども、それに就てもつと色々の御希望とか、もう少し此際女は何う云ふ風にしなければならないとか、今迄なさつた事に對しての希望なり批判なり仰つしやる方がございますか。此の間市政研究會の方が市會議員の家に押掛けたことは大變彼等に強い刺戟を與へたやうだと云ふことを新聞社側の人から聞きました。市會議員の奧さんは半分以上青くなつて震へ上つたやうだ。其の効果は何うあるかと云ふ事に就て意見を聞きたい、と言うて私の所へ新聞記者が參りました。夫人と疑獄など云ふことは割合關係があるやうですが、きつと皆さん御意見があるではないかと思ひます。

壺井　よく震災前迄は、新聞に出る寫眞等でも、政治を議するにお猪口と藝者が並んで居て非常に氣持が惡かつた。此頃大分新聞に出るのが少なくなつたやうですが。

新妻　實際は矢張りやつて居るんでせう。

大和　新聞には、大變市政研究會の人は議員に對して被告扱にしたと云ふやうなことが書いてありました。



多川　私共決して政爭の道具にはならない積りですけれども、併し吾々は、政爭化しようが何うしようが否決になればそれで宜いのですから、いゝ加減政爭化した時分には引込む、口火を切れば宜いと云ふ形で、元來人數も少いし資金もございませぬから、徹底的運動は出來ませぬ、併し今度は、市政の淨化と云ふことは必要な時機と思ひますから、出來る事ならもう少し聲を大きくして皆さんの力を借りて徹底させたいと思つて居ります。

富山　私――これは個人の考で會を代表した言葉ではございませぬが、市政研究會に關係致して居ります心持は、私達が直接運動に携はる場合、どうぞ出來るだけ誤りのないやうに、詰り世間の方から「どうも女があゝ云ふことをやつて異れては困る」と云はれるやうなことを致しましては、今後お起ちになる御婦人に對して、申譯ないことであると思ひますので、出來るだけ愼重な態度を何時も念頭に置いて居る積りでございます。

竹内　今市會議員夫人の訪問と云ふ御話が出たやうですから、少し私に意見を言はせて頂きます。皆さんの御盡力で兎に角一通り市會議員に婦人の聲としてお灸を据ゑることは、大變いゝ事です。婦人も唯ぼんやり見ちや居ない、婦人も是だけ思つて居る、是だけ要求して居ると云ふことを、はつきり仰つしやつて下さつたことは、非常に私共婦人全體で感謝しなければならぬ。けれども市會議員と云ふものゝ立場と市會議員

の夫人と云ふものゝ立場や地位や力や、さう云ふやうなものをよく考へ合せて見まして、其の夫人にそれだけの此方の註文を出しまして、それが何の位効果があるか、又さう云ふ事をすることに依つて何の位一般の人が何う云ふ風に感ずるかと云ふやうな事も考へてみなければならぬと思ひます。で本當に悪い事をする人は何だか市會議員に出る時に其の目的で出る人が隨分あるらしい、又其の夫人なる人が、本當に其の半身であり本當に伴侶であるならば、夫がさう云ふ悪い事をする時には、蔭になり日向になり畠山重忠夫人みたいな態度を以つて、十分夫を牽制して行くと云ふことは望ましい事でもありますが、今の市會議員に、果してそれだけの夫人が有るか無いか、ですから皆さんお出でになつても、好感を以て皆さんの言葉を受入れるやうだと効果があつたでせうが、唯脅かされるやうな氣持では、何の効力もないと云ふことゝになりはしないか、折角の働きをなさりながら冷笑を以て迎へられるやうでは運動の効果は擧がらないと思ひます、其の夫人と云ふものは矢張り女の一人であつて力が無くて悩んで居るかも知れない。だから其處を考へなければならぬと思ふ。



大和俊子

市會の淨化と云ふものは、迚も八十八人の市會議員の夫人の全體が實に有力な人で善い行をしても淨化は六ヶしいと思ふ。全體の婦人が其處に行かなければならない。良い婦人が出て代表者を送り出すにも參加する。又自分達が其處に出て行つて。市政の濁つた水を薄めて行くやうにしなければ、迚も本當の淨化は六ヶしいと思ふ。其れに就ては一日も早く公民權を得ると云ふことが、根本的の淨化運動ではないかと思ふ。今迄も隨分參政權、公民權を得る爲に、婦選獲得同盟などやつて居りますが、先達の訪問をやつてみましても、一般の婦人と云ふものが實に斯う云ふ運動に對して無理解で、何だか恐しいものに觸るやうな心持で居ります。折角行けば新聞は新聞でひやかしたやうな態度で書き並べると云ふことは、實に殘念至極でありますけれども、併しさう云ふ世の中です。男は總て女のする仕事を見ればあゝ云ふ態度に出たがる。そこを參酌して、運動者としての歩みを餘程氣をつけて行かなければならぬと思ふ。



多川　私共の會は、名前は市政研究會など と大變穏かでないやうですが、其の實は突飛なやうで突飛でない。兎に角研究が主で、實行は餘技でございまして、此間市議の家を廻りましても、大變大袈裟に新聞には八十八人の市議の家を全部廻つたやうに書いてありますが、迚もそんな暇はありませぬから、七八人の主な人の所へは午後の暇をみて廻り、あとは書面です、又訪問した時でも意氣揚々だの堂々だのではない。極く穏かで、自動車でも横丁で下りまして（笑聲）皆で鄭重に致しましたのでおぢけをふるつたと云ふやうなのは少しおまけだらうと思ひます、女だてらにと言はれるのは恐れて居りますので、其點は隨分考へて居ります。

生田　一寸そこで之を申上げたいと思ひます。皆さん御存知かも知れませぬが、古島一雄さんの選擧の時よく……、松本亭の女將さんであつた松本ふみ子さんが、矢張り隱れた所で政治を淨化する爲に、餘程御盡力の氣持――又行動を持つていらつしやる、其の方が今日の會に大變御賛成でして、斯う云ふ御手紙をお寄越しになりました。それを唯今讀みませう。

――議員の中にはいやいやながら賛成するものも可なりあります。この樣子から見ましても、親分政治を打破することが何よりのことゝ存じますが如何ですか、何時の選擧にもいやになりますのは無智な土地の有志に左右せられて、自己の本心すら失ひたる行動をしてまでも議員になる人のあることです。選擧の度に有志として奔走する人の中には、候補者を苦しめたり、議員を誤らせたりする人も可なり多いのです、有志家なるものもこの際相當に社會が制裁を加へたきものと存じます。

多川　市民の自覺と云ふことを促さなければいけない、今仰しやるやうにお金が欲しくて議員を選ぶ人が多い、それが改められなければ何時になつても本當の事は六ケしい、一寸眼先はうまいやうで、其の實はお金を撒いて議員になるには野心があつてなる、利權を得たい爲に一時お金を撒くのですから、それに騙されて選ぶと云ふ、職業的市會議員それを大いに此際市民の自覺を促したいと思ひポスターを刷つて撒きました。



富山　當面の問題は市議員の辭職勸告でございます、それが片附けば婦人公民權なり、次の選擧に如何に市民が自覺して起つべきかと云ふ運動の方に移らうと思ひます。物には順序がありますから……。

竹內　總辭職をしたとしても、其次に選出される市會議員は、今から皆で一生懸命やるとして、良い人が出るものでせうか。

伊福部　それは、資本主義社會が續く以上、幾代經つても同じことに行くんですよ。

富山　現實は理想の通りには參りませぬが、理想は飽迄高遠な理想を持つて居ります。それは理想であつて勿論私達致しますことは、大きい池に石を放り込むやうなものですが、それならしない方がましであるかと云へば、矢張り一つぽつんと音させるだけでもしないよりはましである。さう云ふ積りでやつて居ります。然し少數の人間の考へたことで一生懸命致した積りでも、後から考へると失敗のことがございます。それはどうぞ皆さん寬大な御心を以て御恕し下さいまして、「それは間違だ今度は斯う云ふ風にせよ」と云ふ風に仰つしやつて下されば、私達は御意見を伺つて又立上がる、それだけの熱心と勇氣と執着心とを持たなければ、餘りきれいさつぱりとした考では駄目だと思ひます。

山田　現在から一歩出るのなら、矢張り婦人公民權ですね、さうしてまあ眞黑い水の中に少しでも白い水を入れる、それが順序ですね。

富山　公民權は出來るだけ早く獲得する爲に婦人も是迄になつたと少しでも働いて見せ

る、少しでも實行して、それで順々に形をつけて行きたいと思つてゐます。早く吳れないかく\と、大手搦手から公民權を得る爲に働くやうなものですが——

金子　是は婦人市政研究會の方々が市會議員を歴訪なさつたりして、其の反響の一つとして一人の市會議員から來た手紙なんださうです。

謹啓御會世話人等に於ける市會議員總辭職勸告の決議書正に落掌し拜見しました。

只今家内は老母の世話と子供の保健と養育の重責の爲め、轉地し留守なれば小生代つて御返事申上げます。



遺憾ながら小生は諸君等と意見を異にし、御大典を前に斯くの如き不祥事を惹起したる下劣なる同僚を頻出したるを憂し、今後の市政革新の爲に一層粉骨碎身、以て其理想を實現すべく責任の重大なるを痛感したる次第にして、辭職勸告の如き小生の眼中一ヶの價値なきことを不惡御了承願ひます。

理由中「市會議員は市民に對して當然辭職を爲すべきものなり」とありますが、金錢情實等に惑はされて、同僚の顏に泥を塗る醜劣なる輩を選擧したる市民は何を以て公正なる市民に謝すべきか？



此際余り多くを言はず、唯一言を附加して御返事に代います。

諸君は諸君に與へられたる天職を三省し先づ諸君の家政より淨化せよ。

然らば其天與の差事は遂には國政の上にも反映せん。

八月廿一日　伊〇美〇松

世話人御中

「追伸解散は大いに歡迎します」（原文のまゝ）

生田　此の手紙に就て色々皆さんの御意見を拜聽致したいと思ひます。大いに一言も二言も三言もある譯と思ひます。

山田　女は家庭だけ見て居ろと云ふ皮肉ですね、出しやばるなつて、初めから皮肉ですね。天職の爲に自分の妻は盡して居る。立派な婦人だと云ふことを言つて。

伊子　自動車を横丁で下りて行つてもね。（笑聲）

新妻　自分のやつて居ることを惡いと思つて居ないんですからね。

富山　法律上では辭職する理由となるものはないので、唯政治道德の上からのことですから、良心を持つた人のすることで、實に六ケしい註文です。

河崎　私は二つの意見があるですが、此の手紙の中で「さう云ふ醜議員を選んだのは市民の責任だ」と云ふことを言つて居ります此前新聞にも何誰の言葉であつたか「さう云ふ議員を選んだのが惡いのだ」と逆捻ですが、是は考へなければならないと思ふ、之に就ては大いに意見があります、もう一つは「諸君は諸君の天職を——」などと云ふ此人に、結局本當の政治は解らないのです。こんな手紙を書いたやうな方は、奧さんは臺所に居つて、何にも御存知ないで、赤ちやんのお襁褓を取換へていらつしやる。此の手紙を見ると、奧さんは老母の世話と子供の健康の爲に轉地して居ると云ふから、此事以外の事はなさらない方であると思ふ、市會議員の奧さんがもつと市の政

治の事を知つて主人が本當に善い事をして



居るか何うかと云ふことを知つて居られたら、もう少しは違ふと思ふですが、此の市會議員の奥さんが知らない、況んや他の政治の事に關係のない人は尚更知らないこと夥しいのだと思ふ。是が大事な問題である。それから一方丁度政治界が婦人に公民權を出すとか出さぬとか云ふ、さう云ふ機運になつて居るですから、一生懸命に公民權を獲得して一票を持つてものを言ふこと、此の二つを目標としてやつて行かなければならぬではないかと思ふですが、差詰め市政研究會の方々が總辭職勸告をなさつたことは當面の問題に對して本當に結構と思ひます。

竹内　私の希望をもう少し聞いて頂きたいですが、殊に河崎さんのやうな方に聞いて頂きたいと思ひますのは何と云つても現在の年とつた方は、まア駄目だと思ふ。若い人を對象に進まなければならぬ氣持が致します。で、その若い人を指導して行く人は、女學校の校長さんが、一番力があると思ひます。少なくとも、女學校で、公民教育をしなければならぬと云ふことを、女學校の校長さんに知つて頂くと云ふことは、非常に大切なことゝ思ひます。私共、隨分御懇意な方もございまして、いろ／＼な方に出合ひましても、割合に政治の事は、皆さんがお嫌ひですね。（笑聲）女學校と云ふものは、良妻賢母を養成する所で、そんな政治の事などは、教育しなくても宜しいと云ふ、お頭の先生が多いやうに思ひますが、さうぢやないですか？　それで私は、女學校の校長さんに是非、膝詰談判で、一人々々に說諭して、やつて頂きたい――如何です？



河崎　私に向つて、仰しやつてゐらつしやるんですか？

吉屋　さつきの、市會議員から來た手紙ね、皆さんに、手紙を差上げたんですか？　それでその返事が、反響として一ツだけですか。でも寄こすだけ諒とすべきですね。

金子　皮肉ばかり……臺所に入つてゐれば宜いつて……。

吉屋　それに對して返事を寄こすだけ、宜い方ぢやないの――取上げたゞけ宜いでせう。まアこんなケチな男とすれば、市會議員なんて推して知るべしですね。

金子　こんな手紙を寄こして、疑惑を新たにして貰ふ爲に寄こしたやうなものですね。



こんな所に持出されて、さぞ光榮と思ふでせう。

新妻　大分お話がはづんで來ましたから、何かもう少し今度の事件に關聯した事で以て……。

生田　伊福部さんが、この問題に就てお話になつたことがございます。さつきの事をどうぞ……。

伊福部　先程竹內さんが、女學校の校長さんなんか、政治なんてものに無關心だと仰しやいましたが、さう云ふむづかしいものでなく、例へば、私の家では、住んで居ります中野の、野方町の町會議員か何かしてゐるですが、それで時々集りなんかあつて、主人が出ますと、集つて來る人が土地の人ばかり、つまり質屋の老主人であるとか、酒屋の旦那さんとか、それから藝者屋の何とか云ふ人達ばかりで、月給取りとか、私どものやうに、書きものをしてゐるやうな人は、一人も出て參りません。さう云ふことから考へるのに、小賣商人とか、地主とか云ふ、その土地に居着いてゐる人達は、非常に土地を大事にしますし、町をも大切にします。けれども、月給取りや何か、つまり家だけを必要として、勝手に移動する人達は、百姓がその土地を大切にするのと違つて、家だけが必要で、庭とか何とか、つまり土地は附屬物位にしか考へないで、その土地を、故鄕のやうな心で愛すると云ふ觀念がないと思ひます。大阪その他の小都市には、東京ほどに醜類とか云ふ者が無いのぢやないかと思ひますが、一體に東京は、移動する人が多くて……みんなが東京は住みよい〳〵と云ふけれども、それは傳統がなく、故鄕と云ふ觀念がなくて、隣りに誰が住んでゐるか、自分達を代表してゐる市會の人は誰なのか、まるで考へませんですから、自分達を代表した人で、悪い事をした時には、悪い〳〵と言ふが、良い事をしてゐる時には、何にも言はない。悪い事をしてゐる人に對しては、悪いと云ふが、扨て取つて代つて、誰が市會に出て、何をするだらうかと云ふ、そこまで考へてゐる者はない。是までの女學校の、總ての教育では、傳統を破壞した……と云ふやうな事を、隨分言はれて居りましたけれども、私は相當に、傳統に生きやうとする心持が必要だと思ひます。市政研究會の方が、辭職をしろとか、どう云ふ風にしろとか云ふ事は、勿論宜うございますけれども、それより先に、女……女ばかりでなく男にも、政治なんてむづかしいものでなしに、故鄕、町、村、への心持をもつと深く持たせなければならないと思ふ。



河崎　その土地の人は、町の事に就て非常に交渉があつて……町は町、市は市で、區は區で結びついてゐます。それが非常に又悪い場合があることもあります。あなたの仰しやるのは、別の意味で、もつと土地に根を下して、故鄕の關係に於ての、物の考へ方を敎へるやうにと云ふ……。

富山　大阪の市會議員は、つまり先祖代々そこに住んで居りまして、何屋の誰と云つたやうな人が、市會議員に出てゐ非常に落付いて仕事をするので、總ての事は、市の理

事者は任してしまふのださうで引續き昔から、代々續いた人が選出される大阪の方は巧く行きますさうで、東京の方は、矢張り地方からいらつしやつて、成功なすつた方が、市會議員になるから、何と云つても愛市心が少いといふことは、明かな事實でございませう。

河崎　私、關西の者でありますから、矢張り逐、大阪の新聞なんか取つたりしてゐますが、東京の市長が度々代るのに、大阪では池上市長が永いことしてゐる。大阪の方は一ッは、あなたの仰しやつたやうな理由で商人が多くて、政治と云ふことは第二義的に考へてゐる。東京は政治其もの丶爲に、つまり政治屋として、いろ／＼の利權を漁つて、勢力を得やうとするけれども、大阪の方は商賣を主にしてゐるから、萬事、理事者に任せてゐる。もう一ッは何と云つても、東京は全國での、お膝下ですから、一番政黨の影響が多い。市議を選ぶにしても府議を選ぶにしましても、政黨の影響が多いから、どうしても他よりむづかしいので理事者なんかも、さう云ふ風な關係から動かされる場合が多くはないかと思ひます。ですから、大阪人が良いとか、悪いとか云ふよりも、其の土地の性質に依るやうなこともあるでせう。



金子　東京の市會議員は、政黨關係さへも超えて唯利害關係で……。

吉屋　私何か喋べらうと思つても、皆さんが長篇小説的にお話になるので、短篇を挾むわけに行かないので……さつきの手紙に、市民の責任と書いてあつたが、そんな悪い奴を、當選させたのは、選ぶ市民も悪いが不思議なことには、瀆職事件などが起ると市民は悪い感情を持たないで、それを隱匿するやうな弊がある。つまり變な、一種の人氣を持つて居るですね。其區の道が非常に良くなるとか……三木武吉のやうなのを御覽なさい。あゝ云ふ風に自分の區さへ宜ければと云ふので、區の爲には、非常に盡すやうなことがありますから……。

金子　さう云ふ事は、多少政治運動などやつてゐると、つく／＼さう思ひます。その事は東京の市會に限らず、地方に行つてもさう思ひますが……。

吉屋　つまり結局は、市民教育ではないですか、悪い政治屋の一人や二人いぢめても、根性は直りませんから。

金子　信州人は……小川さんをそんなに尊敬しないけれども、信州人としては中央線なんかを電化して貰ふ爲に、鐵道大臣で居てほしいと云ふやうな實際問題と、政治と云ふものと結び付いてゐるから、その結び付きが一體どうなるか、それを考へると……

伊福部　先程、政治を淨化するには、今度總辭職をして新しい市會議員が出れば、幾らか良くなるとか、それでも良くならない。矢張り女が入らなければ良くならないと云ふお話がありました。私よく考へてみますと、今の女は清淨潔白である。つまり資本主義、或は經濟とか、金とか云ふものに、女が矢面に立つてゐないから……けれども女も經濟の渦の中に、資本主義の中に卷き込まれると、矢張り醜類になつてしまふかも知れない。ですから女が居さへすれば良くなる譯でもないと思ひます。

山田　四十年や五十年先はどうでも、五年、

十年潔白のが居たら滿足です。

富山　絕對的のものぢやありませんから‥‥

吉屋　要するに女が市會議員になることですね。四谷選出、山田わかなんて張札するやうに‥‥。

新妻　公民權の問題が‥‥此間は婦選の問題を政友會に出したさう‥‥。

金子　それはまだ政友會へ出してゐないのです。まだ政友會として發表したものではありません。具體案として言へると思ふものは、政府の市政制度審議會、行政制度審議會では、婦人に參政權を與へるなら、公民權からと云ふので、年齡も教育も制限する必要はない。男の普選と同じ程度のもので宜しいと云ふのが、行政審議會の成案なんです。是が政府の原案になると言へば、なるのでせう。それに對して政友會の方はちつとも具體案を出して居りません。三十歲以上の世帶主なんて、新聞の方で勝手に臆測してゐるだけで、言明は聞いて居りません。公民權のお話も、今朝の日々ですか望月內相は公民權も尙早だと云ふことを出して居りますね。

吉屋　兎に角正業を持つてゐない人は、選擧される資格はない、宿屋でも、八百屋でも宜いと思ひます。瀆職なんかは大抵無職者から出ますよ。

時雨　それより手當が少なすぎるのではないでせうか？

山田　それは普通の市民として生活して居れば、足りないことはないのですが‥‥。

吉屋　名譽職なんだから、無給だつて宜いんでせう？

金子　可笑しい話を聞いたんですが、市會議員になると、五圓札が大變澤山に要るんださうです――。

吉屋　藝者になるも、市會議員になるも同じことね。

新妻　兎に角あまり悧巧の人なんかならないですよ。

山田　私の參考の爲に伺ひたいですが、大阪の市長の任期の問題は、私達が聞いて迚も羨ましい。どうしたつて、半年や一年で仕事が出來る譯はないですからね。で、さしあたり四谷區の問題ですが、區長が迚もいぢめられてゐるんです。民政派にも、政友派にも關係ない方ですが、民政派の方の人が、あの人を入れたらと云つて、推薦したゞけですが、民政派と睨まれて、政友派から迚もいぢめられてゐます。その場合に私共、何だか區長が區長としてあまり仕事をしない人だから、取換へると云ふのならば已むを得ないけれども、正々堂々と、正義を以て仕事をしやうとして居るのに、反對派の爲に、ほんとうに正しく鬪つてゐるのではなく、色眼鏡をかけて、いぢめると云ふことは、何としても口惜しい‥‥何とか出來ないでせうか？　婦人の力で‥‥。

新妻　仕方がないですね、だからあなた方が監視役に一ッ、女で拵へるのですね。

多川　西久保市長の追出しの時――革新會が西久保さんを選んだのですが、自分達が選んで置いて、自分達にあまり利權を與へてくれないので、彈劾案を出した。情ないことに、市長さんは偉い人がなりますけれども、市長の權限が弱いのです。警視總監と云ふ者があり、府知事がありますから、市長さんの仕事は、極く權利が狹められて市會の解散權がない。內務大臣にその權利があつて、當時の內務大臣と云ふのが、鈴木さんで、矢張り政友會のですから。市長さんの肩を持ちません。市の事は市で決定すべきであると云つて、とうとう不信任案が可決してしまつたのです。

金子　四谷婦人會の事、新聞で御覽になつた

方があるでせうけれども、さつきから盛んに、公民權の問題が出て居りますが、實際問題として、竹內さん、山田さん、大和さん方の御盡力で、四谷に婦人會が出來たのです。會長、竹內、山田副會長と云ふことに決めまして、民政派の巨頭の夫人も、創立に出合つて居られたと云ふので、政友派の方で出來上つた婦人會をクソミソ言つていぢめる。さうして山田さんなんかを、副會長に選んだのを、赤化の虞れがある、赤化宣傳をやるなんて云つて、出來てホヤホヤ、何にも仕事をしないうちから、政爭の中に、區の婦人會であるから卷き込まれる斯う云ふことはほんの一例ですが、將來婦人が權利を持つたら、さぞ政黨側の勢力が婦人を利用しやうと思つて、取卷くだらうと思ふ。

八木　今、市會議員達が瀆職罪で擧げられても、それは皆下の人で、氣の利いた人は擧げられない。だから結局、二大政黨の醜惡と云ふことが、末の末まで反映して行くのは仕方がないですね。

金子　司直の手と云ふものが、どの程度まで働くかと云ふこと….此間檢事局にいらつしやつた時は、どんなお話でしたか?

富山　あの時に決議書を拵へました。決議書を持つて來りましたら、お骨折を感謝するこの上とも十分に徹底的に調査をする、それだけの事を申上げて置く――とだけでございました。萬事型の如くなんです。

金子　折角女の方がいらして、型の如く仰つしやらないで少しくだけていろ／＼聞いていらつしやると宜かつたのに….新聞に書かれたのを見ると….

竹內　でも此頃は少し、新聞の論調もさめかけて來ましたね。

八木　研究會の方が訪問なさつて、あくる朝の新聞の書き方が、ほんとうに不愉快でしたね。

大和　眞相を報導して貰ひたいと思ひますねどこまでほんとうかと云ふ、疑念を持たなければならない。

山田　婦人參政權の問題を、尙早だと云ひ、公民權が尙早だと、望月さんが書いてゐますが、そんなことはない。婦人の要求が無いぢやないかと、斯う云つてゐます。つまり婦人の聲が小さいのです。

金子　兎に角公民權を得て、東京市會を女で。

時雨　理想の市長を選んで、其人に高い權威もたせて、擁護したら宜い――。

新妻　理想の市長と云ふものが、選ばれた時には、女の方の理想の市長と、今の市政をやる市長と、相容れないぢやないでせうか?　聲だけとして叫ぶのなら宜いかも知れませんが――。

時雨　國政は外國との關係なんかで、まあ、そこには、臭い物に蓋と云ふこともありませうが、市政などは每日市民に報告しても宜いと思ひます。市民も樂しんで待つてゐてよい筈です。いろ／＼なスポーツの――あの野球やなんかのやうに、大きな看板を出して明白に….

吉屋　ラヂオでね….

河崎　それは愉快ですね。

吉屋　政治なんか、一體婦人が擁護しやうとしても、認めない人が多いぢやないですか。

山田　一票を持ちさへすれば、認めて行きます。一票取らなくちや駄目です。

金子　吉屋さん、先ほど長谷川さんが、そんな時には稅金を納めることなんか拒避して共託するとかおつしやつたのですが――。

時雨　（吉屋氏に向つて）あなたなんか、稅金を拂つてるでせう?

吉屋　えゝ、馬鹿々々しいのね。義務だけ懲發されて….家の近所の書生なんて、親の

スネを嚙つてゐても、二十五歳過ぎてゐるから‥‥。

時雨　小さな事ですけれど、郵便切手なんかでも、向ふで貼つて來るのが不足だと、やかましく取りながら、こちらから餘計に貼つてやつた時には決して何にも言はない。あれは變ですね。

竹內　それは、規則に不足ぢやいかんが、多いなら構はないとあるからでせう。

吉屋　あの花の日會がお釣を出さない（笑聲）やうに‥‥

山田　アメリカに手紙を出すのに、まだ十錢で行つた頃の事ですが、向ふのアドレスは英語で書いたが、こつちは日本語でした。さうしたらそれを、家に配達して來たのです。それで私は、英語の讀める者はないのかと郵便局に行つて苦情を言つた所が、十錢損をさしたから返す。遞信省に取りに來いと云ふことです。十錢取りに行くのに、十五錢電車賃を使つてもつまらぬから、もう奉納してしまつたですが‥‥。

時雨　もつと不愉快なのは、瓦斯屋や電氣屋なんかまるで政府筋かの者のやうに、集金に來る者の態度に、威張つてゐる者がゐますね。こまかいのが貰ひたいとか、一寸間へると云ふと明日は來られないとか何とか叱言を云つて怒りますが、あんなのも變ですね。

吉屋　さう云ふ事が、市會議員の家だと、市から命じて親切にやるんでせう。露骨ですからね。

金子　私が信州に參りまして、上田の市會議員の中に、それは面白い人がゐるのださうで、何かむづかしい問題になると、一寸失禮して家へ行つて參ります。と云ふ‥‥つまり家へ行つて、奧さんに聞いて來るんですね。一寸待つて下さい――と云ふので、有名な市會議員（笑聲）私それを聞いて、大變に意を强うしたのです。男の市會議員でもそんなのが居れば、婦人は政治敎育が無いとか、婦選尙早なんて云ふけれど、女の市會議員が、一寸聞いて來ますつて言つても、ちつとも恥ぢやないと思ひますね。男でもそんなのが居れば‥‥。

新妻　さう云ふのが細君にのろいなんて、惡口を言はれるんでせう。

金子　それが、ちやんと勤まる‥‥上田だから勤まるので、東京ぢや迚も‥‥。

吉屋　女學校の校長から言はせればどうか分らないけれど、文部省の國定敎科書の修身とは反對です。女は、家計を良くし、子供を養ひ、夫に後顧の憂ひなからしめ、家事にいそしめば宜い。と云ふやうな事ばかりで、市民敎育を受けろだの、市會議員の監督なんて事は、書いてないですね。

河崎　さう云ふお話が出ましたから、引つくるめていろいろ申上げたいと思ひます。山田さんが十錢の事で、こつちから申出たから、遞信省に行けば拂ふと云つたので、若し默つてゐたら、そのまゝ取つて居つたかも知れない。こつちで默つてゐなかつたから、さう云ふものでないと云ふことが分つた譯で、皆がヤイ〱言へば政府の方でも、さう默つてはゐないで、報告してくれるだらうと思ひます。竹內さんは又一方敎育の方から、政治の事を知らすやうに、敎育するのが宜いと仰しやる。そして今又敎科書の問題が出たですが、文部省は、普選が通りました少し前頃から、政治敎育といふことを大分考へ出しまして、大正十一年頃から、成人敎育講座と云ふ題の下に、政治思想、社會思想を養成するの目的にあると云ふことが、書いてありますで、全國で、昨年までの報告を見ますと、昨年は一番多くて、九十四ヶ所程聽いて居ります。矢

張り政治の民衆化は當然であるとか、或は市政に付てとか、憲政に付てと云ふやうな事の講座をして居るので、聽講者は二萬人位、そのうち女の人は二千人位聽講して居ります。女の人が、年々少しづゝは多くなるですけれども、先づ全體の一割位しか聽講してゐません。併し今年の二月、普選が實施されてから、自然と婦人參政權の問題がやかましくなつて來て、矢張り女の人に公民權が必要だと云ふことを、女學校の校長も大分考へて來たらしく思はれます。

奥 私さつき、竹内さんのお話の時にさう思つたのですが、學校の教育と云ふものに、信頼出來ないと思ふ。私、前からおかみさん連中を相手にして仕事をしてゐるから、政治は臺所の延長だと云ふことだつて、隨分抽象論だと思ふ。それよりも、もつと實際問題…今の政治家は斯う云ふ惡い事をしてゐる、何故さう云ふ惡い事をするか？と云ふことを、分らせるのが、もつと具體問題だと思ふ。學校の教育で、選擧權のことなんか本にも書いてあるやうですが、この間の總選擧の時に學校では、有權者の生徒に成るべく選擧されまいとして、學校の生徒を骨抜にして居る。もう少し露骨になると、自分の政黨に都合の好いやうにする都合の好いやうに動かせるやうな學校ならば、例へば政友會の支配下にある文部省は學校をさう云ふ風になら動かすかも知れないが、さうでなければ、動かせないやうにしてしまふ。だから婦人參政權でも、教科書に書いたゞけだけでは、却つて骨抜になる。私の關係の團體などは、成べくもつと實際問題から、何故今の政黨が惡いことをするか、何故久原さんを遞信大臣に据えたか――と云ふ風に、政治教育はそこから入つて行きたいと思ふ。學校の教育も抽象論として教へていらつしやるから、その教育に肉をつけ、身をつけるのが我々團體の仕事だと思ひます。今の政友會は、どう云ふことをしてゐるかと云ふやうな、現實問題に就ては、もつとはつきり…

新妻 無産運動では暴露主義でやつてゐますね。

金子 それが…私無産政黨に反對しないけれども、無産政黨の演説會に行く。さうすると、裏長屋のおかみさんが來て居るのは意にも止めないで、演説していらつしやる理窟では暴露であらうけれども、譯の分らぬお經を聞かされたり、むづかしい言葉で演説されたり、いろ／＼な書きものなんかもむづかしくて…。

奥 さうして聲明書でもむづかしい言葉ばかりで、「わし實際、よう解らんのや」(笑聲)などと言つて居ますが、そんなことで、實際みな空なヵヶ聲だけだと思ふ。

河崎 奥さんが仰しやるやうに、政治の事實を…あれは斯うなつてゐる。是は斯うなつてゐると云ふ風に、事實を暴露して行くのには、その方法を、どう云ふ風にしてやつて行かうかと云ふことは、結局一ッの政治教育になつて行くだらうと思ひます。

吉屋 それは言語の機關があれば宜いと思ふその點でこの女人藝術が卒先して、之を載せる――それは隨分利くと思ひますね。

奥 實際問題としてやつて、もつと言論の機關を通じてやる事も、無論必要で、現在行はれてゐると思ふが、それの及ぶ範圍と云ふものは、實に少數だと思ふ。所謂知識階級の婦人にしても、しつかりしてゐる婦人きりだと思ふ。で、膝詰めで…おかみさん達に解らせるには、前垂れがけで一緒に話すやうにすれば、解らせることが出來ると思ふけれども、年がら年中、歩いてゐられる程、私達には時間がありませんから―

吉屋　みんな御用聞きにならなくちや、しやうがない。

金子　もつと具體的に、無產婦人團體でも、どうしたら澤山の女の人に分らせられるかと云ふことを、研究する必要があると思ひます。例へば紡績の女工さんとか、勞働組合のある所では、組合の機關雜誌、殊に婦人部の方のいろ〱の仕事の進んでゐる所では、大變嚙みくだいた物が、いろ〱出來て居りますけれども、それを讀んでも、まだ女工さんにも解らない所、かたい所が澤山あります。

吉屋　河崎さんどうする？　一ツ言論で‥‥

河崎　それ〲持つてゐる力で以て、つまり理論でなくして、具體的にやるのですね。そしてほつとかないで、機會ある每にやつて行くが宜いです。もつと具體的の問題になると、言はうと思つても學校の先生なんて者は、政治の事など一番知らないですよ

八木　勝田文相をどうして引つ張つて來たの久原をどうのと云ふこと、學校で先生が仰しやると、首になりませんか？

奧　文部省で押へてゐれば、文部省は政友會の支配下にあるから‥‥。

河崎　學校の先生と、お坊さんとは、政治に物を言はさぬから、知らないのが當り前で知らうともしなかつた。ですから何も言ふ事を知らない――。

金子　今のさう云ふ言論の力とか、いろ〱な教育運動以外に、日常鬪爭、實際鬪爭を教へて行くと云ふことは、實例教育と云ふことになる。是で行けば、自分の家の子供をやつておく小學校の隣りに、藝者屋が出來るのが良いか、惡いか位、どんな人でも分る問題だらうと思ひます。

新妻　私先達て玉の井に行つて見て來たですが、その蔭にも政黨なんぞが潜んでゐる。土地と政黨と云ふもの丶、因果關係が幾つもあるから、私共の理想的には行かないですね。惡い事とは知つてゐながら、土地の發展といろ〱な關係から‥‥ですから一寸とした事は言へない。惡い事は事實でせうが、兎に角輿論と云ふことは‥‥。

富山　あらゆる婦人雜誌とか、いろ〱の機關が一齊に、婦人の公民權とか云ふ題材を捉へて來ましたならば、世間の人の注目が向いて參りますで、いくらか時期を早めることが出來るかと思ひます。

金子　私も富山さんの仰しやる通り、お聲は大分かゝつて來たと思ひます。で、今度のやうな、二業地の問題でも、市政の革新の運動でも、必ず婦人だけの結束と云ふことが‥‥無論是は、無產階級の運動と一緒にやらなければならぬと云ふことはありますけれども、兎に角婦人なら婦人だけでも別になつてゐることは、嘘だと思ひます。併し割合最近は、女の人が一緒になる傾向が出て來たと思ひますから、この女人藝術なんかも有意義に働いて行くやうに、いろいろな注文を申上げやうと思つて居りますが、二業地の問題なんか、もつと起らないでせうか――？

奧　市政研究會では、今年の春市會の選擧の當時も、運動なさいましたか？

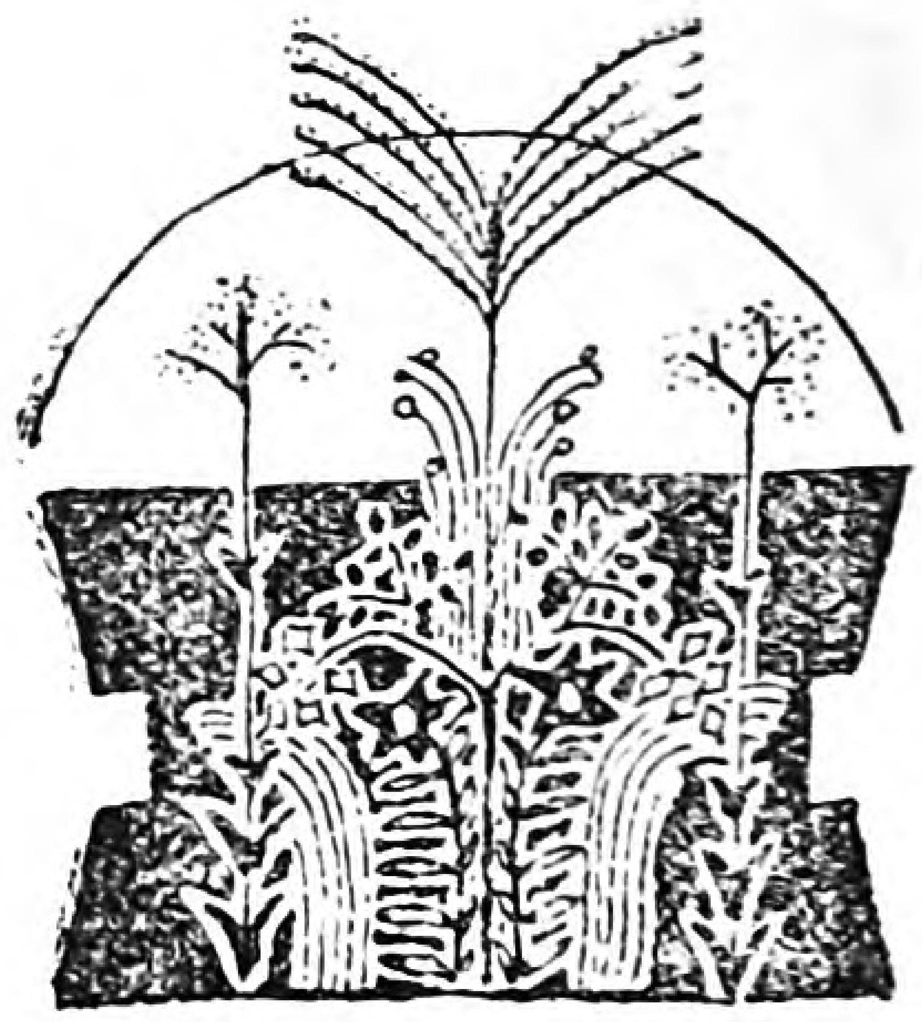
多川　市會選擧の當時も致しました。

金子　決議文をお出しになりましたか？

富山　絕えず反對して居ります。兎に角私達は微々たるものですが、どこまでも徹底的に、進むと云ふ方針で幾度か決議文を出しまして、どうか否決して吳れとか云ふことは願ひましたのでございます。その點、どうか宜しくお含みを‥‥。

生田　今日は大變に皆さんから良いお話を伺ひまして、有難うございました。

大野優子、佐藤秀子、速記擔任



大阪アヤ子

秋が來たんだ

——放浪記——

林芙美子

圓い食堂の中を片づけてしまつて始めて自分の體になつたやうな氣がする。眞實に何か書きたい。それは毎日毎晩思ひながら、考へながら、部屋へ歸るんだが、一日中立つてゐるので疲れて夢も見ずに寢てしまふ。

淋しいなあ。ほんとにつまらないなあ…。住込は辛い。その内通ひにするやうに部屋を探さうと思ふが、何分出る事も出來ない。

夜、寢てしまふのがをしくて、暗い部屋の中でじつと目を開けてゐると、溝の處だらう、チロチロ…虫が鳴いてゐる。

冷い涙が不甲斐なく流れて、泣くまいと思つてもせぐりあげる涙をどうする事も出來ない。何とかしなくてはと思ひながら、古い蚊帳の中に、樺太の女や、金澤の女達三人枕を並べてゐるのが、何だか店に洒らされた茄子のやうで佗しい。

「虫が鳴いてるよう…。」

十月×日

一尺四方の四角な天窓を眺めて、始めて紫色に澄んだ空を見た。秋が來たんだ。コック部屋で御飯を食べながら私は遠い田舍の秋をどんなにか戀しく懷しく思つた。

秋はいゝな…。

今日も一人の女が來た。マシマロのやうに白つぽい一寸面白さうな女。厭になつてしまふ、なぜか人が戀ひしい。

そのくせ、どの客の顏も一つの商品に見えて、どの客の顏も疲れてゐる。なんでもいゝ私は雜誌を讀む眞似をして、じつと色んな事を考へてゐた。やり切れない。

なんとかしなくては、全く自分で自分を朽ちさせてしまふやうだ。

十月×日

そつと私が隣のお秋さんにつぶやくと、
「ほんとにこんな晩は酒でも呑んで寝たいね。」
梯子段の下に枕をしてゐた、お俊さんまでが、
「へん、あの人でも思ひ出したかい……。」
皆淋しいお山の閑古鳥。
何か書きたい。何か讀みたい。ひやひやとした風が蚊帳の裾を吹く、十二時だ。

十月×日
少しばかりのお小遣ひが貯つたので、久し振りに日本髪に結ふ。
日本髪はいゝな、キリ、と元結ひを締めてもらふと眉毛が引きしまつて、たつぷりと水を含ませた鬢出しで前髪をかき上げると、ふつさりと額に垂れて、違つた人のやうに美しくなる。
鏡に色目をつかつたつて、鏡が惚れてくれるばかり。日本髪は女らしいね、こんなに綺麗に髪が結べた日にやあ、何處かい行きたい汽車に乘つて遠くい遠くい行きたい。
隣の本屋で銀貨を一圓札に替へてもらつて故里のお母さんの手紙の中に入れてやつた。喜ぶだらう。
手紙の中からお札が出て來る事は私でも嬉しいもの……。
ドラ燒きを買つて皆と食べた。
今日はひどい嵐、雨が降る。
こんな日は淋しい。足がガラスのやうに固く冷える。

十月×日
靜かな晩だ。
「お前どこだね國は？」
金庫の前に寢てゐる年取つた主人が、此間來た俊ちやんに話かける。寢ながら他人の話を聞くのも面白い。
「私でしか……樺太です。豐原つて御存知でしか？」
「樺太から？　お前一人で來たのかね。」
「えゝ！」
「あれまあ、お前きつい女だね。」
「長い事函館の青柳町にもゐた事があります。」
「いゝ所に居たんだね、俺も北海道だよ。」
「さうでせうと思ひました。言葉にあちらの訛がありますもの。」
啄木の歌を思ひ出して眞實俊ちやんが好きになつた。

　函館の青柳町こそ悲しけれ
　友の戀歌
　矢車の花。

いゝね。生きてゐる事もいゝね。眞實に何だか人生も樂しいものゝやうに思へて來た。皆いゝ人達ばかりだ。
初秋だ、うすら冷い風が吹く。
佗しいなりにも何だか女らしい情熱が燃えて來る。

十月×日
お母さんが例のリウマチで、體具合が悪いと云つて來た。
もらひがちつとも無い。
客の切れ間に童話を書く、題「魚になつた子供の話」十一枚。
何とかして國へ送つてあげやう。老いて金もなく頼る者もない事は、どんなに悲慘な事だらう。

可哀想なお母さん、ちつとも金を無心して下さらないので餘計どうしてゐらつしやるかと心配します。

「その内お前さん、俺んとこへ遊びに行かないか、田舍はいゝよ。」

三年も此家で女給をしてゐるお計ちやんが男のやうな口のきゝかたでさそつてくれた。

「えゝ……行くとも、何日でも泊めてくれて？」

私はそれまで少し金を貯めやう。

いゝなあ、こんな處の女達の方がよつぽど親切で思ひやりがある。

「私しあ、もうもう愛だの戀だの、貴女に惚れました、一生捨てないのなんて馬鹿らしい眞平だよ。あゝこんな世の中でお前さん！そんな約束なんて何もなりはしないよ。私をこんなにした男は今、代議士なんてやつてるけど子供を生ませると、ぷいいさ。私達が私生兒を生めば皆そいつがモダンガールさ、いゝ面の皮さ……馬鹿馬鹿しいね浮世は、今の世は眞心なんてものは、藥にしたくもないよ。私がこうして三年もこんな仕事をしてるのは、私の子供が可愛いからさ……ハツハツ……。」

お計さんの話を聞いてゐると、ジリジリとしてゐた氣持が、トンと明るくなる。素的にいゝ人だ。

十月×日

ガラス窓を、眺めてゐると、雨が電車のやうに過ぎて行つた。

今日は少しかせいだ。

俊ちやんは不景氣だつてこぼしてゐる。でも扇風器の臺に腰を掛けて、憂鬱そうに身の上話をしたが、正直な人だ。淺草の大きいカフヱーに居て、友達にいじめられて出て來たんだが、淺草の占師に見てもらつたら、神田の小川町あたりがいゝつて云つたので來たのだと云つてゐた。

お計さんが、

「おい、こゝは錦町になつてるんだよ。」

と云つたら、

「あらそうかしら……。」

とつまらなさそうな顔をしてゐた。

此の家では一番美しくて、一番正直で一番面白い話を持つてゐた。メリーピックホードの瞳を持つて、スワンソンのやうな體つきをしてゐた。

十月×日

仕事をしまつて湯にはいるとせいせいする。廣い食堂を片づけてゐる間に、コックや皿洗ひ達が先湯をつかつて、二階の廣座敷へ寢てしまふと、私達はいつまでも湯を樂しむ事が出來た。

湯につかつてゐると、一寸も腰掛けられない私達は、皆疲れてゐるのでうつとりとしてしまふ。

秋ちやんが唄ひ出すと、私は茣蓙の上にゴロリと寢そべつて、皆が湯から上つてしまふまで、聞きとれてゐるのだつた。

　　貴方一人に身も世も捨てた
　　私しや初戀しぼんだ花よ。

何だか眞實に可愛がつてくれる人が欲しくなつた。

だが、男の人は嘘つきが多いな。
金を貯めて呑氣な旅でもしやう。

――此秋ちやんについては面白い話がある。
秋ちやんは大變言葉が美しいので、晝間の三十錢の定食組みの大學生達は、マーガレツトのやうにカンゲイした。
十九で處女で、大學生が好き。
私は皆の後から秋ちやんのたくみに動く瞳を見てゐた。目の縁の黑ずんだそして生活に疲れた衿首の皺を見てゐると、けつして十九の女の持つ若さではなかつた。

其の來た晩に、皆で風呂にはいる時、秋ちやんは佗しそうにしよんぼり廊下の隅に立つてゐた。
「おい！秋ちやん、風呂へはいつて汗を流さないと體がくさつてしまふよ。」
お計さんはキユキユ歯ブラシを使ひながら大聲で呼びたてた。
やがて秋ちやんは手拭で胸を隱すと、そつと二坪ばかりの風呂場へはいつて來た。
「お前さん！赤ん坊を生んだ事があるだらう……。」

――庭は一面に眞白だ！
お前忘れやしないだらうね、リユーバ？　ほら、あの長い並木道が、まるで延ばした帶革のやうに、何處までも眞直ぐに續いて、月夜の晩にはキラキラ光る。
お前覺えてゐるだらう？忘れやしないだらう？

――……
――そうだよ。此櫻の園まで借金のかたに賣られてしまふのだからね、どうも不思議だと云つて見た處で仕方がない……。
と、櫻の園のガーエフの獨白を別れたあの男はよく云つてゐた。
私は何だか鹽つぱい追憶に耽つて、歪んだガラス窓の白々とした月を見てゐた時だつた。

お計さんの癇高い聲に驚いてお秋さんを見た。
「えゝ私ね、二ツになる男の子があるのよ。」
秋ちやんは何のためらひもなく、乳房を開いてドボン！と湯壺をあげた。
「うふ……私處女よ、もをかしいものだね。私しやお前さんが來た時から睨んでゐたよ。だがお前さんだつて何か悲しい事情があつて來たんだらうに、亭主はどうしたの。」
「肺が惡るくて、赤ん坊と家にゐるのよ。」
不幸な女が、あそこにもこゝにもうろうろしてゐる。
「あら！　私も子供を持つた事があるのよ。」
肥つてモデルのやうにしなしなした手足を洗つてゐた俊ちやんがトンキヨウに叫んだ。
「私のは三日めでおろしてしまつたのよ。だつて癪にさわつたからさホツホ……。私は豐原の町中で誰も知らない者がない程華美な暮しをしてゐたのよ、私がお嫁に行つた家は地主だつたけど、ひらけてゐて私にピヤノをならはせてくれたの、ピヤノの教師つても東京から流れて來たピヤノ弾きよ、そいつにすつかり欺されてしまつて、私子供を孕んでしまつたの。そいつの子供だつてことは、ちや

んと分つてゐるから云つてやつたわ、そしたら、そいつの言ひ分がいゝぢあないの――旦那さんの子にしときなさい――だつてさ、だから私口惜しくて、そんな奴の子供なんか生んじやあ大變だと思つて辛子を茶碗一杯といて呑んだわよホッホ…どこまで逃げたつて追つかけて行つて、人の前でツバを引つかけてやるつもりさ。」

「まあ…。」

「えらいね、あんたは…」

仲間らしい讃辭がしばしは止まなかつた。

お計さんは飛び上つて風呂水を何度も何度も、俊ちやんの背に掛けてやつた。

私は息づまるやうな切なさで聞いてゐた。

弱い私、弱い私…私はツバを引つかけてやるべき、裏切つた男の頭をかぞへた。

お話にならない大馬鹿者は私だ！　人のいゝつて云ふ事が何の氣安めにならうか―。

十月×日

…ふと目を覺ますと、俊ちやんはもう仕度をしてゐた。

「寢すぎたよ、早くしないと駄目だよ。」

湯殿に皆荷物を運ぶと、私はホッとした。

博多帶を音のしないやうに締めて、髮をつくらふと、私はそつと二人分の下駄を土間からもつて來た。朝の七時だと云ふのに、料理場は鼠がチロチロして、人のいゝ主人の鼾も平かだ。

お計さんは子供の病氣で昨夜千葉へ歸つてしまつた。

眞實に、學生や定食の客ばかりでは、どうする事も出來なかつた止めたい止めたいと俊ちやんと二人でひそひそ語りあつてゐたものゝ、みすみす忙がしい晝間の學生達と、少い女給の事を思ふと、やつぱり弱氣の二人は我慢しなければならなかつた。

金が這入らなくて道樂にこんな仕事も出來ない私達は、逃走するより外なかつた。

朝の誰もゐない廣々とした食堂の中は恐ろしく深閑として、食堂のセメントの池に、赤い金魚がピチピチはねてゐる丈で、灰色に汚れた空氣がよどんでゐた。

路地口の窓を開けて、俊ちやんは男のやうにピョイと飛び降りると、湯殿の高窓から降した信玄袋を取りに行つた。

私は二三册の本と化粧道具を包んだ小さな包みきりだつた。

「まあこんなにあるの…。」

俊ちやんはお上りさんのやうな格好で、蛇の目の傘と空色のパラソル、それに樽のやうな信玄袋を持つて、まるで切貫な一つの漫畫だつた。

小川町の停留所で四五臺の電車を待つたが、登校時間だつたのか來る電車は學生で滿員だつた。

往來の人に笑はれながら、朝のすがすがしい光りをあびてゐると顏も洗はない昨夜からの私達は、インバイのやうにも見えたらう。

たまりかねて、二人はそばやに飛び込むと始めてつゝぱつた足を延した。そば屋の出前持の親切で、圓タクを一臺頼んでもらふと、二人は約束しておいた新宿の八百屋の二階へ越して行つた。

自動車に乘つてゐると、全く生きる事に自信が持てなくなつた。

ぺしやんこに疲れ果てゝしまつて、水がやけに飲みたかつた。

一大丈夫よ！　あんな家なんか出て來た方がいゝのよ。自分の意志通りに動けば私は後悔なんてしないよ。」

「元氣を出して働くよ、あんたは一生懸命勉强するといゝわ…。」

私は目を伏せてゐると、サンサンと涙があふれて、たとへ俊ちやんの言つた事が、センチメンタルな少女らしい夢のやうなことであつても今のたよりない身には、只わけもなく嬉しかつた。

あゝ！　國へ歸らう…お母さんの胸ん中へ走つて歸らう…自動車の窓から、朝の健康な青空を見た。走つて行く屋根を見た。鐵色にさびた街路樹の梢にしみじみ雀のつぶてを見た。

うらぶれて井戸のかたいとならふとも
故里は遠きにありて思ふもの……

かつてこんな詩を讀んで感心した事があつた。

十一月×日

愁々とした風が吹くやうになつた。

俊ちやんは先の御亭生に連れられて樺太に歸つてしまつた。

─寒むくなるから…─と云つて、八端のドテラをかたみに置いて東京をたつてしまつた。

私は朝から何も食べない。童話や詩を三ツ四ツ賣つてみた所で、白いおまんまが、一ヶ月のどへ通るわけでもなかつた。

お腹がすくと一緒に、頭がモウロウとして、私は私の思想にもカビを生やしてしまつた。

あゝ私の頭にはプロレタリヤもブルジョアもない。たつた一握りの白い握り飯が食べたい。

いつそ狂人になつて街頭に吠えようか、

「飯を食はせて下さい。」

眉をひそめる人達の事を思ふと、いつそ荒海のはげしい情熱の中へ身をまかせようか。

夕方になると、世俗の一切を集めて茶碗のカチカチと云ふ音が下から聞へて來る。グウグウ鳴る腹の音を聞くと、私は子供のやうに悲しくなつて、遠くに明い廓の女郎達がふつと羨ましくなつた。

澤山の本も今はもう二三册になつて、ビール箱には、善藏の「子を連れて」だの「勞働者セイリヨフ」直哉の「和解」がさゝくれてボサリとしてゐた。

「又、料理店でも行つてかせぐかな。」

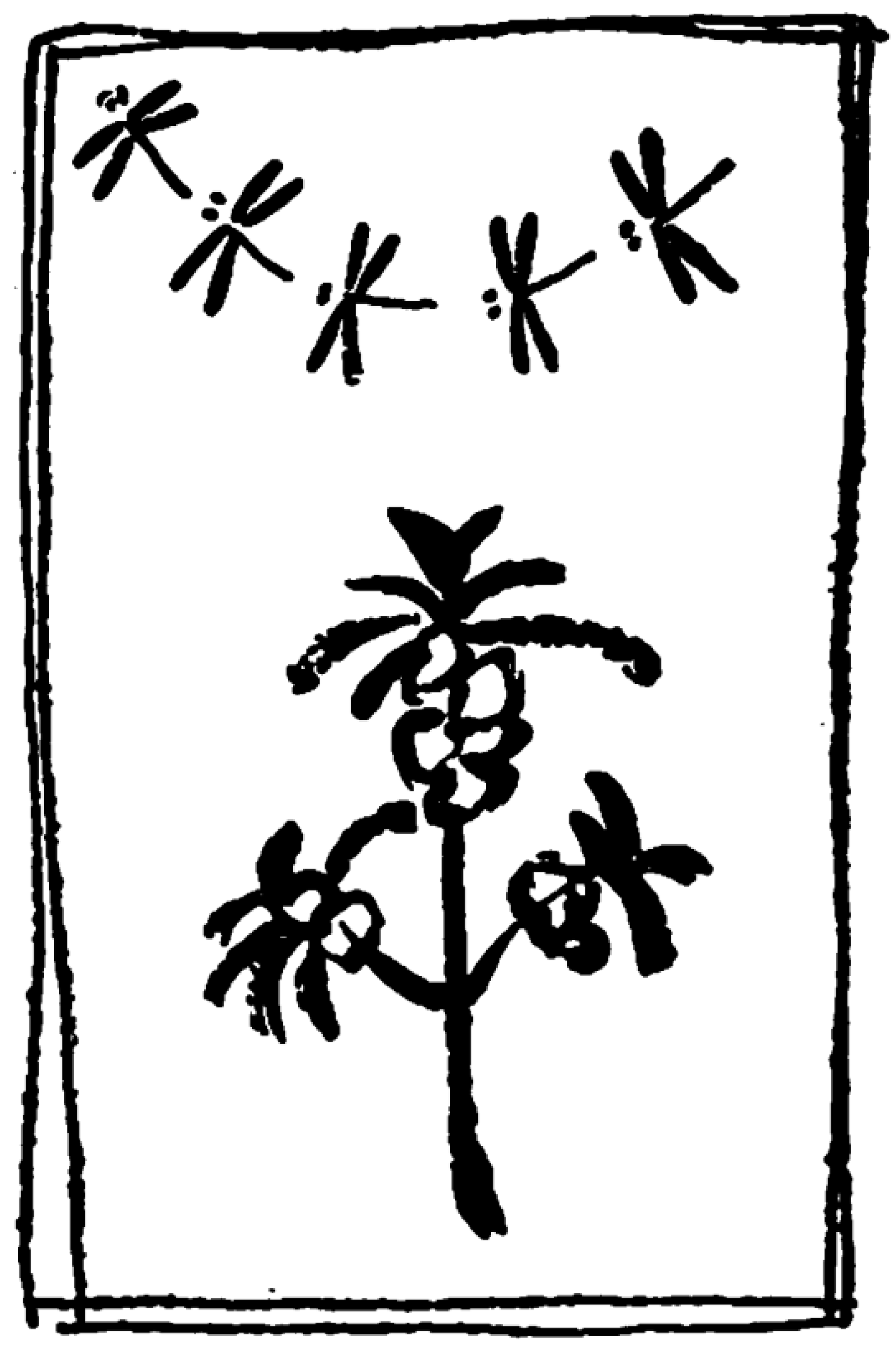
ちんとあきらめてしまつた私は、おきやがりこぼしのやうに變にフラフラした體を起して、歯ブラシや石鹸や手拭を袖に入れると、風の吹く夕べの街へ出た。

─女給入用─のビラの出てゐさうなカフエーを次から次へ野良犬のやうに尋ねて…只食ふ爲に、何よりもかによりも私の胃の腑は何か固形物を欲しがつてゐた。

あゝどんなにしても食はなければならない。街中が美味さうな食物ぢやあないか！

明日は雨かも知れない。重たい風が漂々と吹く度に、昂奮した私の鼻穴に、すがすがしい秋の果實店からあんなに芳烈な匂ひがする。

──一九二八・九──



大[illegible]アヤ子

朝鮮秋風抄

後藤郁子

朝鮮

秋はいちばん、朝鮮の朝鮮らしい纖細な感じが、如實に滲み出てくる季節(とき)。朝鮮の人々の胸にも古今春秋のおもひが、しみじみ湧いて來よう。內地から渡つて行つてゐる人々、支那人やロシア人、その他異國の人々が鄕愁に嘆く季節。

印象的な——秋は朝鮮にゐると殊にみじかい。

急激に訪れてくる大陸的な冷氣のためか、朝な朝な明らかに濃い變化をみせて去來する故にか。

多く、浪々と彷徨ふものゝ集ふ植民地として、或は遠く歐洲につゞく土地として來往する人々を、限りもなく送迎する關係もあるであらう、何となく慌ただしい始終の心。所謂腰掛のやうな朝鮮。でも永く居住すれば矢張「住めば都」ののんきなのが何より好いとほめる人もある。朝鮮に永くゐると、確にのんきに親しむ。

朝鮮ののんきはあきらめと愛しみの中間に住む。李朝の陶器——彫刻——建築——繪畫に依つて生かされて居る、あの美は、地味に洗練(リファイン)されたのんきの歡びに違ひない。凝乎つと想ひを秘めてゐる、さりげないやうに淡く——と、いつしかふくらんでゆく歡び！

鵲

私が渡鮮したのも九月の始め、內地は未だ殘暑が酷しいのにもはや彼の地は、四時を打つと涼風が立ち、夜更けては、夏夜着のうすさを感じる程冷氣が肌に泌む。

蒼黑い水をたゝへ渺茫とはてしなく流れてゐる洛東江。飄揺と空を掃くポプラ。白衣の群に、懷しい內地の海山、肉親や友達の顔が今更浮び、はるばる植民地に嫁いだ身の寂しまれる朝夕であつた。

住むべき新居も定らず、旅宿に無聊をかこつてゐる頃、階上の欄干によりそつてみ下ろして居た庭の一隅に紫苑の一群が花をひらき始めてゐる。初秋の赤い夕陽のさしたその丈高く伸びた姿、そこに足早い秋をみた。

亦同じ宿のある朝、ふと聞き慣れない鳥の聲に、後の窓をあけて

みると、堀際の泥柳のしげみの下で、雉にも似た彩り美しい鳥がそこここ餌を探す様子、そして折々鳴く。

——まあ、街のまんなかにあんな綺麗な鳥が。何でせう?

——朝鮮烏さ。

——……え〻? あれ烏?

——かさ〻ぎの渡せる橋に……と うたはれてゐる鵲だよ。だけれど朝鮮ぢやあ、普通の烏は居ないで、あれが澤山飛んでゐるから、烏に下落したのさ。

——そう、其れにしてはもつたいないわね。

こんな問答を交しながらその鳥の紫藍色の濡羽に見惚れたのも最初の事。それでも、宵雪の一面に降りつもつた朝、まつ白い小丘のやうな鮮人屋根の上で、クツキリとした姿をみせてゐるのは風情がある。そんな朝は餌がなくて困るのであらうか、ごみためを開けると飛び下りてくる。庭の砂糖楓や杏の木にも止る。山や林にも里にも街にも、朝鮮に生活する人にとつて之程近しい鳥はない。——内地へかへると黒い群烏がめづらしい。

京 城

あの巨大なビルデイングに押されて、京城(ソール)の都市も變貌してゆく。

東西南北に廻らした石門。石門の都ともいふべき名物の石門が年々崩壊されてゆく。京の東山になぞらへる南山の麓に內地人が多く北漢山に連るに仁旺山の麓に朝鮮の兩斑(ヤンバン)が多かつたが、近年總督府が北部の方に新築されて自づと街の發展もその方面に向ふ。かうして、石と石の間を柔く土でこね上げた塀墻も自滅するのだらう。

京城の市街の電車通りは單純だけれども、歩いてゐると行きつまるとみえてまた、ひらけてゆく不思議な路地の多いところである。

蛇性の路地がうねりめぐつて鮮人家屋が市街の陰のやうに、たゝずんでゐる。赤い汚れた房の旗をかゝげた支那人の飲食店が並んでゐるかと思ふに、ふと顔を上げれば高々と空の前方にホテルがそびえてゐる。足許の土墻を越えれば、バラの花咲くホテルの庭苑。

赤旗のひるがへるロシア領事館。ひつそりとしづまつた支那領事館。等々。

京城は烈しいジヤズの都市である。鐘路銀座に本町銀座。前者は朝鮮の人の唯一の繁華な通り。後者は內地の街通り。

朝鮮人のモガ、モボ、內地人のモガ、モボの對照。モボは朝鮮の青年の方がスマートだ。昔から男が衣裝を氣にする故と思へばみじめになる。物見高い癖、ぶら〱する癖。生業もなく散歩して歸れば、それで女は喜んで洗濯する。亦外出させて見送つてゐる。これが、昔の此の國の風習だつた。女の虛榮だつた。あのピンとはね上つた兩斑の髭のやう、空に虛勢を張つた鮮式瓦屋は、貧富の差の甚しい昔の朝鮮の富んだ者の樓閣。低いながらも藁葺屋をへいげいしてゐたのも今はコンクリート製高層建築の傍らでのざらしにされてゐる。文化都市の皮肉さ。

乞 食

秋くる頃は市街の辻々に燒栗賣る鮮童の呼聲が遠く近くひびく。夜闇に、ほつかりと浮ぶ灯のもとにパチ〱栗煎りながら、人待つ彼等。彼等の栗がむいてなかつたら、買手ももう少しあるのであるまいか。身裝まづしいもの〻手は汚れて哀しい。

乞食が多い。本當に多い。多になればそうした人達の凍死が一晩

に幾人かある。塵溜を漁る春と秋の乞食。ニコ〱しながら物乞ひする子供乞食。東拓銀行の横の空地で、破れたゴム毬をもつて五六人集つて野球して居た子供乞食はいじらしい。

光化門通りは眞正面の北に、朝鮮總督府を迎へた電車の交叉點である。朝の八時と、夕の四時はサラリーマンがなだれる。此所に年中乞食がゐた。私は丁度家路の途中なので、よく顔見知りのが居て「ゴハン三日も喰べません」といふのが常套語なのを、ふりまいてゐるのが可笑しかつた。「働いたら可いではないか」と或る人が言ふと「病氣してゐます」といふ。何だか青い顔をして、力なげな樣子の男乞食であつた。三度に一度は與へてみても、情なさにこちらからボンヤリその男の顔をみつめてゐるとコソ〱姿を沒して仕舞ふそして人がかまはないで談笑してゐると、自分も側でポカンと聞きながら一緒にいつしか、うす笑ひしてゐる悲喜劇な乞食。あれは職業だと言ふ人もあるほど、時には無感覺に眺めることのできる乞食あの人達をどうしたらよいのか……。

藁葺屋

南山の砂山の、松の間からでもいゝ。仁旺山の麓の三角山からでもいゝ、あるひは街の中央のホテルのベラスからでもいゝ。

小高いところに立つて京城の街をみ下ろすと、低い丘が幾つも幾つもゆるく薄黄ろく、波打つてゐるのは藁葺屋である。土にもぐつてしまふのばかり、地にかゞまつてゐる屋根はパカチの畠となる。

秋、パカチの青い實の大きなのが、網の樣に引つぱり廻はされた細にかゝつてころがつてゐる。血のやうに赤い唐辛子が干されてゐる。これは地面にもムシロの上にも散らばつてゐる。

彼女達

近づいてみると、其うした生活をしてゐる人達の白衣は大抵汚れて汚ない。女の際は髮油を濃くつけるのと汗と垢でピカ〱光つてゐる。

溝水と漬物石位の石さへあれば洗濯して居るのに――畫はパンマイダ(洗濯棒)を握り、夜は砧打つ音の絶えない女達の哀れさ。つゞれた白布を樹の枝に乾すはまだ上々。地面の傍らに小石で四方を抑へて擴げて置く。冬期だけでも黑衣奬勵する樣になつてゐても、なかなか行はれないのは、異邦人からみるとユーモアさへ感ぜしめる。でもそれは中年以上の人々で、若い新しい婦人や女學生は、洋裝を取り入れてスカートを短かくし、輕快な步調(リズム)を揃へてゆく。

髮を下手にウエーヴしたり、紅墨を濃くしないやうに――貧女達のもつとも美しい傳統の「素朴」をつねに凡てに忘れない樣に――背景や氣候と共に身體全體の調和を忘れない樣に――乾燥しがちな大陸の空氣をつぐなふやうにみづ〱と新鮮であれ、今は秋、彼の秋草の花のやうであれ！

朝鮮雅樂

市街の盡きるところ、ほそぼそと朝鮮部落の路地がひらけ、小高い山の麓に彼等の祖先を祀つた土饅頭が眠つて居る。おのが祖先のみ墓が、生涯、我家から仰げる。青い芝草におほはれ、釣鐘草のうす紫の苑が匂ふともみえぬほど、はかなく、たのしげにうたふ。秋風に吹かれて――その時、何處か、天の一角に、金、石、絲、竹、土等の古代樂器をもつて、今もいふ李王宗廟の奥ふかく奏する朝鮮雅樂に似かよつた、これは貧しくもいみじい低い莊重な調べが、仄かに〱相和するではないか。

京城のジャズもこゝに來て鎮もる。

朝鮮の朝鮮らしさは、古曲のやうな味はひである。



吉田[illegible]子

長流記（その三）

山田邦子

その年も歳暮近くなつて寒い日が續いた。その寒さのなかに街々は思ひ思ひの裝飾をこらしてクリスマス歳暮の贈答品を並べて人の目をひいてゐた。龜屋や明治屋のデコレーションは此寒さに震えて來るやうな人々を花やかな樂しい氣持に變へさせるやうに、キラキラしい玉や星や人形が濃紅な八重櫻の造り花の木枝をかざり熱い紅茶やコーヒーをはこぶ給仕の白い服がそのなかを走り廻つてゐるといふ特種な趣きある時期にはひつてゐた。

その街のなかを一方から歩いて來た佐千子は他の方から歩いて來た痩せた西洋婦人をまじへた四五人の一群とばつたり落ち合つて互に挨拶を交したのであつた。

「長田さん、お久しう」

「マアおそろひで…：」

さうした禮を交した連中は佐千子が故鄉の方で出入りしてゐた或るミッションに關係のある人々であつたがそのなかに前篇に一寸書いた、佐千子が曾て三四年前に若い心の情熱を寄せあつた青年教師大谷氏がまじつてゐた。大谷氏はその頃北海道のミッションスクウルの教師になつたと聞いてゐたが、どうして何の用で上京してゐたかは此頃の佐千子の知らぬ事であつた。

「クリスマスの買物よ…：大谷さんも此間から上京してゐて明日のクリスマスを無理に手傳つて頂いて明後日の朝は北海道の方にお歸りになるの」

前の頃を知つてゐる痩せた西洋婦人は佐千子の爲にかう說明してくれた。それからお茶を飲まうといふ事になつて一行は揃つて明治屋のデコレーションの下にはひつて行つた。

佐千子は初臺の丘で思ひ切り強くも大谷氏の願望を拒絶して「どうしても僕と結婚してくれないのね‥‥」と嘆息して野菊の咲き亂れてゐる土手の方へ向いて男の涙を飲んでゐるらしい大谷氏に自分の拒絶を通してしまつた。大谷氏が「では仕方がない、からだを大切にして‥‥」そして涙をこらへるやうに弱い自分を鞭うつやうに月の光の流れる道を一度もふりむかないで歸つていつたあの夏の夜の別れ以來又消息を聞かなかつたのであつたが、思ひがけない此再會に佐千子は彼に向つてなか／＼口がほどけなかつた。大谷氏も、昔の事情を知つてゐる瘦せた西洋婦人を前にしては、破れた自分たちの今の位置から何を言つていゝか分らぬといふやうに、うつむき勝ちであつた。

此青年教師とは前篇にも書いたやうに、一度は二人の親と親の交渉にまで進んでいつたのであるが、佐千子の父親が熟考の末此緣談をきつぱりと斷つてしまつた。そして二人の戀愛もそれで打ち切られてしまつたのであつた。それには佐千子は、永年離れ／＼に暮してゐた嚴格な父親に對する遠慮深い、むしろ恐れてゐる心からとは言ひながら、もつと深く尋ねてゆくと根本的には佐千子の戀愛が本物でなかつたと言へる‥‥。

事の起りは佐千子が十七の年の暮、クリスマスの夜に佐千子がハンケチを忘れて行つた事からであつた‥‥。まだ人の集つてゐない教會のなかで殘りの星をもつと襖や壁にはりつけやうといふので佐千子たちは糊をもちだして金銀の紙の星をいそがしさうにそこらへはりつけた。仕事が片付いて手を洗つたところで佐千子は山國のをとめらしい上氣した紅い頰をして

「アレ、ハンケチを忘れて來てしまつた‥‥大谷先生借して下さい」

日頃佐千子に親切な大谷氏が佐千子の横に立つてゐたので佐千子は何心もなく不用意に其ハンケチを借りてつかつた。教會は人の來るさかりでそれを返す事のおくれた佐千子はもう大勢の人の集つた頃又佐千子のそばを通つた大谷氏を呼び止めてハンケチを返さうとした。

「ア、一寸長田さんにお頼みしたい事がある、こちらへ來て下さい」

かう言つて彼は先きに歩きだした。そして人のせはしく動いてゐる室を通つてそのうしろの細い廊下に出た。電燈の光がおぼつかなく長い廊下を照して人の影もない。大谷氏は立ち止まつてふところから小さい包を取り出すと佐千子に渡して

「此プレゼントを受けて下さい。僕はあなたを思つてゐる‥‥手紙に書いてありますから返事をして下さい」

そしてあきれて立つてゐる佐千子を殘して彼はにぎやかな人の集りの方へ歸つていつた。其夜佐千子は降り積つてゐる雪さへ燃えるやうな心持がした。おそろしい事が身に迫つて來たやうな、又嬉し

い事が迫つてゐるやうな……。

その頃の山國のをとめの心には戀愛といふ事は何となく、いまはしくなすまじき事のやうに思はれるし、とはいへ彼の烈しい炎のやうな心は彼女の心をも巻きこまなくては居ないものがあつた。佐千子の心にはそれから二つの心が戰ひ通した。――其時代の教育は嚴然と佐千子の心に「身をたて名をあげ……」云々といふ理想を强ひて來る……戀に浮名を流してたゞ戀の爲に其一生を葬り、若い心の野心を葬つてしまふ事は佐千子には出來ない事であつた。と同時に、神に殉ずる者の如く一切をあげて戀に、佐千子に奉じてくる大谷氏の愛を斷ち切る力は又佐千子にはなかつた。

「貴女がいろ／＼と事を六つかしくするのです、僕には何も六つかしい理屈はない、たゞ貴女とホームを持ちたい、これだけです」

青年教師はそれを言つた。事實深い野心もなくたゞ主の爲に小さいミッションの一教師として熱心に働いてゐる彼の言葉に少しも不純な處はなかつたが佐千子の方はさうではなかつた。東京の文學雜誌に投書をはじめて、「才氣非凡草に埋るべきものではありません、詩の爲に猛進あれ」といふやうな評を受けてそれに醉うてゆく心は此平和に小さくホームを作らうといふやうな戀に納まつてしまふものではなかつた。むしろそうした戀々とした感情からぬけ出してもつと／＼勉强して名をあげてみたい若い野心は佐千子の心をとらへてゐた。それとも一つ佐千子はどういふものか大谷氏の純情には泣かされ愛の言葉に引つけられながら彼の性格とか又彼のきりやうなどにどうも眞から好きになれないものがあつた……郷里に何萬の資財があつて生活に困らぬと言ひながら男らしい野心もないやうな性格は佐千子にはおもしろくなかつたし同時に彼はたしかにあまりきりやうが勝れてゐなかつた……。

こんなゴチヤ／＼した心持からと同時に佐千子を養育してくれた祖母の死によつて北海道に居た父母の家に引とられて行つた事などから二人の戀愛もプラトニッククラブの程度を出でないで打ち切られてしまつた。前篇にも書いたやうに佐千子は此戀愛を出て實に心がホッとした。つく／゛＼纒綿たる戀愛の情緒にあきはてた心持であつた。これが佐千子の上京後さま／゛＼な愛を一も二もなくおしのけてしまつた大きな心の一時期であつた。その點でお慶さんが、やはり初めの戀人であつた川端氏との戀愛を一度打ち切つた時、我にもあらず「ア丶、せい／＼した」と川端氏の前で言つてしまつて川端氏を憤慨させた氣持にぴたりと共鳴した佐千子の心であつた。

其大谷氏に其年の夏三年ぶりで偶然にもめぐり逢つて初臺の家でおなかの痛かつた大谷氏の爲にお慶さんがお粥を煮てくれて夜更けて强い事を言つて別れ／＼になつてしまつた以來どうしてゐたか聞いてみたい氣持がお茶をのんでゐるうちに佐千子に起つてきた。

「大谷さんお久しぶり……お變りも御座いません？」

佐千子は何氣ない聲を大谷氏にかけた、其時そばにかけてゐた何

も知らぬ一婦人が

「お變りがありましたのよ、先生は結婚なさつたんです」

それは何といふ無造作に言ひ出された言葉であつたらう……然し此瞬間に佐千子の心と大谷氏の心が互にすつくと立ち上つた事を知る人はなかつた。

何氣ないやうにして別れて來た佐千子は其夜一晩眠らなかつた、それは唯カッとしたと言ふより外は言ひやうのない心持であつた。静かに考へてみればそれなら大谷氏をいま一度自分の方に引もどして來るのかと言へばさうではなかつた、まして引もどして自分と結婚するのかと言へば佐千子はつよくかぶりをふる……それなのに……それなのに……佐千子は悶々として牀がへりを打つた、明日のクリスマスをすませばもう北海道へ引かへしてしまふといふ事を耳にはさんでゐる佐千子は悶えた末に兎に角明日の朝は早く起きて、クリスマスだろうが何んだつてかまはない、どうしても、どうしても大谷氏を外に誘ひ出して一言言つてやらなければ……と、よく考へれば自分の方にはそんな理屈も言ひ分もあるべき筈もないのに佐千子は強く決心した。そして夜が明けると顏を洗つて番町の道を市ヶ谷の停車場の方に歩き出した。身内が譯もなく寒く震へるやうであつた……もし邪魔がはひつて此事がさへぎられたら……それを思ふと佐千子は身内が震へた……どうしたつて、どうしたつて、それだつたら誰れが居たつてかまはない、無理に彼を表に引出してしまふ。破れゝば破れろ、笑ひたければ誰れでも笑ふがいゝ、どんな手段をとつても……でそれからどうするのか、彼を、自分を……そこで佐千子ははたと行きつまつた。別段彼が戀しい譯ではなかつたから……でも何んでも佐千子の足は先へ先へと歩いてゆく――。

九月七日のこと　時雨

八日の夕刊を御覧になつた皆様から、早速にお見舞をいたゞきましたお禮を、こゝに厚く申上げます。

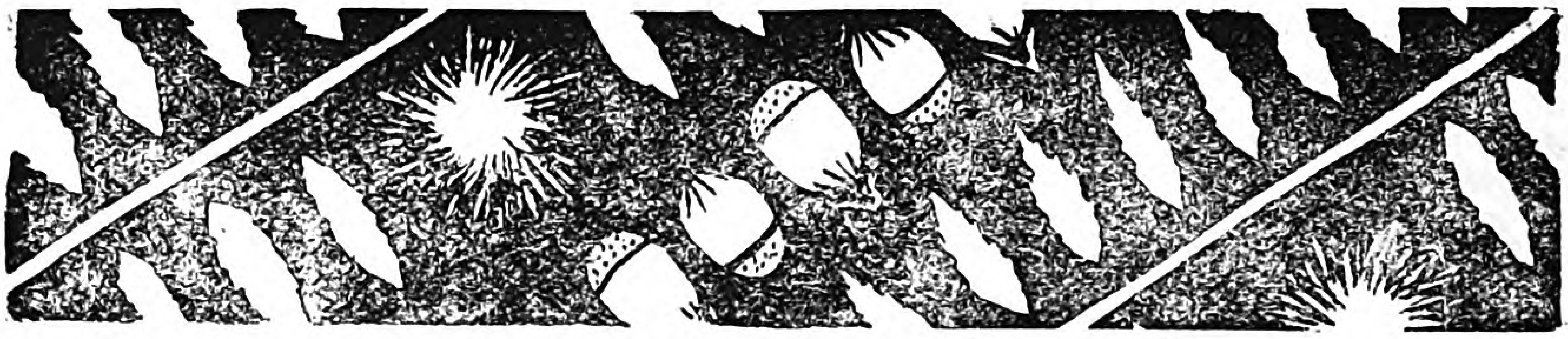
通り魔は風のやうにともふしますが、あたくしは訪れて來た人のためにも悲しみます。もちつと感情が疏通したら、通り魔はお互の間を通らなかつたらうにと思ひます。

あたくしはあまりに正直すぎると考へました。今の世では正直に、打明けてものをいつても、それが眞直にうけ入れられない場合があるのを悲しみます。要するにお金の問題で、ありさへすればよかつたのが、具合わるく、おはづかしい事にちつともなかつたのです。

もとより何の恩怨もないもの同士、僅かのくひちがひが人を罪させたと思ふと、非常に憂鬱でした。言ふまでもなく疵つけやうとしたのではないと思ひます。

丁度その日の朝、風邪の心地でふせつてゐましたのを、ハワイから御歸京の北村兼子さんがお訪ね下さつて起きました。あとからあとからとの御訪問に勞れ、女人藝術は締切り前の忙しい最中、夕暮れなり、あたくしの態度も優しくなかつたかと顧見なければなりません。併しちよつと悲しい氣がしました。驚くとか、怖れるとかより、どう考へても憂鬱です。

一々お禮申上げなければなりませぬのを勝手ながら餘白をかりまして

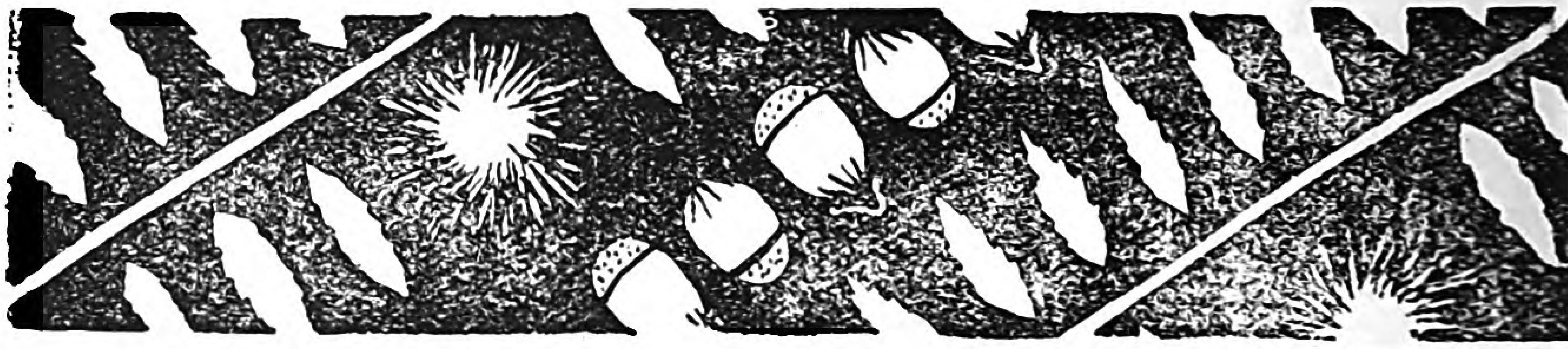


大原アヤ子

このごろの歌

茅野雅子

柿の樹のつぶらなる實のあらはにも見えて嵐は尙やまず吹く
くもりたる大空のもとにくつきりとさえさえ青し庭の草木
ひとりゐて幾日かすぎぬたそがれの庭石の上に蟇きて坐る
不器用なる歩をはこび大き蟇夕毎にきて坐る蒜の根
われを見て不思議とすらし蟇二つ石に坐りて眼をかがやかす
天地の不思議を思ふかたちして空見つめつつ動かぬ蟇よ
向ふむき默然と坐りいつまでも動かぬ蟇のをかしき夕
おどけたるにぶき姿の大き蟇は萩のたり枝の葉の下にゐる
とりすましかしこまりゐる大き蟇の背にたれつつも萩の花さく



青き灯かげ

江口章子

あらし來ると赤き旗立ておのゝくや秋の港に似たる心の

破れたる朱に汚れたる旗一つ心の崖に立てりこの頃

倒れたる墓石のごと吾が胸の重きいたみとなりし夢かや

生きの身の熱き心は失ひぬ埴輪に殘る後の世なれば

玉蟲の御厨子のおくの佗人のいつの世までのにがきおもひぞ

世にうとき沙門出家の庵に入り三年の秋の蟲の音を聽く

二十年は淸き尼僧の心もてかにかく生きぬわが若き日よ

紫の鹿の子の帶のいとしもよ身も世も捨てし片身なるゆゑ

枯尾花五十路の阪の哀れさを霜おく髮に知らば足りなむ

一本の蠟つきるまでしら〲とおもひ續けぬ夜もふけぬらし

蠟の灯の青のさゆれに幽かなる一つの命燃えにけらずや

ある朝の追憶

奥むめお



松本妹子

今日の朝やけは美しかつた。

子供たちも割りに早く起きたので、手をつないで散歩に出た。よく晴れた朝に、それも未だ明け切らぬうちに、日の出の方に向つて歩いてゆく氣持を私は好く。きのふ一日の疲れも、腹立ちも、悲しみも、ひいやりした曉の風に吹かれて初めて癒えるやうに私はいつも思ふ。

もう數年前のことになるけれど、私の兄が死んだとき、その日の朝の輝かしい太陽が、私の泪を誘うて仕方がなかつた。このあさの太陽をみて、いくら兄さんだつて死ねたであらうか、と、さう思ふと、止め度もなく泪が流れたのであつた。

今日、「女人藝術」への原稿を書いてしまはなければあんなに云つて下さつた長谷川さんにも生田さんにも濟まないと氣にしいしい、しつとりと露にぬれた草を踏んでゐると、私は、山川さんが前號に書いてゐられた『婦人の言論機關とその特殊的使命』を憶ひ出した。そして思うたことは、山川さんだつて、こんなにせいせいした朝の散歩のあとであの漫罵を御覽になつたんだつたら、あゝも小つぴどいものを書かないで濟んだらうにといふことである。正直に云ふと私はあれを讀んで、ちよつと見當違ひの感想だつたけれどさう思つたのだつた。これあきつと夜か、原稿でも書いて變に疲れたときか、身體の調子の惡い時あたりにあれを讀んで一氣に書かれたな、と。

それは、とにかく私たちで發行してゐる「婦人運動」に、誰の書いたものにしろ、個人としての誰々氏をひどく不快にさせるやうなものを掲載したことについては、全責任を負うて誠に濟まないことをしたと悔いてゐる。改めて、この「女人藝術」誌上で謝しておかう。

然しこれだけのことで、長い間に山川氏と私との間に築きあげられて來た友情が一氣に抹殺されたのであらうか。

私はけふも、しみ〴〵と草を踏んで歩きながらこのことを思うた子供の時分に、うつかりおそうをしてしまつて、そのとたんにぴちやりと平手で打たれたあの變な情けない氣持である。

それはとにかく、こんな辯解じみた事は書きたくないんだけれどすゝめられるまゝに私の立場をこの公器で云はせて貰へば、「婦人運動」の編輯者として私は(私一人で編輯をしてゐるわけではないが)

いつも自分と同じ思想、同じ考へ方、同じ見方、同じ感じ方のものしかのせないことにしてゐるのでは決してない。塵一本の違ひでも自分と違ふものには目に角をたてゝやつつける此の頃流行の分派主義者小兒病者とやら云ふ人のことは知らず、例へば「女人藝術」の長谷川さんにしろ、「婦人公論」の島中さんにしろ、又「婦人の友」の羽仁さんにしろ、巻頭の論文から漫畫、ゴシップの末に至るまでみんな自分とぴつたり同意見のものばかりをのせていらつしやるか？尠く共私に於てはさうでないといふことを念のために一般の讀者に諒解していたゞき度、併せて、出來ることならば、もつともつと廣い範圍に、全ての婦人問題を、いろんな形で取扱つてゆくことが出來るやうに、この上一層のお心添が願ひたいことと思ふ。

先日、時事新報社の白木正光さんから手紙が來て、女人王國巡りを家庭欄ですることにしたから「女人藝術」社の次にあなたの方の事務所を訪ねる、云々といふことであつた。

考へてみると夢のやうである。丁度大正十二年の春、同じ時事新報の白木さんから手紙を受けてその頃、期せずして同じ月の一日から創刊した三つの婦人雑誌——私たちの雑誌（現在の「婦人運動」がその頃は「職業婦人」と云つてゐた）と、長谷川さんの「女人藝術」（たしか、あの時もさういふ名前だつたと記憶する）と、三宅やす子さんの「ウーマンカレント」（今は廢刊になつてゐる）と、三人三様の立場と主張を書き並べたことがあつた。

三人の中では比較にならぬ程貧乏な私が、とにかくに六年といふ間貧弱なもの乍ら出し續けて今日に至つた。貧乏は相變らずひどくうちのトウチヤンの言葉を引用すれば、怜悧な奴なら、疾くの昔に切り上げて外の仕事に精進してゐる、鈍根な私である。

平塚らいてうさんが、二階住ゐの私共の假寓へ夜おそくたづねて見えて、新婦人協會の仕事に誘つて下さつた時、長男の杏一は胎内にゐた。子供をおん負して政治運動に驅けずつてゐた頃、私はよく思うた。この兒と、私のしてゐる婦人の政治運動と、どちらがよく發育して伸びるだらうか、と。數へ年九つになる杏一のおでこ頭を撫でながら、移り變りの激しい人の世の中のことがいろ〳〵に考へられてならない。

丁度十年になる。團體的な婦人運動に私が入つてあわたゞしく暮らすやうになつてから十年になるのであるが、私は私たちの仕事の上に積み重ねられて來た澤山の人の測り知れぬ好意を思ふと、どんなに自分が苦しくても、この好意を生かさなくつちあ、と、歯を喰しばるやうな思ひで自分で自分を勵まし〳〵するのであつた。外から見てどんなにつまらぬと見える仕事でも（まして、立場の相違は、山の上と下とではものゝ見方を如何様にも變へるものである）實際に汗を流し、心を痛めて奔走するといふ事は苦しいことの多いものだ。私は、自分の經て來た十年の苦闘、實際にそれは苦しすぎひどすぎただけに、おろそかならぬ氣持でいつも思ひ出すのであるが——であるだけに、汗に汚れぬ白い手で書かれた妄評をたとへ、誰が誰のことを書いたものにしろ私は輕蔑する。御婆さんの云草ではないがよくもまあこんな事を得々然と書けたものだと、驚きあきれる一方、妙に暗然としてさみしく考へこんでしまふ。そして、そんな時によく思ひ出すのは、トウチヤン舊作

やうやくに秋も可笑しきものと知る、腹をたてる蟷螂の顔。

といふうたである。



母と子の記録より

伊福部敬子

私の家の前に、朝鮮人の一家がある。主人はどこかの學生らしいが、この頃國から來た十二の少年はなか〱愛らしく、私共の子供と往來してゐる。その少年が毎日ハーモニカを吹いてゐる。それがどうも、私の家の兄弟に私が揃へて買ひ與へた、そして弟の方がすぐに失くしてしまつたものに似てゐる。けれども私はそれを確める勇氣を持たなかつた。

ところが、或時その少年が愛翫のハーモニカを吹きながら小猫を抱いて來た。

「そのハーモニカ、朝鮮で買つたの？」

「ちがひます。道路におちてゐたのをひろひました。」

少年は平然と返事をする。私はをかしくなつて笑つた。

普通私共の場合ならば、拾つたものをそのまゝ自分の所有にすることに幾分の疾ましさを感ずる。そしてその事實を言ふ場合には、羞らひとか、間の惡さとか、苦しさとかをのり切つて、特に「正直」に告白するのである。けれどもその少年は、勇氣をもつて「正直」にいつてゐるのではない、平然と言つてゐるのである。彼がさう言ふことに、何らの恥らひも疾ましさも苦しさも伴はないで。彼には、拾つたものを自分の有にすることは、當然のことなのであらう。

これは、この少年ばかりではなく、朝鮮の人々の通有性であるらしい。私の家で先年朝鮮の少女の世話した時にも、屢々このやうな事を感じさせられた。

彼等は、明らかに他人の所有であるものに對してはそれを侵すことをしないけれども、屢々捨てられたもの、落ちてゐるもの、道端畷畔にあるものなどをば平氣で拾ひとる。そしてこれは、彼等の道德の規範にふれない。

これは何故であらうか？　往々にして、朝鮮人の道德觀念が低いの故を以て此の如き傾向を批判し去られてゐる。或は又、物資缺乏にその原因を求められる人もあるやうである。

しかし、私は思ふ。もし、物資缺乏のためであるといふならば、もし我々の社會が天災その他の原因によつて一齊に物資缺乏を來し

た時、又は自分一人だけが缺乏の狀態に陷つた時、その時道に落ちてゐたものを拾ふのに、何の恥も疾ましさも感じないか。樣々の理屈をつけて自分の行爲を是認しようとするところを以てみれば、恥と疾ましさを感ずるからである。是は彼等の場合と全然　る。我々は、現在もし物資缺乏の狀態におかるゝとも一度は自他の所有に關する嚴然たる道德の時代を通過してゐるからである。彼等朝鮮の人々は、自他の所有に關する道德が、我々のそれにまで到達しないから、拾つたものを自分の有としてはならぬといふ道德は無いのである。何故か？

代々の爲政者が、人民に財貨を蓄積する餘裕を殘さず、賦稅徵發を常とした爲めに、個有の財貨といふものを持つことが出來ず、從つて個有の財に對する觀念が極めて幼稚稀薄の故もあらう。然し朝鮮にも亦富裕者のあることは、單にこの原因のみによるものでないことを明かにしてゐる。

彼等は多く自然收穫(？)によつてゐる。日本の農民の如く、勤勞を致して米麥を收めるので無く、野山に自然に發生してゐる木の實草の實などをとつてゐる。彼等も亦米を作るけれども、それはたゞ種子を播くといふだけの事だといふ。勤勞を致して收得した財貨に對しては、何人も執心をもち、又他人の財貨に對しても同樣にこれを認めることとなる。併し、もし自然に發生し自然に實れるものをとるならば、それほどに執心をかけない、又他人のものについてもそれほど大切なものと認めない。早い話が、私共が山へ栗拾ひにいつた時、誰かゞ木に登つてゆさぶり落すとする。その人がゐる間は流石に拾ひ取りはしないけれども、その人が去つてしまつた後ならば、ゆすぶり落されてゐるものを拾取るに何のやましさをも感ぜず何人もそれを咎めもしない。朝鮮の社會狀態は、まだこのやうなところにあつたかに思はれる。このやうな社會狀態の中に、自他の所有に對する嚴然たる道德の無いのは、むしろ當然である。

日本でも、かつては「落ちたるを拾はず」といふ事は、一段と高い美德とされてゐたこともある。

道德は、社會狀態とはなれては存在しないことを、切に私は思ふ。

朝鮮の人々に、我々の所有道德を教へたところが、それは單に空文空則としか聞えず、よく理解されず、實感として來ないであらう。けれども、これを以て、彼等の道德が低いとは言ひ去られない。たゞ後れてゐるといふだけのことであると思ふ。

後れてゐることとならば、亞弗利加のホッテンドットは、朝鮮よりも一層おくれた社會狀態にある筈であるけれども、その所有に關する道德は、我々のそれよりも高い。クロポトキンが「相互扶助論」の中にのべてゐるところによれば、彼等は森や林の中で何か食物を發見した時は、三度高く「食物を見つけた、欲しい者はないか」と叫んだ後でなければ食べないといふ。彼等は又、一方の糧倉に食物が充滿されるその隣に於て飢にたふれつゝある人のある狀態を、どうしても考へることが出來ないといふ。

後れてゐる事が即ち低いと言ふ事が出來ないと同じく、進んでゐるのが必ずしも高いとは言へない、と私は思ふ。

私は、先日よんだ婦人の友社の松岡久子さんの朝鮮人は子供の持つてる毬をたゝきおとして取つたりするといふ通信を思ひ返しながら、前述のやうな考へ方をする親切をもたれたならば、も少しちがつた見方があつたらうにと、淋しく思ふのである。あの少年は相變らずハーモニカをふいてゐる。私はをかしくなつて笑つてしまふ。

「板舟」について

市會議員の瀆職から一般市民に問題とされてゐる板舟權、誰もそれにふれようとしないけれども、あれは歴史的に見ても面白い問題だと思ふ。

板舟といふのは、中世の「座」の遺物なのである。室町時代、「市」よりも前、一定の場所に一定の人を限つて商取引をゆるした、それが「座」である。油座、麹座、材木座、新錢座、いまだにその名が殘つてゐる。この間も机の中から出た古銀を見たら、「銀座常是」の四文字があつた。何時の時代の通貨か、私はそれを明らかにしないが、この銀座は今日の銀座街の意味では勿論ない。時の政府の財政を司る機關のことであらう。

一定の人に對して許した商取引は、やがて制定された場所のみが問題となり、その場所に出入することは一の特權となつて、ゆづり渡されるやうになつた。次いでは、場所といふよりその地點といふか、例へば、魚の取引場では魚をのせる板にその權利が移つたものである。そしてこれは今日の自由商業の精神とは逆行するものである。震災で板舟が燒失したに就いて、これを機緣として中世紀的の特權商取引を打破しようとするのが、自由商業の精神であり、今日板舟權を保證しようなどといふのは、時代錯誤といふべきである。

堀江さんのメイ論

本誌九月所載堀江かど江さんの「如何に戀愛すべきか」これは實にメイ論である。私は之ばかりは再讀したけれども、尙ほ私には堀江さんの論旨のあるところが理解されないのは、私の知識ど智惠の不足の爲かと思ひ、よく分るやうに御教示願ひ度、おたづねします。

先づフロイド擬ひ（堀江さんには眞正のフロイドでせうか）の精神分析學を借用してゐられるが、それが性慾解放を理想とするといふ推定結論（私はさういふ御結論の如く推定しましたが）と、どういふ關係があるのでせう。

動物には性慾はあるけれども戀愛は無い。人間にのみ戀愛はあるそして戀愛とは性慾の淨化せられたものである」といひ、「人間の社會はこの戀愛あるために進歩發達する」と言つて居られる。やがて又、「性慾解放は人間を愚劣にしないため、人を盲目にしないために必要である」といひ、更に又、「戀愛の否定され輕視される世界を將來したい」といつてゐられる。

先には　人間生活の進歩發展は一に人間が性慾を戀愛にまで淨化せられるところにあるといひ、今は又、戀愛は人間を盲目にし愚劣にするから否定するといふ。これは私には明らかに矛盾する言葉のごとく讀まれますが、如何でせう。それとも堀江さんには、紀元何世紀頃までかは戀愛は人間の社會を進歩させるものであり、何世紀頃からは戀愛は人間を愚劣盲目にするものだといふ理論でもおありなのでせうか。もしあるならば、私にも分るやうに發生學的に說明御教示願ひたいものです。

一夫一婦は、人間の性生活の本來の要求であるか。堀江さんはこれを否定してゐられる。そしてその理由として、人間よりおくれてゐる猿が一夫一婦であり、人間の中でも低級といはれるプロレタリ

アが一夫一婦で、高級といはれる有閑有產階級に往々これと異る事實を見る。又人間社會に姦通の事實があるのも、一夫一婦が人間最高の性道德ではないからであるといつてゐられる。猿の一夫一婦は私の知識圈外に屬してゐます。しかし、有閑有產階級が上等人だから、一夫一婦と異る事實をもつなどゝいふことは、皮肉としてはともかく、眞面目な論としては誰が通用させるでせう。

「一夫一婦は自然の性生活ではなくて、資本主義と共に發達した私有財產制度の副產物である」これも私には耳新しい御說です。

私有財產制は既に長い歷史をもつてゐますが、資本主義は極めて近い過去に於て發生したものだと思つてゐました。交通用具の發達と蒸氣動力の發明とによつて私有の財產を「資本」とすることが出來るやうになつて以來のことです。この二つは同時に發生したものでなく、更に堀江さんのいはるゝ資本主義によつて私有財產制が發達したのでもないやうに思ひます。さて、堀江さんは一夫一婦は資本主義と共に發達した私有財產制度の副產物であると――けれども、私の知るところによれば資本主義の發生は極最近の過去に屬するのに、基督教國に於ける一夫一婦はそれ以前より行はれてゐました。又、私有財產制の副產物であるならば、私有財產制の下にあるトルコに、一夫一婦の行はれないのは何故でせうか？

堀江さんは、性慾は、食物やその他の生活資料と同じく、分配し融通し間にあはせ、決して相手を個有獨占しない世界を望むといつてゐられる。けれどもそれは理想であつて、現代社會のイデオロギーを生活する自分は實踐は出來ないだらうと言つてゐられる。

しかし、社會狀態は一枚の成文の法律によつて一擧にして變化するものではなく、一人一分子より徐々に起り徐々に傳へて大きな力をなすことによつて變化するのであります。堀江さんは堀江さんの招來しようとせらるゝ新しき社會と新しき道德のために、自らの理想に從つて實踐せられべきものと思惟します。殊に公民權とか私有財產制とかとは事かはり、あなたの個人の意志で直ちに實踐せられるものと思ひますが、如何？　これは質問でなく忠告です。

尙ほ、「社會が不自然に發達した場合」といふ文字を散見しますがこの社會を他にして、この歷史の流れ以外に、どこに自然なる發達といふものがあるのでせうか。社會は、唯物辯證法的に、必然の經路をたどつて發展する、私はかく思考しますが、ちがつてゐませうか。生活意識、生活無意識。これは日本人の用語慣例よりしては、一寸解釋に苦しみますが、どういふ意味でせうか？

私にはどうも始から終までの御論旨が分りませんので、おそらくそれは私の不明の故だらうと思ひ御伺ひいたしましたわけであります。

論旨のわからない堀江さんの御說に批評し反駁しようなどといふ僭越はゆめ持つてゐませんから、その邊よくお含みおき下さるやうに

北平だより　（九月一日）　一木公子

朝夕は少し寒く、昨夜はじつに良夜でした。しかし幾分誰れもが感傷的になります。

その後北平もあまり變化は御座いません。ポスターは變つた文句がふへるばかりですが、いたづらに通行人には見過されてをります。人口は十萬人位へりました。店を閉ぢたのが三千軒位、役者上りの車夫などが出來るし、不景氣風は深刻で、革命は成功しても人氣は沈んでをります。



吉田雅子

社會時評

大木耳子

一、不戰條約の成立

八月二十七日には、パリで各不戰條約參加國の調印式が行はれた。この不戰條約は、フランスが米國との間に親交を復活せしめることの必要を感じて兩國間にとり交はさんことを提議した一つの提案の暗示によつて生れたもので、米國が幾多の折衝を重ねた後國務長官ケロッグ氏の名によつてフランスその他の各國に提議したものが成立した結果であつた。

米國がフランスの提案に對して興味を示し始めたのは、ジュネーブ軍縮會議の失敗によつて、一度び失つた名譽を中外に向つて回復するの必要を感じた結果であるといふことが云はれてゐる。即ち政爭のあるところどの國家にも人氣取りの政策たるものがあつて、現米國政府は明年行はれる大統領選擧戰を政府黨たる共和黨に有利に導かんが爲めに、今回の不戰條約の提案者としての名譽を利用するのであらうといふ觀測が專ら行はれてゐる。

國際聯盟設立の功勞者としてのウイルソンの名聲は、ブルジョア世界にあつては嚇々たるものである。アメリカ人がこれをもつて光榮とすることは自然の數であつて、ケロッグ氏がウイルソンの故智に倣はうとする者であるといふのは、今日の如く黨人根性の卑しさを底迄見せつけられてゐる私共には實に容易に肯定できるのである

不戰條約は米國政府が希望した通りの成功は、齎らすことが出來たと云へば云へるであらう。第一に、參加を要求された各國は偉大なる債權國たる米國の提案に對して、反對の意思を表示する氣概を持合せなかつた。金持が貧乏人と仲よくやつて行かうと持出したことである。後方を向いて舌を出すと出さないとは各國の自由であるとして、その寄合ひに出かけて行つて金持の御機嫌をとり結つて置くことの必要は常識ある國家は知つてゐるのである。第二に、米國内の輿論は概して米國政府の成功を謳歌するに傾いた。これは提案國としての體面上締盟諸國に對する禮儀としても當然のことではあるが、しかしその結果は無論共和黨の我田引水式の自負を自立せし

めぬ程度の役割を果したことであらう。そしてその事は又直ちに米國政府が希望したところのものであつた。

日本の實業家の誰かは、不戰條約を泥坊のお寺詣りに例へてゐた。つまり締盟各國を泥坊になぞらへて、不戰條約のやうな理想主義的な行事をもつて、その泥坊根性を洗ふお寺に見立てたものであつた。

お寺と云つても樣々である。お寺もその成立の始めは、確かに人間の善根をみがくが爲めの機關であつただらう。しかしお寺も墮落した。今日のお寺は死體埋葬業そのものゝ形式的な方面を受持つてゐるものであるに過ぎない。從つて人間の善根をみがき、人間生活の利眼を開かせやうとする最初の意圖は、今日では全然失はれてしまつて來てゐる。各種の所謂平和條約なるものも、又さうである。

侵略戰爭の抑制を目標とすると稱乍ら、世界最大の帝國主義國家の一つである英國は、『自國の平和及び安全に重大の關係ある世界の或る地方において、英國がとるべき自衞手段としての行動の自由』を認容されたるものとの解釋の下に條約に參加してゐる。英國が帝國主義國家としての自己の『平和及び安全』に關係あるのは、埃及でありインドであり、濠洲でありカナダであり、更に支那であり南アメリカである。然してこれらの地方は決して永久に英帝國主義の抑壓を忍ぶ能はざるものであることは、最近のインド、埃及その他の狀態によつても明らかである。

さすれば、これらの地方或は國家が獨立を企てるか又はその後進國として先進國によつて加へられる各種の抑壓を免がれんとすれば英國は砲火に訴へることは明らかであつて、今回の不戰條約は決してその際に於ける英國の行動を抑壓することは出來ないのである。

かゝる種類の不戰條約が世界の平和にとつて何等かの足しになるとするは、國際的ブルジョアジーが世界の無産階級に對する欺瞞の手段で、米國がこれを提案せる動機に對して各種の批判臆測を行ひつゝも各國の政府がこれを應諾したのはこの理由に基づくのである

二、反二業地設置運動について

今回宮田警視總監によつて突然許可された花柳街新設許可に對しては、一般婦人界に於いても漸く反對の氣勢が濃厚であるが、特に地元各町の婦人達は珍らしく結束してそれに當つて居られるやうである。池袋町は今回許可された四ヶ所の中でも、僅か二丁はなれたところに小學校を控へてゐて他の町村よりはその弊害に堪へぬ點があるのであらうが、この三日に某所に集合して設置反對婦人團なるものを形成し、『子女の教育の爲め社會風教の爲め二業地設置に反對する』他四項の要旨を陳述し、要路の大官を訪問して陳情書を手交することに決したさうである。

婦人矯風會とか廓清會とか一定の組織と運動の經驗とを持つ團體が動くことは決して珍しいことではない。しかし五百といふ未組織の大衆婦人がともかくかうした動機によつて動き始めたといふことには、私共は少なからぬ興味を覺へるのである。

民政黨內閣の太田總監が、若槻內閣の瓦解が決定すると同時に八ヶ所の二業地許可をやつて市民を呆然たらしめたことは、私共の記憶にまだ新らたなことである。その太田總監の後に就任して、世人と共にそのヒレツな態度を痛擊した宮田總監が、一年後の今日後手の暗打式に識者の監視をさけて許可したことには、今日の黨人根性なるものゝ忌憚のない曝露を見る。

黨人の前には自己の屬する政黨の利益のみであつて、人類の正道

も理想も、輿論も批評も識者の非難もないことを私共は覺らなければならない。しかしこの黨人のある限り――否黨人をして斯くの如くその權勢に執着せしむる制度のある限り、問題は一二の花柳界新設許可の如きに止らず、大衆は常に各種の不快にして不當な出來事の爲めに惱まされなければならないのである。

私は二業地新設反對運動を、決して無用にして効なき運動とは考へない。しかしかゝる社會的腐敗墮落の現象を個々のものとしてのみ見てその對策を決し、その根本に遡ぼつて批判することを避けるやうな態度は、勞して功少ない運動であると考へる。社會組織の全面に對する理解を持ち、個々の運動をその批判によつて指導して行くが如き方面に、これら大衆婦人の自覺を向けしむることは、今日指導的地位にある婦人達によつて是非なされねばならない事である。

三、婦人の政治的參加の目標

新聞紙の傳ふるところによると、行政制度審議會は政府の命によつてかねて來議會に政府案として上程する婦人公民權問題を調査中であつたが、調査がほゞ完了したのでいよ〳〵具體案の作製にとりかゝつてゐるといふことである。

又傳ふるところによれば、政府は選擧法改正の意嚮を有し、その改正案の中には婦人に選擧權被選擧を與へる條項を有しこれ又行政審議會の審査にかけるべくその手續きを取られたといふのである。

民政黨は政友會が婦選をその綱領中に加へたのに對して、公民權を與へることを主張してゐた。行政審議會が政友案をさし措いて民政案をまづとり上げたのはどんな動機からであるか審らかでないがしかし種々のことを綜合して考へて見るに萬一この議會に婦人參政權の問題乃至は公民權の問題が議題として日程にのぼるやうなことがあれば、民政黨は決して積極的にこれに反對の態度を示すことは出來ないであらうし、無産黨は無論全部これを支持することであらうから、長年の婦人界の懸案であつたこの問題も、政黨間相互の功名心によつて意外に呆氣なく解決されさうな形勢にある。

それにつけても思ひ起されることは、今日の東京市の疑獄事件である。東京の市會はこれ迄も度々の疑獄を生んで來たのであるが、しかも今回の如くに陋劣で醜惡なるを見たことはないとは、ブルジヨア社會さへもが一齊に叫んでゐるところである。事件は實に一板舟權、一京成電車乘入れの問題ではないのである。私共はこれらの例證によつて、かの選擧の際に口に美辭麗句をつらね、『貴下の淸き一票』をと哀願した彼等が徹頭徹尾たゞ金の爲めに動いてゐたといふ確證を與へられた譯である。彼等醜類の前には、市政も市民もないのである。彼等の利權漁りの邪魔となることであれば、市吏員の職務の遂行を妨げ、市民全部の利益を蹂躙することは決して珍しい不道德ではない。

フエミズムの運動を行なう人々は、婦人公民權が與へられゝば、自治政の上に著しく淸淨な空氣を導き入れることが出來るといふことを長く主張して來た。しかしそれは今日の政治そのものゝ本質を知らない民主々義者の空想たることが次第に明らかになつて來た。これら一國の甲羅を生じた職業政治家とその背景にある金權の黒い魔手とが、單なる投票、單なる言論によつて左右されると考へることは、よほどお目出度い考へ方である。私共は無産政黨のある人々の考へる如く、婦人の政治的參加の最も効果的な方面は、凡て從來大衆の直接批判の外に置かれた現代政治のからくりの忌憚のない曝

要と、それによつての大衆の政治的訓練を完成せしめることにあるといふことを、よく頭に入れて置かなくてはならない。この政治的參加の最後の目的を見過る時には、功を急ぐの餘り彼等一國の職業政治家に甘言と術策とをもつて乘じられ、婦人自ら婦人を賣るものとならないとは保證しがたいのである。この事については無産階級の友人をもつて任じてゐる民主々義的傾向の人々に、特に戒心を求めたいと思ふ。

四、農村託兒所の問題

內務省中央社會事業協會が、今秋より未だ曾つて日本に於いて試みられたことのない農村託兒所の設立運動を起すといふことは、珍しいからばかりでなくて、私共の可なり深い關心をよび起した。何れは官僚式の、その標榜するところと實質には大きな相違あるものが生れることは明らかであるが、しかもこれらの運動にも存在にも全然縁遠くして、その自覺と改善とが何時と知ることも出來ない遼い未來でなくては來ないと思はれた農村に、これが動機となつて眞に彼等を扶け彼等を導く組織が生れることゝなれば、これは決して農村にとつて、特に農村の婦人にとつて小さな福利ではない。

無産階級が、複雜な社會組織の下に殆んど完膚なき迄に酷使され搾取されてゐる今日の、無産階級の婦人の困苦は決して一通りのものではない。男子の得る賃銀が一家を養ふに足らず、しかも絶えざる失業の不安に脅かさるゝ現代にあつては、婦人は常に男子の共働者として外に働かなくては、その最も低度の生活すらも營むことが出來ないことは今日私共が見るとほりである。その結果は婦人は家庭內と家庭外と二種の勞働の爲めにその心身を勞し、疲勞困憊の度は決して無産階級の男子の比ではない。男子は例へば十二時間の勞働を强ひらるゝことがあるとしても、家庭は大抵は彼に何等の勞務を課すことはない。殘餘の十二時間を、彼は睡眠と休養との時間とすることが出來るのである。けれど婦人は仕事から解放せられて歸る家に待つのは、家事であり育兒である。ある研究者はある時期のロンドンの工場勞働者について研究した時に、二時間半乃至三時間の睡眠によつて働きつゞけてゐる婦人工場勞働者の群を發見したと云つてゐる。

農村の婦人は、これら都會の最も窮迫した婦人勞働者に較べては時間の點で或はやゝ優しであるかも知れない。しかし農繁時には朝は未明に起きて深夜迄働き、家に歸つて家事を見ることは當然のことゝされてゐるのである。しかしてこれら多忙な婦人を母親とする子供達は、終日殆んど人間らしい注意をも愛撫をも受けることなしに、全くの無感覺な物品のやうに無心な子守の背にくゝりつけられるか、又は木の下砂の上に放置して置かるゝのである。

農村の子供達は、都會の子供達の如くには危險と疾病とにさらされることはないかも知れない。しかし農村が婦人の手を要すること今日の如く、又將來も婦人が産業的に社會的に働くことが社會にとつても婦人自身にとつても必要であるとすれば、農村の子供達を長く今日の如き原始的な放任狀態に置くことは出來ない。

農村の子供達のみじめな狀態を見、農村に託兒所を設くることの必要を感じた者はこれ迄とても決して少くはなかつた。が、しかし都會に於ける託兒所すらまだ充分な發達を見ることの出來ない今日特に退嬰的な農村に於けるこの種の設備は、組織の背景と資金を有する團體でなくては、手を染めることが不可能であつた。

ロシヤに於ける託兒所、殊に農村に於ける夏季託兒所に關する報告は、日本に於けるこの運動を起す人々にとつては興味あることであるかも知れない。しかし私はこゝではそれに觸れてゐることは出來ない。それは又他日別箇のものとして報告する機會を得たいと考へてゐる。たゞ然し農村の託兒所は、託兒所であると同時に農村婦人に最も缺けてゐる育兒に關する智識を供給する場所であることは勿論であるが、その婦人自身の凡ゆる問題についての親切な指導者であり相談相手でもある種類の設備にまでその組織が發展して行くことは必要であると考へる。

五、米價の暴騰

毎年新米が市場に出る前の二三ヶ月間に、米價が騰貴することは定則となつてゐるやうである。而も今年は天候不順で作米の減收といふ豫想が行はれてゐた故でもあるか、例年の程度を突破して、非常な暴騰であると云はなくてはならない。

プロレタリヤ階級は、生産階級であると共に消費階級である。日常必需品の暴騰は、いかなる場合にあつても最大の痛苦を伴ふものである。特にそれが米の場合に於いては甚しい。都會のプロレタリヤにとつても農村のプロレタリヤにとつても同樣に痛苦でなければならない。しかるに支配階級は、近頃の米價の暴騰を、あだかも農村プロレタリヤの利益と都會プロレタリヤの利益とが背反するやうに見せやうとしてゐる。しかしそれによつて利益を占めるものは、ひとり一部の米商ブルジョアジーと大地主とのみであつて、農村プロレタリヤではないのである。

日本のいかなる地方と雖ども、農村プロレタリヤが新米を賣出す二三ヶ月前まで貯藏米を持越してゐるやうな財力のあるものは、恐らく一人もない。彼等はこの時期には大多數が地方々々の米の小賣商人から逆に米を買つて生活してゐるのである。彼等はつまり自分達が生産した米を秋から冬の間に安く賣り、夏から秋にかけての期間に非常に高い値段で買ひ取つてゐるのであつて、近頃の米價暴騰は農村プロレタリヤの利益には少しもならないのである。

新米が市場に持ち出される前の二三ヶ月の期間まで貯藏米を持越してゐるものは、大地主と米商ブルジョアジーのみである。從つてこの時期に於ける米價の暴騰はこの種の階級の利益を意味することに外ならない。農村プロレタリヤが都會のプロレタリヤと同樣に苦境に投げ込まれるのは、いふ迄もないことである。

日本の社會では特に、男子は主として稼ぎ人であり、女子は主として家庭人である。男子は工場に於いて會社に於いて生産に携さはり、女子は全部ではないが大部分は家庭に於いて消費に關與してゐる。それ故に米價の暴騰を先づ第一に痛感するものは、婦人である。

こんな場合に、婦人が消費の分野に於いて一つの階級的な組織を持つてゐたら、どんなにいゝ事だらう。婦人の自覺の程度が廣い英國では、婦人が消費經濟の道に明るく、パンの價格については常に注意を怠らず、これを略々一定の値段にして置く事に調節されてゐるといふ事を聞く。私達もさうした組織を持つ事が出來たら、今回のやうな有產階級的な米價の釣上げに對して直ちに抗議を持ち出す事が出來るし、又これと鬪爭を開始する事も出來るのである。そしてそれは私共の生活にとつてどんなに力强い助力となりうるのであらうが、併しまだそれらの大衆的な組織を持たうとする傾向さへも私共は日本の婦人の間にないことは、甚だもつて遺憾なことである。



落合百合子

父系第一思想の跳梁と其破産への道

新妻伊都子

（一）

最近私の讀んだ新聞記事の中で、特に興味を引いた事件が二つあつた。それは何れも夫から妻へ向けたもので、一つは妻の姦通行爲に就て、他は虚僞の結婚に對する離緣の訴を提起したものであつた。

前者は、或る夫婦が永年外國に住んで居たが、永久に異國の土と化すことを望まぬ爲か、妻は先に日本へ歸り、幸ひ自分のもつ技能を發揮して、或る一つの事業をはじめた。夫は夫で、外國にある仕事を續ける爲に、殆ど多くの日を妻と離れて暮らして居た。つひに妻は若人と戀に落ちた。夫はそれを知つて姦通の訴を起したのであつた。

後者は、日本とは國情も勿論法律、慣習も異る米國での出來ごとで、或る人妻が結婚前すでに處女を破つて居たことを、結婚後まで夫は知らなかつた。夫は妻がそれを自分に隱して結婚したのだから、卽ち『詐欺』の結婚だとて、離緣の訴をしたのだそうだ。

これだけの記事では何の變哲もない、昔からありそうな出來ごとに過ぎないが、これが結末は、今迄とは少し違つて居るのに興味が感ぜられる。なぜならば、在來の日本に於ては、夫が重婚をなした時か、又は夫が姦淫罪に因つて刑に處せられた時以外は、妻は夫に對して、性の問題から起つた離婚の要求は出來得ないやうに承知して居る。それに引かへ男性は、たとへそれ自身は他に情事關係があらうとも、妻が姦通なしたる場合は、法規にてらして、離婚は勿論、姦通の訴も出來るのである。それに對して妻は殆んど抵抗力をもたず、刑法第百八十三條の『有夫の婦姦通したる時は二年以下の懲役に處す』と云ふ法令の下に姦通罪に服さねばならぬのである。

女性には片手落ちの法律の存在を、今更珍らしそうに披露するがものでもないが、これだけを見ても、家族制度保持の名の下に父系尊重の思想によつてつくり上げられた制度が、如何に女性を苦しめて居るかゞ窺ひ知られる。ところで問題の結末であるが、傳へ聞くところでは、此の事件の被告は、離婚の一理由として米國の法律に於ては認めて居る『夫婦の一方が性の滿足を與へ得ざりし場合』を强調し、斯うした羽目に陷つた主たる動機をそこにありとし、豫審判事の前に赤裸々に陳述して憚からなかつた。これは勿論、家族制

度保持の爲に種の純潔を第一とし、それ故には妻たるものゝ人としての本然性、――本能、情操、意欲生活すべてを古反古の如く棄てしめて顧みず、單なる子を産む機關とすべく、努める日本の法律に照らしては、罰せらるるのは當然ではあらうが、しかも罰は罰とし、信じる處をそれが爲めに狂げようとせず、遂に示談となり、訴訟取下げにまで漕ぎつけられたのであつた。

次の詐欺結婚に就いては、夫妻は、結婚に依つてはじめて結ばるゝ夫妻であつて、從つて妻が其の結婚前の行爲に關し、何等夫に束縛さるべき義務を負ふものでは無いとの理由で、詐欺結婚の訴へは成立せずとの判決が下り、妻の勝訴となつたそうである。これについて米國の知名な婦人達に依つて組織されて居る一クラブでは、早速討論會の一課題としたところ、大多數は此判決に贊成したと云ふことであつた。

記事はこれだけであるが、此中に示された思想上の著るしい特徴は、卽ち永い間築かれて來た父系思想の跳梁に蹂躪されて、手も足も出なかつた女性の立場が、歩一歩取り戻され、より衡平に、より正義に趣き、やがては父系思想の破產を齎らす一端として、考察するに値しようと思はれる。

（二）

人間は、よりよく生きんが爲に、制度を作り、習慣を生み、道德を築き、法律を拵へる。ところが、いつの間にか主客が顚倒され、よりよく人間が生きん爲に拵へた筈の制度其他が、堅い殼となつて、却つて生々育々伸び伸びてやむまいとする人間の生活を、外から縛らうとする事はめづらしくない。この場合に於て、制度その他の客體たるべきものが主體であつて、主體たるべき人間の生活が客體となつてしまふ。然し、堅くなつた殼の中には、いつの世に於ても、柔かい雛鳥がはぐくまれて居るから、時が來ればそれが世に出て、又新らしい、それに必要な客體が生れて來るのは、歷史が明らかに語る處である。

たとへば、今日から見れば、悪虐行爲としか見られぬ、封建時代の斬捨て御免にしたところで、士農工商と、武士を以て四民の頭に置き、一旦ことあつた場合の用にたてる爲、養つておかねばならぬ武士の自持心を保たせる方便としては、其當時必要な制度であつたに相違はない。けれど、武士階級から町人階級へ、社會の變革から、經濟組織に著るしい變化をもたらしたことは、云ふを俟たず、武士に必要とした制度、習慣等々は失ひ、町人に利益するものがそれに置きかへられた。

此樣にして、人間のよりよく生きんが爲につくられた今日迄の制度は、その時代〳〵に、或る一部分の功をなしたものであつた。

（三）

戀愛、結婚、離婚等、男女關係のものにも、その時代〳〵によつて大きな變遷のあとがある。性交無制限であつた時代、血族群婚の時代、さうした亂婚の時代には、それにふさはしい制度、習慣があつたに違ひない。いはゆる母權時代から父權時代に移り、そこに私有財產制度は生れ、その蓄積された財の存續の目的から、家族制度は生じて來た。かうして出來上つた男子專制の社會組織は、全く女性を奴隸とし、男性の所有物としてしまつた。

此時代に於て、一夫一婦制度は確立されて居たが、貴族、武士、

有產の町人等は、表面は正妻が一人でも、婢妾の蓄へは依然として多く、むしろ、これあるを誇りとした。女性のうちで最も苛酷のあつかひを受けたのは妻であつた。であるから、貝原益軒と云ふ儒者は、『女大學』と云ふ書をあらはし、然かもこれを女性の寶典と稱へ、こと〴〵く妻を侮辱し、輕蔑してしまつた。これこそ近代日本に於ける、男女關係の思想を最も形たゞしく結晶させたものと云つてもよからう。その最も手嚴しい一節は

『凡そ婦人の心様の惡き疾は、如き從はざると、怒り恨むと、人を誹ると、物を妬むと、智惠淺きと也。此五つの病は十人に七八は必ず有り、是れ婦人の男に及ばざる所也。自ら顧戒て改むべし、中にも智惠の淺き故に五の疾もおこる女は陰性也。陰は夜にて暗し、故に女は男に比ぶるに愚にて目前なる然るべき事をも知らず、又人の誹るべきことを辨へず、わが夫、わが子の災と成べき事をも知らず、科もなき人を怨み、怒り、詛ひ、或ひは人をねたみてわが身ひとり立たんと思へど、人に憎まれうとまれて、みな我身の仇となるを知らず、いとはかなく淺まし、……かく愚なる故に何事も我身を謙て夫に從ふべし、古の法に女子を產めば三日床の下に臥しむるといへり、是も男は天にたとへ女は地に象る、故に萬の事に付ても夫を先立て我身を後にし……又人に侮られても腹立て、憤ることなく、能く堪へて物を恐れ愼むべし……』

これによつてみても、女性は、否、妻は全く人間以下に取扱はれて來たことが證明される。然しこれは何に原因するのであらうか。云ふまでもなく、經濟上の權利が完全に男性の手に落ち、女性は男性の寄生者として、すべての權利を奪はれたことにある。されば夫婦關係に於ても、命令と服從とのみで、相對的立場に於て生ずべき人間の情味などは少しも現はれない。まして自由戀愛など、自滅を覺悟せざる限り、及びもつかぬことであつた。

斯の如く、女性の上に課せられた枷は上層階級に多く、夫婦共稼をしなければならぬ階級にあつては、幾分自由なところがないではなかつたが、矢張り女房は、何の理由がなくとも、夫から三下半を突出されゝば、去つてゆかねばならぬのは同じことであつた。

然し、かうした、女性にとつての惡制度も、時が來れば自壞するのである。

（四）

最初よかれと作られた制度其他も、時勢の推移によつて惡しくなる。それは人間全體によかれと作られたものではなく、いつの世に於ても、或る一階級、即ち貴族、武士、町人の各階級が、覇權を握つた時、各自それ自身の都合よき制度をつくるのに起因しよう。それ故に、下積とされた階級も、はじめは無智からそれが自然のことであるかのやうに思つて居ても、いつか目が覺めれば、自分に毒する制度であることを悟るやうになり、從がつて虐げるものに對しての反抗は起つてくるのである。此反抗が戰爭となり、革命となるのである。

歷史の上に表はれた兩性問題の上にも、戰爭と革命が大きな影響を及ぼして居る。亂婚風習のあつた原始時代の遠き昔のことはさておき、男女關係をもつて罪惡視した基督教の風靡した時代には、女性をして不淨の者と呼び、男性を墮落さすものと、極端に賤しんで居る。此時代には人間自然の本能である性行爲を戒め、肉慾禁斷を可としたのであるから、結婚制度についても、『自ら制ふこと能はず

ば婚姻するも可し』と、やむを得ざる場合にのみ許されて居る。そして一度結婚なしたる女性は、生涯離婚することは出來ないのであつた。今でも舊敎にはその風習が存在して居るやうであるが、事實は大分變つて居ようと思はれる。

勿論これ許りが理由では無かつたが、かうした舊敎に反旗を翻へしたのは、ルーテルの宗敎革命であつた。そして性に關する不自然な制度も變遷された。卽ちルーテルは、結婚は人類のなすべき必要なことであり、若しそれが完全にゆかざる時は、お互ひ合議の上で離婚さへ出來得ると云ふのであつた。

更に時代は進み產業革命となつた。此時代に於て自由主義が叫ばれるやうになり、從つて、盲從して來た女性の上にも、平等の權利が鼓吹されるやうになつた。此頃女性の先覺者として現はれたメリー・ウオーストンクラフトは『夫が妻に對してもつ權力、妻が夫に絕對服從することは自然ではない。社會的地位に於ても、道德的にも差別があつてはならない。女性が男性より劣つて見えるのは、先天的に與へられたものではなく、因襲、習慣のしからしむるところである。』と看破し、當然得べき女性の權利を主張したのであつた。此頃から、女性主義は發達し、男女平等の權利獲得の爲、戰は年中つゞけられて來たのである。

更に時代は轉換した。經濟の行詰りから歐洲大戰爭は勃發し、進んでロシヤ革命に至つた。これによつて、性的方面の變革は實に驚くべき現象を現はした。續いて歐洲諸國に於ける現在の事情を、讀み聞きした處の一つ二つを摘錄してみるが、それは今、その善惡を指摘しようとするのではなく、たゞ變遷した狀態を示めさうとするに過ぎない。

現在の勞農露國に於ては、結婚、離婚は全く自由となつた。一時に解放された不用意から、一歩辷り出た放縱の境に進む者がないでもなからうが、とにかく女性をして眞に自由な行動を、率直にさせるやうになつたらしい。

デミドウイッチ著の邦譯された「亂婚裁判」のなかに記されてある、イリナと云ふ三十五歲になる女性の云つて居ることを一例に上げたい。

陪審員が、『何故今性慾を抑制することが出來ないか』と云ふ問に

イリナ『そんな馬鹿を仰しやる事はやめて頂き度い。まるで聖人の書物にでもあるやうな、私は私自身の滿足を禁慾することも出來ますし、饑餓の我慢も、必要なら一日に十八時間働きもします。私が異性に接するのは何も自分の享樂を追ふためではありません。偉大なる自然的要求を滿たす爲です。私は仕事が出來なかつたり、安眠が出來なかつたりすることを好みません、それで私は異性と接するのです。女は愛情と愛撫なしでは萎縮して了ひます。私達の樣な落伍者にとつては、短かい情愛、愛撫も貴いのです。』

陪審員『何の落伍者です』

イリナ『性慾生活の落伍者です。世の中には好い配偶者を得て相互に意識的に性慾の純潔を保つてゐる人もあります。がこれを得られなかつた者のことです。此落伍者は亂淫者乃至墮落者と間違へられます。實際落伍者に割合に多く純潔な友情、人情に富む者があります。適當な配偶者をみつけられゝば、私共は眞心を以て末永く愛して行きませう』

次にコロンタイ女史著の邦譯『戀愛の道』のなかにある『三代の

戀』のゲニヤと云ふ娘が、たゞお互が氣に入りさへすれば、戀愛と名づけるものはなくとも、種々な男に關係を結ぶ、そしてそれは何物にも責任がない、と云ふやうなことを云つて居る。又ゲニヤは母親の夫、卽ち娘の繼父にあたる男と性的關係をもつたことについても、さほど惡しき行爲とは思つて居ないらしい。

これが勞農露國の解放された女性の、あゆむ正しい道であるとは、コロンタイ女史も云つては居ない。こゝから新らたに生れてくる新道德、新制度こそ、女性の上におかれるよきものとなるであらう。

（五）

以上述べて來た如く、男女關係にある制度、習慣、道德、法律など、基督教時代の徹底的な侮蔑時代から、革命後の露西亞の如き放縱な時代に至るまで、思ひもよらぬ推移があつたが、これも前に記した通り、男女關係の變遷が、常に經濟狀態の變革にもとづくものであることが明かに成つた。

そこで、我國に於ても、祿を食んで、太平樂をならべて居られた時代には、女性を扶養して置くことも出來、從つて生產力をもたぬ女性は隷屬物とされたのも、やむを得ぬことであつた。然し、さうした座食して生活出來ぬ人間が、社會の八割以上を示して來た時、女性も社會に出て働かねば食へぬやうになつた。と同時に自分達に壓迫を加へる制度其他に對して、反抗するやうになるのも當然の當然となることであつた。そこで、最初に記した姦通事件に對しても、在來の道德觀からみれば、勿論惡しき行爲には相違ないが、その環境と事情とを酌量してみれば、また別な見方をせねばならなくもなる處に、時代の推移を示して居る。

或者は露西亞の如く、亂雜な男女關係が行はれては、一夫一婦制度が亡びて、原始時代の如き亂婚になると恐れるが、それは在來の男性の云ふ言葉であつて、男性自身の亂淫行爲をかへりみず、たゞ女性にのみ强ひる父系思想から出た言葉と云はねばならぬ。若し、男性が女性に對して一婦を守るならば、女性も男性に對して勿論熱愛して一夫を守るであらう。はたして、それが人間自然の行爲であるか何うかの論は別として、未來の世につくられるかも知れない、宗全な一夫一婦制度が、人間の美くしい家庭をもたらせるかも知れない。然し、現在の如く男性にのみ性的多角行爲が許されるならば、同じ人間である女性にもいなむ事は出來なくなると云つても、若し良心のある男性ならば何とも云へぬではあるまいか。

要するに、女性の解放運動が步一步階級的に進みゆく時、一部の階級から生れでた父系尊重の思想は沒落し、そこによき制度は生れ、女性全體の幸福となるべきものが建設されるであらう。然し現在は建設の前の破壞時代であるから、數多の受難者の出ることはやむを得ぬことであらう。

× × × × × × ×



大原アヤ子

強權か自由か？

望月百合子

最近、婦人の社會的意識への目ざめといふことが說かれます。そして婦人が、婦人として、無産者としての二重の桎梏から眞に解放される爲に、無産階級解放運動に合せよと、多くの自覺的知識婦人の間に叫ばれるやうになりました。

併しこの無産階級解放運動とは何を指すものでせうか？ これには現在種々な見地からの運動があります。そしてその見地の差に依つては、同じ目標を目ざし乍ら、全然反對の意識と結果とに到着するものがあります。この點で若し一歩を誤れば、解放の爲の婦人の努力は何の役にも立ないことになります。それ故、目標と手段とをまづはつきりさせる必要があります。

そこで問題は、いかに私達が社會的に目ざめるかといふことになります。昔の靑踏一派の新らしい女の自覺は、個人的意識に基いたものだと言はれますが、また一種の社會的目ざめだといふことも出來ます。人間の社會的生活には政治的方面、經濟的方面、家庭的方面その他種々な方面があります。そこで靑踏の新らしい女の思想は、經濟的に社會意識をはつきりさせなかつたかも知れませんが、性的に、哲學的に、或は道德的に婦人の社會的地位をよく自覺してゐたやうであります。原始女性は太陽であつた！ と絕叫したのはたしかに宇宙的或は人生觀的見地からの目ざめで、この點が經濟的見地に目ざめた今日の婦人の自覺と異る點であります。

今日の社會的目ざめといふのは、單に經濟的政治的方面にのみ中心點が置かれて、この經濟的政治的不平等がどこから來るかには些も注意が向けられて居りません。この點に就てはいろ／＼むづかしい議論もあるでせうけれども、人間に自我の分裂が起り、自己意識が生れ、それによつて權力と服從の關係が起り、それがこの經濟的不平等の基礎になつたといふことには議論が進んでゐないやうです

今日、多くの婦人は、男子に對する婦人の經濟的政治的平等を得る爲に、『婦人は無産者』といふ立場から、無産政黨運動に投ずるやうであります。この運動によつて、この不平等を無産男子と共になくなせると思つてゐるやうです。そしてこの男女の經濟的平等とか

參政權を平等にするとか言ふやうなことは、權力と服從の關係を認めてのことのやうに思はれますが、若しさうだとすればこれ、木によつて魚を求めるものであります。たとへ參政權が、ブルジョア、プロレタリア、婦人の間に平等であつても、政治のある處には必ず强權制度があり、强權制度がある限りは權力と服從の關係は必然に伴ひます。これは過去數十年に於ける歐洲諸國の無產黨の歷史がよく物語つてゐる處であります。即ち無產政黨に依つては、無產者の中から、大抵の場合、無產者でない、無產政黨の指導者等を、ブルジョア政治家の仲間入りさせるだけのもので、一般無產大衆は依然として無產大衆として殘つてゐるのであります。從つてこれは無產大衆を踏み臺として、少數者の特權を助長こそすれ決して無產者の解放に役立つものではありません。これと同樣に、婦人參政權も亦、少數婦人の爲のものであるに過ぎません。婦人參政權が行はれてゐる國にありては從來よりも一層婦人同志の間に確然とした階級が打ち建てられてゐるのであります即ち從來『弱者』と言ふ比較的同じ立場にあつた婦人同志の間に公然と支配階級に屬する少數婦人と、被支配階級に屬する婦人大衆とが相對峙する事になつたのであります。

一體かうした現象は、どこから起つてくるのでありませう？ そもそもから云ふ不平等を生ずる强權制度がなければ、吾々は生活できないものでありませうか？

モルガンの『古代社會』の中には、何等の强權なくして幸福な生活を送つてゐた民族のことが書いてあります。男も女も老人も子供も平等な權利を持つてゐて、そこには一人も支配者がない、何かの事件が起れば男も女も一所に集つて相談して決める。決して誰も命令もしなければ壓制もしない。只老人は經驗に富んでゐて、多くの知識を持つてゐるので皆から尊敬されてゐた。といふ事であります。

さらに人間は果して平等なものでせうか？

自然狀態に於て人間は決して平等なものではありません。婦人と男子とも平等の存在ではありません。年齡の差によつても不平等が生じます。生れながらにして智能の相違もあります。それなら所謂平等論は現實の社會には成立しないものでせうか？ 否、否、さうではありますまい。

この不平等な現實の社會生活の上に自由に圓滿に表現させる處に眞實の平等があります。この平等は强權制度の下には決して行はれないことであります。そこには嚴然として支配階級と被支配階級と命令と服從とがあります。好適な例としてロシアを御覽なさい。あそこには果して勞働階級が渴望して止まなかつた自由と平等と友愛とがあるでせうか？勞働者獨裁國のあそこには一人も不幸な勞働者はゐないでせうか？いいえそれよりもあそこには他人の勞働を搾取して美衣美食を盡してゐる遊惰な人間は一人もゐないといふのでせうか？否、否、否、あそこにも亦、私達のこの國と少しも變らず支配者と被支配者との國だといふではありませんか？そしてそこにはツアル時代よりももつと多くの貧しい勞働者がうよ〳〵してゐるといふではありませんか？只ツアルに代つて他の人々が、他の方法で主權を行ふに過ぎないではありませんか？

これでは只人類に一寸した變化を起しただけで解放とは言はれません。そこには常に新らしい不幸者が絕えないのであります。私達のいふ解放はかうした變化ではありません。權力の移動ではありません。私達のいふ解放は人類全體が一人殘らず自由平等の幸福を享受するのでなければなりません。私達が社會的に目ざめるといふこ

とは、この根本原理、卽ち私達の社會生活の眞實に目ざめることでなければなりません。私達がかうした自覺を得たとき、必らず新らしい歩みが、この現實社會の上に始められます。

この新らしい歩みはどういふ風に始められるでせうか？今日の强權制度の下にあつては男女ばかりが不平等なのではありません。男同志の間に不平等があり、女同志の間に不平等があります。殊に日本の法律では男女の權利地位の差が著しくあります。それ故この差を除く運動も勿論無意味ではありません。併し若しそれを除いても旣に述べましたやうに强權制度の下では凡ての人間が、男も女も、男同志も、女同志も平等になることはできません。

それならばどうしたらいいでせうか？第一に必要なことは、私達自身が知識的に、道德的に敎育されることであると思ひます。これが私達の仕事であります。敎育といつても現在の大學に行つたり、男女が平等に學校に入ることではありません。それも勿論必要なことでせうが、それは私達の解放に大した役目を果すものではありません。私達は私達の根本原理に從つて、世の中の政治、經濟、敎育文藝等あらゆる現象に對する新らしい觀察眼を開いて行けばいいのです。一語にして言へば新らしい社會觀人生觀を開くことに努めればいいのです。こゝにこそ私達の自由社會建設の第一步が踏み出されるのであります。

理想社會を招來すべき運動には、急進的な態度と、漸進的な態度とがあります。それは時と場合により、またそれに當る人物によつて自ら差異を生じます。併乍らそれが急進的革命運動であつても、漸進的革命運動であつても、强權を否定した眞の解放運動は、强權を肯定した非似解放運動とは判然たる相違を現すに違ひありません

それ故自由社會建設の爲には、今日現存する支配權を奪取するといふやうな目論見は、たとへ手段としても受け入れることの出來ないものであります。よく社會革命家が、プロレタリアの獨裁といふことを言ひますがそれは社會黨なり、共產黨なりが自分達の野心を滿足させる爲ならば、それも結構でありませうが、プロレタリアの解放といふ意味から言ふならばそれ程無價値な運動はありません。否、單に無價値であるばかりでなく、私達の解放を妨げること甚しいものであります一つの强權を倒して、他の新らしい强權を建てるのは、それは革命ではなくて權力爭奪にすぎないのであります。强權的獨裁制を建るのはやがて自由の社會に行くべき階段であるといふ詭辯を屢々耳にするのでありますが、それは函館に行くにはまづ長崎に行かなければならないのと同樣であります。

苟くも、自由社會を目がけて進むならば、自らそれにふさわしい道筋があるべき筈です。私達はその道を求め、その道を進むことに努力しなければなりません。第一原理に目ざめた私達は、この新らしい社會觀、人生觀に基づいて私達自身を組織して行かなければなりません。敎育して行かなければなりません、この敎育と組織とに依つて、私達は或は徐々に、或は急激に自由社會へと進んで行くことができます。

繰返して言ひますが、いかなる形に於ける强權と雖も、その强權の上に立脚する單なるフエミニスト運動、單なる無產階級解放運動は、私達の眞の解放とは全然相反するものであります。それ故私達は、强權か自由かのこの二說をはつきりと認識區別して、人類全體の幸福に向つて努力する時、始めて婦人として無產者としての二重の桎梏から完全に解放されるのであります。（一九二八、八、七）

女流教育家八百屋見立

●秋は八百屋の店賑はう時季なり。我店にも品物かきあつめて並べて見んと思ひたつ、殘りもの賣る横町の角の端店ならねど、あまり新鮮ならず、ひねたるが多きぞうらめし。

嘉悦孝子（澤庵漬用干大根——實用向き）
——怒るな働け、實用主義、同じ大根でも水氣含まず、鹽が少々利きすぎてゐる。

羽仁もと子　八ツ頭）
——土の中にじつと根を張つて座つてゐる。すべては神の御恩寵！

與謝野晶子（トマト）
——濃艶、くづれるがごとし「やは肌の赤きトマトにふれもみず淋しからずや道を說く君」

井上秀子（燒き芋）
——女子大生徒これを食す。あまりうまからずと稱す。

塚本はま（ずゐき）
——味のかはること足早く、わけてお茶の水にあへば忽ち變色す。校長閣下諸氏、辨當の菜に最もよし。

跡見季子（じゆんさい）
——亡き慈姑の後繼者、おなじ跡見の池に生じ、ぬらりくらりと本性わからず。

川村文子（朝鮮白菜）
——旦那さん滿鐵でしこたま儲けて、學校たてるとはしほらしや。この朝鮮白菜見かけ新鮮なり漬け方次第でうまくもならう。

津田梅子（梅干）
——花の魁け、洋行のさきがけも今は悲しき梅干。アメリカの先生俳句つて曰く。「東風ふかば匂ひおこせよ梅の花」

大妻コタカ（葱坊主）
——其かたち針坊主に似たり段々に大きくなる。敎へていはく、一本の細き針よく我を大にす、豈葱坊主の細胞世人あなどるなと。

三谷民子（しひたけ）
形雅、嚙みしめて味あり。

櫻井ちか子（馬鈴薯）
——代用食にもなり料理にもなります、きはめて經濟お德用ですよ。わけて今年はお米の價があがるからこの薯は大切です。わかりましたか皆さん、櫻井女塾ではこれをポテトーと言ひます。

安井哲子（チシヤ）
——その味淡白、つけあはせによし。

鳩山春子（天王寺大蕪）
——鼓の皮の千枚漬、昔は選擧に贈りものとすれば效ありしも、現代普通選擧には落選の香のものなり、品下落せり但しこの蕪に舌あり、古菜の辯を有す。

堀越千代（筍
——衣をかさねるほど段々ふとる。若竹のむかし思へばはづかしや、人のきぬぬふわざをひろめて」糸よりほそき願ひもて、裁縫大學設立の夢破れていまははかなしや。

山脇房子（西洋人參）
——トマトほど美しからず、アスパラガスほど優艷ならずしかし、馬鈴薯、玉葱にまぜてサラダをつくる時の紅一點なり

吉岡彌生（西瓜）
——形大にして皮硬く、腕の冴えに一刀兩斷、鮮肉滴々たり。汁は腎臟病の特效藥、神田萬惣にて販賣、その種子の播布や甚大、目下ハワイに輸出中。

下田歌子　キャベツ）
——十二單衣重ねたらんやうに白き、薄黄なる、青みたる、さま〲の皮をゆるやかに、ひしとまとひ、ふくよかなる面差し愛嬌あり。「芽キャベツのころもありしをゴロゴロとげに福相に丸みたるかな」と讀みて歌子の名あり。彼の衣一重〱はがしなば、いかなる化の皮はがれんかと世の人いふもうべなり。今こそ女隱居めきて忍びてあれど、貴紳の秘事いかほどにか包みて守るらんと、隣れるカボチャの世に憎さげにもぞいふ。あなかしこ。キャベツ卷にしてでしこたま財寶を蓄積するとかや

マダム・ケート（日ましのコンニャク）
——日本惣菜ならばケンチン又はノッペにきざみこめど、一品洋食店にても用ひ方に困るといふ。流石胃の腑の頑健をもつてなる早稻田健兒だけが少々翫味するとなり。

河崎夏子（ラッキヨ）
——小粒で色白な瓶詰めの品ではありません。震災のとき配給された、色の黒い、鹽のからい大ラッキヨです。ガリガリとして齒ぎれよく、消化もよくおほひに用ひられてゐます。

ほそい月

——ジエームス・スチイヴンス

松村みね子譯

天はしづかで、はだかで
見あげる空に一つの星もひかつてゐず
空氣にすこしもうごきがなく
人間はみんな床にはひつてゐた

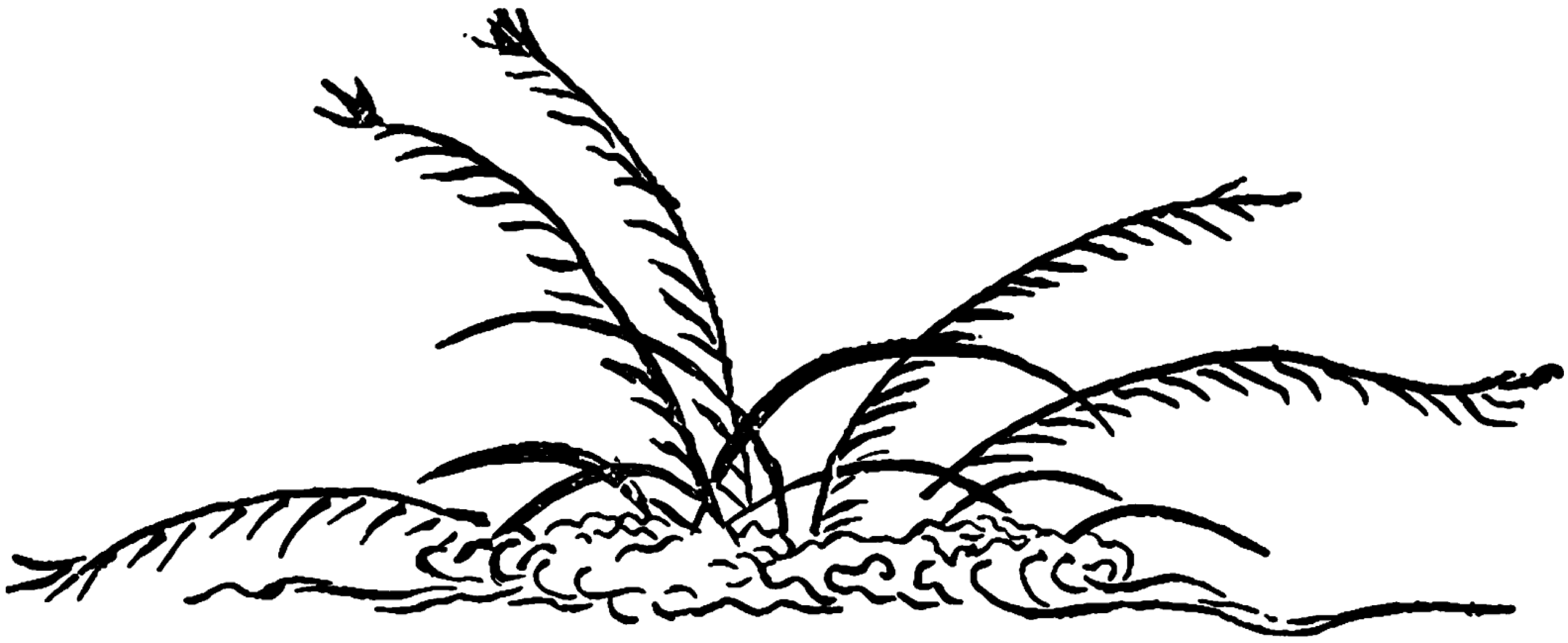
夜のなかに、わたしは、たつた一人で
月とゐた、わたしたちは暫らく話しあつた
月の顔はひかりの奇觀だつた
その微笑はうつくしい微笑だつた

月は下にこごんで來た、わたしはもうすこしで氣ちがひになりさうだつた
――わたしも彼女とおんなじくらゐ怖かつたのだ――
でもわたしは彼女の接吻をもらつた
彼女が海にあたへようとしてゐた接吻を

すると海はおどろきに巻き上がつた
月が浮氣で不良だといつて
月は空をとほつて逃げてしまつた
わたしは溪を通つて逃げてしまつた

それからのち、わたしたちは二人きりでゐたことがない
よるもひるもわたしたちを見張るものがある、そいつらは
あはれな小さい月を彼女の玉座にしばりつけてしまつた
だからわたしは別の花嫁と結婚した

大塚アヤ子

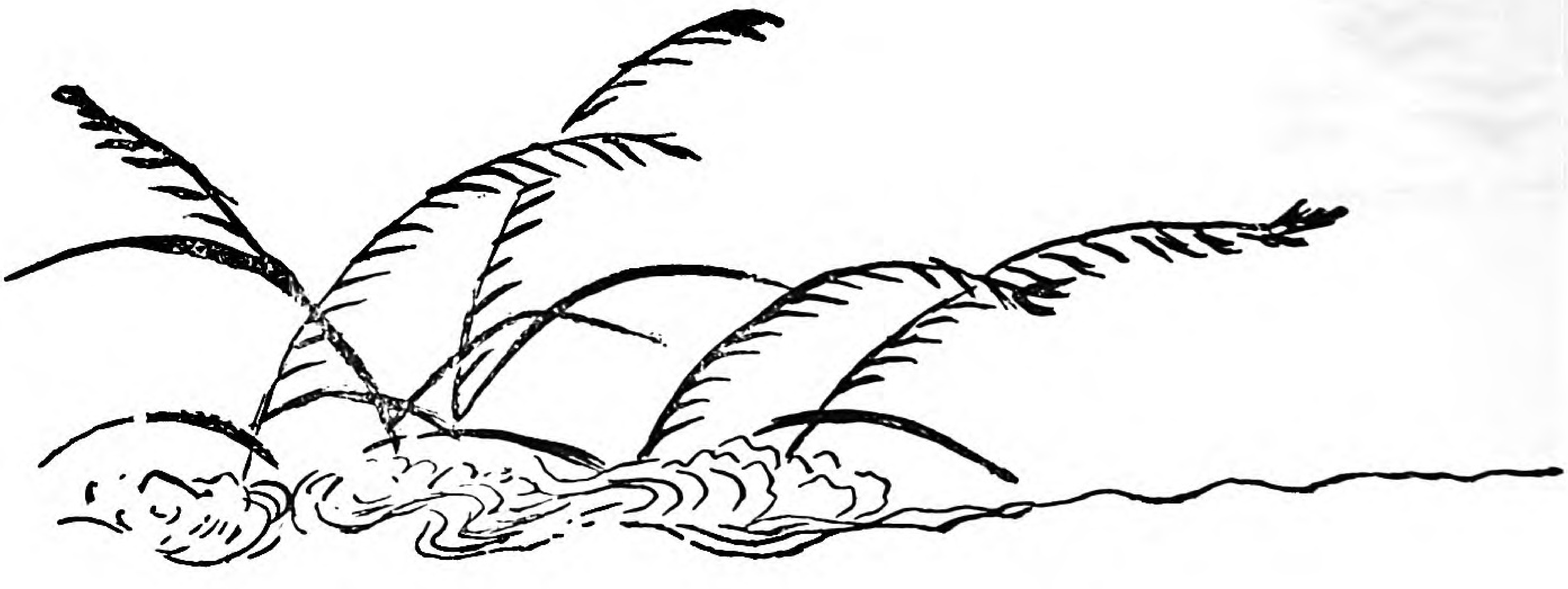


平原から

澤ゆき子

美くしい水分が
眠りかけたやうに川の上に浮んで
どこまでか冷たく結ばれた夕ぐれの唇が
平原の上から、花の上から、おぼえのない手觸をする。

おゝ霧よお汝のしぶきで
若芽いろにぬれやう
私の衿もとを
よこざまに流れてゆけ



ふきおろす人間の反逆
まひ上る人間の亂舞に、そのあわたゞしさに
何のお汝がかゝはらう

もし〳〵霧よ
お汝が本當に私を抱くならば
私のもろいあこがれの
かみの毛が
かろげな風にさいなまれてゆく
音のかすかさをおききき
搖れやすいいたいけな無限性が
九月の魂の上にうづたかく
沼の紫のかげから
おちしづむ一片の花かのやうに
そこにとけて了はうよ

九日よ霧よ
双手はたゞそれで一ぱいです。

山と霧

——(秋百首)——

與謝野晶子

秋風に白く靡けり山國(やまぐに)の淺間の玉のいただきの髮

霧降りて斜めなるべき淺間嶺の見えざる日にも赤き落日

晝のほど淺間の銀の火を吞みし空より秋のむら雨零る

山莊の五更の窓に覺めて見る冷たき夢は知られずもがな

輕井澤三笠の莊の借り家の丸木の欄の濡るる霧かな

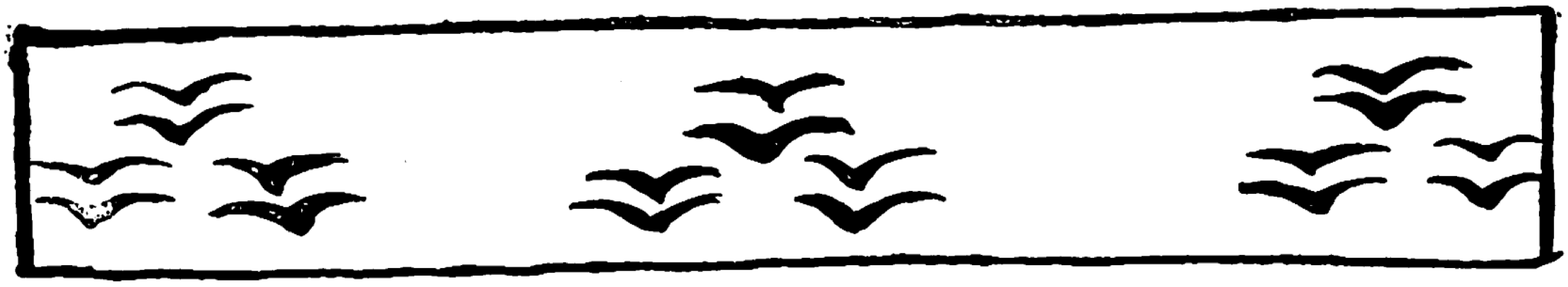
白樺の秋のしづくと日の影の同じきほどに漏れて散る庭

山莊や空も梢の明るさも遠く眺むる木の節(ふし)の椅子

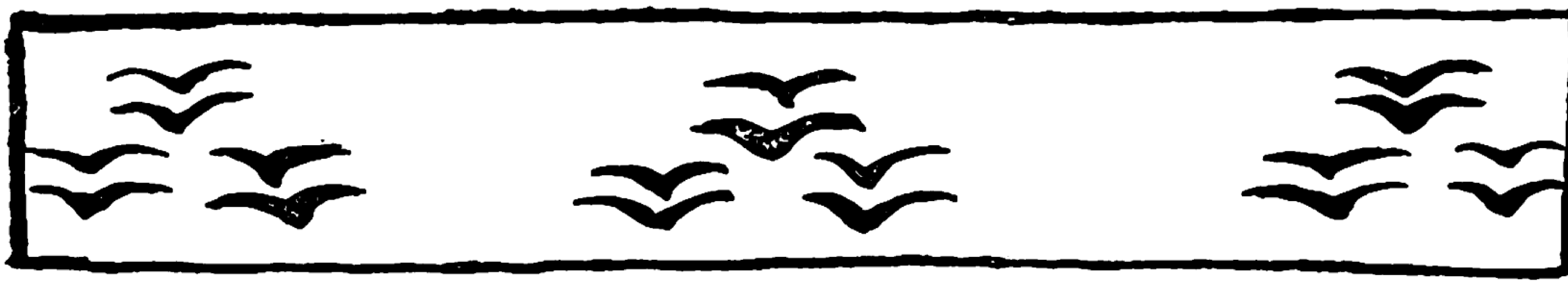
ななめにも日影のさせば光るなり榛の林もしら樺のごと

榛林(はりばやし)梢の高く幹細し日が横いとをかくるはつ秋

山風が月見草をばかへり見て少しやさしくなりにけるかな



山山は夜にとらはれてかひなきに月見草のみほの明るけれ
都をば昨日の世とも思はずて山に籠れば霧冷たかり
山の雨物しづかには寄りてこぬ慣ひなれどもなつかしきかな
石の沓うがちて雨の踏むやうに朴のひろ葉の鳴れる明方
秋風や鎖のやうに下枝先づうら枯れわたるから松の森
秋風の吹く花野より高くして羽圓扇型のはなれ山かな
飛行機を信濃の空のしら雲が隔つる朝の秋の初風
秋の水夫人の下りてある側の雲場の川は紫にして
淸らなる芹生よ雲のやうにして緣どる水は湖に落つ
雲場池淺間の煙初秋の白雲となりうつくしきかな
芹もまた巴まんじを描くものとひろがるさまに知る野澤かな
山泉は音ある鏡冷たさと淸き光はかはること無し
淺間の火白樺の木と通ふなり何れも池の倒影にして
雲場池雲走りかひ波うごくなかばは陰の琅玕の水
山と霧人間の和のはかなきに比ぶべからず寄りも寄らずも
その中に沓掛行きの車をば見かくる原の秋の夕風
星の湯へ二里の道をば夕月に歩みし友の病める東京
落日を蕎麥の莖ほど細く見る小板橋こそ涼しかりけれ



輕井澤指折るほどに隔たらぬ八とせばかりは歸りてよかし
亡き人の浮月の庵それよりも寂しおのれに目を轉ずれば
涙をば流さぬ假の心にてむかしの跡をたづね入る路
なほ半昔語りになりはてでわりなき涙流れぬる山
今日もなほ語り合ふべき心をばもてるこの世と彼の世なる人
額紫陽花秋に魂か魄かは知らねどもその一つをば失ひて立つ
夕暮に採花の人のためらへる五尺あまりの月見草かな
木の枝がつくれる洞を走るなり水の流れと云ふやうにわれ
先立ちて夕の色を作るなり霧のたぐひのから松の山
霧降れば白樺の木の梢なる遠山うごくここちこそすれ
山の家夜氣に蛾の寄る硝子戸の外はこの世のここちこそせね
夏と秋陰陽の氣と人の世と雲とかたみに入り混るかな
都てふ全きものの苦き味なつかしきかな山に思へば
山莊を今日限りにて立つ人のいでて歩めるしら樺のもと
一夜寢て越の溫泉に行くと云ふ若人と聞く山莊の雨
をとこへし女郎花より濃けれどもはかなきさまのしもつけの花
しもつけの花上じろみ霧積の碓氷の坂に秋風ぞ吹く
霧深し山は暮色と薄明の色を混へてあぢきなきかな

霧もまた空しきものにあらずして城さへ造る信濃の國に

霧積の霧の使と逢ふままに峠は秋の夕ぐれとなる

滿山の霧くらくして鶯も夜のこほろぎのここちこそすれ

山の霧人の目に見ぬ大いなるものを追へると悲しかりけり

しばしして霧より出でぬ葉の如くうすくはかなく重れる山

初秋のきりつみ山の石の亭六方の窓霧にふたがる

霧深し人稀にして見晴しの台に妙義の現るる待つ

溪溪の杉をめぐりて風上りわれは妙義の霧を眺むる

山國の秋のめでたさ妙義より碓永にかかる豐かなる霧

山川は時より速く流るると知りていささか慰みぬわれ

輕井澤綠衣の舍人守らねど白く直ぐなる路つづくかな

高原の淺間の灰は骨に似て乾けど踏めば音して怒る

花野にて二人眺むる落日の有明よりも悲しかりけり

藤かづら薄鐵のごと鳴るものか落ち合ふ川の中にする岸

山もまた枝さしかはす姿して北の信濃のなまめかしけれ

曉に馬悲めりしらつゆのうまやの軒に散れるなるべし

衰へて黃玉色となりにけり朝霧降れる野の月見草

淺間山雲催して花ぐさの一かたにしも傾ける晝

木の奥を淺間の湯川はやく行く沓掛宿の盆の燈籠

ながながと湯川光れば山の雨いよいよ暗く思ほゆるかな

信濃行く迷路を出でし人のごとわれを見なすも假の心ぞ

から松の路を初めてわが行きしその世の馬車の御者も見まほし

から松が竹の形に伏すほどに信濃の雨の淋しくなりぬ

から松と雨の煙が殘したる淺間のふもと明星の池

山の池濁る身ならばにごれかし傾ふごとし秋雨の中

山蔭のくもでの水を貫ける一つの路は葦の葉ぞ鳴る

女郎花葦にまじれり縱横に湯川流れてしろき初秋

雨の日は黛いろに冬めく淺間の山のけぶりと知りぬ

から松の細き葉はやくうら枯れて北の信濃の秋の雨降る

離れ山雲破らんと急ぐなる顏隱されし童のやうに

あひだ無く浴みてましを星の湯と七夕ばかり稀に逢ふかな

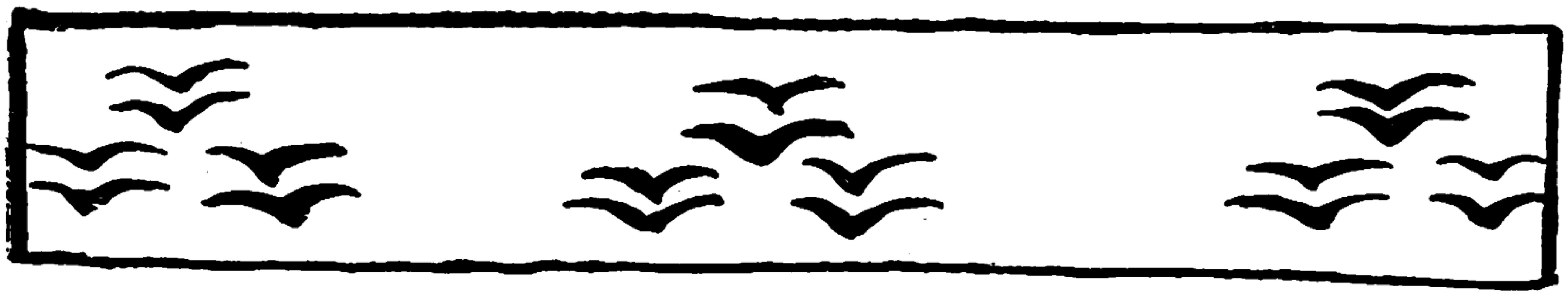
おもしろき踊場となる星の湯は淺間の麓の一ところにて

旅人のむかしの夢のごとく立つ明星の湯の秋の白樺

涙また雨は地上に泌み入れど流るるものの川こころよし

白樺の木の間にありぬ忘れては山の鳥かと思はるる家

溫泉を地に掘り出づるなにがしの寶石の錐得るよしもがな



山に居て都の家の朝顔の色を思へり我子のやうに
月見草夕闇時にまぎれ咲く花のこころと似ざる色かな
草山を群行(ぐんかう)すなる人もまた越(こし)の雁かと思はるるころ
わが溪の路埋もるるところまで至れば逢ひぬ大きなる蛾に
霧積が霧の垂れ幕なかば上げこよてふ如し輕井澤町
秋山の蝶家(や)の蔭をのみ飛べり澄みたる空を恐るるやうに
山荘の園を流るる時にすら音の急なる秋の水かな
夕暮に主人の駒の足音(あのと)をばまねぶ莫哀山荘の水
山の雨降ればおどろくここの外事無き日をば假に作れる
いかづちの轟く方を案ずれば寢釋迦の山のかしらに當る
高原の千本槍をこらす雨降りて信濃の涼しかりけれ
初秋のならひに雨氣の迷ふ日は速かに咲く月見草かな
錦木とかへでと秋の末方を幽かに見せて人白を着る
山の雨日影をまじふ階前にしら樺の影横たはりつつ
雨の音泉の聲のうちこもり莫哀荘の洞めける秋
山荘に泉の王と見ゆれども秋より後はさひしからまし
山荘にあけびの蔓を引きし世の霧に勝りてくらき雨かな
山の雨草のしづくとなりて散る窓のひさしに生ひも並べば



アンナ・グルスキナ女史訪問

「いつごろ日本へいらつしやいました?」

「五ケ月あと、三月でした。」

「ロシヤであなたがお譯しになつたのはたしか古今集でございましたね。」

「さうです。古今集は小さい本にして出版しました。今は新古今集や、萬葉集を研究してゐます。休みまへまで、帝國大學で佐々木信綱博士の講義を聞きました。」

「お譯しになつた古今集の序文に『短歌は言葉と調べの花束で、思想に關しては全くない』といふやうなことをお書きでいらつしやいましたが、現代の短歌、それから古今集以前の――萬葉集など最初に御らんになつたら短歌に對するお考へがずつと違つて來るだらうと皆さんがおつしやつてゐました：：：」

「現代の?私今石川啄木の歌を勉强してゐます。萬葉集も調べてゐます。思想!さうです、けれども美しい言葉の調子がやはり：：」

「古代のものを主におやりになつたのでは、日本がずいぶん違つてゐるとお思ひになりませんでしたか。」

「私は東洋語學校を卒業して、やはりレニングラードで大學の日本語科に學びましたが、東洋語學校の方では言葉の外に歷史、地理、風俗などを敎へます。大學の方は言葉ばかりです。こゝには昨年日本へ來られたコンラード博士が居られるのでいろ〳〵日本のことを聞きましたから、日本へ來ても驚きませんでした。大學ではまた日本の新聞や雜誌を時間中に使つてゐます。東京朝日新聞、東京日々新聞、改造、中央公論などが來ます。時々は大阪の新聞もまゐります。」

「こちらへは研究が主でゐらしたのですか。」

「私はレーニングラードの博物館で土俗學の方へ務めてゐますのでそこから日本の產業や文化などの研究に派遣されて參りました。日本へ來てから色々なものを見ました。生花、お茶、琴など珍らしいものは何でも調べてゐます、生花は模形を造つてロシヤへ送りました。幾種類もの花を造花にして、それをお花の先生に巧く生けて頂いたのです。」

—浪子さんは御自分で生花もお茶もおやりになつてゐるのです。お琴が大變お上手なんですよ。」

浪子さんが日本へ來てからの最も親しい友だちである此家の聰明な夫人が言葉をはさむと浪子さんは快活に、併し狽てゝ否定する。羞耻とは別な不思議に明るいつゝましさを感じる浪子さんの天性がさうなのか、日本の文學を研究するところからそうなつたものか……—。

「今朝は私と二人でお茶をやる筈だつたのですが、お客樣やなにかで……」

お客さんといふのは、やはりロシヤから來た通商官シュピンドレル氏と夫人とであつた。

「日本の女についてどう御感じになりました。」

「さあ……、日本の女の人はいろ〳〵な種類があります。丸まげに

結つたり家庭の仕事ばかりしてゐる古い型の奥さん。やはり家庭に入つてゐるが低い髪に結つて、大變勉強してゐる、たとへばこのきみ子さんのやうな人、それからモガとか云ひますね。こて〳〵化粧して外面だけは大變新らし相にしてゐるが中味の空つぽな人、見たところも新らしく眞面目に働いて活動好きなほんとの新時代の女の人と、四種類あるやうに思ひます：：。モガといふのは大變いやですが日本の髪を結つた娘さんは好きです。美しいですね。」

「男の方から日本の女は如何です？」

とシュピンドレル氏に問を向けると、踊りの上手だといふ夫人と顔を見合せながら、

「日本の着物を着たおとなしい奥さんが一番好きです。丸髷は嫌ひですが：：」



「これは今日の一番肝心のこと、ソビエットの婦人の生活をいろいろ委しく伺ひ度いと思ひます。」

「婦人の生活！ロシヤは廣い國ですから一口には云へません：：私が生れたのはシビレといふ北の方ですが、レーニングラードへ來てから八年になります：：とにかく今のロシヤの婦人は非常に自由です。革命のまへまでは、どこの國でもさうであるやうに、男の人の方がずつと威張つてゐましたが、今では何から何まで全く同じです。むしろ女の方が威張つてゐるところもあります。」

「例へばどんな風に？」と質問した時に、きみ子さんが何やらいたづら相に眼を輝かせて、

「ほら、日躍などもね、浪子さん：：」といふがいなや、浪子さんは快活に聲を上げて笑ひながらそれを押へてしまつて、後はどうしても話さない。

「私は未だ結婚しませんから、家庭生活のことはよく知りませんが、交際などは全く自由です。今は女の人も大抵職業を持つてゐます。家庭の生活は色々で、一軒々々の家に住んでゐる人もあれば、共同住宅のやうな所にゐて、二人共朝出かけて、夕方一緒に歸つて來るといふ生活をしてゐる人もあります。食事も家々で造る人もあれば、夫婦で食堂へ食べに行く人も澤山あつて、レーニングラードには簡單な食堂が澤山出來てゐます。夫婦で働いてゐるのは、經濟的な關係からの人達もありますが、女も仕事を持つて働かなければといふ考へから黨の仕事を手傳

つてゐる人もあつて、みんな働くことを喜んでゐます。工場や託兒所に働いてゐる人も澤山ありますが私の友だちは大抵博物館のやうなところに務めたり、組合の書記をしたりしてゐます。」

「失業者といふものは全くないでせうか。」

「…………」

「仕事を得るにはどんな方法をとればよろしいのですか。」

「それ〳〵の職業によつて組合が出來てゐますから、そこで仕事を與へてゐます。子供は、子守女を雇つておく人もあれば、託兒所へ預けて仕事に行く人もあります。託兒所は全部國營で、たしか無料だと思ひます。」

「先日一日結婚とか云つて、結婚の制度も離婚の制度も非常に簡單なのをいゝ事にして、蜜月だけすごすと、對手の知らないうちに幾度でも離婚するやうなのが多いので、差止め令が出たといふことがありましたが、御存じでいらつしやいますか。」

「そんな事はないでせう。結婚は簡單で自分達が結婚したいと思へば親の許しを受けなくても、屆けさへすればいゝのですが……」

「屆けは役所へ行つて口頭で申出ればいゝといふことですか。」

「口頭だけではないでせう。自分で書いて出さなくてはならないと思ひますが、私は未だ經驗がありませんから、委しいことはわかりません。」

「女性の立場から公平な、ソビエットの制度についての考は……」

「…………」

「例へば、不滿足な點など……」

「…………」

「比較的いゝ方面は知られてゐますが、生活するものゝ眞實の聲として不足な點を明らかにすることは、今後の人類の進歩に大きな必要ではないかと思ふのですが――」

「それは一年々々色々に改良され變つて行きますから…何よりか婦人の生活が大變自由だといふことは云へますけれど……」

「日本では今、コロンタイ女史の戀愛論について、樣々な意見が出て問題になつてゐますが、ロシヤでは如何ですか？性的生活に對する絶對の自由……」

浪子さんはシユピンドレル氏の顏を見て何やら盛んにロシヤ語で話し始めた。

「餘り人々の注目を引いてゐませんの。」

「……」

結局これに就ては何にも聞き出すことが出來なかつた。大して問題視されてゐないらしい。

「女の藝術家はどんな人が活躍してゐますか。」

「小說家では、セフリナ、ベーラインバラ、マリエツク、サギニアン、アンナ・ハマタリなどで、セフリナはシビレの生活を書いた有名な本が出てゐます。本は小說家組合で出版しますが、劇は政府でやることもあれば、俳優協會のやうなところでもやります。女優ではコルチヤビナ、アレキサンドロフスカヤなど有名です……」

話しながらも浪子さんは、かきもちの交ちつたお菓子をしきりにすゝめて下さる……恰度日本の若い主婦がするやうに不馴らしい手付きで……他國人には容易にうかがひ知ることの出來ない微細な人情の方面について、若い浪子女史から何も聞き出すことの出來なかつたのが殘念だつた――。（記者）

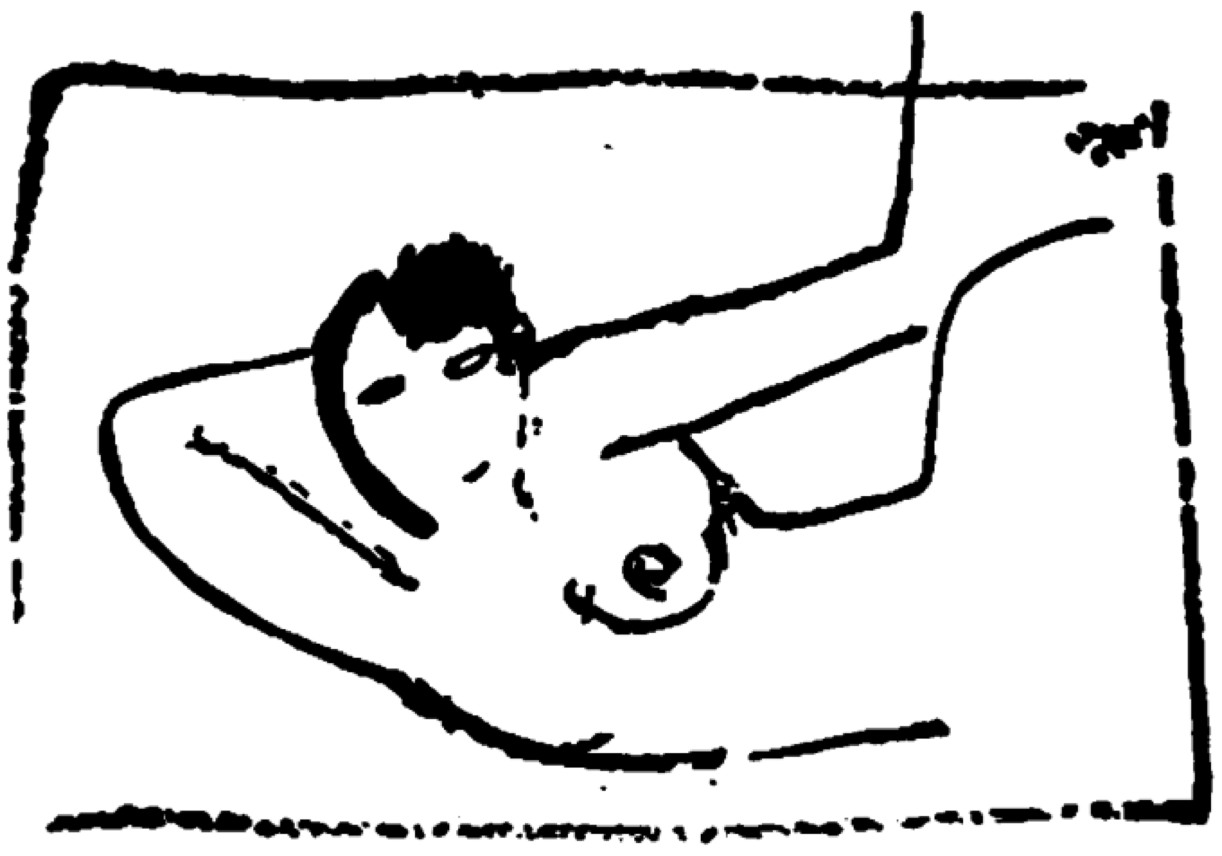
創作欄のこと

創作欄が期せずして新進の方ばかりになりました。四人のうちお二人が令孃でお二人が夫人です。上田博士令孃の戲曲と樺山千代夫人の小說はさきに二三發表されてゐます。生越宮與夫人のと村田千代さんのはまだ生毛のあるもので本誌によつて生れました。勝れた作品とはいへないまでも、懸命の作であるので生したてたいと思ひます。三人は東京在住の方で、村田さんは信州高崎の、山ふところにつゝまれて勉強してゐられます。

所謂戀愛共產婦人（感想その四）

――三角關係の一端より――

生田花世



長谷川春子

――三月十九日午後一時――

どちらのを先きへ讀まうかと考へるまでもなく眼はおのづとあの人のハガキの上にゐた『三月十六日の夕。こゝは山の中腹にあるラジウム溫泉で、遠く海を見晴らす。景色はいいが、やはり大阪的空氣が落着かせない點がある。そのうちしづかなところへ移らうとおもつてゐる。留守はよくたのむ』

裏をかへすと海を遠景にした山の上の庭の松葉が黒く中央の英字を背に記した大きいベンチが一脚白くくつきりと浮いたやうに見え右よりのところに電信柱が一本絲のごとくほそく立つてゐる寫眞。もう一枚は、そこへゆく山みち、自動車でのぼつてゆくにちがひない美しい廣い道路、小さな小舍も立つてゐる

これには

『すべて意想外のことばかり、心機一轉少し早目にかへるかもしれない。それだけに當人以外の人は總て安心していいことばかりだ』

と細字で書かれてゐる。

×

『こんな美しいところへ行つて…』とすぐそのランデブウがおもひやられて來たけれども、今の心の想察はすでに昨日の心の想察のやうな私自身の肉體的な感情の痙攣をひきおこすやうなそんなものとはちがつて、何かから昨日見た劇の一つのシーンを想起するやうな餘裕のある心持。

『二人ともどんなに幸福であつたでせう』

と思ひやられて。

×

それだのにあの人はこんなことを書いてゐるのだ。

『當人以外の人はすべて安心していいことばかりだ』當人はよくはないといふことをいつてゐる。この言葉が、私の心の何かにからみつく。何故、こんなことを書いてくるだらうとにかくこゝで彼女に逢つてこま〴〵の話をした十七日といふ日に。それなのにどうしてうまくゆかないのであらう。あの女との同棲それがそんなにも困難だらうとは？　彼女自ら強烈な情熱だといつて彼にむかつて告げてゐるのにどゞしてあの人との同棲を拒むので

あらうか。どうしてもそんな風にはおもはれないことだし、又どんな困難な事情があらうとも二人はそれを問題にもしないで突きすゝむところに戀愛の權利のあることを知らない二人でもなからうものを。(それを認めてこそかうして私はひとり自分の感情を整理しつゝあるものを) 湧き上るやうな情熱と、かりたてられるやうな衝動とで、にがい否定の呼びかへしを拂ひのけつゝ出て行つたあの人がどうしてかくも早くかういふハガキを書いてよこしたのであらう。とにかく文面に現れてゐるのは、歸つて來たい、歸つてくるといふ心持の上で書かれてゐるのだ。それがはつきり分る。『あるひは自分にはさういふ權利はないかもしれない。出てゆく者の自由を束縛することは出來ないかもしれない。おもて沙汰にしようとも、第三者を入れようとも、どうしようともそれは自由だらう……しかし一人ぢつと待つてくれてるとおもへば、歸つて來るといふ心をこちらにきつと持たす。少くとも僕の心はさういふ風に出來てゐる。戀愛は必ず燃えて了へば冷える。その幻滅がやつてくればどこへ僕は行くだらう。しかし決してたのまない。今の僕にとつてはそんなことはどうでもいいのだ。なるやうになつていいとおもつてゐる。』と立つ時にあの人のいつたことが思ひ出されてくる。

×

それにしても『心機一轉』とは何にむかつてその心が一轉したのであらう。その戀から又他にうつる何の閃きがあの人の心に生れて來たのであらう。こんなにも速く心機一轉する二人の戀に、私の十五年の結婚生活をすつかり臺なしにして了ふとは何といふ苦しいつらい事だらう。この私の不幸よ。

×

またも私は亡弟のいつた言葉を思ひ出す。

『ねえさん……お兄さんの戀人は書物です。ですから、書物がお兄さんの心をとらへてゐる間は、お兄さんは決して戀愛なんかしませんから安心していらつしやい。僕が戀愛なんかにちつとも興味のもてないのも、やはり、書物といふ唯一の戀人があるからですよ』

それはその通りだつた。Sの長い〳〵間の戀人こそは、あのマルゼンを通して海のかなた、英獨からやつてくる美しい表紙をもつた又重厚な革の表紙に飾られたあの書物、そのものであつた。その書物が去年あたりからつまらなさゝうにされて來てからの今年のこの戀愛沙汰である。すると、書籍—そして女性、そんな風にあるいたあの人の心のみちが分る。あの人の戀人、かつての日の書籍には妻君は貧乏にされたし、今の戀人、女性にはかくも純一な感情をさいなまれる。何といつても苦しいのは妻よ。

×

つねに有るものよりも有らぬものを戀ひ、持てるものよりも持たざるものに心ひかれ、現實をいとひ、空想にあこがれてゆくあの人の心よ。しかもその心によつてのみ拓かうとする心よ。草にも水にも心誘はれ、『旅』へのあこがれの、『仕事』への情熱の、『書物』への沒頭の、『女性』への衝動の、つゞきにつゞくその心。しかもさうして外へ外へと行き續けた事によつてあの人は生きたのだ。唯『女性』によつて生かされるあの人の心だけがなぜかくも私のとりかへしがたい痛苦にはなるのだらう。あの人の『旅』も、又その『讀書』もかういふ結果は決してもたなかつたものを。

子供のない私にとつては愛兒、父親のない私にとつては慈父、親友のない私にとつては親友、しかも敎師でさへもあるあの人の心ひ

かれる『女性』の出現をなにゆゑ私はあの旅の時のやうに、書物の時のやうに、心平かに考へようとしないのだらう。何故苦痛と侮辱とを感ぜずには居れないのであらう。かゝる場合世の多くの妻はあきらめる、そして屈從する。それだのに私はとてもそんな事が出來さうもない。(ただ私のみこんな人間なのであらうか)あの女性か、私か、あの女性とともどもにあの人を愛してゆくといふやうなことは到底私には出來さうもないのである。

『歸つていらつしやるならば、きれいにそちらの人と別れて歸つて來て下さいまし。でなければ、今度は私が出て行かうと心がまへしてゐます』

かう考へをまとめたが、ハガキの返事はしないつもり。私の感情など見せたくない。

×

彼女よりの手紙を讀む。あの文字である。毎日、ミス、ロビンなる變名で、Sのところにとゞき、いつも私が、開封なんかしないでSの机の上においたその筆蹟であるし、あのとき毒針のごとく私の心臓を突き刺したあの文字である。『様』といふ字に書き癖があるのでまがひやうはないのだし八年昔からの時々の來書の主をどうして私が見まちがへようぞ

とにかく私からはこの女に何一つわるい事をしてない自信のもとに讀む。『その後お元氣でいらつしやいませうか?此頃は二三日とても冷たうございますわね。あたし、今日□□で亡き弟を思ふといふあなたのお歌拜見いたしましてよ。何か靜かに淚ぐんだ思ひがすらすらと歌になつて流れたやうな氣持ですのね。靜かな悲しみを感じました。私實は今朝新聞を見ましたら廣告の中にあなたのお名前を見ましたのでさつそく小僧に買ひにやりましたの。S様は此頃御勉强? 私みたいな騷ぎやがもうお訪ねしなくなつてお靜におなりなさいまして?私も淋しうございましてよ、だつて、議論したり、いろんなお話しても分る人がないんですものね、時折、ええ、一年に二度程もこれからは伺ひましてよ。今に、秋か初冬頃には出かけますわ。私今度は泊めていたゞかうかしら。御返事伺ひたいわ!ね、泊めて下さる?下さいね……』

×

『泊まりたい』とのこの强い調子の言葉がこちらの胸にぐつと來る。何ともいへぬ壓迫を感じることだ。それにしても何と妙な手紙ではあることぞ。かくもそらぞらしく嘘の書ける女にあなたがなつてゐようとはである。ほんとに、ほんとに變な心持。『S様はこの頃御勉强?』といふ。こんなに問はれたら誰れだつて困るではないか?本人がこゝにゐないで『勉强』だけがこゝにゐるわけもないのだもの。見に來てごらんなさい。S様はゐませんといひたい心持。しかしよく／＼日附を見ると三月十四日夜とある。懷にでもいれ歩いたと見えて隅々に癖がついてゐるのにも氣附く。それの封筒のスタンプはと見ると十八日と何度見てもはつきりしてゐる。十四日——十八日、この間の日數が彼女の何を語る?とにもかくにもこの手紙が私に見せてくれるものは彼女の狼狽の外の何ものでもないのである。十七日にあの美しい山の中の宿で彼と逢つて話してゐる。それなのに十八日に、十四日に出した手紙を投函するとは何といふことであらう! これが文字どほり狼狽といふ事なのである。彼女の心持をそんたくする。つまり慰めてくれたのである。不幸な私を。亡弟の死を。何とやさしいことであらう。しかも要求はひそむのである。Sとのその戀をなほもひそかにつゞけてゆかうとするその努力。それは制しても制し切れないものである

らしい。しかし責任はもちたくない。時々のランデブゥだけで幸福感をもちつゞけたいといふ強いのぞみの上にこの手紙が書かれてゐるといふことがこちらの本能にぴつたり映づてくるのである。慰めたいとおもふ心が彼女自身の戀からも來てゐる。

『けれど、ミス、ロビン』と私は思ふ。『こんな手紙をなぜおよこしになりました。今更何の必要があるんでせう。私を慰めるなんて事が……。』

『あのSはあなたのものでせう、完全に、まつたく完全にあなたの ものぢやないでせうか。生れてはじめてあたしからいふ強烈な熱情に出逢つたとあなたはいつたし、毎日々々のそのローマ字の手紙だつたし……又こちらの人はそちらでゐるつもりで出掛けて行つてゐるのだし……今更お二人の愛に何の疑惑があるんでせう。二人はもう、あらゆる周圍のものをはらひのけてその愛の殿堂をそちらでおきづきになるばかりのはづだのに……。』

『東京へ行つたら泊めてくれとのこの何か力をこめての言葉はどういふわけ？ Sを失つて了つた私が、(名のみの妻　として東京でSの家をいつまでも守つてゐるとおもひのやうね、そして、あなたが愛人として入りこむおつもりね。さうしたいあなたの希望、それはあなたの都合上よからうけれども、私にはとても耐へられはしません。そんな『心の奴隷』の境遇に耐へることの出來る私の性質でもないし、これまでそんな歩いて來かたでこの結婚生活を いとなんで 來たのでは なかつた私。今いかに未練はあらうとも立去つてゆくでせう。三人で亂れるよりも二人と一人とに別れて生活を鎭めたい。そして私こそはもう一人やつてゆくべき時。

二十五歳のあなたには戀愛の幸福あれ。四十一歳なる私には仕事の世界が待つてゐる。私の母の結婚生活も父の死によつて四十一歳で終つて了つてゐるのだもの。

×

出て行つた人に對していよいよ離散の手續きをとるまで、留守の責任を私が遂げる。それは私の人間的責任だし、私自身としてのこれまでの結婚の總決算でもある。さそひ出し引き出したあなたにはこれからの將來の大きい責任がある。あの人に對し、又あなた自身に對して地味な地味な生活の上の務めがありはしないだらうか。とにもかくにもあなたたち二人は結婚したのだ。立派に。私はそれが結婚でないとは思はない。世間的に今當分私が妻と呼ばれてゐようとも、ほんとうのところはもう妻なんかではない。立派に夫などない一人の女である。ひどく骨が折れたけれども感情の始末ももうついて來てゐる。かくかくしたいといふ離去のすぢみち、何をしたいといふ仕事の目的もある。もう苦痛も暫くの間であらう。あなたといふ婦人と結婚してゐる男性を何で私が面倒見るべきであらう。

×

しかしあの人は、この女に逢つてをりながら、どうしてこんなヘマなことをさせるだらう。あの女は『我』のつよい、それだけ聰明のほこりをもつてゐる女、その聰明のほこりが私の眼の前で狼狽してゐる。かくも知られてゐると知るならばこんな手紙をよこしはしなからうものを。もしも私が何にも知らないでゐた者ならば、この手紙はひどくうれしかるべきである。誰れでもこの心持を解するであらう、その身邊に死を見たものは。私はどんなに喜んだらう、この手紙を。彼女は故人とは親しかつたのだ。しかし今は仇なる仲。慰められるといふことは却つて愚弄されることでさへもある。私にとつては。

×

腹を立てるな心よ（私はかく思ふ）あの女と爭ふなんて醜であるものを。知らないまではあんなに面倒を見てゐた此間まで、愛してゐたお前の知人の愛のさまたげをしてはいけない。（私はかく思ふ）

×

あの女性の戀のため、またSの戀のために私が生活を亂され、心を暗くされ、たえず虐げられてゐなければならないものとせよ。私の人としての、女としての生き甲斐はどこにあらう。人なるものの心情そのものが變化しないかぎり、私自身が私であるかぎりこの抗議をすてるわけにゆかない。

男ごころの弱さから起る過失、その迷ひは人間性のもとにゆるせる。然しいい氣になつて夫が他に戀人をもつてゐても平和にくらしてゐられる女がさう多く世の中にあるだらうか。妻に戀人の出來たのを知つて喜べる夫のないやうに、それはあまりにもはつきりした事ではないだらうか。一夫多妻一妻多夫、一夫一婦、この三種の形式の中で、私達のやうな女性のもつとも願はしいものは一夫一婦である。さうでなければ一人生きる事である。

今進んでゐるといふ新しい人々は夫に戀人のあることを、妻に戀人のあることを、昔のやうにはモンダイにしない。人間の心は變るのだからそれがよいはづだといふ。結婚廢止戀愛の共産、さういふこともいはれてゐる。ミス、ロビンなる女が今度上京してから、私は戀愛共産婦人なのよ！　と云つてたことをおもひ出す。（私はほんの冗談だとおもつてゐたのだ）さういふ人達に比して古いといはれようとも、私はいやなことはいやで徹さうとおもふ。他に戀人を持つ人と一緒にくらしてゐたくはない、ましてや、その戀人に一夜の宿をするなどたまらないことである。所謂『戀愛共産』そんなことはもつとも私の性に合はない。性に合はないことをするのはうそであるからいやなことである。

×

それにしてもあんなにも、義理がたかつたあの女が、五年見ない間に『戀愛共産婦人』なんかといつたりして、今の時勢の一部の波に漂つて、何かにかぶれて、したい事を何でもするやうになつたのだと考へると、いふにいへない氣がする。


[illegible]女史

革命後の北平

筌千鳥

永樂十九年正月より民國十七年六月まで五百年間、支那の主都であつた北京は北平と改稱せられ、事實上政府は南京に移されました。

たとへこの政府の統一が半年とは保つまいと言つたところで、その土地が日本の領土でも無いのに、日本人だとてこの改稱を認めない譯にはゆきませんでせう。

であるのに、日本の新聞などがいつまでも北京と書いて居るため、一般日本人の注意を呼び起さず、日本から來る書信の殆んど全部といつても良い位北京と書いて來ます。

それは根本から統一されて居ないかも知れませんが、既に國民政府の支配下となつて、青天白日旗のもとに政治が行はれてゐるのですから、いかに日本の外交の方針が强硬だからとて、在支の日本人までが政府の强硬を眞似て喧嘩腰で居たら、排日の思想をますます高めるだらうと思ひます。

今度の排日はかなり深刻で、智識階級に於てはげしいように感じます。

先日、日本より來平の慶應庭球部の選手とのマッチを中國友誼倶樂部が急にその日になつて拒絶したことなど注意すべきことでせう、尤もこの友誼會倶樂部の主任は外交官のT氏です、蔣介石氏のアットホームに我が公使はじめ公使館員が出席しなかつたといふこともありますが。

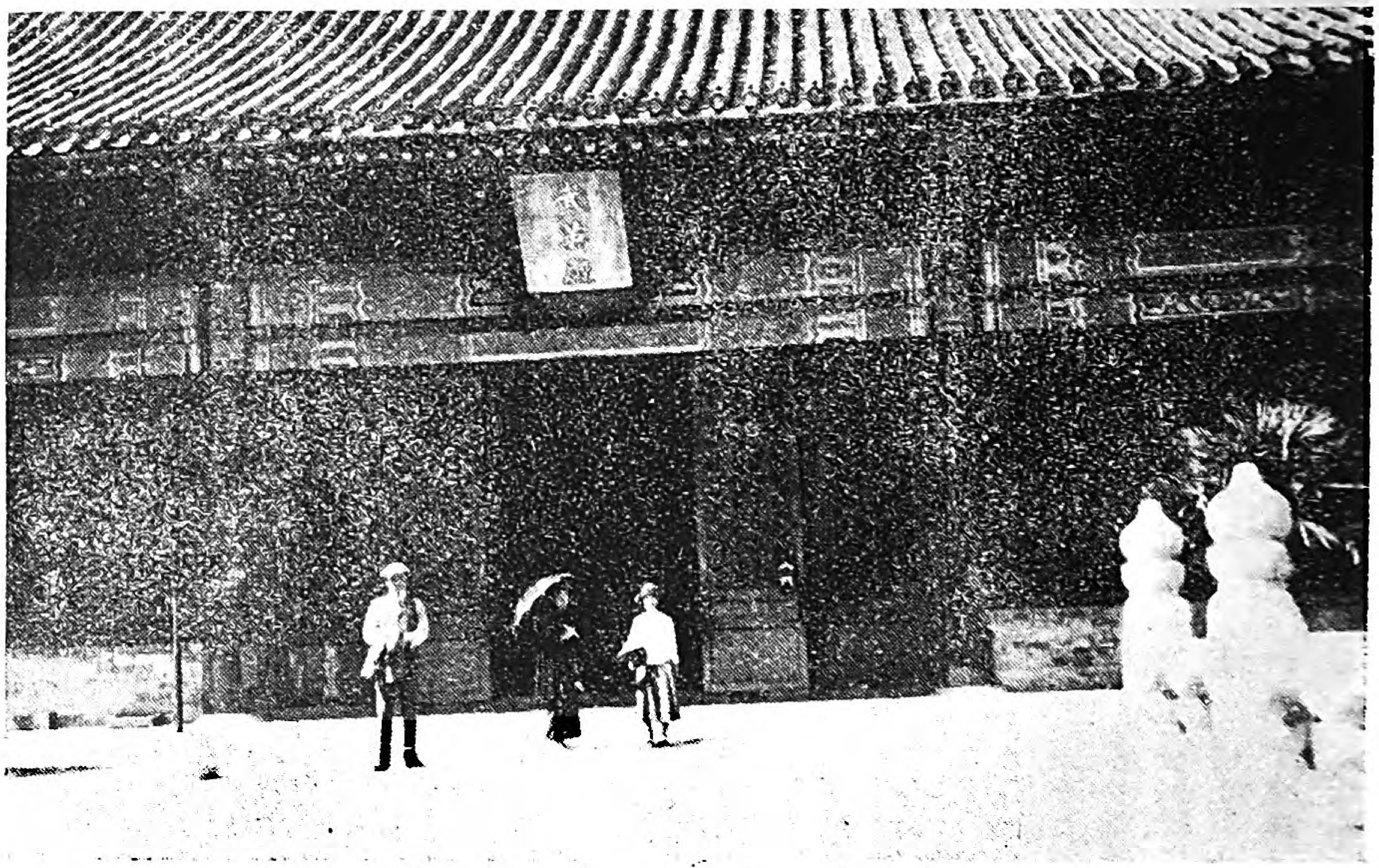
排日の宣傳が一般下流の人たちにはあまり感じないといふのは、彼等は喰べることが第一の問題ですから、職を失ふことが一番恐ろしいことなので、國民政府とならうが、主都が變らうが、痛痒を感じません。

革命完成後三十いくつかの勞働團體は出來ましたが、勞働者が無智ですから、しつかりした團結は出來さうもありません。

學生達は割合に靜です、尤も今休暇で重に歸省中ではありますが、冷靜にそして深刻に將來を期してゐるのです、敎育者たちは小學校の生徒たちにまで、今度何年の後日本への復讐を吹き込んで居ります。

北平の各城門や大街胡同の壁にベタベタ貼り付けたこと貼りつけたこと、まるで日本の田舍のお寺の山門を見るように、色々な紙に完成國民革命、革命未成功同志須努力、遷都孫總理遺囑、打倒帝國主義、實行三民主義、斷行裁兵の文字が雨に晒され、風にはがされてはその上から幾重にも幾重にも貼り付けてある、天安門の大理石の橋の欄干や獅子の臺石には半永久的にペンキで立派な文字で書いてあります。電車にもベタベタ、これには神聖勞働などもありますが、この字も讀めるのか意味も分るのかなんだか、吾關せずといつた顏をしてゐます。

市政はぐんぐん改革せられてゆきます。總



紫禁城内武英殿

ての舊制度は廢せられ、警察廳は公安局、巡査の劒は棒といつたように、殺渕たる中にも市中の空氣は和やかになりつゝあるように感ぜられます。

○三十才以下婦人斷髮令。

○中學生の結婚禁止。

○舊習慣の結婚式及び葬式の禁止。

○男子の馬掛兒着用禁止。

○官吏の中山服着用。

私娼、賭博、阿片飲用、宴會禁止等幾分、從來の淫蕩なる風習は改淸されつゝあります。

婦人運動はまだあまり多くを聞きませんが、女師大學生が男女教育平等を叫んで、全國へ通電したのと、蒙古婦人が蒙古婦女委協會といふのを組織し、舊習の打破、蒙族の發展向上を期する等でせう。

昨年張作霖のために殺された京報社長郡振靑氏の未亡人が新たに社長となつて、京報を復活したのは婦人の仕事として注意すべきでせう。

婦人の職業といふことが認められて來ました。これまで家庭の『アマ』以外は極少數の女醫士、重に日本女醫學校出身者と看護婦位でした。

然し、只今のところ、職業の範圍が狹いのと、教育が低いのとで、さしづめ、看護婦の見習になる人が一番多いようです、この頃日本の同仁醫院で五名採用するところを、百名の應募者がありました、排日の空氣のあるにもかかはらず、いかに家庭より開放されたる婦人の多いか、その一端をうかがふことが出來ます。

遷都以來、重なる人は北平には殆んど居りません、これからはますます淋しくなつて行くのみで、これ以上目ざましい變化はないだらうと思ひます。

馮玉祥夫人は非常な活動家ださうです。この人でも北平へ來たなら、婦人達ももつともつと活動するかも知れません、先ごろ巨頭連が來たころには生憎お產のため來られませんでした。

蔣介石夫人宋美齡女史は革命主將の夫人にはふさはしくない「ハイカラ」なので、一般の評判はあまり良くなかつたように思ひます。

若い人達はぐんぐん目覺めつゝあります、

支那人の顔が日本人に似て來たといひますが元來支那人は體格は良し容貌は立派で、ことに眼が綺麗です。小兒のころは皆伶悧ですが、家庭や、環境のためだんだん退歩して仕舞ふのです。

若い人達の眼は理智に耀やいてゐます、そして動作は活潑で、スタイルの清新なる、とても日本婦人の及ばぬところだと私はいつも思つて居ります。

今後一般に教育が普及され、これ等の人の世界となつたならば、立派な國民になるだらうと思ひます。

將來、日本が提携して行かねばならぬこの若き支那との空氣が日に日に、惡化してゆくことを悲しみます。（八月十二日）



深澤紅子

北海道の旅 2

八木秋子

偶然の出來ごとから、私は留萠線のほろぬかといふ小驛へ下りて、次の列車を待つことになつた。それまでには三時間半の餘裕がある。眼鏡をかけた驛長さんが氣の毒さうにして、驛前のたつた一軒、待合所と書いた店へ連れて行つて下さつた。家の前に五六人ひとだかりがして蓆の中のものを見てゐる。覗くと、それは鋸屑にまみれた小海老とどぜうである。驛長さんはにこ〳〵して、蓆ごと手に掴み「あゝ、これだけあれあ、鷄のやつが喜ぶだらう、どうもありがたう」といつて立上ると、捕つて來た者とおぼしいふたりの子供が、「驛長さん、これそのまゝやるのけ、生ぢやちつとべひどいねえ」と「なあに、煮ねえだつて鷄は喜ぶべよ」驛長さんはのれんの奥をのぞいて呼んだ。――おい、おつかあ――そして顏を出したおかみさんに、私の事をたのんで下さつて、蓆を抱へてすた〳〵歸つて行つた。

線路の片側は森、片がわには家かず三十戸ばかりが道をはさんでまばらにつゞいてゐる。運送屋と、諸國商人御旅宿との二つの看板が眼につく、家のまはりはひろ〴〵とした畑ばかりだ。すゝめられるまゝに臺所に上つて爐端にすはる。お神さんは「お客さん、そんなふうで寒くねえですか」と案じ顏にいふのだ。この人は單衣の上へ綿入の袢天を重ねてゐる。

爐の火をかきおこしながら、いろんな話がつゞいて行く、この部落は五十戸足らずで、鐵道官舍と運送店、宿屋に小學校、そして店が少しばかりで、あとは百姓だといふ、小學校は高等科まであつて、先生は校長まで合せて四人、校長さんは月給八十圓を貰ふから偉い人だ、とぼつ〳〵話すのである。

百姓は現金を持たない、だから買物はみんな帳面で、秋の收穫がすんだ時、まとめて拂ふ、農家の食物は、自作の薯と南瓜が主で、馬鈴薯を何十貫となく山のやうに貯へてお

く、そしてこれを甕茹でにしておき、南瓜と一所にさめてから更に網の上で烙つて食べる、そして御飯のかはりにする家が多いのだといふ。

「わたしどもも北海道へ來てからもう二十五年になりますども、これまでには、話にも何にもならぬ苦勞したごんだですよ」

かういつて語り出した。この夫婦はあちこち北海道を十個所もさすらつて、漂泊の末このほろぬかへ足を止めた時は、懷中には三十錢の持金しかなかつた。ふたりは別々の家に雇はれて骨身の碎けるほど働いた。二年ほどしてふたりの小遣ひを合せて九圓五十錢となつた時、この家を借りて竈を持つ事になり、酒を一升、燒酎を一升、ビール一打、それだけ仕入れて店をはじめた。今では家も自分のものになり、どうやら人間らしいくらしが出來るやうになつた。北海道はくらし良くて、とても內地へ歸る氣はない、といふのである。陽が落ちて、風が寒く薄い着物をとほして、腹の底からの慄えがこみ上げて來る。戶外を何かさわがしく、子供等のこゑがする、出て見ると、七夕祭の夜の事とて、男の子、女の子達が別々に行列をつくつて七八人づゝ赤いほうづき提灯をとぼして家々の軒先にろうそくを乞ふてゐるのであつた。

『ことしや豐年、たなばた祭り……』

女の子たちは流石にやさしく、貰つた小さいろうそくを別け合つて、また隣りへと同じ歌をくり返しながら行くのである。赤い提灯に浮んだ小さい顏、エプロン、七八人の聲がもの悲しいリズムをつくつて、野の夜風に吹かれ、消されて行く……この夜ほど、私はかつて美しい星の光りを見た事がなかつた。

親爺は、四里ばかり先の留萠の海へ夜釣りに出かけるのだといふ。ボロ／＼の詰襟の冬服を着け、冬のオーヴァの年代ものを羽織つて、その上手拭で頬かむりだ。親爺さんは私の膝の上に眠つてゐた小猫を受けとると、いきなり風呂敷の上に座らせて、手早く包んでしまつた。

「なあに、こいつが近所のひよこを食べて、仕樣がねえのです、こん畜生は、これから汽車の窓から棄てられるんですよ、は、は、はは……」と笑ふ、

「もうお客さん、三度も失敗りましたからな、畜生の悲しさに、一度味をおぼえてしまつたでは、もう近所ののけものですよ」居合せた隣りの若者も、當りまへの事のやうに笑つてゐる。風呂敷の中で鳴きたてる猫を抱へた親爺のあとから、暗の中を一足さぐりに驛へゆく、停車場は暗い、待合室と、ホームに一つづつ、洋燈がぼんやりともつてゐるだけだ。暗のホームに立つて、見ると、はるかな畑道を、草の中に見えがくれして、子供たちの赤い提灯がチラ／＼とゆれうごいてゆくのであつた。

石狩沼田の驛に汽車がつくと、わたしの前へ、八歳くらゐの女の子をつれたお婆さんがはいつて來て、腰かけた。お婆さんは髮をきれいに撫でつけ、銘仙の着物、子供はメリンスの涼しい單衣である。私は、何かこの邊のあきない店の隱居かなと思つた。――どこさ行ぐですね……といふ言葉のきつかけから、だん／＼話して見ると、このふたりはやはり農家の人達だつた。

「私ども夫婦は、今から三十年まへ、この土地へ來て開墾をはじめたのです、當時はまだ汽車などはなく、二里ばかり向ふにアイヌの部落があるだけで、人間の顏は一年中に何度しか見られませんでした。ふたりは全くの無一文で奧深くやつて來ると、まづ林をきり開いて丸太で家を立て、熊笹で屋根をふいて住居をつくりました。まつ先きに粟、稗、それ

から馬鈴薯をつくつて、手取り早い食物をつくり、熊のやうに黒くなつて働きました。秋のなかば、ある日の暮れ方うちの方へ歸らうとすると確にある筈の家が見えません、走り、近寄つて見ると、どうした火の不始末からか家はあと方もなく燒け落ちてゐた、その悲しさ、着物は一枚もなし、暫くの間はこもを着て夜露をふせいだ事もありました。

お米といつては、三年ばかりたつてからはアイヌが遠くの川から運んで來る一俵を、お藥のやうに大切にしてたべましたが、私は悲しく心細くて、內地戀しさに二三年は涙の出ない日はありませんでした。男の子を五人までも亡くし、たつた一人の女の子に養子を貰つてそれでも今ではもうわたしも、いつ此處で死んでも安心です」

と語る。老婆は私の手を取つて、つくづくと眺めるやうにした。

「姉やんの手は、何てまあめんこい手どなあ、これ、この指、めんこいなあ」としみじみいふ。

「今はうちの親父に養子、娘と肩男の四人の手で十一町歩の土地を耕すことになつて、昨年あたりは三町歩の水田から百八十俵の米を收獲した。そのうち自家で食ふ五十俵を除いて百三十俵を賣る事が出來た」といふのである。三町歩から百八十俵とすると一反歩六俵あてとなる、內地ですらも五俵平均なのに大變いゝ成績だと思つて聞くと、

「それは土地がまだ新らしいからです、六俵とれるうちは、わたしの所だけだ、それに肥料が要らないから樂で、もし北海道の水田が內地のやうにたくさんの肥料を使ふやうだつたら、とてもくらしてはゆけない」――

一俵九圓五十錢で賣つたとして、百三十俵ならばざつと千二百圓になるなどゝ思ふ、それにしても自家用の五十俵とはずゐぶん多いではないか、

「それは皆よく食べますよ、大人が五人子供六人の家內だが月三俵食べるから、年には少くとも三十六七俵要るのです」

そして娘は十七の歳に養子を迎へて、翌年に子供を生み、ことし二十七で六人の子持だ。十、九つ、八つ、それから六ッに四ッに二ッの子供がある。養子は幸ひにも働き手で、わたし共はいま極樂で



北海道の自然

すーーと。
二十七歳の若さで六人の子供、そして毎日未明から田畑に出て、男のやうに働く農家の女達である。激しい勞働と多産、粗食で滿ちた胃袋——、實際、私は北海道の漁村や田畑のあたりに群れあそぶ、實に大勢の子供達を見た。
北海道は、勤勉な勞働と、零細な貯蓄を積み重ねた何十年の歴史を物語つてゐる。おつとりした餘裕と、あたゝかい人情味が底を流れ通してゐる。小樽や函館あたりには組織された勞働者の群もあり、小樽には舊勞農黨の新黨組織準備會が結成をいそぎつゝあるとの事である。だが通りすがりの旅びとには、さうした空氣は感じられなかつた。



上陸の日

——日記から——

中野てい

文字通り穏やかな太平洋上の數日はこともなく過ぎて、デッキゴルフにピンポンに、團體遊戯にテイパーテイに、やうやく他の人々の顔にも名にも親しみを覺えかけた一行は、十日目の今日もう船にも人にもサヨナラを告げなければならなくなつた。「ホノルヽ、といふ所がもつと遠ければいゝ」と思つたのはおそらく私達ばかりではなかつたらう。でも來る日も來る夜も水と空ばかりの單調な眺めにならされた目に始めて青草につゝまれた陸地の映じた時は、さすがに誰れも嬉しそうだつた。「昨夜の風で入港が少しおくれました、御上陸のかたは一應ダイニングへ」といはれた。
こゝで種痘のあとなどをしらべられる、それからスモーキングルームでパスポートのしらべのある間再會期しがたいお互は、お互に「御きげんよう」をかはしあふ。其うち急に甲板がにぎやかになつたので何事かと問へばホノルヽの各婦人團體の代表者達が一行を出迎へに來て下さつたのだといふ、此地の風習として人を送迎する時には花の首飾をおくることになつて居るとか、一行は色とり〲の花かざりを首にかけられた、わけても井上先生、ガンドレット先生、吉岡先生などは花輪で首をうづめられていらしつた、調査の都合でおそく甲板に出た私は折から出あはせた人の手に殘つて居た日本のくちなしに似た香氣の高い白花をつゞつたものを首にかけられたガールスカウトの歡迎歌につゝまれながら一同甲板で紀念の撮影をする。
稅關では荷物の遲速やら、言語の不通やらでみんないさゝかなやまされた、ミスターフオード氏や此の地の婦人會のかた〲が色々こま〲とお世話をして下さる、しらべは至つて簡單であつた、それから私達はそれ〲出迎へに來て下さつたかた〲の車で自分の宿泊所と定められたマノアの山莊に送られる
街幅はかくべつ廣いとも思はないが道路はことごとくアスファルトかコンクリートかで



汎太平洋婦人會議の人々の一部

完全に出來上つて居る、こゝが昔の宮殿で、こゝがお墓で、こゝが今度の會場で、とドライブして下さつた池田夫人が一々御說明下さつたが私達はどこを眺めても至る處が綠と五彩の花に掩はれたさながらの公園であるのにおどろいた。

山莊でかるい中餐を喫してから一同は今回の汎太平洋婦人會議出席者接待委員長であるイー、エー、アール、ロッス夫人主催のテイパーテイーに出席する、場所はマノアの山莊から八哩ばかり隔つたポールシテーの名家アルバートワアターハウス氏の別莊である、私はドクトル吉岡御母子、北村兼子女史等と同じ自動車であつた、愛知日報通信員である北村女史は終始手帳を懷中して事々物々の名や折々の所感を記入して居られるらしい、さすがにと敬服する。

無果花に似た葉をもつた樹に鈴なりになつて居るのはパパイヤと說明されてから吉岡先生は何でも果實のなつた樹さへあれば「またパパイヤがあるよ」とおつしやる、わが國のれんぎように似た金雨花、火炎のやうな紅炎花などが、さながら孔雀の羽根をひろげたやうな椰子樹の間に點在する、其のほか夾竹桃ねむ、芙蓉花のたぐゐが紅紫とり／＼の色香にそこにもこゝにも咲き亂れて居て常夏の都はいづこを見ても花ならぬはない。此地にはカラスは居ないといふことで其のかはりに鳩よりも少し小さいマイナ鳥といふのがあつちこつちに遊んで居る。

街をはなれると山路になる路のほとりにサボテンの林立して居るのが旅客の目に如何にもものめづらしい、しかもこの地のものは椰子樹でもサボテンでもにく／＼しいほど雄大でないのだから愛嬌がある。

甘蔗畑やチヨコレート色の土、何もかもをものめづらしくながめまはして居るうちに車はいつか眞珠灣を見渡すワアターハウス氏の水樓に來た、水に面した客間には既に多數の白人にまぢつてフイリツピン、支那あたりから先著の代表婦人も見受けられた。

白服に赤ネクタイのハワイヤン、ガールスカウトが冷めたいお茶や色々のお菓子をはこんでくれる、色こそ黑いが皆目がつぶらで可愛らしい、私はこゝで日本からもらつて來た二三の紹介狀をとり出した、それが非常に役

立つて次々の人に紹介していたゞいた、Hui Heung Li といふ支那婦人は女醫で九人の子女の母君であられるとか、ドクトミとかたがきをした名刺を下さつた。フイリッピンから來られた代表は紗のやうなうす色の絹に縫模樣のある彼の國獨特のめづらしい衣裝をまとうて居た。名刺をもらつたがつい紛失した、みな英語がたくみである。

餘興にハワイヤンガールのウクレクイにあはせたフラダンスや、サモワ代表の唄やをどりなどがあつた、最後に斷髮洋裝の藤田たき子女史が謠曲鵜飼の一とくさりを聲ほがらかにうたはれて非常な喝采を拍された、如何にもインターナショナルの感じのするテイパーテイであつた、散會前椰子樹の下で一同紀念の撮影をする、廣重の繪に見るやうな眞珠灣の水色を後に私達は再びマノア山莊に自動車を驅る。山莊は今度會場となるプナホスクールの近くである、プナホ一帶の地は此の地でも一流の住宅地といふことで右も左も美しい庭をめぐらした人家ばかりである。

高莊な建築がはやらないといふことで、いづれも瀟洒な木造の家ばかり、しかもこの邊の家にはほとんど塀といふものがない、庭と道路との境はわづかに靑芝か、子供でも跨げばまたがれるひくい生垣でくぎられて居る。こゝを見た目で麴町あたりの石塀を高くめぐらした家のことなどを思ふと丁度大小をさした昔のいかめしいおさむらいといふやうな感じがする。この地に住みなれた人達がもし高塀の家を目にしたら私達がチョンマゲを發見したやうに笑止に感じるかもしれない。

宿にかへつてから荷物のかたづけなどをして夕食、食後井上先生ガンドレット先生がたから、滯在中の注意すべき事項についてお話をうかゞひ各入浴、床につく。

吉岡先生御母子はお部屋の都合でこゝからほどちかいプレザントンホテルといふのにうつられた。

消燈後市川房枝さんが「一寸來て御覧なさい」といはれたので藤田女史のあとから私もぬきあしで出かけて見た。

ダイヤモンド丘からワイキヽの濱を見渡す窓の上に高く半月がかゝつて夢深いマノアの谷のかなたはるかな街々の燈火ばかりが少女の髪かざりかなにかのやうにチカチカと眼下にまたゝいて居る、何の花の香か馥郁とした芳香が風のまに〳〵せまつて來るのもなつかしい、私の目にはじめて映じたホノルヽは夢想以上に美しい處であつた。

（八月七日、山莊よりプナホに移轉の日）



略歴

松井綈子

明治三十五年、裏九州、延岡町に生る。
大正八年、延岡高女卒業
爾來、今日まで、米を商ひて、飯を喰ふ。
されば、枡賣り、秤り賣り、腕力勞働方面には調法がらるれ共、ペン先きの業にて、藝術にたづさはる事の不得手なり。
雜誌、潮流に、「淸酒一樽」を、文藝市場に「女」、「色のかたち」を、文藝戰線に、「神主の子」を、女人藝術へ、「五月雨」を、甚だ寡作なり。されば、再びわれ文藝家に値ひせず。
プロレタリアの現實を凝視し、只其の生活に住みて、わが書くは喚するのみ。

戀愛異說

伊福部敬子　永嶋暢子
生田花世　八木秋子
林芙美子　北村兼子
長谷川春子　城しづか

伊福部　この前の座談會の時、戀愛といふものゝ定義なしに話が進んで行つたやうでしたね。だから、ある時はプラトニックラブだけであつたり、母性愛が戀愛であつたり、こんがらがつてゐましたでせう。

時雨　ではその戀愛の定義なるものをどうぞ——

伊福部　戀愛の定義は私が持つてゐるわけぢやないんですが——戀愛といふものは、やはり性慾本能から出發して、單なる性慾だけでなく、そこから發達した感情である。で、そこには肉體面もあり精神面もある。精神面ばかりの時、それをプラトニックラヴと稱するものですが、それだけが戀愛のやうに考へられてゐて、肉體面がそれに入ると、夫婦愛といふやうに言はれて來ました。そして一般に精神面だけの戀愛を非常に高いものゝやうに考へられますのは、明治何年からかの女子教育から來た誤謬だと思ひます。

八木　性慾から出發した感情つて？少し漠然としてるやうね。

伊福部　もう少しお話が整理されて行くうちに、説明して行きませう。

八木　私、戀愛は性慾と友情とによつて戀愛と名付けられるものぢやないかと思ふ。

長谷川(春)　私、野人だから理論も何もなくいきなり戀愛するわね。ある時は嫌ひな人でも戀する事がある。

八木　私、戀愛といふものが、あまりに高貴な地位におかれてゐると思ふの。さうした概念は打ち破らねばならない。それは文藝から來た影響でもあるでせうが——今後の社會では戀愛といふ誤つた概念を打ち破りたいと思ひます。

永島　戀愛を高價に取扱つた社會的根據を究めなきやならないわね。今までの社會から見て既成觀念が戀愛を美化して、性慾といふと非常に汚く、戀愛といふと高價に思ふ、戀愛にすら誤つた概念があつたのですね。

八木　私共少女の頃には戀愛といふものを非常に美しいと考へてゐましたわ。

長谷川(春)　戀愛ははじめは憧憬的なものね。闘爭になれば激しくなるけど——。

八木　どういふ處から戀愛は起るかつていふと——。

長谷川(春)　花がさく時に香氣が發せられるやうに

生田——　戀愛といつても個人々々の問題で色々異つて來るでせう。

林　私、ざつくばらんにいふわ、やはり伊福部さんの仰有つたやうに、明治時代の遺物

かも知れないけれど、性慾なんか忘却した、たゞ好き！といふ氣持時代の戀が非常に貴く思はれますね、もうその後戀から戀にうつつて行つては、身も汚れ心も汚れて、戀愛ぢやなくて遊びだつたといふ氣がしますわ。

長谷川(春) 忘却したんぢやなくて性慾の方面はまだ發達しなかつたのでせう。

伊福部 つまりその半ばにして終つたものは、ほんとうに戀しなかつたんぢやない？。

林 ほんとうのものだつたわ。

伊福部 コメツト・タルホが非常にむづかしい言葉を用ひましたね、消滅線下の藝術といふ――つまり一人の男が女を得ようとし、空想し藝術化する、然しそれが實現された時には現實はその人にとつて無價値なものであつた。實行し生活したら價値のなくなるやうな藝術を、すべてタルホ氏が消滅線以下の藝術といふのです。で、あの人は生活しても永遠に光を失はない藝術を創作したいといつてるのです（笑聲）。

長谷川(春) コメツト・タルホは天文學者でありながら永遠に失はぬ光なんていふのは可笑しいわね、

伊福部 私は戀愛も亦肉體面をもふくめた本當の生活に入つて、それと共に消えてしまふやうなのは所謂消滅線以下だと思ふの。

時雨 私は飛入りよ、何て言つても人生は戀愛がなければたゞの旅行ね。

長谷川(春) 戀愛は人生のオアシスでせう。

永島 また一方からいへば苦痛ともいへるのね。

時雨 若き日の夢は宏遠で、高貴なのね、然し實行は近いものを求めるから……。

永島 性慾は、戀愛からピヨコンと浮き出てゐるものぢやないから、唯無意識に、本能的に働いてゐるもので、そこから戀愛がわき出るんでせうね、意識するしないにかゝはらず、横たはつてゐるものなのね。

林 あたしの經驗からいふと、美しいのは、――理想的なのはやはりプラトニツクですね。感情だけで戀した時代に比べて、色々な技巧なんかふくんだ肉體的な關係は、戀愛たあ言へないわ。

伊福部 そりや個々の問題ですよ。然し、やはり戀愛は戀愛でせう。林さんのおつしやるやうな肉體面を持たなかつた戀愛は、本當の戀愛ではなく、過去に對するなつかしみ、所謂心殘りでせう。斯う云ふことがあます。放蕩する人が、澤山色街の女に接して……いやな言葉ですけれども、關係した女は古いのなんかみんな忘れてしまふさうですが、兩方で好きでありながら、關係しなかつた女は、いつまで經つても忘れない。大變惜しくも思へるし、いつまでも好きで、或時はいやに思ひ出したりするさうですが、私それも戀愛の幾部分かではないかと思ひます。肉體面と云つても、あの人の眼が綺麗だ――と思ふそれも肉體面を含んでゐると言はれるでせう。ですからはつきりと、肉體面と、精神面と分ける譯には行かないと思ひます。

生田 戀愛と云ふものと、色事と云ふことゝ二つあるでせう……。

林 私としては戀愛と色事と一緒に考へたくない。高尙な氣持が……（笑聲）

生田 女の人のたちに依つて、色事でなくては男に向いて行かない人もあるでせう。男の人に、倦きてゐる女としては、どうしてもそこへイリウジヨンを持つて行くでせう。戀愛の方は相手の男性を破滅する力を多く持つて居る。

長谷川(春) 異常な肉體だつたら、破滅する力を持つてゐやしませんか？

永島 林さんが、過去に肉體面を持たない戀

愛に敬意を持ち、それが本當の戀愛だと云ふことを仰しやつたそれを伊福部さんが、それは本當の戀愛を經驗しない未練がましいものだと仰しやつたけれども、林さんが現在、本當の戀愛をしていらつしやらないと云ふ、一ッの反證になるかも知れないと思ふ。現在本當の戀愛をしていらつしやつたら、その時のことを、殘り惜しく思つて‥‥

城 今、一生懸命やつていらつしやる所なのね。（笑聲）

生田 今が幸福だから、過去のものは本當のものでなかつたと云ふのが分るのでせう。

林 戀愛の定義のツマに出たのですよ。

北村 私は美しい修辭語を知りませんけれども、自分の足りない所を相手に見出す、その時に足りない‥‥と云ふ言葉は可笑しいけれど、つまり美しい眼が欲しいと思つてゐる時に、たま〳〵さう云ふ風な眼を持つてゐる男性が現はれたとしたら、そこにフトしての戀が起るのぢやないかと思ひます。或は姿とか、又心の現れとか、さう云ふ風なものを自分が求めてゐる時に、相手が幾らかの影を持つてゐると、例へば空間で火花が散るやうに、そこに火花のやうな戀愛が起るのぢやないかしらんと思ひます。

八木 自分の足りないものを相手に求める氣持にピッタリ合つたと云ふやうな、さう云ふ一ッの‥‥變な言葉ですが目的意識でなくて、私の考へでは、戀愛と云ふものは、どうにも斯うにもならない、好きと云ふやうな簡單な言葉では現はせないものだと思ひます。その意味で戀愛は本能的‥‥。

北村 好きと云ふのが、自分に求める所のものに合致したから‥‥。

永島 その人にも依りますし、精神的のものを求める時もあるし、肉體美にあこがれる時もありませうが、戀愛には美と云ふものを求める氣持は十分あると思ひます。エレン、ケイの書いた物に、人々は、例へばその人以上に仕事をしたり、其人以下に仕事する人もあるけれども、戀愛に於てだけは、其人の本當のものだけしか接觸しないと書いてありましたが、本當だと思ひます。

北村 私の好きな男の方は、自分と同じやうな系統を持つ者、顏立ちとか、背の高さなんかも同じやうなのを求めるやうに、男の方達は御自分と同じやうな女をお好きになるやうに思ひますけれども‥‥。

長谷川（春） 丁度私と反對――

林 私も反對ですわ。

長谷川（春） 私は、必ず自分の、さう云ふ空想とか、つまり頭に描いた人と全然反對の人を印象する。

永島 反對ですね。自分が本當に、生一本の事しか考へられない時は、生一本にしか考へられない事を、嫌らなく思ふ氣持が、そこにデカタン的な人でも現はれた時に、非常に引つけられてしまふやうです。自分に滿されない事を相手に求めると云ふ氣持と、向ふにもさう云ふ氣持が有つた時、そこに火花が散つたのが、私戀愛ぢやないかと思ひます。私は一體に、戀愛を單純に考へる方かも知れないけれど‥‥

生田 ファーストインスピレーションで決まるんですね。ですからいろ〳〵な理窟は後で‥‥

長谷川（春） あとでデッチ上るんですね。

生田 私は若い時小學校の教師をしてゐました。その時、同僚にちやんと斯う自分の好みに合つた人が一人決つてゐて、何てことなしに、そこで、仕事をしたり、話をしたりするのに、自分で氣が引つけられる――



右より順しづか、長谷川春子、北村兼子、八木秋子、永島暢子、伊福部敬子、林芙美子、生田花世、長谷川時雨。

そこには理窟も何もなしに、何となく……

長谷川(春) さう云ふ例は、此處に出しては一寸お差し合があるので……まア初めは大嫌ひだと言つてた人が好きになつたと云ふやうな……

永島 嫌やと云ふのが、既に印象された……(衆口騒然)

林 兎に角戀とは瞬間ですね。

永島 例へば最初に合つたその人に對して、好感を持ち得ないことがございます。それがいつの間にか、戀愛に變形してゐると云ふ……

時雨 その人の才能、その人の遣る事、それ等に敬意を持つことが澤山ありますね、それと戀愛とは違ひます。戀愛は無條件なものです。例へば乞食であらうと……おかしなお話ですけれど、價値ない者にでも、戀愛を持てないとは言はれない。立派な位地に居る人だから持つとは限らないでせう。ですから非常に宏遠な問題だと、戀愛を考へるから、あり來りの、手近に現はれるのを戀愛と言はれると、勿體ない氣持がします。一寸とした心の動き……踊りの時の姿を見て、あの人が好きだとか云ふやうな、つまり浮氣をも戀愛に入れるのは一寸困ります。で、久米さんの「靑眉」と云ふ小説を讀んだ時に、キッスをする……それはほんの、洗へば綺麗になるでせう――と云ふことが書いてあつたので、私がビックリして、今はさう云ふ手輕なキスなんてものがあるのか――時勢に疎いのでせうが、非常に驚きました。私なんぞ時代が違うからでせうけれど、手を與へると云ふ時には、既に心も與へると同じやうな氣持なんですが、今ぢやまるで違ひますね。どうぞ今の戀愛を聞かして……

生田 何でせう?プラトニックの方の……今はどうか知りませんが、感情生活なんてものは、豐富にするだけ宜いと云ふ人があります。

城 今時雨さんが手を與へる、それから與へられると云ふことを仰しやいましたが、戀愛つて與へるのでせうか?奪うものなんでせうか?

時雨　私なんて威張つてるから與へると思つてますね。

城　私は奪ふのぢやないかと思ひます。

時雨　奪はうとしてもくれなければ仕方がないでせう。

北村　手を出すにしても、右の手があり左の手がある、そこに求めると云ふ氣持と、求めたいと云ふ氣持の違ひから考へて、奪ふと云ふ氣持になりはしませんか？

時雨　言葉ではさういへるがどつちみち（手を打つて）この音のやうなものではないのですか。

北村　手がなるにしても、右の手がなるのか左の手が鳴るのかどつちがさきに動くか……

林　時雨さんが男の方であつて、向ふの女に手を與へると云ふのも同じことでせう。

永島　有島さんの「愛は惜しみなく奪ふ」の中に、戀愛は人の情と云ふものを主觀的に見て、それで考へたことであつて、戀愛そのものから見たら、與へるも與へないもない——とありますね。

長谷川(春)　先方でくれる場合が一番美しい（笑聲）宜き感情を貰ひ合ふと云ふことは、隨分綺麗だと思ひます。兎も角戀愛と云ふものが、人生に必要と云ふことは、滿座異議ないことですね。

伊福部　必要とか、必要でないとか云ふやうな、個人的なものぢやないと思ひます、人間の力で出來るものぢやありません。

長谷川(春)　あつた方がより宜いでせう。尤も野蠻な人間なんかは、發達した感情になつてゐないらしいですね。殆ど肉體的のことだけで……

城　臺灣の生蕃なんて、迚も鋭いんですつて……。

長谷川(春)　それは唯、女性の貞操と云ふ意味ぢやないかしらん……。

永島　却つて田舍に行つてみて、知識階級の人達より、綺麗な戀愛をしてゐる人達もあります。無智同志が……。

長谷川(春)　倂しよくは知らないけれども、支那の苦力（クーリー）なんて、殆ど女にも全然接しないで、物質と、喰ふと云ふことで一生を過してしまふさうです。激しい勞働ばかりしてゐると、感情が缺除してしまつて、女も知らずに一生終つてしまふ人があるさうです。

永島　餘儀なくさうなつてしまふんでせう。つまり昔の奴隷階級なんぞに、さう云ふのがなかつたかしらん？

長谷川(春)　肉體的の過度の勞働をすると、さう云ふ者には、性慾も何も無くなつてしまふんでせう。全然無いとは言へないでも、無い人もあるんですね。全然副作用なしに濟む藥が世の中に無いやうに、副作用だけ惡いかも知れないけれども、やつばり藥のやうに戀愛は入用（いりやう）なものぢやないかしらん……

八木　入用ですが、私は戀愛は本能だと思つてゐます。

永島　食べものを食べる事が必要だと同じやうに……。

長谷川(春)　精神的糧（かて）の一種ぢやないかと思はれますね。

永島　人間が生活して行く上に、一ツのあるべきものぢやないかしらん……。

長谷川(春)　あるべきものね、だから戀愛生活の少い……しまいとするやうな人ほど、嫉妬が多い。修道院の人とか、……それを拒否しやうとする人ほど、戀愛に就て嫉妬が強いやうですね、女學校の先生とか……

（笑顏）

生田　この間の座談會でも、もう少し具體的に入つて、みんなで言つて來ると宜かつた

と思ひます。

城　あの時、夫婦愛と、戀愛と區別がつかなかつたから、どうぞつけて下さいな。私は同じつもりで、この間しやべつたんですが……。

林　私は違ふと思ひます。夫婦愛と云ふのは廣いし、戀愛も廣いから、どう言つて宜いか——例へば嫌やな、その人を愛してゐないで、一緒になつた男女があるとする。永年暮してゐるうちに、中年位になつて、その夫に對して、お父さんて妻が呼ぶと、夫がお母さんやツて呼ぶ。さう云ふ風に極く自然的に技巧とか、心構へとか云ふものなくして、無條件に信じ合つたのが、夫婦愛つて云ふんぢやないかしら？戀愛つてのは、初期、つまり知り合つて好きだと思ふけれども、やつぱりいろ〱な心構へとか、技巧とか、さう云ふものが要るから。他人と他人の接觸と云ふのか……どつちかと云へば他人に近い方を戀愛と云ふのぢやないか？夫婦愛てのは、何も彼も交り合つて、一ツの圓滿な人格になつたのが、本當の夫婦愛と云ふのぢやない？。

伊福部　少し私異議があります。夫婦愛の中に、戀愛の交つた夫婦があるし、ちつとも戀愛の無い夫婦もあります。戀愛を通らないで夫婦愛に來たのもあるし、戀愛を通つて、夫婦愛に來たものもある。ですから私が思ふのは、夫婦愛と戀愛と云ふものは、全然別のものぢやないと思ふ。

北村　戀愛を通過しない夫婦愛と云ふのは、結局同情とか、義理とか、さう云ふ風のものが幾らか加味されてゐるのぢやない？

生田　夫婦になつて、愛の湧かないやうなのは一緒に居りませんよ。ですから夫婦愛と云ふものも、戀愛の仲間の一ツでせう。そこに義理とか、責任感が多分に含まれてゐるのもある。

林　戀愛には責任感と云ふものは薄いですね。

生田　戀愛は鬪ひであつて、落すか落されるかと云ふのが戀愛です。夫婦間になると落すの、落さないのと云ふことはないでせう。お互に信頼の上に成立たなければならないと思ひます。

永島　戀愛は鬪であるとは、どう云ふ風な意味でせう？。

伊福部　爭鬪ばかりぢやありませんね、それが夫婦愛になつたら、安心して委ねる氣持で別に向ふを征服しやうとか云ふ氣は無くなつてしまひます。

永島　私は、さう云ふことは一寸考へられませんね。

林　夫婦愛と云ふのは、多分に安心があります。

八木　私は夫婦愛は多分の安心があると云つて、落付いた一つの夫婦愛と名づけられる中に、一生を通じて戀愛の過程にあると云ふ、さう云ふ時代になつてゐるのぢやないかと思ひます。

永島　夫婦愛と云ふことは、宜く分りませんが、一ツの相反撥するものでない、一ツの人格としての戀愛が尊いと思ひます。火花を散らしてゐたものが、鎭靜しまして、そこに一ツの習慣とかいろ〱なものが入つて來て、所謂さびが出て來たのであつて、私は、戀愛の時であつても、やつぱりそこに二人寄り集つて、何かなさうと云ふ氣持があるのぢやないかと思ひますが、さうはつきり區別出來るものぢやないと思ひます。今までピカ〱光つてゐた所の戀愛に、さびがかゝつて來たものが、一ツの夫婦の落付きぢやないかと思ひます。

伊福部　それがつまり夫婦愛と云ふものにも、戀愛を通過して來たものと、通過しな

い夫婦愛、戀愛を絶した夫婦愛と云ふものもあります。昔なんか、戀愛なんてものは少しも無くて、見合ひ結婚とか、寫眞結婚をしたやうな人にも、一年、二年、三年と暮してゐるうちに、夫婦愛が湧いて來る例があります。

長谷川(春) 併し見合ひ結婚にも、一種のあこがれのやうな戀愛があるのぢやないかしら? 見合ひに行く娘達の態度を見ると、さう云ふ風がありますね。

生田 男でも女でもさうですけれども、戀愛なんかをすると云ふのは、積極的に生活力のある人で、さうでない人なんかは、戀愛をすると云ふ力を持つてゐない。さう云ふ事が弱い形で……。

長谷川(春) 私、みんなの戀愛のし方を見てゐると、若い時のは憧憬的な、甚だ情操的なものですが、中年になると、非常に沈痛な苦しさを、側でみて見えますね。悲痛な戀愛と云ふ……ゲーテなんかも、自分が年を取つてから、若い者を戀するのに比べて、棄てる時の方が苦しいだらう、若い時は自分に美しさがある、奔放にやつてゐたのが、年を取ると……

生田 年をとつてから。十年以上も一緒に暮してから、兎に角斯う、妙な言葉ですけれど、一心同體と云ふやうになつて居て、そこへ生木を裂かれる、斧をいれられる……それぢや痛まざるを得ないことになるでせう。中年の戀はくるしいわ。

長谷川(春) ほんとうに、殊に苦しいだらうと云ふ感じがしますね。

伊福部 夫婦愛と戀愛との區別はついたんですか?。

八木 私はつけられるものぢやないと思ひますね。

永島 昔の人達は、見合ひさへもしないで結婚した人が隨分あるでせう。それでも夫婦生活をしてゐると、自然そこに愛情が湧いて來ると云ふことは事實ですね。

長谷川(春) 見てゐて動かされるやうな愛情があります。

永島 隣り合つて住んでゐる人達の間にも、そこに隣人としての感情が湧いて來るでせう。殊に夫婦としての生活をすれば、自然愛情が湧いて來るもんだと思ひます。だからさう云ふのがやつぱり、そこに淡い戀愛が湧いて來るのぢやないでせうか……

生田 兎に角夫婦關係の時は、憐れみと、いつくしみが湧いて來るものです。

八木 夫婦愛の中にも、絶えず心の動揺があつたり、隙があつたり、さう云ふやうな動きがあつて、火花を散らす戀愛の新しさが、始終通つて來ると思ひます。

林 その時代が戀愛であつて、卒業して信じ會つたのが夫婦愛と云ふぢやないでせうか?。

八木 信じ合ふと云つても、一生信じ合へますか…?。

永島 今までの生活規準に縛られて、お互にそれに信頼し合ふ氣持で暮せるかも知れませんけれども、動いて來る時に、何時二人の人達が離れるか分らないと思ひます。ですから必ず昔の尉と姥と云ふやうに、さびのつくのは大變だと私は思ひます。

林 いゝい、しよつちう、さう云ふ風に戀愛をして過すなんて、私は疲れて死んでしまひますよ。

永島 だから戀愛は度々出來ない、一遍で結構でせう。

林 でも夫婦は永いものでせう? 結婚すれば……。

長谷川(春) こんな事を聞いては惡いですけれども、生田さんのやうに、結婚生活に入つた方は、他の方に動かされるやうな事が

少いでせうね。人妻つて者は‥‥。

生田　さう單純に言へないわ、その人の性格にも依るし‥‥。

北村　大體に於ては少いでせう。

長谷川(春)　抑へてしまふから‥‥。

永島　その人が好きであれば、他の異性が眼にうつることが少いでせう。

生田　兎に角一緒になつて三年位すれば、不足を感じますから、何等かの方面で補つて行かなければ‥‥。

伊福部　それを補つて行くのが戀愛の道德と云はれるでせう。

永島　いつかこんな事を思つたことがあります。十年の結婚生活の後に、結婚した當時みたいに生々しい夫婦があつたら宜いなと思ひました。

伊福部　そんなに結婚當時が續いたら、退屈でたまらないと思ひます。

八木　私は斯う思ふ。戀愛を、火花を散らす瞬間的なものだと云ふ――さう云ふものから夫婦の關係に入つた場合に、平らかな友愛、淡い友愛、さう云ふ感情が一番何だか自然のやうな氣がします。友愛と云ふやうな風に生きたい氣がする。それが一番好ましい‥‥私は夫婦愛と云ふものを作り出す、概念てものに疑ひを持つて居る。

永島　此間の座談會で貞操に關してのお話があつたやうですが、あれを戀愛と結びつけてお話下さいませんか。

生田　この間は望月さんあたりが大分あたらしい考へでした‥‥此間、貞操は二人なら二人に、皆持つて行く‥‥と面白い事を云うていらしつたけれど、それぢや貞操の開放ぢやないかしら。

長谷川(春)　あれは過去の概念‥‥。

北村　自分の意志に反して結婚させられた。さうして、再婚するでせう、それが本當の戀愛であつたら、それは處女だと云へるでせう?

生田　例へば夫婦がある。非常に惡い狀態で、兩方が見るのも嫌やになつた場合は、其二人は夫婦とは見做せない。さう云ふやうな時に、貞操なんてものはさう堅く言へないでせう。

北村　貞操つてのは、破る時にその價値が分るのね。

城　貞操つて云ふのは、男の方から見た時に言ふのでせうかしら‥‥?。

長谷川(春)　無論さうです。家庭平和論者で‥‥貞操だの姦通なんて言葉は、みんな男が作つたんですよ。

城　私は、自分の爲の貞操だと思ひますわ、男の爲ぢやなくて‥‥。

永島　男の功利的な氣持ちよ、ですから何故この頃に於て、貞操の觀念が薄れて來るかと云へば、女も一人の人間として、男と對等にやつて行かうと云ふ觀念が動いて來てゐるから‥‥。

長谷川(春)　日本みたいに封建制度のひどい、初めつから概念ばかり入れた國ぢや、殆んど本質のやうに頭に沁みこんでしまつてゐる。

永島　處女が大事だ〳〵と言はれてゐて、終には貞操と云ふものを、ちつとも知らない無邪氣さを示してゐる。

長谷川(春)　貞操を蹂躙されて自殺したなんて事が、キリストの初期から中世紀まではあつたやうですが、文藝復興からは殆どそんな事はないやうですね。

北村　今までの日本の父親、母親と云ふものは、從屬的に貞操の行使權を持つて、娘の貞操の保管義務を負はされたに過ぎない‥‥。

永島　女の人が、自分の純潔を自由に行使する前に、一ッ過渡的な現れとして、所謂そ

ダンガール的になるのは、どうも仕方がないと思ひます。

長谷川(春) 過渡期の犠牲で仕方がない、だから自由な戀愛が出來る立場になつたら、愈々賢く自重した態度を持さなければ……。

伊福部 今の時代の貞操とは違つた内容のものを持つて來るやうになりませう。今は私有財産制度で、財産が有ると無いに拘らず、私有財産制度の中に生きてゐる男にとつては、自分の名譽とか、位地とか、財産とかを、眞實の子に與へたい、繼がしたいと云ふのが非常に強くありませう。女に貞操を要求するのも、自分の眞實の子を得たいと云ふのが、永い間の私有財産制度に生きて來たからで……殊に武士の時代にやかましく言はれたのは、武人はたびたび家をあけて、戰場に行かなければならない。だから自分の眞實の、強い子供を殘して置かなければならない――さう云ふ必要から貞操なんて事が、大變やかましく云はれたと思ひます。今は財産制度で、一家の財産は世襲のやうになつてゐます。ですから結婚した女は、その男に愛があつても、無くても、その男を守つてゐなければならないので、愛の有無に依つて、法律上の夫婦でない人に……現在の夫と言はれる人でない人に愛を持つ時に、不貞とか姦通とか言はれるので、若し是が共有財産、共産制度と云ふやうな時になつて、自分の子供を自分が育てなければならないとか、自分の持つてゐる物を自分の子に讓るとか云ふやうなことが、全然無くなつた時には、女は本當に愛する人に貞操を捧げる……それが貞操と言はれる。愛してもゐないのに、他の事情でくつついてるのが、不貞と言はれます。そんな事から、今言はれてゐる貞操は、總て無くなるかも知れないと思ひます。

林 貞操錠なんてのがあつたのは、いつ頃の事でせう?

伊福部 十字軍の時代から、ナポレオンの頃でせう。

長谷川(春)併し外國ぢや、宗教の何は別として、さすがに日本や支那ほど、戀に否定しませんね。

伊福部 日本でも戀愛を否定しやしないでせう。明治から西洋を學んで……。

永島 佛教思想が入つてから壓迫して來た……。

長谷川(春) 戀愛の感情をほかに傾けさしたんでせう。宗教を愛するとか、隣人を愛するとか……ギリシヤ主義の時はいみぢきものは戀愛なり、藝術なり、キリスト教と佛教と云ふものなり――。

伊福部 佛教徒がさう云ふ事を言ひましたね。お釋迦樣の戀愛、愛慾を通じて所謂……。

長谷川(春) 釋迦の頑迷不靈な、狹義な概念ばかりで固める奴等が否定しましたね。

永島 けれども所謂性慾を否定して、子供やなんか生れる事の無かつた時、あれは性慾否定ぢやないでせうか……? お釋迦さまでも姦せずして生れたと云ふぢやないですか、お釋迦さまはさう云ふ點で……。

伊福部 それは違ひます。佛教徒と、佛教とは區別しなければならない。お釋迦さまは、御自分の記錄なんか殘されてゐない。お經つてものは聞いた事を書いたものですから、眞僞は推るべからざるですが、お釋迦さまは非常に奥さんや子供を可愛がつた、もう可愛くつてたまらないと云ふ風に……。

生田 或る時期を過ぎると、中年以上になると、男なんて者に燃燒されなくなる。仕事と云ふものが十分それと同じやうに燃燒に

なります。これからの時代の女の人が目醒めて來て、さう云ふやうな、仕事に依つて燃焼されるやうな、明るい生活が來ると云ふことが、隨分樂しみです。

長谷川(春) 戀愛無しで？

生田 戀愛と云ふものに打込んで行かれるのは、十の物を十三に…

長谷川(春) つまり仕事有つての戀愛…自分の人生の或る一部としての戀愛と云ふ譯ね。

生田 えゝ戀愛至上ぢやなく――

長谷川(春) 自分自身がそれに伴つて、活氣を添へ、光澤を添へ、若やがせる爲に、戀愛は必要だと思ひます。

北村 本當の戀愛をしてゐる時には、仕事が捗どらないのぢやない？

長谷川(春) 戀愛を一つすると、仕事が捗どる。仕事が失敗なり成功なりすると、一戀愛やると云ふ風に、泣いたり喜んだりしてゐると、又新たに人生が來る…戀愛が無くなつて、仕事も無いとなると、人生落寞たるものとなる。

時雨 それこそお茶がおいしい心境になるのぢやない？

生田 私なんか、今度になつて、「女人藝術」からお使ひが來ると、迚も嬉しい。生々して、喜んで出かけるその心持が自分にも不思議に思はれるのですが、つまりそれが私の戀愛なんだつて…「女人藝術」に戀愛をしたんだつて…

八木 私過去を考へて、戀愛つてものは高い、美しいものだと云ふ觀念が泌みこんでゐたから、戀愛と云ふもので、さんざん苦んだことを考へますと、何だか馬鹿々々しいんです。それだけの苦しみを持つて來て、仕事とか、自分が本當に生きる方へつけて來たら宜かつたと思ひます、自分が過去の戀愛に過まられたと云ふ感じから、非常に戀愛を輕蔑したい氣持がします。

伊福部 輕蔑どころか、さう云ふ經驗をしたから、戀愛は高いものだと思へるのではないでせうか？

八木 自分の體驗から、若い人達が、個人的なセンチメンタルの處に止まつてゐると云ふやうな、さう云つたやうな、戀愛と云ふものに半身を捧げて、熱を不當に持ち過ぎて居ると云ふやうな、そんな一つの斯う反抗したい氣持になつてゐるんです。

永島 過去の戀愛に對して、幾分でも感謝するやうな氣持になり得ないの？

八木 感謝するには…(笑聲)戀愛は決して否定しませんけれど、内容が…

長谷川(春) 反動期に入つた譯ね。仕事の方が強くなつて、戀愛の方が薄らいで來た、仕事が相當纏つて來ると、その戀愛の方がもつと貴重になりますよ。きつと…だんだん乏しくなつた懐の如く、戀愛が貴重になる――。

八木 過去の私が考へてゐた戀愛と云ふものは、明るいカラッとした苦しみを伴はない、友愛…さう云ふやうな感じで云ひ現したいやうな氣がしてゐたんですけれど…。

生田 戀愛つて云ふものは、眞劍になればなる程、男ならば我が無くなる、沒我的になります。遊戲的な戀愛でなければ…女の人は戀愛から出發して家庭を作つて行く。年月が經てば經つほど深く…その中に入り込んで行きますが、男は築いて行けば行くほど醒めて行く…と云ふことが言へると思ひます。

●

八木 戀愛に破綻を來していろいろな悲劇があります。女の人が裏切られたとか、捨てられたとかして、非常に惱む。さう云ふ時に考へて見て、男の人は戀愛つてものに對し

て、斯う遊戯的な、お互に責任を持ち合はない氣持でゐるのに、女はいつまでも戀愛に大きな主義をつけて、その中に全身を入れてしまふから、そこに破綻が來た場合に、女があざむかれたとか、いろいろ、女の方に痛みが來ると思ひます。

生田　それが夫婦の中に、子供が有ると、男が逆の場合になることがあります。女は非常に子供と云ふものに引かれるですから、妻君を子供に取られちまつたやうになる――。

伊福部　男にはいろ〳〵な生活があるから……戀愛生活でなしに、經濟生活やいろ〳〵ありますが、女はその男の蔭に居るだけで、家庭生活と云ふものに全身を打込んでゐるから、その生活に破綻が來た時にも、女は打撃が大きいのでせう。

永島　女にも一つの生活があつたらほんとうに宜いと思ひますね。

生田　それは本當にさう思ひます。棄てられた女が一人で强く生きてゆく力がなければ、もつともその破綻はひどいであらうと考へられます。

八木　もう少し戀愛と云ふものが、明るく自由にならなければいけないと思ふ。大きな概念の中に、それを入れて考へるから……

生田　本當の戀愛と云ふものは苦しいけれども、苦しみに伴つて樂しみも感じますね、その人に對して苦しんだと云ふだけ、愛したと云ふことになりますからね。

城　でも他の苦しみに比べて甘い所がありますね。

長谷川（春）　城さんはあんな事ばかり……（笑聲）。

北村　でも生甲斐のある苦しみでせう……。

生田　兎に角朗らかな戀愛と云ふものを、誰でもあこがれてゐます。

八木　自由に……もう少し束縛から離れて、新しい自由な道を見出したいと云ふ……。

生田　自由に新しく私達が生きて行く上に此方に花が咲いてゐる。こちらにも花が咲いてゐる。風が吹いて來て兩方が崩れる――さう云ふやうな狀態は、綺麗なものに見なければならない。さうして仕事と云ふものが、本當にその人にとつて無くてならぬものになれば、あとの物はすつかり下つた物になります。ですから女の人で小說を書いた人なんか、田村俊子さんなんか、さう云ふやうな道を取りましたね。

永島　コロンタイの「戀愛の道」のゲニヤですね、ゲニヤがお母さんの戀人と關係する――それが惡いことか良いとか言へないけれども、少くともお母さまが惱むと云ふことは自然な事、いくらゲニヤがお母さんから何も奪つてゐないと言つても、そこには實感として言へない。言ふ所と實感とは違ひますけれども……。

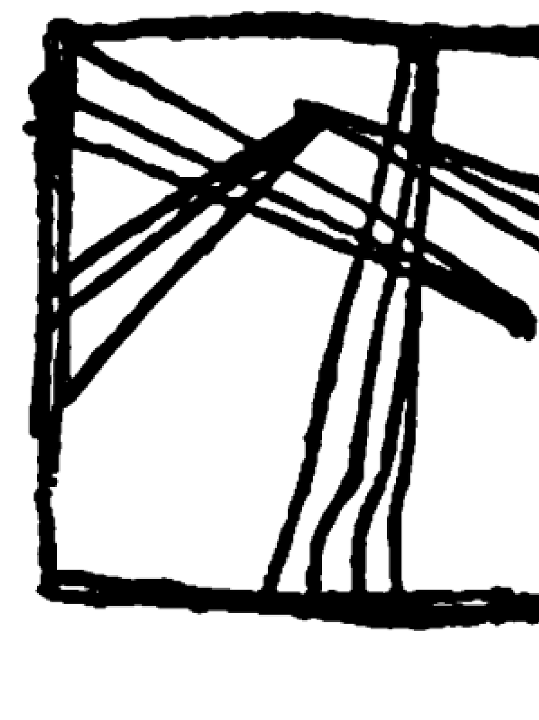
長谷川（春）　嫉妬でも出來るだけさう云ふ感情は知らせまいとする方が、人情ですものね。

生田　性的關係がついてゐてもそんな事、何でもないと云ふことは、日本にもザラにあつた。時に珍らしいと云ふ譯ぢやありません。

――以後、食慾が戀愛を語らせる口をあたへませんでした。時雨

九月八日夕





遠近　シャポー

大原アヤ子

　最近重態と傳へられたマクシム・ゴリキーは、その盛名と世界的インフルエンスとにも拘らず、終生苦しみ又苦しめられる定命の下に在るらしい。彼はそれにとうから僻のはひつた體だつた。レーニンは懇切な手紙を彼に送つて、クリミアの氣候も彼を癒すのには効がないから、是非イタリーに轉地してくれと勸めた位だつた。が勞農露西亞の彼の敵紙は、イタリーで彼がその一室を借りてゐる城全部の寫眞を載せ、彼はレーニンの厚遇に付上つて、かくも宏壯な邸宅を構へ、凡そその所説に反した豪奢な生活をしてゐると宣傳した。

　だから今度の歸國に際しても、彼の胸は重かつたに違ひなかつた。途次ウクライナで彼は先づ一つの問題に打當つた。ウクライナのアカデミーは彼に至上の名譽を與へ、尚彼の全著作をウクライナ語で出版しようと申し出た。が彼はたちどころにその申し出を拒絶せねばならなかつた。理由は彼がウクライナの獨立運動を承認することが出來ない事從つてウクライナ語はソヴイエツト、ロシアの一地方語としか考へられない事——つまりその拒絶にはソヴイエツト政府の意志が働いてゐたのに違ひなかつた。その證據にはソヴイエツト政府は此問題の發表を禁止してゐる。此消息の洩れたのは或ウクライナ紙からだつた。

　だが今度の歸國は彼にとつてかなり光榮あるものには違ひなかつた。モスコーとレニングラードで名譽ある用務を終へると、彼はソヴイエツト政府から贈られたクリミアの邸、——昔ヴオロンツオフ・ダチコフ伯の別莊だつた一城に落ち付く筈だつた。「ヴアガボンド・が遂に城を得た」と巴里でも騷がれてゐるほどである。が飽まで苦しむべく生れた彼は恐らく彼が住む事を潔しとしないその邸宅に入る事なしに倒れてしまふのではあるまいか。

　巴里では六七月を舞踊の季節とされてゐる。今年も六月に入ると直ぐデイアギレフの露

エレン・テリー

M I M I

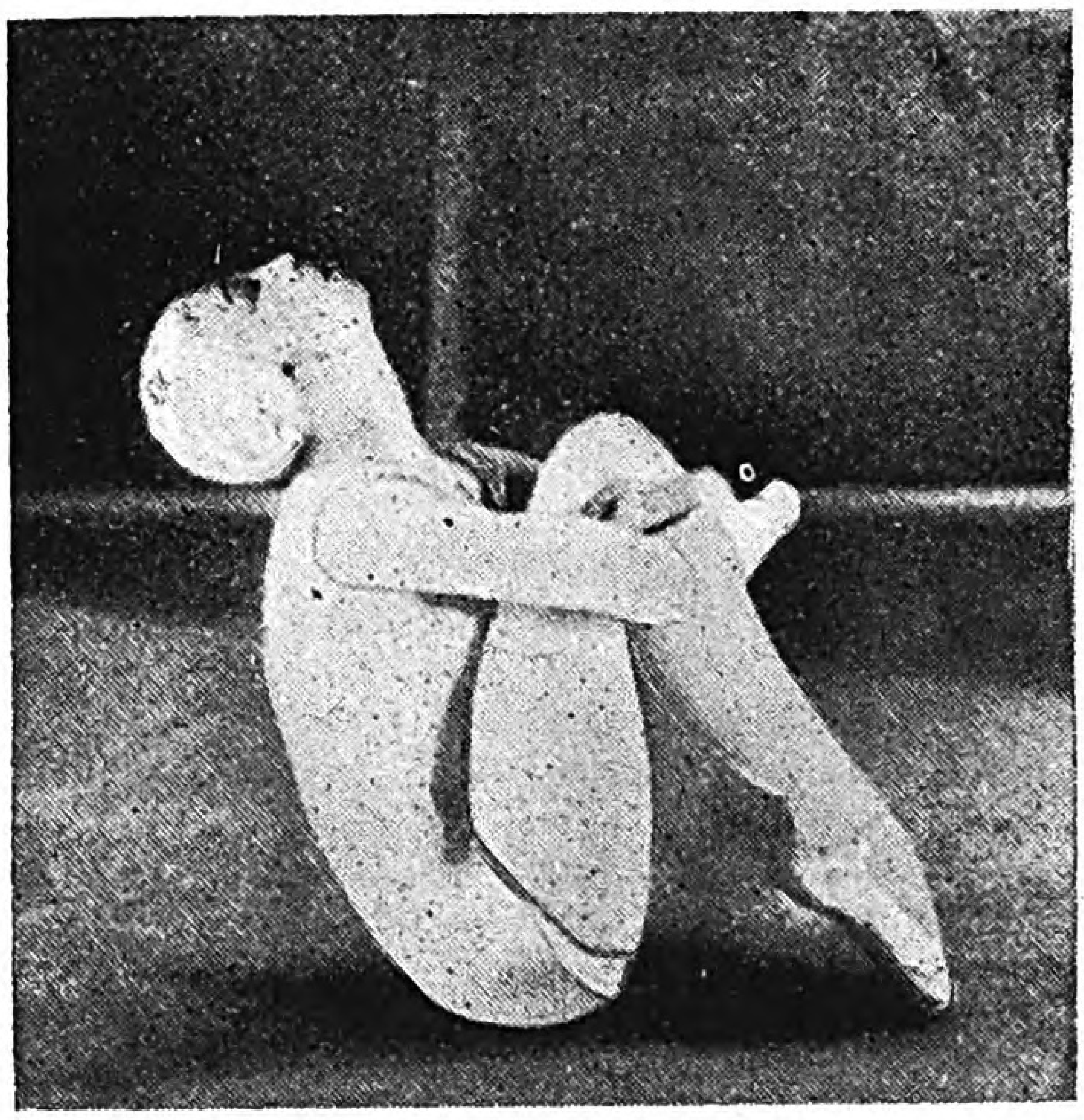
1.

　最近のニユーヨーク『ネーション』誌は、先達死んだエレン・テリーについての、ゼエ・ランケン・トウゼといふ紐育の劇評家の批評を載せてゐる。サラ・ベルナール死し、エレオノラ　デユーゼ逝き、今又エレン・テリーを送る。私共は一度もそれらの輝いた舞臺を見た譯ではないが、しかし私共の前に藝術の最高位を占めて一つの時代を造つて去つて行く同性の人々に對して、私共は遙かに愛敬と惜別の思ひに堪へない。こゝにエレン・テリーに關する批評の大意を紹介して見やうと思ふのも、實はさうした私共の心の現はれに外ならない。

　日本も英國も變りなく、現代資本主義社會に於いては、劇壇は他の何れのところより最も多くコンマーシヤリズムの支配をうけなければならない。こゝの社會では、俳優は藝術的であるよりは、餘りに職業化され無目的にしばりつけられるやうになる。從つて眞にすぐれた俳優は、容易に求めることが出來なくなる。特にエレン・テリーのやうなクラシツクを得意とするものに於いてはさうである。彼女は既に舞臺を退いてゐた。それ故彼女の

西亞舞踊がサラベルナール座に、次いでフェミナ座にはアルヂエンテイナの西班牙舞踊が華ばなしく開演された。二三年前まではあんなにア・ラ・モードだつた瑞典舞踊は、北米でも巡業してゐるのか、今年は姿を見せないやうである。

　デイアギレフの舞踊團はその歴史に加ふるに、よい踊手とよい作曲者とを持つてゐる點で、他のいかなる舞踊團よりも基礎あり、未來あるものといつていいだらう。年々プログラムに新作を加へて行くことだけでも、眞に驚嘆に價する。此季節に發表したものは、ストラヴインスキーの「アポラン」と、ニコラス・ナヴオコヴといふ新進作曲家の「オード」との二である。二つながら隨分斬新な音樂らしく、音樂舞踊共になかなかの好評である。



「オード」中の或ポーズ(ドウブロスカ)

　奇才といふ字ほどストラヴインスキーに嵌つた稱はないだらう。が同じ奇才でも當世佛文壇の奇才ジヤン・コクトーなどとはまるで趣を異にしてゐるコクートが何處までも巴里兒らしい輕佻さや街氣から拔けきれぬところがあるに反し、ストラヴインスキーは何處までも大地に足を踏んばつた藝術家である。それでゐて此二人が固く手を握つてゐる事實を私は面白いと思ふ。私はかつてストラヴインスキーの「結婚」の初演を觀、閉幕後何度も何度も舞臺に呼び出されたストラヴインスキーその人を觀た。私が彼の音樂の中に感じた素朴さは彼其人にそなはつたものだつた。否彼其人が素朴な中に何處か洗練されたテイミドネスを持つてゐるに反し、彼の音樂は眞に息もつかせぬやうな肉迫力、——いひ得べくんば蠻力を持つたものだつた。私は「ノス」の中に勞農露西亞の民衆の聲を聽く氣がした。又、かくして迫つたのであらう革命の力を感じる氣がした。そこに感

死は直接英國劇壇の損失ではないが、しかも英國は彼女の死に最後の偉大女優——ではない迄も、尙ほ近い將來には見ることがないであらうすぐれた女優を、失つたのであるとは云へやう。

　エレン・テリーは、偉大な歴史ものを演ずる恐らくは最後の一人であつたとまで云はれてゐる。彼女の後繼者たりうる者は、恐らくは現はれまいとさへ云はれてゐる。日本で歌舞伎が衰退して傳統的な名俳優の數が少くなりつゝある矢先き、松助の死が特に哀惜されてゐるのと、これは非常によく似た現象である。

2

　エレン・テリーは、舞臺の上で生れて舞臺の上で育つたと云つてもよい。彼女の兩親は餘り有名ではなかつたが、相當に知られてゐた職業的な俳優であつた。彼女はやう〳〵歩き始める位な年頃になると、すぐ舞臺に立たされた。彼女は始めは、種々なグロテスクな型の狂亂劇の中の子役をした。そしてその才能を認められ、彼女自身も始めて舞臺の經驗を得た。

　彼女が八歳の時、その頃最も才能があり又最も學識があつた舞臺監督の一人であるチヤールス・ケーンから、彼女は子役をしてくれ

ぜられるのは神經よりは寧ろ筋肉の活躍だつた。私は音樂に現れた佛露の相違をそこに見る氣がした。同じ畑の奇才で、コクトーの片腕だつたといつてもよいエリツク、サテイの音樂の如きは、唯神經を操るものとしか私には感ぜられなかつた。ストラヴインスキーが露西亞舞踊と切つても切れぬ關係にある所以も、彼が筋肉の音樂を書く點にありはしまいかと思ふ。

リヒアルト・シトラウスは此程書き上げた「埃及のヘレーン」といふ歌劇を、五萬弗、即ち百二十五萬法餘で、ヴイエナの書肆アドルフ・フアルストナーに渡した。蓋し作曲料のレコードであらう。今までのレコードはパガニニの六十萬法だらうといふことである。

音樂及び劇の愛好者は巴里にシヤンゼリゼー座のある事を忘れる事が出來ないだらう。その劇場が七月一日からギヤンナ・ウアルスカ夫人の所有並に監督するところとなつた。此劇場は長い間、奇行を以て聞えたジヤツク、エベルトーの手にあつたが 確か一九二四年頃瑞典舞踊の監督ラルフ・ド・マーレに讓り渡された。それと共に同所から發行されてゐた「テアートル・エ・コメデイア・イリユストレ」も廢刊されてしまつた。私は此雜誌を編輯してゐた劇作家のルネ・ブリユエーズとはかなり近しい間柄だつた。でモスコー美術座や瑞典舞踊が此處にかかつた時などには、毎晩のやうに只で見物させて貰ふ事が出來た。のみならず劇場の内部に立ち入つた面白い話もいろいろきかせて貰ふことが出來た。

エベルトーの經營當時シヤンゼリゼーの内部に蔓延してゐたのは、佛蘭西人にいはせると、獨逸流の變態性慾だつた。つまり彼等は、フエーア・セツクスを愛すべきものとは思はないのだつた。瑞典舞踊のジヤン・ボーランがシヤンゼリゼーから打つて出てあんなにかつがれたのも、ボーランが女でなかつたからだといつた人もある。エベルトーは又ヴアレンチノが巴里に遊んだ時歡待の限りを盡した一人ださうだつた。彼は又巴里に女の流行雜誌ばかり腐るほどあるのに憤慨して、彼の愛する男性の爲に一時「メシユー」といふ流行雜誌を發刊したほどだつた。尤も芝居關係者の變態は巴里では一般の事といつていいさうでサラ・ベルナールは男と共に女も、——女優の新顔が見えると一度は手をつけないでは氣がすまなかつたらしかつた。ド・マツクスの如きは男でも女でもない、——或は男及び

との申出をうけた。そして彼女はケーンと共に、『冬物語』の中では少年マミリアスに、『眞夏の夜の夢』の中では妖精に、『ジヨン王』の中ではアーサアに、『マクベス』の中ではフリーンスに扮して、持ち前の美しさや明るさや聰明さで非常に評判をとつた。その後や丶暫時は滑稽劇や喜劇で少年の役をしたり、お伽芝居で踊つたりした。

一八六二年に、彼女は僅かに十六歳で、皇女劇場でケーンと一緒にデスデモナを演じて深大な感動と迄は行かなかつたが、しかし非凡な手腕と魅力とを示した。それから三年後には彼女はトム・テイラーの『深淵波立たず』の中のミルドメイ夫人に扮して、一般的な好評を博した。その役で、彼女は彼女特有の最も魅力的な力を充分に示すことが出來た。しかも又その時が、ヘンリイ・アーピングと共演した最初であつたのである。

有名な畫家のヂ・エフ・ワツトスが——彼は彼女よりはかなり年長だつた——彼女と知合ひ、心を引かれて結婚を申込んだのは、丁度またその頃のことであつた。

二人の結婚は、幸福ではなかつた。彼女は若くて元氣で、その上氣儘で自由で折り合はなかつた。間もなく面倒が起つてこの二人は極く僅かの結婚生活の後別れてしまつた。別れると直ぐに、彼女は又もとの舞臺に立つた

「アポラン」舞踊中のドウブロスカ



女と共に、或種の動物を愛したといふことだつた。

かうしたシャンゼリゼーの中で、ブリュエーズは一人ひたすらに女性のみを愛した。從つて彼は常に目に見えぬ迫害に取りかこまれて居なければならなかつた。而もエベルトーはブリユーズを無二の話相手とした。次の挿話はブリュエーズが親しく見且語つてくれたところのものである。

その時ブリュエーズは歸りの電車賃もない貧しさだつた。尤も彼の貧しさはその時ばかりではなかつた。彼は持前の女性崇拜から、持參金のない娘をめとり、忽ち六人の子供を得た。なほその上にも彼はコンセルヴアトアール出の或若い女優を熱烈に愛してゐた。それで彼が月月エベルトーから受ける報酬は千法そこそこだつたのだから、たまに自作が上演されるにしても、小遣として彼の手に殘るもののあらう筈はなかつた。エベルトーは、電車賃もない彼の懐を承知しぬいてゐた。いや、だからこそエベルトーはブリュエーズを散歩に誘つたのだつた。二人は先づルナパークへ行つた。そこで僅かの入揚料を拂ふ爲、エベルトーは千法の紙幣を出してみせた。次に二人は或キャフェに行つた。エベルトーは珈琲二杯分のビルの上に、又新たな千法の紙幣を乘せた。次のキャフェ、次の次のキャフェでも、――つまりエベルトーは一文無のブリュエーズに、五六千法の持金を見せてやりたかつたのだつた。又た或時エベルトーはオペラ座の招待日にブリュエーズを伴れて行つた。二人が遲れて入つて行くと、ちやうど第一幕の終つたところで、滿場の紳士淑女はいつせいに席を立つて戸口の方へ顔を向けた。するとエベルトーは舞臺の上の人がするやうに手を擧げ、氣取つた抑揚でいつて曰、「いや諸君、どうかそのまま、そのまま。」

しかし彼女は二十一歳になる前に、チャールス・ケリイといふ俳優と結婚した。そして六年間邊鄙な田舍で生活して、後でゴールドンとエイルサ・クレエイグといふ名で知られた二人の子供を生んだ。そしてさうした彼女を時々舞臺に誘ひ出してゐたのは、彼女の昔からの讃美者チャールス・リードであつた。

バンクロフトと彼女が共演するやうになつた時には、彼女はもう殆んど完全な手腕をもつてゐた。そして彼女は『ベニスの商人』のポーシヤをやつた。彼女の人氣は劇壇の最高位に置かれた。次ぎに劇壇に現はれた最も手腕ある監督の一人であるジョーン・ヘーアの監督の下に、彼女はウイルスの脚色した『ウエークフイールドの牧師』の中のオリイビアに扮し、急に現代の喜劇役者として最も人氣ある女優となつた。

3.

ゼエ・ランケン・トウゼは、彼女の眞價を次のやうに述べてゐる。

彼女の一般的な人氣は、彼女の眞に役者としての才能によるよりも、彼女のある愛嬌から生れたものであつた。彼女が偉大な藝術家であつたことには疑ふところはないが、創造的乃至は演出的な力をどれほど持つてゐたかといふ點から見れば、彼女は偉大な女優であ



吉田[illegible]子

院展、二科観後感想

長谷川春子

院展についてまづ感じる不滿は、若き人達に特異な質を持つ人、特異とまで行かなくともせめて新進氣鋭位でさへもいゝ、が見當らないことである。これは院展の將來についても淋しいことだとおもふ。なるほど第一、二室あたりには多分初入選の人々であらう、少しは生新なまごころの籠つた工手間を措しげもなく費した佳作！が二つ三つはあるようだ、然し作者の名前を印象される程特色をはつきり現してゐるものはひとつもない。そして一二回入選すると忽ち所謂院展風なスタイル丈になつて、古徑氏あたりの眞面目さを似せて、然もそれとは似もつかぬ精進なき平凡な心境でかげの薄い愚作ばかり出して困らせる。古參の出品者と同人の中にこういふのが澤山ある。

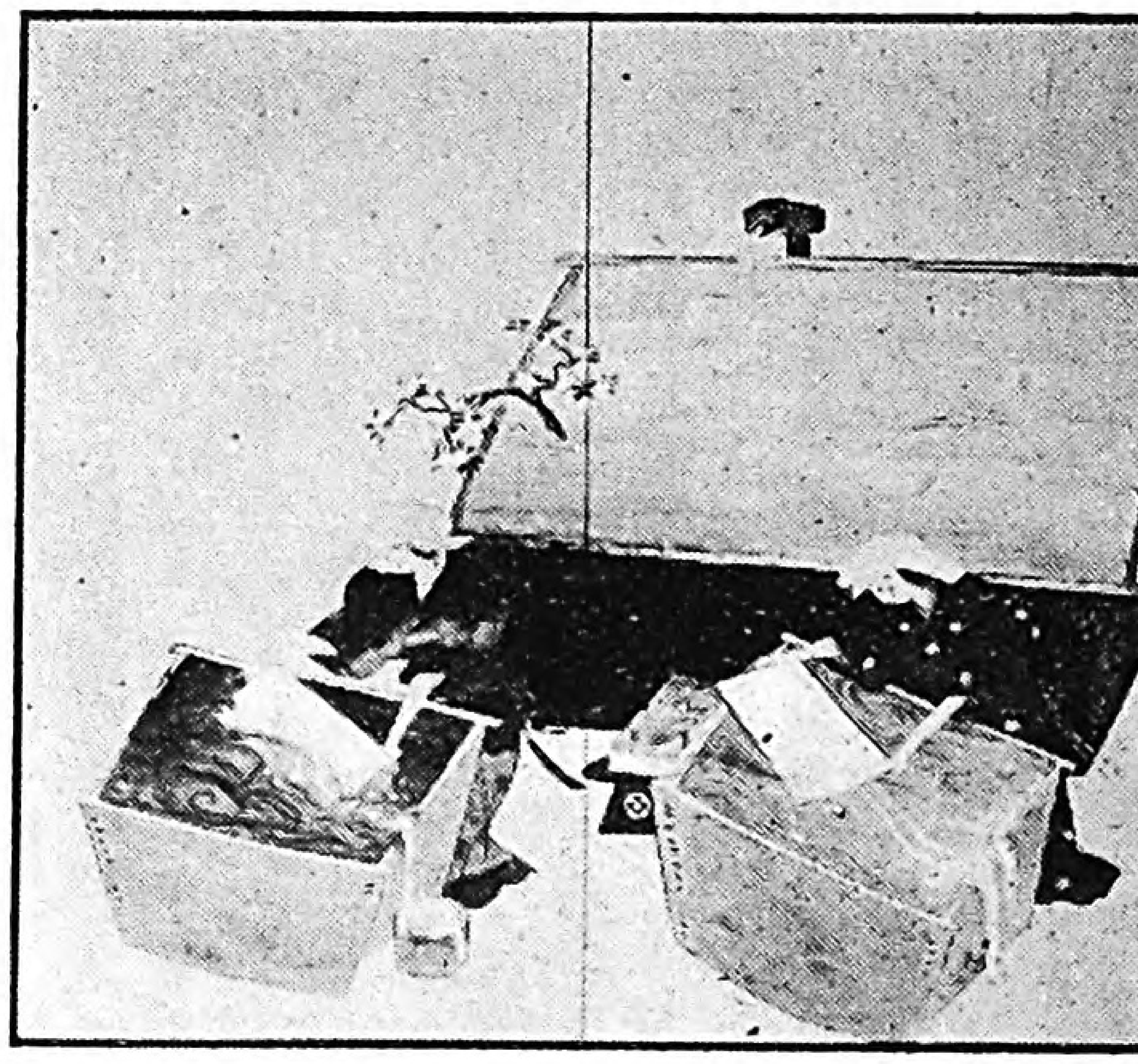
大觀氏とか古徑氏とかキツイ、エライ先輩が居ると氣の小さな連中は手も足も出せなくなるのかしら。その大觀氏達は皆其時代の先輩の風下にばかり從つて居ないで、今からおもへば隨分可笑しいものを、可笑しからうと何であらうと大膽に見て試みて自ら道を切り拓いた人なのに。若き人々よ、なぜ先輩に叱られまい笑はれまいとする樣な畫を描くのかどんな試みでも自信があればやつて見よ、無法こそ若い人のみもつ强みなのだ。永年の功を積んだ先輩に仕上げのうまさはまかせておいて、眼と、頭を他へ轉じたら如何ですか繰りかへす樣だが質と頭腦について將來を期待する樣な人が見當らない。

それと反對に院をより凡化する方法は雜草の如く盛んである、ちよつと氣がついた丈でも今度の作品について云へば一二室丈でも富取風堂、荒井寛方、へんなダンテ！ださうだ—を描いた人（去年のダンテはもつとひどかつた）等等等澤山見あたる。然し、もう木村武山氏とまで行くと愛嬌があつて、この好々爺に對して怒る氣も出ない、この途方もなく大きな雷樣の畫は展覽會よりも、兩乞ひの御寺で、一錢づゝ取つて案內人が帳を竹の棒で

つたとは云へない。深遠な人間的感動の高さと深さとは、彼女の手に觸れることの出來なかつたものであり、又彼女の心が理解することの出來ないものであつた。が、優美、無邪氣、滑稽、派手、靜かな哀調、やさしさ、媚情、揶揄、その他凡ゆる種類の女性的な技巧これが彼女の藝術を生かしてゐた。從つて彼女の悲劇的な語調は力のないもので、『ロメオとジユリエツト』に於いても、マクベス夫人に於いてもそれが見られた。彼女のジユリエツトは若々しい情熱と處女らしさとで人の魂を奪ふほどであつたが、悲劇的な場面になると失敗だつた。彼女のマクベス夫人も同樣でラブリイな魅惑的な女には出來上つたが、底力のないものであつた。言葉をかへて云へば彼女は樣式に於いては美しく立派であつたがどの役に於いても自分をかくし切ることが出來ないで、彼女自身に特有な性格を餘りに出し過ぎてゐたのである。しかしそれにも拘らず彼女の持つ特有の魅力は、さうした缺點を押しかくしてしまつてゐたほど、偉大なものであつた。

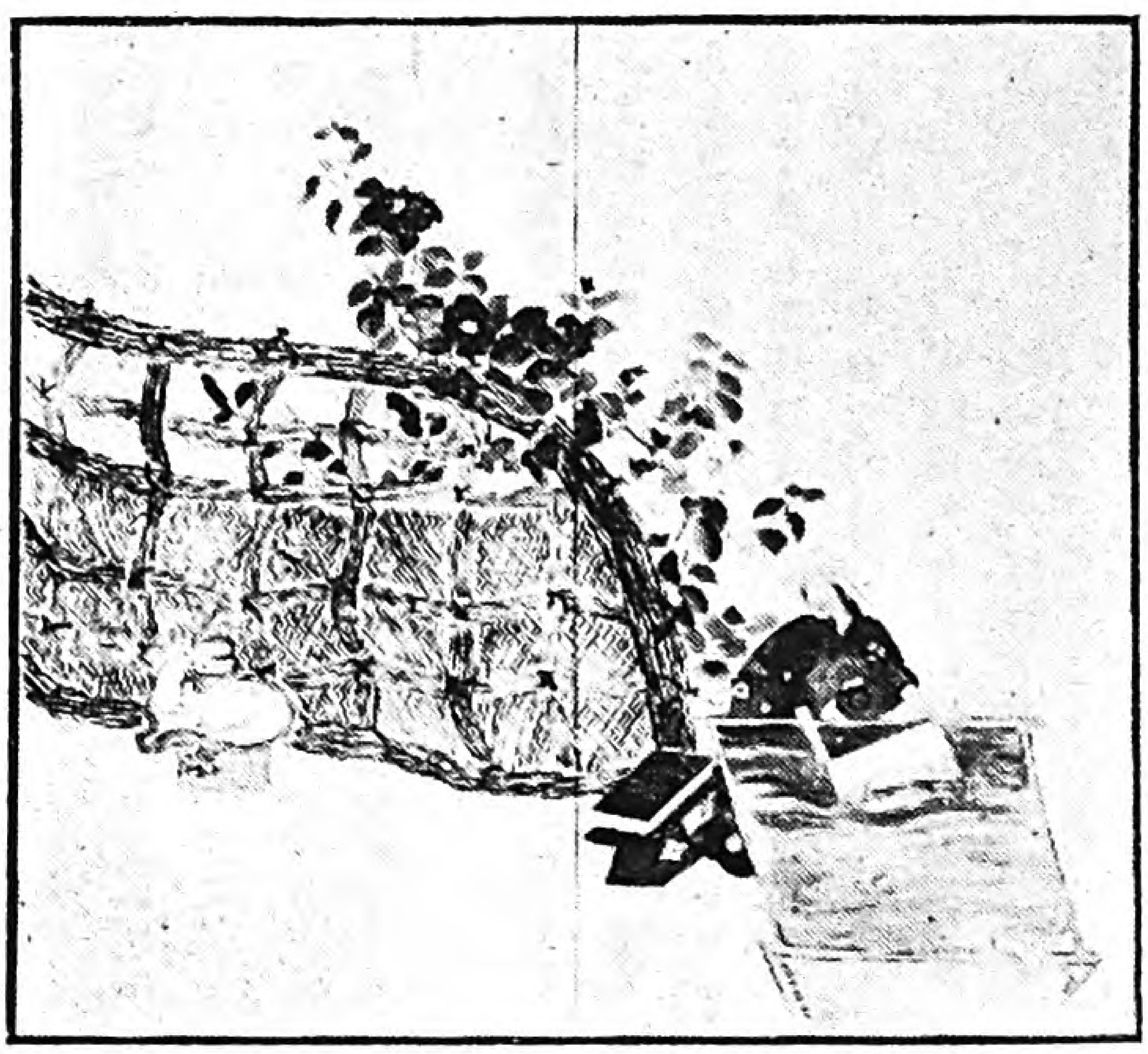
エレンも死んだ。好いものは亡びて行き、俗惡な下等なものが榮える時世だ。彼女達のやうな偉大な藝術家が榮えるやうな時世が來る迄には、人類は政治的に經濟的に一つの大きな飛躍をしなくてはならないだらう。

富田溪仙氏畫　紙漉き



酒井三良氏（水邊二題）、とう〳〵此人は持つて居たいゝ質を自ら院展の水刷毛で洗ひ落して了ふ積りらしい。無論いつまでも、鄕土の童謠は都會にあつて年を經るにつけ何等か變化してゆくのは當り前だが、でも、その童の詩の內に隱れて居た特異ないゝ質があつたやうに思へたが、仲間の若い人々より描きたい事が自ら頭に湧く種の人の様におもへたのに――嗚呼！である。

速水御舟氏にもこの言葉はやゝ同じだ。畫中の御魚は成程圓味もあつて下手ではない



かゝげて御開帳するとよささうだ。勇敢な時代ばなれである。ずつと巧いが其口に下村觀山氏がある。本を讀まず時勢を知らず（多分さうだらうと思ひます）といふ事は呑氣なものだ――私はふと年寄りの懷石の料理人がまけない氣を出してへんな甘い黃味酢を作つてマヨネーズ紛ひのサラダを食べさせた事があるのを思ひ出した。白粉をつけたモナリザの似顏の女と觀山風な老人が印度風の服裝で集つてゐる、で題は魚藍觀音である。

小サロン

時雨女史あの古風な七三のお頭から、每月女人藝術に關した妙案續出。ある人曰く「時雨さんは實に頭腦明晢ね。あんな人早く婦人參政權を獲得して大臣にするといゝ。」それを聞いて某「ホホウ、時雨さんが大臣になつたらさぞ女人藝術の賣行きのいゝ土地に鐵道を敷くだらうね。」もう一人「さう〳〵。その土地の御繁盆をはかつて、時節柄二業組合を許可したり：：おつと時雨さんは女でしたね」

（ＡＢＣ）

×

近眼らしいゴシップ氏にもの申す。あたしの頭中味が古く上皮が新らしいのです、よく見てください。七三なんて古風なのではないこれは「く」の字、クョ〳〵しやんなといふシンボル。面倒くさいから右から左へもつていつて、一捻りしてもとの右へお返しした鼠のシッポです、以上。――サョウナラ！　おつと、も一ッ言はして貰ひます、大臣なんて鐵道同様古くさい夢はあいにく持ちあはせません。新夢想兵衛女史は飛行機無賃輸送をゆめみ、懸に上下の差別なきごとくならなければいけないと思つてゐます、失禮！

×

くの字畵なんてあれはくやしんぼの言ふこ

が、院の器用な先輩達はそつくりでもつと巧く描いて見せて居る、そして先輩が描いて見せなかつた蛙になるとこれは又馬鹿にまづい。

さて小林古徑氏（鶴と七面鳥）であるが――私はかつてこの作者の小品で氣品の非常に高い、いゝ鶴の畫を見て感じた事がある――頂の丹の色のよさは今でも眼に浮ぶ位に――で期待したのだが成程とか流石だとか云ふ形容詞丈のものであつた。頭のいゝ確りした澄んだ？心境の所有者のこと故、繪の具はまつたく冴えて居る、――が、樂しく嬉しくもつと晴々した時の冴え方はもつと懐しく愉快だが――これは理智丈の冴えだ。實に畫面を自ら限なく點檢するから、隅から隅まで「成程」である。や、あやしげな事はちつとも描き込まない氣の弱い若い連中は顏が上らない譯である。私は此作者が時々これと反對に不得手な所をも出し乍ら描きたさに描いたとおもはれる抒情詩的な構圖を懐しくおもふ。とこ
ろで七面鳥のおしりの邊りを空中かそれとも地上か黑く暈されたのは何の爲めか？成程あそこは黑い事は畫面として確によささうだ、でも暈と質を書き現した七面鳥に對して何の暗示もないモヤ〳〵の無意味な暈しのかたちは此の作者丈に私は不滿におもふ、もつと必然的な工夫がなかつたものかしら。

それとよき對照をするのが富田溪仙氏の（紙漉）である、最初ひよつとこれは不出來かとおもつた。處が觀て居る中に樂しさが增す、此作者は畫面の巧拙出來不出來なぞはあまり考慮しないらしい。面白く感じたもの描きたかつたものは描く、だから觀者にその樂しさ面白しさが傳はつて來る。あの一見萎びた樣な小兎の可愛らしさよ、初めは黑ずんで墨そのまゝの色が氣になつて見えた椿の氣禀のある美しさ、女の――殊に中央の女の顏のよさ――私はこういふ畫がすきだ、こういふ態度の作者を好む。さうしてさういふ心が觀者をしてアラを探させない。どんな奇異な描方でも自分自身のものならその畫中では嘘や不思議ではない。

近藤浩一路氏の畫はいつでも見てゐる瞬間は題材にも手法にも頭のよさと中々面白さと隨分巧みなのに感心するが、其の次の瞬間、何處となく名付け難ない厭味のやうなものが殘る。小川芋錢氏のは一見もつと奇異な風變りなやうでそれが少しもない。で折々芋錢氏獨自の素朴ないゝ風景を出される、今度のはよくないが。さて題で驚かされるのが二つある、一つは眞道黎明氏の（吼天、鷲鷲、顧步、疎翎、啄苔、舞風――六鶴圖）――讀者よとです。美しい人のくの字に座つたかたちはいゝものだが、頭全體がくの字にヒンマガラレては困りものだ。あれは屹度ねぢパンから思ひついたのでせう、ゴシツプ氏をやつゝけたつて、さういふ白分も近眼なのです。（行司）

×

暫らくぶりで逢つた人、「喜多村綠郞に、瘦せましたね」といふと「瘦せたつて？……？……？……この間明治座でお化けを演つたら、フキカヘになつてくれる門弟が、一寸も厚さのある當物を肩やお腹にあてゝるので、それはなんだいといふと、かうしなければ似ませんで――それがお化の女ですよ」

×

鏡花先生、煙草入れの筒をスポンとさせてどうもその、けしからぬことでと仰しやる。洲崎で夕立ちにでもをお逢ひになつたのかと思ふと、さうではない「女人藝術」初號ゴシツプで「夜這ひの常習犯」の説明半ばで止めたから、あれではさも常習犯であるやうになる。其上もひとつけしからぬことには、週刊朝日のゴシツプ「番町異名」にブラキン狸のあだ名をあげてゐるが、聯想するといかにもシタノビをしてゐない男のやうになる。まして、番町の夜は門口の椽臺でとなると、いよ〳〵怪しからぬ話だと――で、此處に先生の濡衣を干します。ブラキンとは將碁の一手で

何と驚くでせう。そしてこの驚くべき變化を現はした主題に對して、鶴六羽は同じ色同じ調子、どこもちつとも感情に變化はない、只下をむいたり首を縮めたり伸ばしたり形がかへてあるだけで。それからもひとつ川端龍子氏の神變大菩薩、川端氏は賢い處世人として展覧會で人目をうばふコツをよく呑み込んだ才人だと思つてゐたが買ひかぶつて居たのかしらん、木村武山氏では笑つて濟むが氏丈にすこし困るとおもふ。一人で院の元氣を鼓舞する氣でもハメが外れすぎた感がある。これと彫塑室の青柳先生の首とは、不必要に無法にものを大きくした一對だ。女流濤上遊龜氏は隨分手すぢのいゝ人らしい。先生安田氏をうけて筆技も色の感覺も中々鋭くうまい、一番劣つてゐるのが題材だとおもふ。心境の方をより精進されたらずゐ分いゝ女流作家であらう。

彫塑はほとんど見なかつた、いつも期待して見る大好きな藝術家石井鶴三氏のものも大して好けなかつた。

紙數が半分以上もうなくなつたので二科に就ては少ししか書けない。院展から此所へ來ると氣持が明るくなる、一般出品人は特に出品製作としてカタクならずに出來た畫の內から出來のいいのを持つて來るから、惡くない作品が集る。大作なきかはりに素人黑人の別なく年々新出品製作者は無限に新しく產出されるから年頃の娘があとからあとからある樣にいつも淸新だ。創立十五年の動脈硬化は此會丈は一番感じられない——會員會友自身の事は別として——其點此會のマネージの仕方は賢い。

安井曾太郎氏を私は隨分尊敬する方であるが今年も亦あまり大した事はない。小品(桃)の實に氏らしくもなく實の質を感じないで毛絲の質を感じてしまつたがその畫面には何かおちついた快きもの美しきもの、——色調?——があつた。(菊)は野暮な美しい官女を思はせる然し貴女である。ふと氣になつたのは氏を初め他の中年の人々、山下新太郎氏等がヒドク派手な色を無理に用はれる事だ。落ちつくのがより自然な年配を若返らうとするようなそぐはぬ華かさのやうに私には思はれたが——。小出楢重氏が日本、フランスの大家連と並んだ室の中で自分の個性をピリリとちよつときかせて居る、がさて此の作者の畫はセルロイドの玩具を傍へ飾つてもさして不調和でなささうな調子だ。マティスの小品はそれに似て流石だ。二科の會員にこういふ人が安井氏の外に一人あつたらさぞよからう。

す。先生は此一手よりほか御存じなくしかも喜多村緑郞直傳の惡ヲッな守勢法、金があつちこつち變通自在、直木三十五、里見弴、水上瀧太郎、久保田万太郎の諸氏枕をならべて討死の好手である。但しその一手より外知らずとの事。秋も露茂き夜となりぬれば、もはや門口の緣臺もおやめ、源氏香の釣燈籠に灯がはひつて、友禪ちりめん二枚重ねの座ぶとん、一酌してトロリとなつた御氣分、この取消しによつて麗かなことゝ知るべし。

×

泉先生、お子樣がないから、おとう樣ともいへないから、おくさまなんておよびになるでせう、數へて下さいましなと城さんがいふなるほど「戀愛永久」をひとりで力說する人のきゝたさうなことだ。

×

「こちの人?」と誰かゞ聞く。まさか!と毛斷氏が否定、「兄さん」さと聞くとAさんいゝわ〳〵と悅びきはまつて泣く。此夏、湯河原にて中戸川氏あてられの場、蓋摘みの一節お互に襟にさしたりさゝれたりの先生御夫婦艷福のむしかへし話、大いに議題となり、何故「戀愛座談會」に夫婦戀愛のモハンとして提出しなかつたかとの物議厥然S子「つい忘れましてすみません」と詫る。

×

餘のフランスの作家達は皆つまらない　畫商の賣品のやうなものばかりである。ヴラマンクなぞ出來が惡くて、御弟子の故佐伯氏に劣る。

才人中川紀元氏もこれではあまりに漫畫だ。さうかといつて漫畫でない肖像の方は又あまり普の畫だ。津田青楓氏も常に惡さうで、よささうで、アクがありさうで、なささうで支那料理の脂のやうなものを人の胸に殘すかと思へば、ふと、折々いゝ仙人向きの菜果が出て來るので、つい作品を見る氣になる。――惡脂の方であつた。殊に(金地院蓮池)なぞは――片多氏だと日本の花をもすこし解す。他の多くの人々に就いていちいち書く事は出來ないが木下義謙氏の作品がなかつたやうだ、此人のは見落さないのだが。

それから意外に思つたのは東郷青兒氏だ。去年久し振りで豹變した作品を見てちよつと心を引かれたが今年はよりレフアインされた感情構圖である、日本に在つては作ることの出來ぬ畫面である。曾つて展覽會場の最後の壁に西瓜の切つたのを並べたような未來派の荒唐無稽の畫面で人を驚かした人が、この今度の(ノスタルジヤ)(靑いエシャルプ)其他總べての作品に院展の安田氏と一脈相通じる女性的とも云へる程線、色形にデリカな感覺家だとは考へも出來なかつた。祝福すべき豹變だ。大變興味を持つて全部見た。先達ピッカソの少々ヒステリックで憂欝な人物顔よりもピッシエールよりも――日本に居て知る限りの作品では――東郷氏の方がより好もしい。只豹變した現在の手法――何々イズムの手法でなくいゝと思つたら度々豹變されたい。構成派、新古典派スユールレアリズム等々產出されるが、初めの折こそ淸新と好奇性の面白味を感じるが飽きる、實に飽かれる、キワモノの樣に――そして反動としてより顧みられぬ、例へば手近に並ぶザツキン、其他がよき例である、私はザツキンは中々一時好きであつた。結局表現の方法は自分自身で作り上げなくてはなるまいと思ふ、さすれば古風な樣でも淸新味あり、必然で新奇でも忽ち陳腐になる、出來たらば人の眞似をせぬことだ。

女流は今年は大變成績がいゝ、若き人々の中にもすぢのいゝ人が見受けられる、其内深澤紅子氏と佐伯米子氏はすでに獨自の物になつてこられた、女性だといふことは一見わかつてそして畫面が中々いゝ。今迄の女流はよき意味の女性獨特の美しさを出す所まで　る人は稀であつた。深澤氏はローランサンを佐伯氏はヴラマンクやじき人の影響をすでに通過されたように思ふ。

戀愛永久性と、夫婦愛について違い〳〵北支那からモウレツに城さんに味方して來たものがある。此號所載「革命後の北平　の笙さんからである。來書に古い〳〵お腰折れがついてゐる。

一生をさゝげつくして悔もなき尊き愛を戀とこそいふ。

お笑草にとあるが、全く少々お笑ひもふしたい。欣舞雀躍の城さん、まづもつておめでたう！

×

吉屋信子さんの渡佛送別會の相談の夜の集りに、どうした拍子の瓢簟か、餘興はみんなでやらうといふことになる。下稽古に立上つた諸嬢、諸女史の扮裝、求めずしての漫畫踊り、木曾生れの八木さんが音頭とりで、「木曾のナ、おんたけさんは……ヨイヨイヨイ」よいゝゝいよいのやうな手振りも交つて笑ひ破發・御近所ではピストルの音よりも驚かされたに違ひない。まして、二階に踊る影を見たらば目を廻したかも知れない、當の吉屋さんはじめ腕は肩から出してゐる洋裝、アンヨはもとより二本ニヨツキリ、眼鏡をかけたのまでが手拭頬かむり。ムベなるかな此女群一隊、オープンの自動車で歸つたら、あんまり元氣なので巡査さんに咎められたさうだ。

文藝筐鑑（四）

生田花世

『新涼入郊墟。燈火稍可親。』私もまたスタンドの灯に親しむ。眞白で房々としてゐる蘭の花が仄見えまだびろうどのやうな新しい芭蕉の葉のうすやみに見える椽側に涼しい夜風が吹きこんで來る。時々香のするのは夜の自動車が、上のすゞかけの並木のある町を疾走してゐるのだ。

『ローザ、ルクセンブルグの手紙』をよみ終へて私の心は生き生きした燃え立ちを感ぜしめられてゐる「マルキストとしての明徹な理論と鋭い批評」の持主なる彼女、「ドイツ社會主義の精神生活に最も著しい影響を與へた」彼女、カール・リープクネヒトの友たるローザ・ルクセンブルグはとほい彼方の闇の世界を疾驅した火の自動車のやうだ。

「ローザ・ルクセンブルグの四十八年の生涯は嵐の如く過ぎ去つた」とこの書は述べてゐるが、まつたくその横死にいたるまでの志士的生涯は想像以上壯烈なものだつたにちがひない。（この書はその大略を傳へてゐる）

今日本のマルキスト中の女性各氏が、そのめざさうとする新戰鬪は、ほゞこのローザ・ルクセンブルグの燃燒的生涯のそれに近いものであらうと察しられるが（模倣とはいひたくない）それは血の外の何ものでもなく、死の外の何ものでもなく、しかも血と、死とをもつてあがなふものはつまりは詩だ。

偉大なる女詩人ローザ・ルクセンブルグはその血で詩を書いた女性だ。かういふ詩はもつとも最高の詩であるといへる。「智の熱情は彼女の聲を進撃喇叭の音にまで高めた」とあるが、詩といふものがさういふものであらうとは、容易に解釋さるゝところである。生命の詩を、正しい愛の詩をその全身全靈で時代の上に書いたところにローザ・ルクセンブルグのかぎりなき魅力がある。

何といふ良い性格であらう。明るくて太陽がすきで、又紫色の夕ぐれがすきで、色彩にも音響にもにほひにも人なみすぐれて敏感で小鳥がすきで、自分が小鳥であるやうな氣がしたりする。ゲエテの『アナクレオンの墓』をくちづさむ彼女、死にさうになつてるひよどし蟬をいつくしむ彼女ライラックの花に彼女はこの世の美しさを見かぶと蟲が蟻に困つてるのにどんなにか同情してどこででも見させられる殘虐相を痛感する。

何といふ純潔な心であらう。この純潔性こそは、彼女をしてマルキストとしてのよき努力にみちびき、慈雨のごとくにその愛はすべてのものをうるほしたのだ。そして純潔はもつとも強烈に彼女を革命女性とはしたのだ。純潔な人ほど反抗せずにはゐられないものがこの全世界にみなぎつてゐるからである。

「私の性質には一般に、凡ての耽溺的なことや、ねぢけた事が合はないので」これが彼女の本然的なもので、こゝから彼女の全活動がはじまつてゐる。何しろ頭腦は天才的に冴えてたし、努力勤勉の婦人だつたし、情操は高貴だつたし何事にも果敢斷行の婦人だつたし

正直で、單純で、素朴であつたこのローザ・ルクセンブルグは、その努力に、その勇氣に、その人間的情操の高貴に私たちの心をつよくひきつける。マルキストならざるものといへども、この書からはげしい快い感動をこめての良き暗示を多分にうけるものが多いとおもふ。

　私たちはつねにつねに自分の不勉強をはづかしいとおもつてゐる勇氣の乏しいのをはぢてゐる。もつと素朴になりたい、もつとやさしくなりたいとおもつてゐる。ローザ・ルクセンブルグの書きのこした次の言葉に敎へられてゆきたいとおもふ。

「私はあなたの知つての通り、運命の凡ての轉換を、必要な快活な平氣さで受け容れます。私はもうこゝでの生活によくなれました」

（獄中より）

「しかし、忍耐と勇氣です。私達はまだ生き、そして偉大なことを經驗するでせう」（獄中より）

（ローザ・ルクセンブルグの手紙）

—井口孝親譯—一圓。神田區駿河臺西紅梅町。同人社書店。

『ゴオリキイ重態』かういふことが各新聞紙によつて最近傳へられてゐる。イタリーにスキスに流浪の年月をくらしてゐたのが歸京した。かうしたゴオリキイに對してはサヴエート政府がどんな待遇を與へてゐるだらう。この無産階級文學の先驅者ともいふべき大作家に對してはさぞかし十分の敬愛が捧げられてゐるのだらうといふ氣がする。西天はるかに秋の陽の夕雲にもゆるがごとき想察のもとにゴオリキイの言葉を偉人への敬愛及び自分の勉強のためにクロポトキンの『ロシア文學講話』よりひいてこゝに記す『人生の意義は自己滿足ではありません。とにかく人間はそれよりは上等なものです人生の意義はある目的に向つて邁往する美と力の中にあるのです。存在のあらゆる瞬間が、そのより高い目的をもつてゐなければならぬ筈です』『憤怒、憎惡、廉恥、嫌惡、そして最後には苦るしい絶望——かういふものは、あなた方が地上のあらゆるものを破壊するに使ふ挺なんです』『おゝ、燃ゆるやうな感情と、力强い總てを抱擁する心を持つた堅實な愛情の深い人物がほしい。この恥づべき沈默の息づまるやうな空氣の中に、彼の豫言者的の言葉は警鐘のやうにひゞくだらう。そして生きながら死せるに等しい卑屈な魂は恐らくは戰慄するにちがひない。（讀者より）

　マキシイム・ゴオリキイの『三人』『二十六人と一人の女』其他。新しがりの人々には、或はそれよりもシンクレアをといはれて了ひさうだが、しかし、何としてもゴオルキイはふかく讀まるべきであらうと思ふ。ゴオリキイのもつてゐる重厚な素朴な作風は、邦譯によつてしても十分うかゞふことが出來るのだから。

『私は、ゴオリキイに恩があります。といふわけは、私たちの貧しい時、私たちの生活は、このゴオリキイの『マルヴ』の邦譯によつて幾月か支へられたのです。『マルヴ』の譯者の傳へてくれる一章一節を小さい机で筆記しつゝ、私はあの笑ふ海の岬角に立つマルヴの黑いきれいな姿をどんなにあざやかに思ひ描いたでせう』

　不幸にも、私は、まだ『どん底』の芝居を見てゐない。今度どこかで上演されたらぜひ見たいとおもふ。役者が少し位まづくても劇そのものは生きて、魅力を與へるのは何としても人そのものゝ力でせうとある方が云つてゐた。

『眞實とはどんなものだ！　何處にあるんだ？　眞實はこゝにある仕事がない……力がない！　それが眞實といふ奴だ！　行く處が……行く處がねえ！　のたれ死をしなけりやならねえ！　これが眞實といふ奴なんだ！　畜生奴！　そんな眞實なんてものが俺にとつて何になるんだ？』（どんぞこより）



晩春騒夜

No bird soars joo high
If he soars with bis own wings.
William Blake

上田文子

時　現代

處　東京

人　讓
香代子
光子
靜子

貧しげな貸家建ての二階。正面廊下の向ふ二三本の庭木の梢越しに遠く夜の町の灯をみる。(但し幕の開いた時には障子が閉まつてゐて後景は見えない。)廊下の左手奥に梯子。部屋は二間からなる。左手は八疊位、右手はそれより狹い。廣い方はアトリヱを兼ねた妹の部屋、日本畫用の畫枠、畫紙、繪具皿の類が雜然と片よせられてゐる中に、稍、高い臺が置かれ、咲きすぎた藤と山吹が大型の花瓶に挿されてゐる。それが貧しげなこの部屋の空氣に調和しないなまめかしい色彩を散らしてゐる。その背後は古い小瓶風で大切さうに圍はれてゐる。その花を畫いたらしい七八分通り出來上つた絹本の畫枠が間近に立てかけてある。

この部屋には電燈はついてゐない。隣室の鈍い電燈の光が、開け放されてゐる襖から入つて來て、ものゝ姿が朧げに見分けられる

次の間は兄の病室で、床の敷いてある外には殆ど何の裝飾も家具もない。

なまあたゝかい南風が、狂氣じみて吹き荒れる晩春の夜、九時過。

幕の開いた時、讓は床の中にゐる。

稍、長き間、不安な風の音のみ。

讓。急に喘息病みらしい咳を初める。咳きし乍ら、腹ばひになつて、枕もとの藥鑵から水を注がうとする、水が無いので、舌うちして、手を拍つ。間。返事がない。軈て、藥鑵をさげて立上がる。顏色の惡いひよろ〳〵した中年の男である。廊下を出て、梯子の降口までゆく。

讓　(しわがれた老人の樣な聲で)江見さん、江見さん。

　階下で若い女の聲がこれに答へる。

讓　すみませんが水を下さいな、この藥鑵に――えゝ、ないんですよ。

靜子　(梯子のなかば迄上つて來たらしく)およびになればいゝのに、――出ていらしつちや駄目だわ。又、ひどくなりますよ。

讓　(淋しく笑ふ)なあに、

靜子　今もつて行きますわ。床へ入つてらつしやいましよ。(降りてゆく)

讓　（貧乏ゆすりしながら歸つて來て、鳥渡妹の部屋をのぞく、不精らしく懐手したまゝつゝたつて、花瓶の花と妹の繪を見較べてゐる）

靜子　（水を持つて上つて來る。廿前後のくり／＼太つた娘らしい女）いやだ！　未だそんなところにいらつしやるの。毒ですわ、本當に又、一昨日の晩みたいになつたら大變ぢやありませんか。

讓　（又、ふらつと自分の床へ歸つて來る。水を一口のんで）大丈夫。注射さへしてしまへばあんなにはならないんですよ。

靜子　（袂をしめる）さうですが、でも隨分お苦しさうでしたわね。私、初めてでびつくりしてしまつて、――あんなこと、度々、おありになるんですか？

讓　さあ、あんなひどいことは年に五六度だけれど、

靜子　まあ、でも――そんなに。

讓　うつかりしてるとひよいとおこつて來るからちつとも油斷が出來ない――一時は、死んじまひさうに見えるでせう。

靜子　えゝ、私、本當に――でも先生が落ちついていらつしやるんで、少し安神しましたけど。

讓　まるで拷問にあつてる樣なものさ。（間）僕はもう小十年、この病氣で自分も苛められりや、他人も散々苛めて來てゐるんですよ。

靜子　すつかりなほしてしまふことはどうしても出來ないんでせうか。

讓　（冗談らしく）まづ死にでもしない限りはね。

靜子　あら、いやだ！

階下で柱時計の十時をうつ音。

讓　もう十時ですか？

靜子　えゝ、でも進んでますわ、あの時計。（間）お遲（おそ）、御座んすわねえ。

讓　誰、香代子？

靜子　えゝ、九時迄に歸るつて云つてらしたんですけど。

讓　出るとさうは行きませんよ。今夜は塾の記念祝賀會だつていふんでせう、きつと大騷ぎしてますよ。十一時頃までは歸らないでせ

うよ。

靜子　さうでせうかしら。

鳥渡、間。

靜子　さう〳〵貴方、御存じですか、篠崎さんの噂。

讓　（鳥渡、目を輝かして）香代子んところへ來る篠崎さん？

靜子　え、あの方の噂で近頃、塾はもちきつてるんですつて。

讓　へえ（間）結婚でもするつていふの？

靜子　えゝ、そうなんですつて。

讓　ふうむ。

靜子　その相手の人が、左傾派の經濟學者なんですつて、それで光子さんも近頃大ぶ赤くなつてるつて噂なんですよ。

讓　へえ、さう、そりや初めて聞いた――。香代子が話してましたか、そんなこと。

靜子　いゝえ。外の人に聞きましたの。何しろあんな綺麗な人でせう、今迄だつて失戀した人が隨分あるのにいよ〳〵結婚されてしまつちや塾の人氣がきつと落ちるつて、役者みたいなこといふひとがあるんですもの。（面白さうに笑ふ。）

讓　（仕方なく笑つて）全くさうかも知れないね。

階下でベルの鳴る音。

靜子　あら、お歸りかしら。（走り去る）

稍長き間。梯子を上る音。香代子、廊下の外へ立つたまゝ顏を出す。二十五六歳色の淺黑い理性的な女。

香代子　唯今。

讓　早かつたね。

香代子　えゝ、光子さん連れて來たのよ、如何？　加減。

讓　あゝ、もう大丈夫らしいよ。

香代子　さう、ぢや隣りにゐるから、用があつたらお言ひなさいね。（障子をしめる）あら、お入んなさいよ。そんなところにゐないで。

光子の聲　だつて、（笑ふ）

香代子　いやな人。（自分の部屋へ入つて來て電燈をねじる）おゝ、むしあつい！（障子を開けてしまふ）

光　子　（廿四五歳、美貌）本當にむすのね、今夜。

香代子　雨になりさうね。

光　子　困るわ、私、傘がないんだもの。（花を見る）まあ、綺麗、いゝ花ねえ。

香代子　散りさうでね——恐くつて。

光　子　屛風をたてまわしたとこがいゝぢやないの。それも一緒に寫すといゝ。

香代子　まさか。（笑ひ乍ら梯子の方へゆく）江見さん、お茶をね。

光　子　いゝの、香代子さん、私、今夜急ぐんだから。

香代子　いゝぢやないの。晩くなつたら泊つてらつしやいよ。

光　子　さうしちや居られないの。私、これからまだまはるとこがあるのよ。

香代子　これから？（稍、間）さう／＼貴方先刻、話しがあるつて云つてたわね。ぢやあ、早速それをうかゞはうぢやないの。

光　子　えゝ、おはなしするわ。（間）びつくりしちやいやよ。

香代子　びつくりなんかしないわ。（直覺的に）貴方、結婚するんぢやないの？

光　子　（間）さうよ。

香代子　矢張さう？

光　子　解つて？

香代子　そりや解つてよ。私、餘程前から、その噂なら聞いてたんですもの。

靜子、茶と菓子を持つて上つて來る。

香代子　有難う、そこへ置いてつて頂戴。

靜子去る。香代子默つて茶を入れる。

香代子　如何？

光　子　有難う。

間。讓、次の間の話しに耳を傾ける。

光　子　香代子さん、貴方、怒つてやしなかつた？　今迄私がかくしてたこと。

香代子　そんなことないわ。（間）で、先方の方は、矢張あの清水さんとかいふ人。

光　子　さうよ。誰に聞いて？

香代子　誰れつて、隨分、その噂ならいろんな人から聞かされてよ。でも、私、そんなことを直接貴方に聞いてみたところでしかたがないと思つて今まで默つてゐたの。

光　子　貴方みたいで皆ゐてくれるとうるさくなくつていゝんだけど、（間）私、本當にこの二三ヶ月、自分にも背負ひきれない樣な苦しいことが澤山あつてね。餘程貴方に丈は相談してみやうかとも思つたのよ。でもねえ、どうせ自分の氣もち一つの問題なんだから話してみたところで貴方を困らせる丈のことだと思つて、わざと今まで話さずにゐたのよ。

香代子　それがいゝのよ。自分の問題は自分で解決するのが本當だと私思ふわ。つけやきばに他人の意見なんか賴つてみてもあとでは矢張愚痴が出るものよ。（間）でもよかつたわね。解決がついて。貴方のお國の方で承知なさらないとか聞いたけれど。

光　子　大騷動だつたわ。（わびしく笑ふ）私とうとう勘當されちまつたのよ。

香代子　さう、——でも貴方よく、思ひきつてね。

光　子　だつて、どうしても諒解してくれないんですもの。（稍、間）でも、この話しは今聞かないで置いてね、いづれゆつくり聞いていたゞく時があると思ふわ。

香代子　（うなづく）結婚してもずつとこつちにゐるんでせう。

光　子　いゝえ、それが駄目なの。淸水が今度九州の方へゆくことになつたの。今までこつちでもあちこち講義しには行つてたんですけど今度福岡の方で是非來る樣にすゝめられたもんだから、あつちには研究材料も豐富だし、是非行き度いつて當人がすつかり乘氣に

なつてしまつてね。實はそんなこんなで、結婚問題も早まつたわけなの。

香代子　そう。でも、貴方の方は向ふへ行つちまつちや繪を描くのに隨分不便なわけねえ。

光　子　（默つてゐる。やがて）私、決心したの、繪の方はこの際斷然やめてしまはふと思ふわ。

香代子　（驚いて）まあ、だつて――本當？

光　子　えゝ。

香代子　そんな貴方、それぢや貴方の今までして來たことがまるで無駄になつてしまふぢやないの――私には解らないわ。

光　子　貴方にはきつと反對されると思つたの。だけど、私、貴方にいゝ加減なことを云つて別れてしまふのはどうしてもいやだから、今日はすつかり話して行くわ。私ね、今まで水木先生や貴方には成丈隱して來てゐたけれど、もう餘程前から、――清水と愛しあふ樣になつてから、私、全然思想が變つてしまつてゐるのよ。

香代子　――

光　子　先生にはすまないと思ふけれど、私、もう、斯ういふ繪に（畫枠を指す）――といふより近代の科學に接觸を持たない殆どすべての既成藝術に興味を失つてしまつたのよ。それでも矢張、惰勢で去年迄は帝展へも出してみたけれど入選したつて通知が來たつて初めての時の樣に夢中になつて喜ぶ氣なんかてんで起らないし、第一、自分の繪をぼんやり眺めてゐるやうな氣樂さうな紳士淑女の顏をみる丈でも大抵いやになつてしまつたわ。あの時分から私、自分の繪なんか、自分自身の虛榮とブルジョア階級の精神的虛榮の對照以外、何の役にもたゝない無駄なものだといふ事がしみ〴〵解つて來たの。それと一緒に、もう何時までこんな筆の先の遊戲にふけつてゐてはならないと思ふ樣になつたのよ。藝術なんて名に隱れて生きた人間の社會の不正を等閑視して置くエゴイズムがあさましくなつたの。今の時代は決してそんな安逸な自個陶醉に耽つてゐられる樣な暢氣な時代ではないわ。私の樣な平凡な藝術家がこんな時代に產れて平凡なマルクスガールに更生する事は必然な事だと思ふの。私、九州へ行つたら出來る丈自分の身體と頭を働かせて清水の手助けをするわ。そして、まづプロレタリアの生活に適應する樣に自分といふものを根本的に改造したいと思つてゐるのよ。

香代子　（獨語の樣に）根本的に生活を改造するなんて、實際、出來る事かしら。

光子　少なくとも今の私には出來ると思ふわ。事實上、私、今、自分を過去の總てのものから切り放し得たと信じてゐるの。これからの私は、田舍地主の娘でもなし、四條派の末流畫家でもないわ。そんなもの一切をすてゝ、唯、清水の妻として、一生を生々した正しい仕事に捧げ盡したいと決心してゐるばかりなの。今は私の一生にとつて、如何しても一つの分岐點よ、（鳥渡、間）でも、清水はきつと私をその分岐點からよい方向に導いて行つてくれる人だわ。

香代子　それぢや貴方は清水さんに自分の過去の一切を賣つてしまつた樣なものね。

光子　さう云はれても仕方がないわね。でも、私、清水を信じてゐるんですもの。（熱情的に）私、あの人が空虛な夢に溺れてゐる私を呼びさまして、此處まで引張つて來てくれたことを心から感謝してゐるの。私、あの人と一緒になら、どんな苦しいことにぶつかつても、決して悔いないつもりよ。

香代子　貴方がさう信じてゐるものを否定する理由なんか私にはないわ。だけど、私達の今までして來たことを單に空虛な夢だなんて私決して思はないことよ。私にとつては、繪筆を持つ事は遊戲でも、虛榮でもない正しい勞働よ——現實以外の何ものでもないわ。觀る人が、單なる玩弄物として私の繪を遇するかどうかそんなことは問題ぢやないわ。繪を描かうとする私の氣もちは、何時だつて苦しいほど眞劍よ。（ふと默る、間を置いて）どの意味からも眞劍になれずにはゐられないのよ。

光子　（朗かに微笑して）そりや私にだつて解つてよ。私にだつて、さういふ時代はあつたわ。だけど、今の私はとてもそんな呑氣な氣持に醉つてはゐられないのよ。

香代子　呑氣！

光子　呑氣といつて惡ければ、さういふ餘裕とか靜けさとか云つてもいゝわ。とにかく、今の私には、斯うして部屋の中に閉ぢ籠つて、繪絹に向つて、外界と接觸をたつてゐる樣な生活を本當のものだとはどうしても思はれなくなつてしまつたの。色の薄い既成藝術で有產階級のふくれたお腹に淸涼劑を送つてやる手間があるなら、街頭に飢ゑてゐる盲目の群集を覺醒させる爲に手を借す方が、人間の爲にどれ丈有意義だか解らないわ。（間）私、今まで長いこと繪の具で汚した手を、今度こそ、土の洗禮で潔めたいと思ふわ。

香代子　（光子の言葉の中、昂奮してゐたが、だん〱自制する。暫く無言）貴方と私との間には環境にも性格にも隨分距離があるわね。手を握つてゆくことの出來ない二人なのね。（間）私の考へを此處でおはなししてみたところが、結局、水かけ論に終りさうだから

今は何にも云はないことにするわ。唯――今の貴方の決心が、一時的な情熱の結果だかさうでないか、それは時が解決してくれる問題だと思ふけれど、兎に角、さういふ風に生涯にきつぱり區かくのつけられる貴方といふ人は、私、本當に羨しいわ。(間)「斯くあるべし」と斷じて決行出來る人は幸福ねえ。

光子　(輕く笑つて) 幸福でも不幸でも仕方がないわ。私達はイネビタブルな力に押されて斯うなつたんですもの。

香代子　私なんか――(云ひかけて默す)

再び稍、長い間。

光子　私、今夜、どうせ貴方の氣分を擾してしまつたんだから、もう一つ、貴方のことについておはなししたいの。聞いてくれる?

香代子　(頷く)

光子　私、貴方の藝術について心配してゐるのよ。

香代子　(何か云はうとする)

光子　いゝえ、いくら私が斯くあるべしの主義だつて、まさか貴方にアトリエをお出なさいなんて云はないわ。私、この際、貴方に忠告したいのは貴方の畫風の問題よ。これから先、ずつと、日本畫の畫家として立つて行くとしても、今の貴方はあんまり水木先生系の保守的な畫風を遵奉しすぎてやしないの。どの意味からも、よき藝術は時代を反映したものでなくてはならないと思ふのに、私や貴方が今迄骨を折つてやうやく一人前に修業した畫風なんか、どうしたつて江戸期の遺物で、現在のわれわれの生活といふものとは到底合致し得ないものだわ。私の知つてゐる限りでも貴方のもつてゐるものを盛り込むにだつて、あんまり單純なあんまり因襲的な畫風だと思ふ――貴方、さう思はない?

香代子　そりや私にも解つてゝよ。(間) でも、この問題、さう簡單には解決出來ないわ。(間) 物質の上でも才能の上でも私、此處まで來るのに貴方の二倍も三倍も苦しんでゐるんですもの。

光子　(疊みかけて) でも、貴方だつて、まさかいつまでも、此處に安住してゐて、第一義的な藝術が產み出せるとは思つてゐないでせう。先生の樣に斯ういふ畫風を、最善のものだなんて信じてはゐられないでせう。

香代子　(間) 光子さん、お願ひだから、私のことはうつちやつて置いて頂戴。私、自分でも考へてゐるんだから。

光子　そりや强ひて、こんなことを云ひたくはないけど、私だつて斯うして貴方とゆつくり藝術の事なんか話せる時はもう、又つて、無いだらうと思ふもんだから、私が既成藝術に手を切つて、階級爭鬪の渦の中に隱れてゆく置土産に、貴方に言つて置きたいと思つて。（間）私、貴方といふ人を、帝展畫家位の世間氣に安住してしまつて、藝術上の精進を怠る樣な人と思ひたくないのよ。香代子さん、貴方、お願ひだから、藝術の上丈でも、健全な正しい生き方をして頂戴ね、ね。

香代子　（突然、自嘲的に）有難う。だけど、私、どの道健全になんか生きられさうもないわ。（間）光子さん、貴方は仕合せな人よ。（凝つと光子をみる）

光子　又、いやよ、（笑ひかけたが相手の眞劍な顏色に押されて、眞面目に）何故？

香代子　（答へず、俯向く）

讓　（熱心に次の間の會話に耳を借してゐたが、この時、突然、急激に咳入る）

光子　（目を上げて）お兄さん、又お惡いの？

香代子　（頷く）

讓　（やうやく咳止む）

香代子　光子さん、貴方先刻、私の生活に靜さや餘裕が充滿してゐる樣に言つてたわね。でも私から言へば貴方の方がどんなに餘裕のある氣もちでゐるか解りやしないわ。貴方には利他を圖らうとする餘裕があるんだもの。私なんか、（躊躇する樣な間）私なんか、筆を玩ぶどころか筆にかじりついて生きてゐる人間よ。私には繪を描くより外、何の生活力も自信も惠まれてゐないのよ。（間）私が一つの場所に止まつて容易に動くことの出來ない理由も結局はそこにあるかもしれないわ。私は前ばかりみて歩くことをゆるされない人間なのよ。

光子　――

香代子　貴方のいふことはよく解るの。でも、私、貴方が少し慘酷な人に見えてよ。（何げない樣に笑ふ）

光子　（鳥渡考へる）私、惡かつたわ。あんまり自分の考へを貴方に强ひすぎた樣ね。だけど、私、言はなければゐられなかつたのよ。誤解しないでね。

香代子　いゝのよ、いゝのよ。そんなこと解つてよ。（苦しく笑ふ。稍、しらけた沈默）何時ごろたつの？

光子　來月の初めよ。

香代子　ぢや、もう直きぢやないの。

光子　えゝ、だから（言ひかけて時計を見る）あら、もう十時半ね。私、歸る。（立上る）

香代子　何處へまはるの？

光子　いゝえ、實はね。そら、あの今M大學で大騷ぎしてゐるでせう。澤さんて人が思想問題で免職になつたその留任運動ね、今夜もK青年館で演説があるんでね、淸水もしやべりに行つてるのよ。これからそこへ行かうと思つて——又、來るわ。どうもお邪魔しました。お兄さんお大事になさいね。

香代子　有難う。（二人降りてゆく）

讓　（むくりと起上つて緣側に出る。稍長き間。香代子再び梯子を上つて來る。讓急いで床に歸る。香代子兄の起きてゐたらしい氣配に感じて默つて緣に立つ。聲をかけ樣として止める。再び長き間。）

靜子　（登場。茶碗など片づけ乍ら、笑ひかけて）先生、篠崎さん、お嫁にゆくつて本當ですか？

香代子　（矢張緣側に立つたまゝで、不機嫌に）さうらしいわね。

靜子　矢張、ぢや、本當だつたんですね。あんまり噂がひどいから、さうかしらと思つてましたけれど。

香代子　他人のことなんかどうだつていゝぢやないの、早く、そこを片づけてしまつて頂戴よ。

靜子　（初めて、相手の氣分を感じて）えゝ、（あわてゝ、茶道具をまとめて立つて行かうとする。花瓶にさした花の枝に袖をひつかける花瓶覆り、疊布にも水がかゝる）あら！

香代子　（神經的に顔をゆがめて立つて來る）鳥渡、早く雜巾持つて來たらいゝぢやないの。

靜子　（駈け降りてゆく）

香代子　（花瓶をもとへ歸し、落ち散つた花を集める。藤も山吹もばら／＼散る。ふと壷を見かへり）あら！　こんなにしちまつて、（海綿でそつと水を拭ふ。もとの樣にならないので苛々して、凝つと考へ込む）

音をたてゝ雨が降り出し、漸時激しくなる。

靜子　（雜巾をもつて上つて來る。拭かうとして）あら！　先生、繪如何かなりまして？　（のぞき込む）まあ、大變に汚れてしまつて――私、どうしたらいゝでせう。そゝつかしくつて、つひ、（泣き出しさうになる）

香代子　（吐き出す様に）仕方がないわ。早く、下ふいて頂戴よ。

靜子　はい。（掃除する）

香代子　（花を手にして縁側へ出て、繪の方を氣にして見てゐたが、急に苛々して力委せに花の枝をふる。殘つてゐた花がすつかり散り落ちてしまふ。）

靜子　（稍呆れて默つてみてゐる）先生、本當に惡う御座いましたわね、折角お描きになつたの、こんなにしてしまつて――なほりませんかしら。

香代子　――。

靜子　本當にどうしたらいゝかしら。先生、これ、お頼まれになつてたんでしたわねえ。

香代子　――。

靜子　（哀願する様に）花だけなら、私、未だ何處かで探して來られると思ふんですけど――ねえ、先生。

香代子　（默つて座敷へ入ると、急に畫枠に手をかけて絹をはがさうとする）

靜子　（驚いて）先生、どうなさるの？

香代子　（冷かに）はがしちまふの、この繪もう駄目だわ。

靜子　でも、先生、明日、もう一度、なほして御覧になつて――それからになさつたら。

香代子　（答へず、はがさうとするが中々はがれない）

靜子　（倒々泣き出してしまふ）

護　（險しい聲で隣室から）香代子！

香代子　――。

讓　香代子、何をしてるんだ！
香代子　――。
讓　おい、何故、返事をしないんだ。（起き出して來る）
香代子　（はがれない書枠を手荒く伏せてその上に突伏して泣きはじめる）
讓　莫迦！　何だ！　その眞似は。
香代子　（猶はげしく泣く）
靜子　――。
讓　（泣いてゐる妹を憎惡の目でみてゐる。稍。間）おい、いゝ加減にしないか。變な面あてはもう澤山だよ。
香代子　――。
靜子　（何時か泣き止んで、けゞんさうに讓をみる）
讓　そんなにしてみせてくれないだつて、お前の考へてる事位、おれにはよく解つてるよ。（咳を續け乍ら冷かに笑ふ）おれはこんな半分死んでる樣な病人だけども、神經丈は人並み以上に冴えてゐるつもりなんだから。
香代子　兄さん、貴方、誤解してゐるわ。
讓　誤解なら誤解にして置くがいゝさ。おれにはよく解つてるよ。
香代子　（苛々して）何が貴方に解つてるもんですか。貴方こそ、（鳥渡逡巡したが思ひきつて）貴方こそ光子さんが結婚するつて聞いたもんだから、變に氣をまはして私にあたるんだわ。
讓　おい、つまらないことをいふと腹ん中が見えすくぜ。光子さんが嫁つてしまつてお前が面白くない事位よく解つてるよ。
香代子　（稍、ヒステリックに笑ふ）そんなことを云つて、貴方こそ、貴方こそ、光子さんがゐなくなつて、急に淋しくなつたんでせう。お氣の毒樣だわ。
讓　（蒼白になつて）莫迦！　もう一度云つて見ろ！
香代子　貴方は私が盲目だと思つてゐたの？

讓　（激怒して妹の顔を凝つと見つめる）

突然、玄關のベルが鳴る。靜子いゝ機會を得てかけ降りてゆく。

讓　（漸く自制して何も言はず自室へ去らうとする）

香代子　兄さん。

讓　（答へず手荒く襖を閉める）

靜子の聲　（階下から）先生、篠崎さんが又。

香代子　（不審さうに）篠崎さんが？

光子　（慌しく上つて來る。雨にぬれてびしよ〳〵になつてゐる）

香代子　まあ、どうしたの？

光子　（著しく昂奮してゐる）御免なさい。こんな風して。

香代子　どうしたの、そんなにぬれて。傘さゝずに？

光子　傘どこぢやないの――あの、清水が今、檢束されてね。

香代子　まあ、どうして？

光子　私、あれからすぐ青年館まで行つたら、未だ早いのに會は中止になつてしまつたあとだつて云ふんでせう。何だか樣子が殺氣だつてゐると思つて、殘つてたMの學生に聞いてみたの。そしたら、清水が檢束されて行つたと云ふんでせう。私驚いてねえ――何でも、清水が演說してる最中に不穩な事を言つたとかつて、右傾派の壯士みたいなものが飛び上つてなぐつたんですつて。それだもんだから、清水の友達だのMの學生だのが又、その壯士と喧嘩はじめて、――結局は、警官が來てどつちも引張つてつてしまつたらしいのよ。何でも清水は怪我してゐたとかいふはなしなの。私の行つた時は皆すんじまつた後なんでせう。私、口惜しくつて。

香代子　まあ、だつて、それぢや清水さんは亂暴された方なんでせう、それに――

光子　駄目々々。清水の樣な人間に對しては官權は何時でも白い眼以上のものをもつてゐる人だから、今夜、來た暴力團なんかだつて、どんな譯があるんだか、解つたもんぢやないわ。（間）えゝ、仕方がないのよ。こんなことなんか、これから私達に何度來るか知

れないんだから。

香代子　（何時か自分の昂奮から醒めて平靜に復してゐる）それで、貴方、今夜どうするの？　これから警察へゆくの？

光　子　えゝ。無駄かも知れないけれど、兎も角今夜の中に行つて見様と思つて。

香代子　一人で？

光　子　いゝえ、それから私、自動電話へ行つて、清水の友達のゐるとこへ、あちこちかけて見たんだけど、ゐない人が多くつてね。やつと一人すぐ來るつていふ人があつて——それで、私、すまないけど、恰度道だから、貴女んとこで待ちあはさせて貰はうと思つて晩く來て本當にすまないんだけど。

香代子　そんなこと構はないけど、まあ、本當に大變ね。心配でせう。

光　子　あの人には珍しいことでも無いらしいけど、私、未だ、初めてだから。（微かに笑ふ）でも、私覺悟してゐるわ。あの人の妻になる以上、こんなことどこぢやないもつとずつと〳〵つらいひどいことに耐えなければならないといふこと——。

香代子　（むしろ、冷酷に光子の昂奮した顔をみてゐる）

光　子　（自分に誓ふ様に）どんなことが來たつて負けはしないわ。私達は正しい理性とイネビタブルな情熱に支配されてゐるのだもの。——誰も知らない幸福を胸の底にしまつてゐるんだもの。（突然よろ〳〵と倒れる）

香代子　（驚いて）光子さん、どうしたの？　光子さん。

光　子　——。

香代子　腦貧血かしら、江見さん、江見さん？

靜　子　（上つて來る）まあ！　どうなすつたんです、腦貧血ですか？

香代子　だらうと思ふけど、とにかく。（光子を寢かさうとする）

光　子　（微かにうめいて身を起す）

香代子　氣がついて、光子さん。

光　子　あ、ありがたう。何でもないの、たゞ眩暈。

香代子　（靜子に）兄さんのとこに葡萄酒があつたでせう。持つて來て丁戴。

靜　子　（立つて行つて酒をコップについで來る）

讓　（身動きもせず夜具を冠つてゐる）

香代子　これ、お飲みなさいよ。

光　子　えゝ、（飲む）ありがたう。鳥度、眩暈がした丈よ。（ふら〳〵立つ）もう大丈夫。

香代子　無理しちや駄目よ。床とつて上げませうか？

光　子　いゝえ、いゝのよ。大丈夫よ。

香代子　でも貴方、今夜、警察へゆくの無理よ。

光　子　そんなこと――私どうしたつて、行かなきやならないの。

再びベルの音。

光　子　あ、やつと來たわ。ぢやあさよなら。いづれ御禮に來るわ。

香代子　だつて、貴方。

光　子　いゝのよ、いゝのよ。私そんなに弱くはないのよ。（駈け降りてゆく。）

香代子　靜子。（つゞいてゆく）

風雨いよ〳〵烈しく。舞臺暗くなる。

暗の中に嵐の騷音のみつゞく。

軈て、時計の午前二時をうつ音。

香代子寢間着に手燭を持ち、梯子を上つて來る。兄の部屋の襖を細く開けて、そつと中をのぞき込んでゐたが、軈てそこを閉めると、先刻の畫枠が裏返しにして、立てかけてあるのを表へかへして、立つたまゝ、その繪を凝つとみてゐる。稍、長い間）

讓　香代子かい。

香代子　（ほつとして）兄さん、起きてたの？

譲　（曖昧に）うゝむ。（間）ひどい嵐だね。

香代子　電氣が消えちまつたでせう。

譲　あゝ。

香代子　雨漏りでもしやしないかと思つて。見に來たのよ。（言譯らしく廊下の方を見まわる）

譲　（妹を呼ばうとして躊躇する）

　稍、長き間。

香代子　（突然、兄の部屋へ入つて來る）兄さん、ゆるして頂戴ね。

譲　何。

香代子　先刻の事よ。私、本當に惡かつたわ。

譲　あやまる事なんかないよ。お前の云つたことは本當の事なんだ。唯僕といふ人間をよく知つてゐてくれる筈のお前が、僕の何處までもしまつて置きたい感情に故意に觸れ樣としたのが腹が立つたのだ。考へてみると我儘なはなしだよ。僕の方がゆるして貰はたきやならないんだよ。

香代子　いゝえ、矢張、私が惡いのよ。つまらないことに昂奮してしまつて、貴方にも江見さんにも本當にすまない事をしたと思ふわ。

譲　（間）香代子、僕は卑屈な人間だ。水臭い兄弟だ。だが僕にはどうしても、自分の苦しみを他に訴へる氣もちにはなれない。訴へるどころか、それに對して他の一指さへ觸れて貰ひたくないんだ。僕は僕の苦しみを自分自身の胸の奥に封じ込めて、たつた獨りでそれに、耐えて居たいんだ。我儘な賴みだけれど、おれの樣な病人を可哀相だと思つてくれるんなら、これからさきも僕の痛いところに觸れる事丈はゆるしくれ。僕をよく知つてゐるお前だから、これ丈のことだつて僕は云へるんだ。ね、賴むよ、賴んだよ

（哀願する樣に）

香代子　解つてます。兄さん、もう何事も云はないでいゝのよ。私、きつとこれからあんな莫迦はしないわ。（間）でも、私、あんな事でも、その爲に貴方が私を誤解しやしないかと思つて——私それが一番恐しいのよ。貴方、私を信じてくれるわねえ。きつと。（兄

の手を執る）

譲　有難う、香代子。お前には全くすまない。僕がこんなに病人になつてことごとにお前の自由を束縛してゐる事がどんなに僕にとつて苦しいかお前には解つてくれないだらう。實際僕はいつもお前に感謝する代りにお前を苛めてゐるんだ。お前にすまないと思へば思ふほど、僕の氣もちは曲つてひがんで、反對にお前につゝかゝつて行きたくなるんだ。おれの病氣は肉體ばかりでなく精神にまで食ひ込んでおれを腐らせてゐるんだ。（嗚咽する）

香代子　兄さん、お互ひに苦しみを背負つてゆきませうよ。私達は日陰の苦勞には慣れてゐる人間ぢやないの。（間）私、先刻から寢ずにしみ／＼考へたんだけど、光子さんね、あの人と私なんかどうしても同じ道を歩けない人間だといふことがやつと、しつくり胸に落ちついたわ。

譲　おれのことはいはないよ。だがねえ、おれは眞面目に考へるんだが、どうだい。お前もそろ／＼結婚した方がいゝぢやないか。お前がそうしていつまで獨身でゐるのはおれは不賛成だ。

香代子　いゝえ、でもそれは駄目よ。私、てんでそんな氣はないんだから。（譲、何とか云はうとする）いゝえ、貴方のゐる爲だなんて―生活の爲だなんて思はないで下さい。たゞ、私は光子さんの樣に容易によい伴侶を見出すことの出來ない人間だと思つてくれゝばいゝの。（間）本當は、私、光子さんがいよ／＼結婚するときいた時、何だか急に暗い谷底へつき落とされた樣な心細いあせつた氣もちになつたのよ。光子さんの樣な美しい悧口な人が今まで獨身で藝術に奉仕してゐてくれた事はそりや、私にとつてもどの位、力強い頼もしいことだつたかしれないわ。でも、結局あの人は意想外の愛人を見付け出して、（間）私達の今まで大事に捧げて來た既成藝術にまで背をみせて行つてしまひました。私、自分の一身上の二つの大切な信條が、あの人の結婚と一緒に急に土臺からひつくりかへされた樣な氣がして――それにあの人に對する貴方の感情まで考へると、たゞもう苛々して、あわてゝ、あんなに莫迦々々しく昂奮せずにゐられなくなつてしまつたのよ。

譲　おれは又、お前がおれのねてゐる隣で光子さんにあのはなしをさせるのが一種のトリックの樣に思はれて口惜しくつてならなかつた。（苦しく笑ふ）ひがみさ、自分にだつてお前の氣もち位よく解つてゐるくせに、どうしてもさう思はずにはゐられなくなるんだ。情けない話しさ。

香代子　私だつてさうなんですもの。(間) でも、今はすつかり考へが落ちついてしまつてよ、先刻あの人の揶揄した時、一概に否定してしまつた餘裕とか靜寂とかいふ言葉が違つた形で私の中に生きてきた樣に感じられるのよ。あの人にあの道があるなら、私にもこの道のある事が、はつきり氣もちよく肯定される樣になつたのよ。(間) 兄さん、貴方、先刻、二度目に來た時のあの人の樣子、見なかつたでせう。

讓　(うなづく)

香代子　私は、今まで、あの人を始終羨しいとは思つてゐたけれど氣の毒だと思つたことはたゞの一ぺんも無かつたのよ。だけど、今夜ばかりは何だかあの人が可哀相になつたわ。私、あの人の昂奮した目の中に、殉敎者臭い誇りの影をちらつとみたの。それと一緒にあの人の所作のすべてが舞臺の役者の藝みたいに見えて來て、あの人の情熱を輕蔑したい衝動に驅られてしまつたのよ。

讓　――。

香代子　これから先はしらないけど、今のあの人の赤い情熱は私にはどうしても健全なものとは思はれないわ。ブルジョアの娘の倦怠から產まれた火あそび以上には評價出來ないわ。考へてみるとすてたといふ過去にあの人は果してどれ丈の認識をもつてゐるか私には疑はれるのよ。又さういふ過去だからこそ輕々とすてたり、うまれ代つたり出來るんぢやないかとしみ〴〵私考へたの、さう考へてみると、やすく〴〵切りかはる事の出來ない自分の心境が却つて賴もしく思はれ出して來たのよ。

讓　ドグマかもしれないが、それも一つの見方だらうね。ともかくも自分に自信をもつ事はいゝ事だよ。自信を失つた人間位淋しい可哀相なものはないからねえ。

香代子　私、光子さんの華やかな勇ましさうな情熱に溺れて、一時的にでも自分の道を否定しかけた事がはづかしくなつたの。あの人が未來の夢をみて步いてゆくのが勝手な樣に、私がふりきる事の出來ない過去を生活の上にも、藝術上にも背負つて步いてゆくのを誰が咎める事が出來るでせう。私にだつて信條はあるわ。(間) 外の嵐が烈しくなればなるほど、內に保つ靜けさの深くなることはあり得ることだわ。さういふ靜けさ、冷やかさから過現未に徹した純粹な藝術は產まれるものぢやないかしら。

讓　「人は他人の意志の拙い遂行者だ」つて誰かゞ言つてゐるね。情熱に走るのもいゝ、靜寂に徹しるのもいゝ。ともかく自分を見誤らない樣に發展させてゆくんだね。(間) 人生は多岐だ。人間の生き方が一つに限られてゐる筈はないよ。

蠟燭の火が風に消える。

香代子　あら！　消えちまつた。（マッチを擦つて火をつける）　其辺に長く話し込んでしまつて。もう、ねませうね。（立上る）

譲　（笑ふ）　少し、風が和いで來た樣だね。

香代子　地雨になつたらしいわ。（間）　光子さん、どうしたかしら。

譲　さうさね。（間。まぎらす樣に）　明日はきつと晴れるぜ。

香代子　さうね、このあれで時候がきまるかも知れないわねえ。

譲　春ももうお終ひだらう。毎日毎日雨と風でくさ〳〵した後だ、早く初夏らしいさば〳〵した太陽の光が見たいね。

香代子　ほんとねえ、夏のはじめは貴方の身體にも一番いゝ時なんだから、ぢやお休みなさい。

譲　お前寢られるか、カルモチンやらうか。（枕もとの藥をとる）

香代子　（受取つて）　有難う。ぢやお休み――。

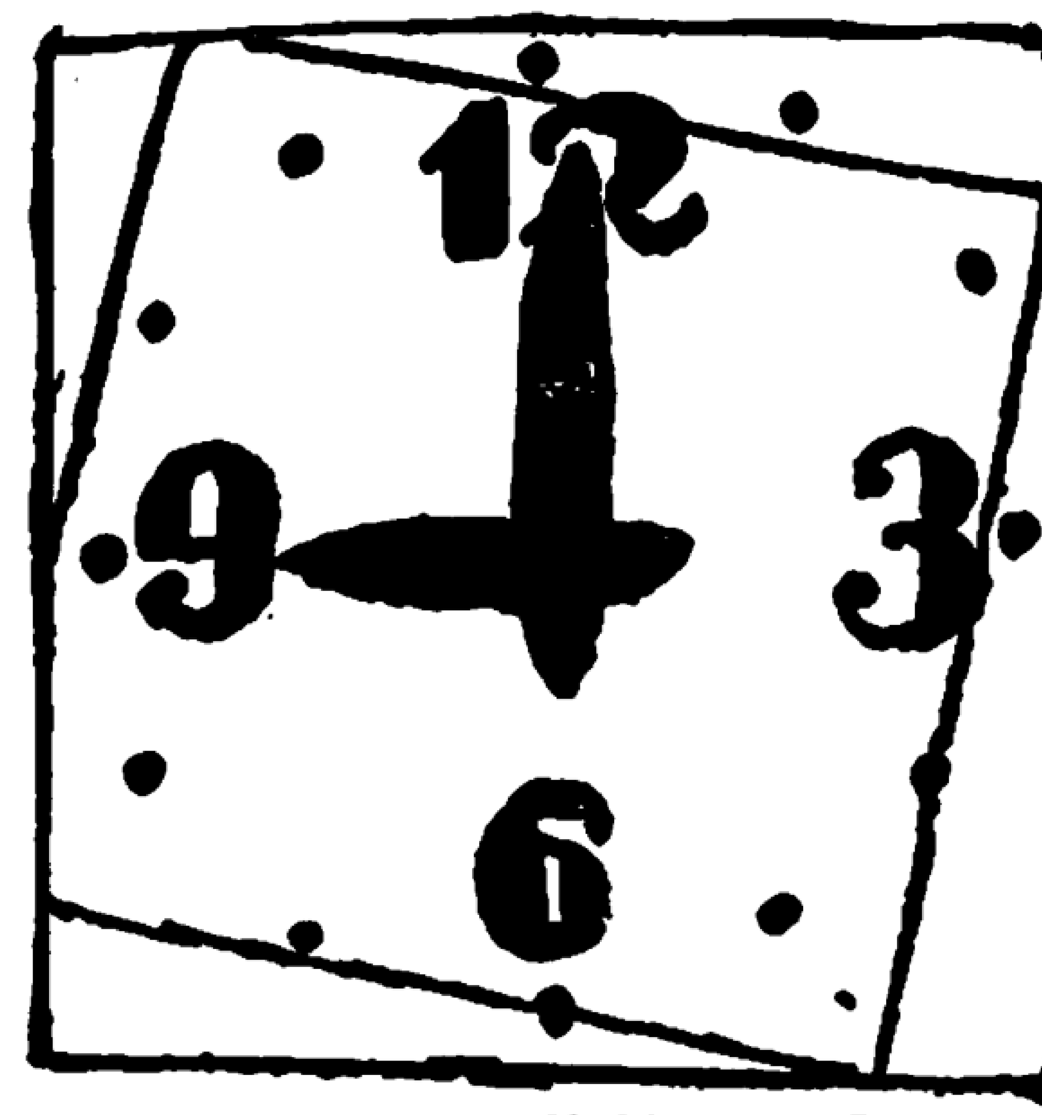
譲　お休み。

香代子　（階下に去る）

再びもとの暗、雨の聲。

幕

（一九二八、八、十六午前）



櫻田ちか子

ヤッチョラ

村田千代

三時過ぎの天道樣は、九月と言つても暑中に劣らぬ色を、西の窓に塗り始めたに、まだ彼女は東向の座敷のくちもとに、ショボ〳〵目を閉ぢたり開けたり晝寢のけだるさのぬけきらぬ恰好で、ペッチヤンコになつて居た。

彼女と言ふ音は若々しく聞える。それでは困る。全く此處の彼女は三萬六千五百回以上、お日樣を見通して來た彼女だつた。どのどんな老ゆきでも、女性でありさへすれば彼女といふ言葉が許されるとして、やつと使へるやうな老々しい彼女であるのである。

長壽は結構と言ふが、又その結構のお返しに頗る結構ならぬ、逆境も見ねばならぬが定めで、彼女は子も孫も死に果てて、家は先祖代々の住家に居ても、今の生活は曾孫と共に、孫の知人の世話になつて居るやうな樣である。孫等は意外に早死であつたが、子は七十幾つかで失せたに、それでも矢張り親より先と言ふ事になつて居て、のがれる事の出來ない逆境は思ひやられる。だが、彼女は命同樣にか、意想外に氣强いもので、

——今度で、養老盃を三度戴くわけだが、子や孫の分までもと思ふや、まだ〳〵足りないわな——

と、時をえらばず言つて居る。

——それでも、はい起きずばなるまいや。と、言つた感じを沈默のまゝ示して、彼女は脊をうぢ〳〵させた。そしてペッチヤンコの形を丸く變へて、枯れ細つた腕を、カサ〳〵さすり始めた。それは

まるで、煮え立つてくる途中から、出來かけた牛乳の皮を、人色にさせただけのものと言ひたい、薄さに、皺かげんに、そのほんの光るところまで、さわつては剝げさうな皮膚だつた。が、何かさすつて得る快感に、彼女のカサ〱はなか〱止まなかつた。右手で左腕を、左手で右腕を、根氣よく續けた。こんな事は、敢へて言ふ彼女の珍らしい動作ではなかつたが。

と、ふと彼女は、老にも似ぬ烈しい行動で、右手をのばして障子を捕へ、時には、皺の中の大きな皺にも見えさうな目を据えきつた。

體の下は、大きな雷鳴のあとの地響きにも似た感覺が通つて居た。

そんな事で、すつかり目覺まされた彼女は、椽先ににぢり出て、目先の葱の頭のトンボから、はるか上の電線に、ぎつしりしがみつくやうにそのあたりを見やつて居た。

すると、何といふ事か？ 幾つかの紙片がチラ〱と、彼女の頭の屋根の方から現れ出て、ひからびた色を目立たせて、輝く色彩の葱畑の上を、大根畑の上を、竹藪の上を、靜かに動くかげんで山の方へ、それも、次から次へ、ずん〱増えてチラ〱し出した。

――おりかや、おりか。

耳はなかば蓋をされたが、遠目を許された彼女は、チラックものの後を追ひながら呼ばつた。

彼女の耳には受け取れなかつた遠くからの返事がして、程なく娘盛りの曾孫がそれにふさはしからぬ身なりで、髮もキリ〱巻に腰の手拭で腕のシャボンの泡を消しながら裏庭に曲つて出て來た。

――見や、おりか、われ始めは蝶やと思つたに、何の、たんと、舞つて來たに――。

襷掛の前掛姿が見えるが早いか、彼女はニット笑つて、チラツイて舞ふものの方向に細腕を伸して言つた。

――あゝおばあさん、あれ？ 今花火の音がしましたね、平和座の――

おりかは、近頃近くに出來た劇場の開演合圖の煙火の後のものである事を説明した。

――音が？ ほんに、ぢやあ今ゆれたのは、うゝ――

それでやつと合點がいくと言つたやうに、又それ程の響きの音なら聞えさうなものだと言ふやうに、おりかの話續けるのにはかまはず、一人不思議顔で、變に、うなづき、うなづいて居た。

まだ紙片は、いくらか形が小さくなつた程度で、もう増す樣子はなくて、トンボだらけの空間を、泳ぐやうにチラツイて居た。

――や、おりか、わかつたよ、ヤツチヨラ、ヤツチヨラが――

――えー

皺のやうな目で、きたない紙片を見送つてゐて、突然似てもつかない、可愛い調子の言葉を出した彼女の横顔を見て、おりかは皺もないくせに、全く顔を伸してしまつた。

――ヤツチヨラよ、清太の十の頃、われの子、お前のぢいさんの

そんな時だつたで、今から六十五六年も前の事だつたたな、丁度今日の様に紙が、それも毎日々々、きれる事なしに、ヤッチヨラ〳〵と舞つたわな——

——まあ、いやなおばあさん、夢のつゞきでせう、お茶でも入れて目を覺したら——！

——いゝ、ほんまだ。ちようどかうゆうふうに、舞つた。さうすると神樣の仕わざではなかつたわな——

おりかは急いで勝手口から上つて來て、火鉢のわきに近づいた。

——なあ！　何時の日から、どうしてさうなつたんか、何と言ふ事なしに、ふんとうにヤッチヨラといふ時代があつたんさ。さうゆう年や、まる一年は確かさうだつたんだでな。

　葉書を三つに切つた位のお札がな、不動樣であらうが、稻荷であらうが、八幡樣であらうが、水神樣であらうが、天神樣であらうが空一面に晴れた空も灰色にさせてヤッチヨラ〳〵漂よつて居たわな。

　そりや、一日にはよつぽど、たんとのお札が地に落ちたんだが、其れを見て粗末な事をしたら、目がつぶれるとか、家が斷絶するとか、いふんで、てんでにそれを一枚なりとも見あてた以上は、何もかもおつぽつておいて、お宮や、お寺に持つて行つたもんや。

　また、そこいら、權現樣の社にも、明神樣の社にも、寺の本堂前にも、誰が何時どうしてあつらへたのか、ちやんと恰好の、お札を受け取るお箱が出來て居てな、子供達が、そのお札をたんと拾ふ程利口になれるとか、早く出世が出來るかつてんで、一日其れを何よりの仕事にあさつて歩いたもんや。

　あゝ、子供達は遊ぶ事と、お札を拾つてお箱におさめる事の他に仕事なんてした事はない。それどころか、子供達ばかりでなく、大人達も働かなければ困るなんて言ふ事はなくて矢張り遊んで居た。

　お札のまふ空がヤッチヨラなら、人間もそれと同じやうに、ヤッチヨラ〳〵と浮いた調子をやつて居た。貧乏なんて言ふものは決してなかつた。あつてもないのと同じだつた。何かもののある家へは大勢の人々が集つて、食べたり踊つたりしたんさな。

　物があつても、人々に自由にさせない樣な家へは、一日の中に、庭中へ牛の糞がつくねられたり、臺所一はい舌切雀が欲深ばばに馳走したやうなものが竝べられたり、大家の示しでもある門の大松の幹が、ナマ〳〵とさかれたりした。それでもまだ頑張つてゐるやうな家は次の日は牛の糞にうづめられてしまつた。感心な家の屋根へは、立派な織物がふつて來たり、金の大袋が置かれてゐたりした。そんな事があると又大祝ひをやつての、聞き知つたほどのものがおしかけて、歌ひ騷いだんだあな。全くヤッチヨラ、ヤッチヨラと。

　人はそしてヤッチヨラ〳〵して居るし、空にはお札が矢張りヤッ

チョラ〳〵して居るし、それぢあ、ヤッチョラの時代と言ふより外に言ひやうはないわな。

何しろ、十年一昔としても、六昔半餘も立つてるで、廣い田んぼや畑が、ヤッチョラの人の手でどうなつて居たかは思ひ出せないがまあ食べるに困つた事のないのを思ふや、どうにか實のつて居たんづらよ。

お札もな、歩いてそう目に見えた程、鼻先にあたつた覺えもないで、地から二三間上でヤッチョラして居たんづらよな。

それだけの事つきりなら、われもとても面白く踊れる筈だつたがその頃にわれは四十で、えらい苦勢をしたんだつた。時たま話したかも知れない、それあのお前の大ぢいさん（彼女の夫）の牢に入つたのはその時や。

はじめは何しろ、一本氣のわれの弟の仕業からだが——弟の友達が、或女と懇意になつて、その女は孤兒だと言ふで、憐れさも加つて、その女を娶らうとした。その時、ふんとうにあきれた事には、その女にはまだ新しいよい男があるといふ事が知れて來たわけでなたう〳〵弟と、その友達は、それから間もなく、その女を殺してしまつた。それを又、その殺させる道順を與へたのは、いまだに眞の事は定め切れないが、大ぢいさんの横智慧といふ事になつてさな、三人は牢に運ばれて行つた。ところがなんしろヤッチョラの事で、それを取締る役人達だとて普通人同様に浮かれてゐたわさ。

家は、此の地でも豪家とされてゐたが、普通ならさうした家へは大勢が集つて食ひ倒すのだつたが、大きな罪人を出したかどで、人がよりつかなんだばかりか、親しく話をするさへ許されなんだ。まあ淸太が一番氣の毒で、十ばかだに、人にかくれては一人でお札を拾つては、早くみんなが許されるやうにと、心をこめてお箱におさめたものだつた。けれど人のよりつかなんだ事が却つて仕合せな事になつて居て、われは毎日ヤッチョラにまぎれては、餘程の金を持つては役人の機嫌を睃めたもんや。

それが又、浮かれて居る役人達には、とても入用なものだつたに違ひなくて、そんな事が半年ばか續いて家の財産は殆んど空になつた時、ひよつこり、不思議と三人共が、——惡い女人を殺したのでは——といふ事で許されて、出牢して來た。

われは何と言つても、其の寛やかな取りなしの有がたさに、殘つて居るありたけの金目のものをたづさへて、禮に上つた。

すると役人は眞劍な面で、

——お前はそんなボロをまとつて、こんなものを持つて來て、明日の食事に困りはしないか——

と、言つてくれしやつた。われは、

——明日は屋敷を賣る事にきまつたから、

と、答へると、

——其處だ、それを待つて居た。とかく人と言ふものは、殊に女

と言ふものは、澤山あればある程、この位は取つておかなければと出す事をおしむものだ、それを何一つ殘さぬまで、よく一つの事に盡したな。

そうしたおほめの言葉と共に、却つて多分なお金をめぐまれたんだつた。そうしたお金も、今度は、清められた家の祝ひといふ事で間もなく消されてしまつたが、家はもとの安らかにもどつたんやな。

そうして、何時とはなしにヤッチョラのお札はまはなくなつて、何時とはなしにみんなも落着いて、ひとりでに、今の樣にめい〱が働いて生きる世になつてしまつた。

われのそうした仕事も、ヤッチョラだつたからこそうまういつたんだつた。

考へようではわれの仕事も、役人の仕業も、とても、惡く見られるのだが、人三人の命を止めたといふ事は決して、つまらん事ではないわな。ヤッチョラのあるといふこともだな。

彼女は腕をカサ〱させ、足をさすり、しぶい茶をくくみ〱、殆んど天道樣の沈む頃までかゝつて昔の氣丈夫の殘り氣分に、しはじめた事は止ぬ性分で、新劇の開演合圖の紙片をヤッチョラ札に見なして、過去を、目新しく並べたてた。そして、ふと言つた。

――なあ、おりか、鐵也は何處になにしてるか？

――まあ、兄さんの事など――

老人の仕事としての追憶に、全く沈默にひかへて居たおりかは驚き顏を上げた。

鐵也は十の時、おりかは生れた時、母親を失なつた。おりかの五つの時、父親も倒れた。鐵也は物心づいた時の、大きな痛いしぐさに、淋しい子に育つた。小學敎員を何よりの身にあてはまつた仕事として、田舍におさまつて居た。ところが、此の春の衆議員選擧に生れた、勞農黨の偉大な論辯に刺戟されて、その後、兒童の前に話すべきでない、不穩の言語を發した。そして直に職席をおはれた。そのまゝ、鐵也の消息を知るものはなかつたのである。

――もう一度ヤッチョラのやうな時代があつたら――

彼女は眼の影を深くして言つた。

――まあ、そんな――

おりかは、兄と共に、その殘して行つた本を思ひ出して居る樣だつた。ヤッチョラは、全く、共產といふ叫びの事實の實行ではないか、と考へて居たに違ひなかつた。

――それだつて、あの時は、われの力で三人もの大きな罪も許されたに――彼女はそう言つて、もうとつくに何もなくなつて居る空を見上げた。そしてその空間に、先刻の舞ふ紙片を自分自身で浮べて、それによつて何か曾孫をもとにかへらせる方法が、得られはしまいか、と見つめつゞけた。



酔っぱらひ

樺山千代

　國子は自分の心が、まづ、ほゞ安定を得たやうな自信をもつて、山の温泉場から歸つて來た。しかし、橋本に對する腹立ちだけは、少しもおさまつてはゐなかつた。たゞ、はじめが、胸を焼きたゞらす火ならば、今は、胸の中に剳りこまれる灼鐵のやうな憤りだつた。だが、それはそれでよかつた。と云ふよりもその方がよかつた。致命的にくだらない相手への未練は、なにより恐ろしかつたし、と云つて、三年間痩せ細るほどの苦しみが、ケロリと拭はれてしまつても、中心がどこかへころびさうな氣がしたので、少しばかり再燃しはじめた創作慾と、彼への憤りに一生懸命すがつて生きて行きたかつた。

　それに永い間の戀愛で棒にふつた自分の生活、それから、相手の卑怯な最後の仕打ちを思ふと、橋本といふ人間に、彼の何よりもおそれてゐた自分の生々しい怨みをたえず釘付けにしておきでもしなければ、とても、腹が癒えなかつた。

　歸つた夜はおそかつたので、次の日國子は上村への土産がはりに晩餐にビールをふるまつた。温泉に一緒に行つた友子も同居してゐる友が歸郷してゐたので、彼女の家について來た。で、三人は一つの鳥鍋を圍んでビールを拔いた。上村はうれしさうにたえずニコニコ笑ひながらのんだ。彼女も、生活のニューエポックを祝するやうな心持でのんだ。そして、友子と二人で温泉場の模樣を上村に語つてきかせた。

「しかし丈夫になつてよかつたね。おかげで僕は淋しかつたよ」

上村は彼女達の話がと切れると、甘つたるい目で國子をじつとみつめて云つた。それは、何氣なくそらしてはゐたが、彼女が歸つて以來、時々、その表情に、彼女の注意を惹かうとしてゐる目だつた。

「ま、あんな冗談を…人嫌ひさんのくせに」

彼女は云つて無理に笑つた。彼女の心は、上村のさういふ甘さに直面することをおそれてゐた。やつぱりどんなに努力しても、彼の男性にとけ込んで行けない彼女だつた。彼女は自分が橋本に絶交状を書いたことを知つてゐる上村が、この機に自分の心をグンとたぐり寄せやうと焦つてゐるのを知つてゐた。それに半月間の獨居は兜をぬぎ切つた彼に、どんな慘めな眞似をさせないとも限らなかつた。一種のサヂズムで、七年間妻の彼女を虐げ切り、遂に別居までしたとは云へ、今では後悔し、國子を愛し、心の冷え切つた彼女に歎願して友人關係で滿足して同棲してゐる上村だつた。彼女は今となつては非の打ちどころのない靑年紳士である上村に、愛せないとは云へ、いや、愛せなければこそ、犬のやうな眞似はしてもらひたくなかつた。

「いや、決して冗談ぢやないよ、僕はそれや人嫌ひには違ひない、しかし…」

貴女だけは別だと云はれさうだつたので、彼女は途中でさへ切つた。

「だけど、山は面白かつたわねえ、友子さん！　あら、あなたちつともへつてないぢやないの？　づるいわ、私にばかしのまして、さぐつとおのみなさいよ」國子はさう云つて、友子のコップを取つてその唇に押しつけた。

「のんでよ、のんでよ、だんだんに…」

たつた一杯でもう目のふちを眞赤にした友子は自分も手を添へて一口のむと、

「しかし、醉つて自動車からおつこちると困りますからね」と男の口調で云つた。

「はゝアん、大きなことになりますかな？」

國子は同じ口調で答へた。それから二人は意味ありげに顔を見合はせて笑ひを爆發させた。が、國子は笑つてしまふと、心の底に泡のやうな淋しさが湧いて來るのを感じた。

「一體、それや誰の眞似だい？」

上村はおき去りにされたやうな不快に、一寸顔をかたくしたがすぐそれをごまかすやうに、

「なにか、とつときの素晴しいローマンスがあるらしいね、一つ拜聽したいものだな」

と笑をつくつて、葱を頰張つた。

「一席辯じませうかね」と云ひかけて、國子はふと默つて鳥鍋に眸を落した。

「あゝ、やつぱりこんなに淋しくやるせない心だつた――」橋本の深い黒々とした目がうかんだ。かつて鳥屋の二階の小さいちやぶ臺にむかひあつた二人の逢曳の姿がうかんだ。やつぱり、かういふ風に、鳥肉がブス／＼と煮えてゐた――。

上村と別居してゐた頃、國子は橋本の熱心な求愛にまけた。勿論拒みに拒んだ揚句だつた。同棲の意義をなさないほどお互に愛のない夫婦ではあつたが、とにかく橋本には妻があつた、そして一人の子供もあつた。

仕方がない、愛し切らう、それが死へのプロセスでも、生活の破滅へのプロセスでも仕方がない、彼女はさういふ心になつた。

上村の同棲しなければ子供を取るといふ脅迫と、その涙にまけて再度の同棲をする時にも、上村との關係ははつきりさせておいた。誰をも僞りたくなかつたので――。上村は「友人で滿足だ。戀があれば認める、結婚する時ははなす、それまでは……」と云つた。それは實行されてゐた。が、橋本も彼女も二重生活は辛かつた。橋本は遂に、凡てを破壞して同棲を決行しやうと云ひ出した。彼女も決した。子供への愛で橋本へ走る事が出來なければ、その時は死だと思つた。愛のない上村との生活も苦しかつたし、とにかく、のりかけた舟を今更ら引かへすやうな卑怯はどんなことがあつても出來ないと思つた。

が、橋本は、具體的に手を下してみると、自活の出來ない妻との離婚は、容易ではなかつた。その上、萬一出來ても、形の上で人妻である國子との結婚は、社會的の彼の名譽と、事によつたら地位をも犧牲にしなければ實行出來ないのを感じて來た。彼は、愛を誓つた國子を理性でもてあますやうになつて來た。

さういふ相手の心を彼女はすぐに見拔いた。が、彼は決して本音を吐かなかつた。どこまでも、彼女の幸福のせいにして、自分は良い子になりすまして別れやうとかゝつた。

「別れたいのなら男らしくさう云へばいゝぢやありませんか。私は自分をもとめない人に自分を强ひる事はしません」

彼女は云つた。さう云ふ調子で出られると、彼は決して去れなかつた。

「別れたいわけはない。僕はあなたを愛してるんだもの……たゞ、かうしてゐるとあなたの生活が破滅するかと思つて……」

「今頃、なにをおつしやるんです。燃えはじめたら私は灰になるまで燃え切らなければゐられない人間だ。途中でいぶるやうになるのはいやだからと、あんなに拒んだのに無理矢理に迫つて來たくせに――だけど、私は、自分で蒔いた種は自分で苅りますよ。別れませう！」

「いや！ あなたは僕の心がわからない。僕を怨んでるんだもの

……」さう云つて泣かんばかりになつて、どこまでも追つて來た。おそらく彼女を怒らしては決して去り得ない彼だつた。底なしに弱く意氣地なしのくせに、算盤玉だけは人並以上に彈いてゐる彼を、彼女は心から輕蔑した。

學士號と、×省の高等官補の地位を、寶玉のやうに撫でさすつて趣味の低級な、する事に齒切れの惡い、男らしくない彼だといふことは、はじめから分つてゐたが、彼女はそれ故の溫情と、自分への愛情にまけてゐた。「そんなことは一種のセンチメンタルだ」と思ふと、彼女は自分の純情をムザムザ泥田に投げ棄てたやうな取りかへしのつかない氣がした。が、彼女はせめて最後に、裏切者なら裏切者らしい強さがどうかして見たかつた。それに、良い子にして去らしてやるのも忌々しかつた。しかし、彼は飽まで「愛してゐるが貴女のために――」をくりかへした。彼女は焦れ切つた。不潔感にたへられなくなつた。そして遂に自分から絶交狀をかいた。そしてそれを送らうと思つてゐるところへ友子から意外なことを聞いた。橋本は時々、友子に彼女の呼び出しをたのんでゐたが、彼は國子を愛してゐない。はじめから愛してはゐなかつたが、國子の誘惑に引ずられた。圓滿な別れかたを考へてもらひたいと、最近、來る毎に云つてゐたといふのだつた。それをきいた國子の心は、怒りと屈辱に燃え狂ふやうであつた。

「あなたを呼んで來ると云つても、もつと後でいゝと云つて、私の手をとつてはなさないのよ」と友子は云つた。

「いつ自分が誘惑した。愛したら愛した。いやになつたらいやになつたと男らしく云へばいゝ。あのコソ泥が、必要以上に友子の手を握りしめて、自分の惡口を云つて――それとも知らずに氣をもんで出かけて行つて、友達に耻をさらしてゐたのか――」さう思ふと彼女の胸は煮えた。友に賣られてゐたことを考へるとどうしても許せない氣がした。

彼女は火のやうな怒りをこめた絶交狀をかいて、彼から贈られた安指環を封じ込んで送つた。彼女は恨まれてゐると思つたゞけでも膽の調子が狂ふと云つてゐた彼が、眞蒼になつて、ヂタバタしてゐる樣を想像すると血をみるやうな惡魔的な快感に胸がおどつた。

それから間もなく彼女は、足に殘つた泥を洗ひおとすために、溫泉に出かけたのだつた。

「あなたの僕に對する愛情は、こんなに高くなるかと思ふと、こんなに低くなる」と、鳥屋の二階で橋本はビールのコップをもつた手で高低の波をつくつて見せた。

「だが、僕は決してかうはならない」と低い波を描いて、「だから、僕の方がよけい愛してゐる」

「かうなるから私の愛が不安なの？」

彼女は低い波を描いた。

「と云ふわけでもないが、上村さんのことを考へるとね」

「不安だつてんでせう？　やきもちやき！」

「なに？…

橋本は矢庭に立つて來て、彼女の口を自分の唇で緘した。女中の目をぬすんだあわたゞしくやるせないキス！

「ふん！」國子は不用意に浮んだ記憶をふるひ落した。心が何かに驚づかみにされてゐるやうに苦しくなつて來た。

「あゝのむんだ、のむんだ。私、今夜は底抜けにのむんだから、醉つたら看護してよ」

彼女はクヽ、とコップのビールをのみほした。腸が燒けるやうに熱くなつて來た。

友子と話してゐた上村は陶然とした目を國子の方に移して、

「看護はわつしが引うけやした。さ、今一こん仕らう、ところで山のローマンスはいかゞでござる」と柄にもない聲色をつかつて彼女のコップを滿した。泡は溢れて飯臺に地圖のやうな形を描いた。

「山の溫泉はね、えゝと、あ、さうだつたとても面白かつたわね友子さん！」

クヽ、とまたのみほした。

「いやな人、何度いふのよ。それよか、ビタカさんのことを早くきかせておあげなさいよ」

さう云ひながら友子は上村と國子のコップにビールをついだ。

「あ、さう〳〵。あのう、ビタカさんといふそれはそれはきれいな青年がゐたの」

「ビタカ？　變な名前だね。すると、さつきのをかしな口調はビタカの眞似か」と上村が云つた。

「さうよ、まあ默つてきゝなさいよ。先づ我々が宿のピンポン場に行つたとおぼしめせ。そしたらね。そこに、ドキッとするやうな美しい青年が……」

「ふん、ふん」

「ゐたのさ」

そこで彼女は青年の說明をはじめたが、どうしてもその顏が思ひ出せなかつた。心のどこかに、ピッタリと橋本がはりついてゐる。彼女はそれと戰ふやうに、メチャ〳〵にしやべりつゞけたが、橋本のイメージは次第にひろがつて行くばかりだつた。彼女はやけにのんだ。拂つても拂つても、橋本の目が、五つも六つもとび散つた。

「あの目がなんだ。それや昔はきれいだつたさ、だが、彼が算盤玉をはじき出してからは、こんな筈はないと思つていくら見なほしても、やつぱりきれいではなかつたぢやないか、それに、あの鼻はなんだ、インテリゲンチャの男に、あんな團子鼻がめつたにあるものか、ハヽヽヽ、だが、醜くつて幸ひ、幸ひ、彼を憎まうとして、顏だけに未練が殘つたら、それこそ大變――おつと、こんなことを考へ

るなんてやつぱり未練があるのか、馬鹿！　どこに未練があるものか、心はごみ溜、目は鰯の目、鼻は獅子つ鼻と……」

心はしきりにしやべりながら、その實しめつけられるやうに辛くなつて來た。彼女はいつか、飯臺に兩肱をついて、頭をかゝへてゐた。

「おい奴さん、ビタカのつゞきはどうした。醉つたな？」

上村の聲に彼女はハッとして顏を上げた。トマトを引きのばしたやうなテラテラした上村の顏が上下に波を打つてゐた。

「あ、ビタカの目か――ビタカは美しかつたのよ。美はそれ自身偉大なる力だつていふことを、私はしみじみ感じたのさ」

彼女はなにをしやべつてゐるのか分らなかつた。心では急に見えなくなつた橋本の顏を一生懸命さがしてゐた。

「分つたよ。きれいだといふことは分つたよ。ところでビタカとの山登りは成功したのか」

「あ、山登り？　成功しましたとも。先づ、『昨日はあの山へのぼりましたよ』ときたわけさ、勿論ビタカさんがよ。『まあさうでしたか知つてればお伴さしていたゞくんでしたに』『しかし曇つて、見晴しが駄目でした。今日みたいだといゝんですけれど……』『ぢや、もう一ぺんお登りにならない？　お伴さしていたゞきたいわ』といふわけで――」

「登つたのか」

「え、漢さんの山登りの舞踊そつくりに――ふゝゝ、ごまかしだつてかまふものか、あんな獅子つ鼻がなんだ。どうだこの素晴しい自然は！　今はかうしてビタカと山登りしてゐるし、四五日したら、サラリと別れて、歸つたら勉强するし……あんな卑怯な……」

彼女はふと、聲を出して橋本のことを云つてゐるのに氣付いて口をつぐんだ。上村の顏が、スーッと遠くへ行つたかと思ふと、また戻つて來た。

「あ、醉つたな、どうしてこの男が愛せないんだらう、なァに、仕方があるものか、靜子にのます乳を便所にすてゝ働いて、歸つて來れば擲られて、ふん、今頃、誰よりも好きだつて――なにを云つてるんだ。勉强だ、勉强だ、靜子は二階にねてゐるし、橋本は憎くつて憎くつて、ゾクゾクするほどいゝ氣持だし」

その實醉つた彼女には少しもその實感はなかつた。

「えゝゝと、それからその快感の苦痛で、手負の獅子のやうに、まつしぐらに生きて行くと……あゝ痛快々々！　ハ、、、、、」

突然國子は大聲で笑つたが、急に、ビショビショの飯臺に、簡單服のあらはな腕を組んで、その上に顏を伏せた。あだかも、その裝置のためのやうに涙がドッと出て來た。苦しさは洗はれたが、身のしびれるやうな悲しさが襲つて來た。

『慘めだなァ、慘めだなァ！」としきりに思つた。醉つてゐないとも思つた。ビールで腕が冷たいと思つた。自分のかうした姿も知つ

てゐるぞと思つた。なぜこんなに悲しいのだらうかとも思つた。が、いつか、モヤモヤと、何もかも消えてしまつた。

「ピタカつて名なんですか？」上村がそれにこだはつてゐるらしく友子にきいた。

「ほゝゝ、さうぢやないんですの、美男でせが高かつたものですから、私達がさうつけたんですの」と友子が答へた。

「へえゝ、でその美男と山へ登つたり、ピンポンをしたり、散歩をしたりしたわけですね、いや、御馳走さま！」

上村は自分の心をごまかすやうに大聲で笑つて、空になつたビール壜をコップの上で傾けた。

「いやな上村さん！　國子さんのお話は大部分は創作よ」

友子はさう云ひながら、煮えつまつた肉鍋をコンロの隅に下ろした。

「どうだかなア、だが一體もう何時だらう」

「十一時ですわ」友子は腕を見て云つた。

「そろそろねませうか、仕樣のないマダムだな」さう云つて上村は美酒と毒酒とを一緒にのみ込むやうな表情で國子を見た。そして「すみませんが、こいつの床をたのみます。僕の寢室は下の座敷なんですから、あなた方は靜子のそばでねて下さい」と友子に云つた。

「御厄介になりますわ」さう云つて友子は二階に上つて行つた。

「國さん、おい國さん、ねるんだよ」上村は國子のそばににじりよつて云つた。國子は上村の手を肩に感じるととび上るやうに立ち上つた。心臓がはげしく皷動を打つた。上村も立つた「あゝ、私ねむつてたわ、何時？　友子さんは？」彼女は或る豫感に、上村から大急ぎで逃れやうと二三歩歩き出したが、あたりが急にグルグルとまはり出した。上村は獸のやうな力で倒れさうになる彼女の體を抱きしめた。

「國さん愛してね、愛してね、僕、淋しかつた。ほんたうに淋しかつた。」上村が云つた。「キッスしないで…キッスしないで…」

彼女は心に叫んで一生懸命に身をもがいた。が上村の唇はがむしやらに彼女のを捕へた。

「橋…バカッ！　S―　いや、ピタ…」

彼女は上村の接吻を誰かと描きかへやうとしたが適當な人がなかつた。その時二階から。

「しけましたよ」

と友子の聲がした。

前號について

▼九月號の詩「月夜」及び目次のあの新味豊かなカットは篠田ちか子さんの筆になつたものでした。名前を入れおとしましたからこゝに追記します。



吉田雅子

姉

生越富與

姉さんが島田に結ひ出した。母さんが、さも嬉しさうな微笑をして、後へ廻つたり前につくばんだりしながら、姉さんの顔や襟に、濃く白粉を刷いたり拭つたりして、只そのことだけでも、家の中が何となく、今までとちがつた明るさが入つてきた樣に思はれた。

姉さんは鏡に寫る美しい自分の化粧顔にみとれてしまつて、ウットリとして鏡に向つてゐた。やがて、チョツポリと紅付いた赤い實の熟した樣につやゝかに綺麗な唇を、ポツリと可愛いく、明けて見たり、つぼめてニーッと笑つたりして眺め入つてゐた。

姉さんは可成美しい人でおつとりとした色白の丸い顔、私はいつもやさしいその頬ずりに惠まれてゐたが、姉さんのお化粧の終るのを待ちかねては鏡臺の前に、ちよこなんと座つた。

私も姉さんの樣に、笑つて見たり怒つてみたり、すましてみたり、白粉を鼻の上や頬に指でぬつて見たり、いろいろな眞似をしながら、最後には合せ鏡の手付をウンと器用にやつてみたりした。

けれど、どう鏡を廻してみても、ねぢくつてみても、私のおかつぱ頭の後はトンと鏡の前には出て來なかつた。しかし、たんねんに、こね廻してゐる中どうかした拍子に、チラリと見えたかとおもふ次の瞬間は、もう湯殿のひさしに代つたり、戸袋の端が出てきたり、五間もはなれた竹籔が、寫つてゐたりしたのであつた。

私は、大人になつて島田に結はなきや寫らないのだな、ともおもつたが、しかし、何事でも、やらうとして、やれない心持わるさには、子供の時から耐えきれない性であつたと見えて、口惜しまぎれ

に手鞠をそこへ放り出して、ぢれ泣きに泣き寝入つたりした。
　ある時はまた日向ボッコの子猫の眼に、キラリと反射光を、さしてやるのが、たまらなくおもしろいものゝ一つであつた。膜の薄い鼻を明るく照らすと、猫は、無精氣に立ちあがつて、背中のアーチをムーッと作ると大きなあくびをしてのつそり／＼、立ち退いてすぐ近くの場所へうづくまる、又、そこを照らす、又、立ち退く、又照らす、又退く、「つまらぬいたづら子だな」かういふ目付をしながら怨めしさうに、終にはどこへか姿をかくす。

　姉さんがまだ、白粉をつけたり島田に結ひ出さない少し前から、いゝどてらの様な大仕立の着物を、着流しにしたお爺さんが、よく私の家へ來初めた。彼の頭はツルツルにはげ上つてテカテカと光つてゐた。鐵輪の車の音が、ガラガラ／＼と、家の土藏に響くと、門前に車は止り、お爺さんの大きい茶色の圖體がぬーつと御影石づたいに、チヤラチヤラと雪駄を響かせて、玄關に近付くのであつた。さうして、定つて咳拂を一つして、軒を抜いて繁つてゐる梨の樹の蔭にきた時、又、エヘンと一つする頃には、母はもう、とるものもとりあへずそわ／＼とうれしさうな笑顔一杯に、お爺さんの出迎をするのであつた。お爺さんが客間に通る頃には、姉さんは何かもののけにでもおそはれたかのやうに、どこともなく姿をかき消して仕まふのであつた。姉さんの行方は大抵の場合は米倉の暗い二階であつた。時にはジメ／＼した味噌倉の隅にちゞこんでゐたりした。
　さういふ時の姉さんは、普段のやさしい圓やかなところなど、みぢんもなく消えて、無類に機嫌がわるく、小暗い小さな窓からうらめしさうな眼をあげて、外をボンヤリ眺めながら考に耽つてゐた。花びらの様に白くほのあかい美しい皮膚も僅かに洩れてくる光線に青黄色く照らし出されて、ふつくりと丸みの勝つた顔も、ひどくとんがつた様に、小さく固く冷たく見えるのであつた。
「お姉さん、お姉さあーんーてば！」呼んでみても、何も應へては呉れなかつた。勿論、さういふ場合、どんなことがあつても、お人形の着物など、縫つて貰へつこもなかつたし、好きな珍らしいお噺も、して貰へるどこではなかつた。私は、姉さんのかうした變り方をジーット見ながら、何ともいへない暗くわびしい氣もちになつてひとりでに悲しい涙が頰をポロ／＼と傳ふのであつた。

　私はどう考へても不思議だとおもひ出した、一體あの姉さんは何が、あゝまで、氣に入らないのだらう、何をあんなに怒るのだらう普段は、誠にやさしく、親孝行な姉さんが、お父さんが呼んでも、お母さんが迎へにきても口一つ利かず、知らないふりに、默りこくつて、濃い眉を引きよせ、紅い美しい唇を引きゆがめ、黑味がつた大きい眼を、悲しさうに曇らせ、スンナリとしたノーブルな鼻をツンと長くする――、それが、きまつて、あのお爺さんが來さへすれ

ばなんだから、…私の疑念は積るばかりであつた。あのお爺さんが來れば、今、笑つてた姉さんが、たちまち、かうなる。私はお爺さんが一圖ににくくつてならなかつた。

私の幼い義俠心は齡勃として起つてくるのであつた。事と品によれば、いつでも私は、あの可愛想な姉さんを助けて、お爺さんを、小ぴどくいぢめのめしてやらうと思つた。私一人の力に及ばなければ、私の味方には、兄さんもゐる、妹もゐる、隣の寛ちやん、新ちやん、男の子でも女の子でも無數だといふことが、いかに私を、力強くおもはしめたことかしれない。

お爺さんの來るごとに、不思議におもはせるのは、母さんの態度だつた。何を一體、あの母さんは、あんなにまで、お爺さんに興奮するのであらう、ズングリと、油ぎつた――見るからいけ好かない奴に、どこがよくて、ああ、ちやほやと笑ひ續けるのか――私の頭の中は、紛糾するばかりだつた。と同時に、お母さんがにくらしいとさへおもはれるのだつた。お母さんはあのお爺さんと何をしてゐるのか――さう思つただけでも、私の小さな胸は、悲しくゆれた。

私はある時、母のあとを追つて、客間の襖を開けてみた、すると床柱を背負つたお爺さんが、テラテラした大きい拙い顏の相格を崩して、何やら野卑な聲音に話すのを、それに對坐した母さんが、キチんと膝に手を置いて、明るい笑顏できき入つて、時々何かしらたのしさうな笑顏を洩らしてゐた。

「あら、とうちやん? こゝへくるんぢやないよ、ね、いゝ子だから、暫く婆やのとこで遊んでおいで、ね」お母さんはふりむいて、私を追ひ立てた。

「いやあ!」私は、母へのにくしみとお爺さんへの腹立ちが、ムカムカと反抗した。

「いゝ子ね、その代り、あとで何でも好きなもの、ごほうびにあげるからね」私の氣もちなどは露ほども知らぬげに母は尙も私をなだめすかして退かせようとした。

「いやあ!」

「何故?」ふりかへつた母の顏は心もちひきしまつた。

「お爺さんがゐるからいや」

「ゐるからつて?」母は私の心持を解し兼ねた樣だつた。

「お爺さん、大きらいだもの」

「まあ――そんな失禮な――子供つてね――全く仕樣がない」母は獨言のやうにつぶやきながら、立つて私のところへやつてきた。

「ねえ、とうちやん、いゝ子だから、そんな馬鹿をお云ひでないよお客樣の前で、失禮な、母さん困るぢやないの、さ、早くあつちへいつて、誰かに遊んでお貰ひなさい。春やにお人形でも作つて貰つて……」低聲にさゝやく母の顏はいらいらしく荒らゝいでゐた。私は一寸氣の毒におもへてきた、お爺さんに對する怨みやにくしみが減

るわけはないけれど、さすがに母のいたんだやうな顔をみたら、この上強情を張る氣にはなれなくなつた。

「お人形遊びなんて、つまんないわ」私は小聲で母屋の方へ不平らしく歸るのであつた。

そのお爺さんのくる毎にいつも〳〵、廣い臺所はテンテコ舞の忙しさであつた。酒食の饗應といふより外策のない田舍の接待法の習慣の中に育つてきてそれを不思議とは思はなかつたが不愉快だつた私にはあのお爺さんの、酒亞々々した顔つきが癪にさはり、聲のげびさかげんにムラ〳〵し頭の禿げつぷりまで剛々賁やす樣になつたさうなるとお爺さん對私といふまるで門外な仇同士が出來上つた。

それからあと、お爺さんの來る毎に、私は誰よりも眞先にお玄關に走り出した。お爺さんの前にたちはだかつた私は、ウンとばかりにお爺さんの全身をにらみ付けた。唇を左右にヒーンと引き開けて齒をむき出すと同時に、あごをツンとつき出すにくしみの表情は、可成に小にくらしいものに相違なかつた。にも係らず、彼は、

「いゝお子だな、今にお前も世話して進ぜるぞ、えらい金持の家へな」

私の頭を、なで〳〵云ふお爺さんの袖の下で、私は息づまるほどのまごつきを感じた。私は私の、夢のまにも忘れなかつた恨みの者から、愛らしさうに頭を撫でられては面くらつた。私は逸早く袖をくぐつて逃げ出したが、倘、障子の蔭からも、襖のうしろからも、執拗にお爺さんをにらみ續けてゐた。

餘程たつてそのお爺さんは、いろいろと變てこなものをどつさりと持ち込んだ、もとより私の貰ふ樣なものは一つもなかつた。他の人々の土産ものとは、全く類を異にした妙なものばかりであつた。

だが、また、例の母さんは、たぐひもなくニコ〳〵もので、いかにも大切な寶ものでもあるかの如く、床の間の正面にそれらをかざり付けるのであつた。

その日は、父もめつたに休んだこともない役所を休み、伯父夫婦も紋付できて、やがて、奧の間で賑やかな酒盛が初まつた。

「俺こそは」と云ひたげなお爺さんの丸い大きい油顔が、私の胸につかへてムカ〳〵したが、しかし肝心要めの姉さんは、もうその頃からあんまり怒つてばかりもゐなくなつてゐた。たまにはお爺さんとさへ口まできき合つたりして、逃げまはることもなくなつたので私も少しは安心したが、又、一人ぼつちに自分がとり殘された樣なさびしさが、心のどこかに巣くつて滿ち足りぬ氣もしないではなかつた。

それから間もなく、姉さんは、白粉をつけ初めたのだつた。お風呂に入つてもなか〳〵上つてこぬ樣になつたし、髮結のお常が三日にあげずきて、姉さんの島田姿を見る樣になつたのであつた。家の中に急に一輪、パッと花が咲いたやうで何となく春と云つた感が、家中を明るく浮きたたせた。

呉服屋、小間物屋、道具屋、さうした人たちの出入が日に盛になつていつた、眼の玉の、グルッと大きいのでゾッとする伯ょさんが手傳にきて、よくしやべり、よく働いた。西の離れ座しきに、裁縫師が三四人きて、せつせとお針を運び出した。目もさめる樣な小袖は、毎日の樣に幾枚となく縫ひ重つた。黒ちりめんの振袖、肩から胸から裾濃に繡つた松竹梅の模樣、金糸銀糸の入り亂れて、實に落付いた氣品の高いものや、紫ちりめんの振袖、秋の七草を、取りどりに咲かせた賑やかなものや、止袖の訪問着には、綠と淡朱のたき縞のお召を、江戸づまにして眞白い寒椿が一輪、パッと咲いてゐたりした。太陽の樣な緋ちりめん、雪の樣な白むく目のさめるほどの美しい長襦袢、さま〴〵な羽織、金襴の帶、錦の打ちかけ、色もとり〴〵に、縫ひ上げられては、そこの衣桁に打ちかけ〳〵。母さんは足も疊へは付かぬげに、浮き〳〵と喜び、姉さんは、まばゆさうにきまりわるげに、ソーッと見てゐた、役所歸りの父さんが、服もぬがぬ中から、部屋に入つてきて、兩手を後でくみ、展覽會でも見にきた樣な顔をして、眺めまはしてゐたりした。そこらぢゆうが急に賑やかにがやついて、人の心が宙に浮いた樣に、皆が浮足をたてゝゐる樣におもはれた。私も何となくそわそわとうれしくなつてきた。

ひよいと、その部屋の押入を開けて見たら、とても綺麗な下駄が何足となく重ねて置いてあつた。中で一番、よささうなのを撰り出して、私は履いてみたら、急に遊びに出たくなつたので、そのまゝ隣の寛ちやんとこへいつた。

「寛ちやん、遊ばうよ」

「おや？」寛ちやんの母さんは眼を丸くして私の足をみた。と、いきなり表へ飛び出した。直ぐに表に婆やの聲がした。

「お孃樣としたことが、お姉樣さまのお嫁入のお下駄のはき初めをして、おほゝゝ」私は直ぐに、おぶさつて歸つた。

「このお下駄は、お姉さんのお嫁に行く日のですよ、とうちやんのぢやありません」

母にさう云はれて、翌日、私は、赤い鼻緒の下駄を買つてあてがはれた。

姉さんがお嫁にゆくんだと云はれて、私はこの頃の樣子が初めて合點がいつた樣におもつた。そして、直ぐに、あのお爺さんのお嫁にだろと思つた。家の父さんとお祖父さんとの合の子位の年をした油ぎつたお爺さんのお嫁に、うちの姉さんを呉れてやるなんて――私は又、ここで反感がムラ〳〵と起きてくるのであつた。

だが、それが不調和だと、おもつてではなかつた、あんな、いけ好かない爺に、うちの姉さんの樣に若く美しい女を、くれて仕まふといふことが惜しまれて癪にさはつたのだつた。定めし、あのお姉さんは、あんな爺のお嫁になつたら、あのまつしろい綺麗な歯も、直ぐに抜けて仕まふだらう。あの漆黒の島田まげも、直ぐに雪の樣に白く、ほつけて仕まふだらう、ふつくりとした紅い頬も、朱の唇

も、白いつややかな額も、何もかも、皺くつちやのねづみいろに變るだらう。どこの世界を見たつて、お爺さんのお嫁はお婆さんに、きまつたものだ、うちの姉さんだつて、あのお爺さんと、結婚さへすめば、直ぐにお婆さんにならざるを得ないのだ、うちのお祖父さんお祖母さん、新屋の謙ちやんとこだつて、あの風も吹かぬに首をブル〱振つてゐるお祖父さんに、年中、咳ばかりするお祖母さん桝屋の康ちやんとこだつてさうだ、皆、同じことだ、あゝしかし、惜しいものだな――。

私は姉の爲めに前途のあまりに短かすぎるのを嘆げかざるを得なかつた。うちの姉さんも小鳥の樣に、飛んでいつて仕まふのか！

あんなにまで美しいものを、急に、そんなヨボ〱のきたならしさにして仕まふといふことは、美しくかがつた鞠を、どぶどろの中へおつことすと同じことだ、それも、あゝいふ汚ならしい爺のゐるばつかりに…。私の心は、くしや〱して、たまらなく腹立たしかつた。何かを一つ、あの爺の爲めに、するのでなければ、氣がすまぬと思つてゐた。

お爺さん！　油ぎつた顔の爺、私の胸の中にぐる〱とまはつた。

ある日であつた。例によつて、雪駄の音をチャラ〱とお爺さんが、又やつてきた、私の彼に對する敵がい心は、ひよいとあの大きい圖體を一目見た瞬間、急に、あふりたてられた樣に、顔がポッポとほてつた。

「まあ〱、御足勞樣で――」などといふ、母さんの、よそゆき顔までが一處になつて、癪の種になつた。お爺さんは、悠々と咳拂をして、自分の家の玄關をでも上るときの樣に、横柄づらをして上つた。その後姿を見送りながら、私は、何とかして復讐してやりたい心が一杯で、いらいらとあせり拔いてゐた。

お爺さんは、大きな大黑帽子の樣な帽子を玄關わきの帽子かけにかけたまま、左手に、すぼめた日の丸の扇子をパチリ〱玩びながら奥の間の方へ通つていつた。

私はフイと思ひ付いた。私の胸は喜びにふるえ、心せわしさに足もしつかりとは地につかなかつた。

いきなり持つてきた箒の先で私は、今かけていつたお爺さんの大黑帽子を、つつき落すと、逸早く袂の中へ押し籠んだ、それから、沓ぬぎの上に、キチンと、揃えてあつた雪駄をとると、私はいきなり裏へ飛び出した。そこには、大きな池が、青黑い水を滿々と湛へて横つてゐた。中には鯉や鮒や金魚が無數に息づいてゐるはづであつた。

私はためらひもせず、ザンブリとばかりまづ雪駄をほうり込んだボチャッと大きな音がしてパッと描く波紋の下に、重い雪駄は音もなく沈んで仕まつた、あゝ何といふ珍妙な雪駄の水葬よ、私は馬鹿に嬉しくなつて兩手をたたいて大きく笑つた。次に、袂から、引つぱり出した大黑帽子も同じ樣にほうり込んだ、これは雪駄ほどの音

はしなかつた、ポソッとかすかな音をたてて、しかも、水の上に浮いたまま容易に沈みさうには見えなかつた。向ふ側の方にポチャッと魚のはねる音がして、鯉の頭が、ブックリと池の面に浮いた。大黒帽子を中心に、僅かに起つた波紋が段々に大きくなつて、それが消えてしまひさうでもまだ、黒い物體は水の上にあつた。おもひきり沈んで仕まはないのが、折角喜びにふるへてゐる私の胸を、またくしやくにしさうになつた。私はいきなり、そこにあつた竹竿を取つて、グーッと帽子を下へ突込んだ、ブクブクくッ、水の泡が水面に音をたてて七つ八つ浮いて消えた。「これでいゝ」私は安心して竿をほうり出した時、またブックリと黒い物體が此度は少し位置を右前の方へかへて、浮き上つた。「おや？」私の心の中にある慘忍性がグッと頭をあげた、私は、一旦捨てた竿を再びとるや、又、帽子を、此度は勢込んで、グッと突き込んだまま、此度は、地の中へ突き刺しておくつもりで、暫くヂッとそのまま、竿を持つてゐた。

「とうちやん、とうちやあん――お出でよ」大好きな兄の呼ぶ聲がして、私はそのまま、そこを走り出した。

ある秋の朝であつた、天氣は晴朗、空には一點の雲もなかつた。海は笑つた、といふあのゴーリキーの言葉がおもひ出される様な朝であつた。

「日本晴、日本晴、何といふおめでたいことだ」、母さんは朝、はね起きると、眞先に叫んだ、いつもの癖で、まづ寢床で一服、煙草をくゆらす父さんは、特別大きな輪を吹いてニコリと笑つた。

家の中はゴッタ返しに忙しかつた、朝から客が、入り代り立ち代り來た、普段は、そゝけた頭で、だらしのない姿を見せる近所の人たちも、男も女も皆、キチンと身なりを調へてゐた。

どの部屋も、どの部屋も、いろんなものが取りちらかされ、臺所の方は一段と女どものさわがしい音がした。口も八丁、手も八丁と云はれてゐる、おきん婆やが、皆を指圖するいそがしさうな聲、庖丁の音、茶わんの音、水の音、それに交つて煮物の臭がプーンと香ばしくかほつてくる。只下駄で通ふ東の離座しきだけが、ガランとしてゐるばかりで、西の離れは、昨日から來た親戚のものたちの、たまり場で、上も下も人と荷物でギッしりと埋つた。

お風呂は、朝からもう三度、たき直した。

午頃になると一段と美しく化粧した姉が、髪結だの、母だの、近所の人たちなどに取り巻かれて、目もさめる様に綺麗な紫ちりめんの振袖をきた。

「おめでたう厶います」皆は一人一人、誰が誰にいふともなく云ひ合つた。お姉さんが云はれると、彼女は火の様に顔を赤くした。私は變な人だなとおもつた。やがて例のお聟さんだろと思ふお爺さんが、ガラガラと車でやつてきた。

「待つてゐました。隨分」といふ母さんをあとにつけて、お爺さん

は、ズヲリと並んでゐる親るいたちの、一番上座にドカリと鷹揚に据つて、エヘンとおきまりの咳拂をしてあたりを睥睨した、皆はいんぎんに挨拶をした。姉さんは、父と、母との間に座つた。

私は賑やかなのが、うれしくなつた。

それ〳〵に着席したら、澤山の祝膳が並べられて、近所のお縫さんとお君さんといふ姉さんの仲よしがお酒の酌をして廻つた。お縫さんは、よく卷紙を持つてきては姉さんに、戀文の代筆をたのむでゐた人であつた。

「目出度い、目出度い」といふ言葉が、異口同音に出た。さうして心からお祝する樣に、ほんとにお芽出度さうにお酒に醉つた。

けれども、父と母は、どういふわけか、そのうれしいといふ顏に寂しさといつたものが漂つて、心からの喜びとは、子供の私の眼にも受とれない處が交つてゐた。

姉さんが嫁にゆく――妙に大切なものを奪ひ取られるやうな氣がした。姉さんは、父さんから何か云はれる度に、泣いてゐる樣だつた、母さんの眼も、うるんでゐた。

「とうちやん、何だつて、そんな顏してるの、ベソを搔いて」兄さんが私の顏をみて云つたので私は急に泣き出した。

婆やがあわてて迎へにきて、私をつれて裏へ出た。そこには二本の大きな柿の樹に、ほの赤く柿の實がなり、靜かな田舍の秋を、ここにのみ止めてゐる風情であつた。

急に表が、さわがしくなつた。澤山の車がきたのであつた、車夫たちは一樣に、香の高い、眞新らしい裝束で、背紋に大きく、姉さんのお振袖の紋とおんなじの抱茗の葉を染め出してあつた。それらがズーッと門先の廣場に一列になつてゐた。

「はやくせんと、もう遲くなりますぜ」

お爺さんは大聲にどなつた。

姉さんは、母さんに扶けられて、一番眞ン中の車にのつた。先頭があのお爺さんだつた。いよいよ、あのお爺さんと姉さんとが夫婦なのだな、と確信する私の胸は隨分口惜しかつた、折角、いくらかなごみかけてきてゐた憎惡の情が、急にまた盛りかへして、お爺さんが、百倍してにくらしくてたまらなくなつてきた。

お父さんは、座しきの緣側の柱側から、姉さんばかりを眺めてゐた。母さんは、姉さんの車の前に、しよんぼりと立つてゐてこれも亦、姉さんを見守つてゐた、お縫さん、お君さん、叔母さん、その他、凡ての人は、黑山の樣に、姉さんの車の前に押しよせて、てんでに、わかれを惜しんだ。人々は皆、悲しいのか、寂しいのか、それとも、うれしいのか、わけのわからぬごつちやまぜの表情だつた

徹底的に洒亞〳〵してゐるのは、花聟お爺さん一人だけであつた

そのことが又、彼に對するの反感に油をそゝぎ又火をつけたのであつた。

私は、あの藥鑵頭をおもふさまひつぱたいてやりたいとおもつた、

でも車上高く控えてゐる彼の頭上は、私の力の權限外にあつた。

私は、例の齒をむき出すにくしみの表情を、立て續けに連發してお爺さんを、おどしつけてやつたが、生憎とお爺さんは、私へは目も呉れなかつた。私の樣な小さな存在物は、みも知らぬげに仰いで空模樣ばかりを見てゐた。私はいきなり天ビン棒を、かつぎ出してお爺さんの禿頭にコツンと喰はした。面くらつたお爺さんは、

「コラッ！」と怒鳴つた。次の車に乘つてゐた義兄が、チラと私をみて苦笑した。母さんは慌てて私の手から天ビン棒を、もぎとつた。

「まあ――お前は」

しかし人々は、幼いが故に、私の行動を、誰一人、にくむものはなかつた。却つて、男も女も、この場面のをかしさをこらへるのがくるしく切ない樣子であつた。

「ひどいやつだなあ、不意打をくらはして…大方、姉さんをつれてゆくのが口惜しいのだらう」お爺さんはさう云つて、頭の眞ン中を抑へてゐた。

「そんなに亂暴な娘ちやと、今に大きくなつても、お世話はせぬぞよ、この姉さんの樣にはな」それでもお爺さんはカラ〳〵と笑つた。

「いくら私が大きくなつたつて!! 又、この姉さんの樣に、いけ好かないお爺さんのお嫁になる？　誰が、そんな！　誰がそんな！」

私は、何よりもそれが口惜しく腹立たしくてたまらなかつた。

「さ、お姉さんにお別れをなさい、今日から、お姉さんは、よそのお姉樣になるのです」母さんは私の手をとつて、心もち私を前につき出した。

私は、胸にこみあげる何かをかみしめてゐたが、とうとう、ワッと泣き出した。お爺さんへ對する、むかつばらも一所になつて、私は地團駄を踏んで泣きやまなかつた。

姉さんも車の上で白いハンカチを顏一杯に押しあててゐた。

やがて、靜かに、車の轅はあげられて、轍を殘して大門を出始めた時に、私は、やさしい婆やに手を引かれてゐた。

顏を掩つたままの姉さんの車も亦、門の外へ消えた、あゝ、とう〳〵姉さんは嫁つちやつた、いやでも應でも、あのお爺さんのお嫁になつて、直ぐにお婆さんになつちまう――私は、悲しくかうおもひあきらめた。姉さんの車が、出て仕まふと、私は婆やの手を振りほどいて急いで裏門から、かけ出した。

北の土藏の塀にピッタリ、後向に身をつけた私は、そこで、姉さんの車がその上の道に出てくるのを待つた。遠く鎭守の森が、左手に見え、秋の枯尾花が向の土手に、風にゆられてゐた。私は姉さんにつれられて、あすこあたりを遊んだことも、おもひ出されては一入に悲しくなつた。

「姉さーん、お姉さーあーん！」何度も、私は姉さんの車に叫びかけた。黄色い悲しい聲は、土藏の白壁にぶつつかつては、こだまを作つて森の奥へ消えてゆくやうだ、姉さんは、時々、白い顏をこつち

へふりむけた、けれど、何の返事をするのではなかつた。門を出たままの姿勢で、白いハンケチは、又しても顔を掩ふのであつた。段々と遠くに離れていつて、ズーッと影が薄れていつた、一つの曲角から全然その姿の消えようとする時であつた、又も私は大きな聲を精一杯にはりあげて。

「お姉さーあーんー」と叫んだ、と、姉さんは突然、おもひもかけず振りむいたと同時にヒラ〳〵と白いものが空を舞つて、地に墜ちた。私は我を忘れてそこへかけつけた。果して、白い紙の細く結ばれたものが道の上に落ちてゐた。私は無中で拾ひあげると、ヒヤリとした、それは姉さんの涙のあとであつた、私は妙に自分が一番、姉さんに惠れたやうに思つて心うれしかつた。

「父上、母上、ながのお惠の有難さが、他家に嫁ぐ今日初めて、しみ〴〵とわかりました、どうぞ、御健在で、幼い弟妹たちの無事の成長をお祈りいたします」

これは姉さんが、懐紙にかいた鉛筆のあとであつたと、母さんはあとで私に敎へて與れた。

「かうなつては春子もしみ〴〵親が有難くなつたんだろ」父さんは母さんにかういひつゝ、息せききつて立つてゐる私の頭をなでた。

「とうちやんが拾つて來たの？」もう一度、母さんは私にきいた、

「エ、お姉さんが、車の上から、落した様だつたから……」私は手柄話をくりかへして、顔を輝かした。

「フーム、こいつ、なかなか、はしつこいからな」と父さんはもう一度私を引きよせて、頭をなでた。

「でもまあ、何といふお仕合せなお嫁御でムんせう。〇州の國初まつて以來の立派なお仕度、お祝儀だつて評判ぢあやムんせんかいなそれには、御先方でも、嫁御の渡り初めにと云つて、どつさりお金を費つて、長い橋を架け代へなさつたげな、いかに御大盡かとて、さうまでにのう、まあ〳〵、何しろ、金の世の中とはよく申したわいな」など、臺所では、女たちが寄り集つては話し合つた。

「小さいお孃様も、あともう十年ですね、十年一むかしと云つたつて、たつて見りやあ、何の雜作もない、ほんのつかのまでムんすよ」

お菊婆さんは、そこへ飛び出していつた私の顔をみるなり、

「立派なお嫁御におなりなさんしよ、お姉様に負けずに――」

私の頭の中へ、今、いつて仕まつたお爺さんの赤ら顔が、スーッと通つて、フイと消えた。

「馬鹿！」私は例のにくしみの表情をして怒りの口を引きゆがめたら、皆がドッと笑つた。私はいきなり父の部屋へと逃げ込むと、

「こらつ！　あつちへゆけ、今、きちやいかん！」例になく父の怒鳴聲をきいて私は驚いた。お父さんの眼からは、さめ〴〵と涙がこぼれてゐた、私は急に、しよんぼりとしてしまつた。

婦人彙報

▼母子ホーム建設

東京市社會局では、民間營業者の猛運動によつて立ち消えになつた市設浴場の豫算五十萬圓を以つて、母子ホーム建設の案がなつた母子ホームといふのは、夫を失つた憐な婦人達が愛兒の成長を樂しみ乍ら自營生活を營むことの出來る溫い設備をしやうといふので、世界にも餘り類がない。共同炊事場、共同洗濯所、應接室、浴場など一切を附屬させ、なほ將來托兒場、授産場をも併せ設けるといふから大いに便利にならう。

▼綜合婦人會館

日本力行會の創設者島貫兵太氏の未亡人志賀子女史は、今度巢鴨宮下にシスタークラブを設けて、左の五部の事業を始めた。

一、勤勞部、手藝、工藝、裁縫、家事手傳、其他技術に應じて職業を與へる。

二、商業部、依託品の販賣、外交、會員の手藝製作品の販賣など。

三、苦學部、仕事を與へ、勉學の援助。

四、勉學部、外語科、音樂科、繪畫科其の他を設け專門教授をする

五、結婚紹介部、內地、海外共。

すでに勤勞部十四五人、商業部八人、結婚紹介四五十人の申込がある。

▼東京聯合婦人會館

こゝのところ會館流行である。東京聯合婦人會では御大典紀念事業として十萬圓の豫算で一大會館建築計畫中。

▼母親の家

大塚、隣保館內の托兒場は非常に重寳がられ好成績なので、市の兒童保りでは階上へ母親の家の設備をする。育兒に必要な圖書室、實驗室など設け、育兒について相談も受ける。

▼富士山上の結婚式

國學院大學講師中村至道氏と內海えみえさんは富士山頂奧の院前で結婚式を擧げ目出度く下山評判になつてゐる。

▼ムツソリーニの影響

下地醫學士の妻まつが、大膽な放火の大罪を犯して世間を驚かした事件について、ムツソリーニ傳の中に「人は身上の運命を開拓するに一旦決した事は暴力によつても決行せよ」とあつた言葉に刺戟されたことが判明した。なほ「世には惡事をしても成功せる人あり躊躇すべきに非ず」の言葉なども動機をなしたといふ。淺はかな女心か、時代相といふ可きか。

▼婦人選擧權、好成績

前號記載鐵道現業委員の選擧に婦人の有權者は棄權者殆んどなく好成績であつた。婦人が選擧權行使の上に現れた結果が問題である

▼婦人公民權案

來議會へ政府案として婦人公民權問題を上程する爲に具體案作制中であるといふ、參政權、結社權を後廻しに、先づ公民權だけ男子の普選同樣に與へる政府の意向であるといふ。

▼迷信打破の叫び

福島縣安達郡二本松町では三十餘人の丙午生れ娘達が謂れなき迷信の犧牲になつて殆んど全部不緣なのを憤慨して、横田いち子、平出はな子など丙午生れの娘達が發起になつて演說會を開いて大いに迷信打破の叫びをあげた。

▼蓬萊米の賣出し

二百二十日を前に米價暴騰の結果東京市では裹所の緩和策として蓬萊米の賣出しを初めた。萊蓬米は內地米を臺灣へ移植したもので內地米を交ぜて炊けば風味がよいといふ。

▼女子公民大學設置

婦人公民權が與へられ相なので婦人市政研究會では、婦人の自治公民思想の普及を緊急問題として女子公民大學講座を開校した。一ケ年卒業で、講師は田川大吉郎、穗積重遠、佐伯矩、高橋淸吾、矢口達、吉田絃二郎、帆足理一郎、杉田直樹氏等諸權威を網羅し、入學資格は高女卒業程度、芝の協調會館である。

▼市政淨化運動

醜市議續出の東京市會に對して婦人市政研究會の多川すみ子女史刈谷道子女史一同は淨化運動に起ち、總辭職の決議文を突付け、市議の訪問をした。家庭婦人の奮起を促すためには、市政は臺所の延長、市政に婦人の意見を採用せよ市政刷新は婦人に公民權を與へること、現市議は總辭職を斷行せよのスローガンを作つて配布した。

▼舞踊の名手來る

世界的大舞踊家ルウス・ペエヂ女史一行は有名な背景意匠家ニコラス・レミゾフ氏を伴ひ來朝、帝劇十月興行に特別加入興行する。

▼トルストイ百年祭

モスクワ、グランド・オペラ・ハウスに於て文豪トルストイ生誕百年祭を擧行した。ソビエットの政府員、外交團員、故人遺族、外國の文士など多數參列、敎育委員長

ルナチャルスキー氏は「トルストイと革命」の題下で大演說をなし多數の祝詞朗讀があつた。

▼二科の女人畫家入選

今年の二科、院展の入選者中に婦人の進出は目覺ましい成績であつた。

二科、藤川榮子、深澤紅、埴原久和代、石塚とも子、甲斐仁代、加藤タキノ、勝本俊子、木下雅子、小林榮、古賀春江、熊坂美那子、馬淵美意子、村田幸江、峰村リツ子、泉二美智子、中尾一枚、西脇マジョリ、野村百合子、齋藤加美枝、佐伯米子、島あふひ、竹內滿佐子、山川久子、岡上りう、氏等

院展、門脇滋子、太田嘉女野

▼大統領若き女に咬まる

ギリシヤの大統領エルーチリオス・ヴェニゼロス氏が官邸の玄關に出ていつた時若い女が近づいて來てお手に接吻をと願つた。六十五歲の大統領がその手をさし出すと彼女は口をあてゝその白い齒でしたゝか肉深く咬んだ。お前は陛下への叛逆者だと叫びながら。痛みをしのびつゝも大統領は騷ぐ捕吏どもを押止め女の後姿を見送つてゐたといふ。女性の實際行動も咬むにいたつてはいかにも女性らしさを帶びてゐて面白いではないか。

▼毒婦余美顏の行方

支那隨一の毒婦として、又絕世の美人として有名な余美顏はさんざ荒れまはつて、もう此上の歡樂もないから自殺するといつて行方をくらましてゐたが、その實、日本に渡り、日本婦人に變裝し、京阪間に蠢動妖婦振りを發揮し、支那留學生、日本實業家を翻弄し、今は歐洲に向つたといふことである。革命婦人を以つて前進する支那にこの毒婦余美顏あり、支那的生活情調の極ならむ。

▼人見絹枝孃歸る

國際オリムピックに活動した一行は、人氣ものの人見絹枝孃を中心にして九月五日歸つて來た。一行意氣軒昂、壯快なりし競技について語る。紅一點の人見孃は二百廿ヤードで世界記錄を破り、光榮ある祝辭を英國社交界の大立物ロンステール伯よりうけたのであるが、歸來、層一層の活躍をもつて益々、女人スポーツ界に貢献するであらうと思ふ。

▼お花の師匠の發明

女の身として雄々しくも生活苦と鬪ひながら珍しい發明をした。その婦人は芝公園十四號十四、お花の師匠の田中カノ女史である。カノ女史は數年前失つた亡夫へのやさしい看護をこれことゝして夫のこのむ豆ミルクを製つてゐたところ、ある日のみのこりの豆ミルクが臺所の隅でブツブツ醱酵してゐるのを見てはしなく、これより飮みもの製造を思ひつき、亡夫死後五年間さまぐ〵苦心の末遂にこの程完全に發明品として酒精飮料水の特許を受けたといふ。この飮料水はボイスといつて、カルピスに似た濃厚な乳狀物で幾分の酸味と强い甘味をもつてゐる。

由來發明などは、特殊の頭腦によるものにて、男性の發明家ははなはだ多いが女性の發明家は少いこの田中カノ女史の發明はうれしいことゝいはなくてはなるまい。

▼易者、藝娼妓禁止

九月一日から南京に於いては藝娼妓、及び易者家業が禁止され關係者は非常な恐慌を來たしてゐる易者の廢止などは如何にも支那らしい情報である。

▼外國舞臺の歌姬

聲樂家關屋敏子孃は伊太利にてラ・スカラ座の採用試驗に及第、スカラ座歌手を中心とする伊太利大歌劇團のスペイン行きの一行に「レヂエロ」の主役歌手としてスペインで歌つて大いに賞讚を博した。なほ、リゴレツト、ルチア、バルビール、シビリア・トラビアタ、及びバタフライを歌つたが、美麗な日本服姿の珍らしさとまつて頗る歡迎せられた。

▼婦人健康相談所

相互職業婦人協會では今度新妻伊都子、成瀨よし子、近藤みつ子の諸女史が中心になつて大いに活動することになり、婦人の見識向上のために働くといふ。月二回の修養會を開き、一方英語、編物、タイプライター等の技術を敎へる講習會を開く等諸種の計畫があるが、中に最も主なものとして婦人健康相談所の設立を計つてゐる。「健康なる母親と、良き子供を作る爲に、又社會に働く健康保全のためにに專ら婦人の健康相談に應ず」との趣意から、直接診療所を設けて、不德な醫者や、金もうけ主義の醫者に對抗策をとる。

▼ニユートン女史來朝

アメリカ女子基督敎青年會外事部主任ニユートン女史が、太洋丸で二十八日橫濱到着が報ぜられてゐる。女史は排日の中心地カリホルニヤに在り乍ら大の親日家で在米日本人の爲に母親も及ばぬ世話をして日本人の母と呼ばれ今度も御大典參列の爲だといふ。

編輯後記

『女人藝術』が美しい秋の季節を廣い海さして出帆する船のやうに市場へと出てゆくまでの編輯室の編輯人一同の活々したヴアイタリチイは今ほがらかな笑ひ聲となつて樓上の窓から秋の町の彼方へと漂つてゆく。窓からの展望は申分なく佳い。廣い青い秋天が白い夕雲をたゞよはせて冴えてゐるのだ。來訪の女人もこゝに來て自由に論じ、快活に笑ふ圓卓の上、毎日のやうに寄稿は殖える。反響の聲もこゝかしこより傳はつてくる。聞けば『女人藝術』を買ひ求めてこれを愛讀し翫味する讀者の中には青年がなかなか多いとのこと。わが若き女性の友以外の志ある青年の後援を得ることは喜ばしい至りである。乞ふ益々愛讀されんことを。(花世)

神戸の高橋鈴子さんからの便りに、よい婦人は電車の中でも「女人藝術」を持つてゐるので嬉しい。そのよいの意味はみなりや顔や持ものがいいといふのではないとある。なんと嬉しいことだらう

望月百合子さんが甲州の旅からの消息にも、若い人はみんな持つてゐると告げられた。堀江かど江さんが信州へ講演にゆかれてのお土産話にも、その通りのことが傳へられた。「女人藝術」を愛することが、かくもいち早く若き人々の間に廣まつたといふ事は、潮は滿ちたの一言に盡きてゐる。都會に多くの友が待つのは期待してゐたが地方にかくも早く潮が流れ押寄せていつたことは、明日を待つものにとつて、欣ばしさが言盡くせない。(時雨)

昨や美術の秋！　本號は表紙に吉田ふじを女史の素晴らしいお作を頂けましたことを、まづ自慢いたします。内容もいつか時雨女史の仰有つたやうに「創刊號はほんとに拙かつた」といへるやうなりました。本號で又々戀愛座談會記を入れました。これは先號のに對して異說を申込んで來られた方々があつたので、あの會の批判にするつもりだつたのでした。「續戀愛座談會」として亦興深いものではないかと存じます。本誌も九月號から第三種郵便物認可を得ました。但し、獨特の赤い帶は、郵送する時は外す約束になつて居りますから、讀者諸氏も、どうかそのおつもりでお扱ひ下さいまし。

それから、小石川の小倉周子様から度々のお心こめたお便り、編輯部一同嬉しく拜見致して居ります。こゝで厚く御禮申上げます。(しづか)

雜誌が號を追つて良くなつたといふ言葉をあちらこちらから聞く。良くなつたといふのには内容、態度、色々な意味があらうが、その好意ある批評が眞實であることを自負したい。殘暑もやがて薄らぎ、人困らせの長雨の後に、事實あるかと危ぶまれた冴えた秋の月が不思議と見られるやうになつてます〳〵軒昂の意氣をお仲間の顔に讀むのは樂しい。

御寄稿下さる方々に非常に原稿が輻輳してゐてのび〳〵になつて申譯がありませんが、なほ發行日を早く安定させるために、原稿の締切りを前々月一杯にして嚴守いたしますから、時宜を選ぶものは特にお含みおき頂きたい。(素子)

先月から今月へかけて旅行やらその他のことでたいへん多忙だつたため、『女人藝術』の方のお手傳ひは殆んど出來ずにしまひました編輯同人の皆さまや讀者の皆さまにお詫びいたす次第です。

秋になつて各方面に活動するにこころよい時期になりました。來月號は、怠けてゐた埋合せをしたいと思ひます。(かど江)

女人藝術定價表

部數	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用は一割増の事。

昭和三年九月廿三日印刷
昭和三年十月一日發行
(毎月一回　一日發行)

發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　株式會社　秀英舍

東京市牛込區左内町三十一番地
發行所　女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七一五八二五

大賣捌　東京堂　大東館　北隆館　東海堂

御大典記念映畫（日活秋季大作）

維新の京洛

全廿巻

山本嘉一　淺岡信夫　酒井米子
河部五郎　廣瀬恒美　梅村蓉子
大河内傳次郎　松本泰輔　伏見直江
岡田時彦　葛木香一　徳川良子
中野英治　新妻四郎　川上彌生

時代劇部現代劇部全員出演

總指揮　池永浩久

監督　池田富保



九條武子夫人著

無憂華

定價貳圓
郵税拾錢
頗る美本

第百七十五版

感想紀行
和歌戯曲
集

一世の麗人が自ら
その心臟を執って
收め給へるもの
即ちこの「無憂華」

「無憂華」は、麗人九條武子夫人の尊い全生涯の隨感隨想をあつめたものです。靜かに對してゐると夫人の心臟を聽く心地さへ致します。一年間に百七十版を賣りつくした日本の代表的名著です。近代日本の精神に生きんとする皆様は、ぜひとも一讀して置かなければなりません。

内容

夫人は永久に無憂華に生き無憂華は永久に人の胸に生く

東京京橋南紺屋町
振替東京參貳六番
實業之日本社

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和三年九月廿三日印刷納本
第一年第四號
定價金四十錢（送料金一錢五厘）

株式會社秀英舎印刷